
グラウンドクロストワイライト

留菜マナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グラウンドクロストワイライト

【Nコード】

N8493T

【作者名】

留菜マナ

【あらすじ】

これは記憶のない少年と地の魔王と呼ばれている少年が主人公のお話です。以前、同人誌に載せていた小説です。

第1章 名もなき大陸と名もない少年（前書き）

完結部分は短くなっています。

第1章 名もなき大陸と名もない少年

「お願い・・・思い出して・・・」
えっ・・・？

僕が目を開けると、藍色の帽子とコートを羽織った女性の顔があった。

「お願い・・・思い出して・・・」
「えっ・・・？ な、何を・・・」

彼女の問い掛けるような声に反射的に反応してから、「僕は、どうして、こんなところにいるんだっけ？」と当然の疑問が僕の頭に浮かんだ。だが、何故か、何も思い出せない。

とにかく、僕は、現状把握と、周囲を見渡そうとした。何度も、何度も、目を見開いて左右を見る。・・・何度も、何度も・・・けれど、どんなに目を凝らしてみても、結果はすべて同じだった。辺りは真っ暗で何も見えない。いや、何も存在していないのだろうか。無音の世界のように、辺りは静まり返っている。

僕は、再び、目の前の女性に視線を戻した。
不思議なことに、この人だけははつきりと見ることが出来る。

藍色の三角型の帽子とコートに身を包みこんでいる。それに、金色の髪と薄紫色の瞳がどこか、不思議な雰囲気をもし出していた。

「お願い・・・思い出して・・・ あの、悲しい出来事を・・・」
「悲しい出来事・・・？」

「名もなき大陸に・・・あなたの記憶ほしのかけらがあります」
「名もなき大陸？」

初めて聞く名前だった。

と、いうか、よく考えてみると、僕は、大陸の名前どころか、自分の名前がなんなのか、それさえもぜんぜん分からないし！？

『悲しい出来事』っていうのがなんなのか以前に、まずは、僕は一体、どこの誰なんだ？

「まずは、そこに行ってください・・・」

「あの、その前に・・・ですね・・・僕って・・・」

彼女の言葉をさえぎって、僕は慌てて彼女にそのことを問いかけようとした。だが、その前に彼女は、それすらもさえぎって締めコメントを残した。

「全ての答えは、ダイタさん・・・。あなたの心の中に・・・」

彼女がそうつぶやくと、周囲と同じように、彼女の姿が暗闇にうもれていく。

ちよつと、待て！ 締め言葉がそれでいいんですか？ そーゆことでもいいんですか？ と、いつか、僕の言葉は無視ですか。。。

だが、僕の必死の訴えも彼女には届くことはなかった。

第2章 うたかたの想い

「あの、大丈夫ですか・・・？」

心配そうにつぶやく女の人の声が聞こえた。

サザアア。

波の音が聞こえる。

ここは、海岸なのかな・・・。

僕はのんきにそんなことを考えていた。

「つて、何で海岸に!？」

大声で叫んで、僕は跳ね起きた。

そして僕は気がついた。・・・ええと、ここってどこなんだろうか？ 空にはどこまでも続く青い空が広がっていて、地面に砂の浜が限りなく遠くまで広がっていた。海岸だろう、と思ったのは、当たりだったらしい。そして跳ね起きた僕の顔を、見覚えのない女性が目を丸くしてじっと凝視していた。先程の彼女と同じく、金色の髪の毛の女性 いや、先程の彼女よりは髪は長かった。彼女は肩下ほどまでだったのだが、この女性は、腰まで届くほどの長い髪が印象的だった。

「ええと、大丈夫でしょうか？」

驚いた表情を浮かべて、彼女は僕を見つめていた。当たり前だ。

砂浜に倒れていた僕が、突然、大声を出したのだから。

「えっ・・・倒れていた・・・？」

「あの」

「はい」

「ここは、どこなんですか？」

「ここは、バリスタという港町の近辺にあります、海岸ですよ・・・」

僕の問いかけに、彼女は親切に答えてくれた。先程の彼女には、僕の問いかけは無視されてしまったので、なんとなく嬉しかったり

する。

「名もなき大陸って・・・何処にあるのかな・・・?」「えっ? ここがそうですけど・・・」

「えっ!?!」

「ここは、名もなき大陸の北部に位置する場所にありますが、パリスタという港町の海岸です」

「ここって、名もなき大陸なの」

「ええ」

名もなき大陸に行くも行かないも、もう既にそこに来ていたら全くもって意味がない。

僕には、選択権はないのだろうか。

はあ・・・。

「どうかされたのですか?」

心配そうに僕の顔をのぞきこんでいる彼女と、視線が合う。

「な、何でもありません!」

「・・・?」

僕は、慌てて視線をそらす。なんだか、恥ずかしくたりする。

「あの、まだ、お名前、お聞きしていませんでしたね・・・。私は、マジヨンといます。パリスタの港町で、神官をさせて頂いています。よろしくお願いしますね」

「ええと、僕は、えっと・・・」

僕はしどろもどろになるが、一瞬、先程の彼女との会話を思い浮かべる。そういえば、あの時、彼女は、僕のことを『ダイタ』って呼んでいたっけ。

「ぼ、僕は、ダイタ・・・っていいです。よろしくです」

本当の名前なのかはよく分からないのだが、そういうしかない!と、僕はとっさに判断したのだった。

「ダイタさんも、やっぱり、『ターン』を倒しに来たのですか?」

彼女 マジヨンは、ニコツと笑顔を向けてくれた。

「ええと・・・」

「違うのですか？」

「　　というか、その『ターン』っていう人、一体、誰なんですか？
当然の疑問を言ったつもりだった。だが。」

「し、知らないのですか！？　名もなき大陸の支配者の『ターン』
のことを……………」

「う、うん」

「で、でも、『セルウィン』のことでしたら、ご存知ではないでし
ようか？」

「その人も、有名人さんなの…かな？」

「…『セルウィン』のこともご存知ないのですか！　『魔雲の大
公』の異名を持つ、あの『セルウィン』のことを！？」

「う、う…ん」

マジヨンの驚き方からして、どうやら、よほどの有名人らしい。

その『ターン』という人物と『セルウィン』という人物は。恐らく、
彼らは、日常的、一般的に幅広く知られているのだろう。

「あの、実は、僕、自分の名前以外は、何も分からなかったりす
るんです」

「記憶喪失…なのでですか？」

「うーん、多分」

正直にそう言うと、マジヨンは神妙な顔で僕を見た。

「　　ところで、その『ターン』という人と、『セルウィン』ってい
う人は、一体、何者なんですか？」

僕の問いかけに、マジヨンは軽く頷き、律儀に答えてくれた。

何でも、『ターン』という人物は、その『セルウィン』という人物
の配下の者らしい。十年前、彼は突然この大陸に現れ、誰も気付か
ぬうちに大陸の一角に《ターン城》なる名前の城を建て、誰の許可
も得ずに、勝手にその主と、また、この大陸の支配者だと名乗っ
た。

そして、この名もなき大陸に存在していた国々を次々と滅ぼし、
勢力を拡大し続けた。

ターンがこの大陸に訪れてから、わずか十年間。わずかその間に、名もなき大陸に存在していた多くの国々は、『フレイム城』という城以外、すべて、ターンの支配下に置かれてしまったというのだ。恐るべき話である。きつと実力も大したものなのだろう。

そして、その『ターン』の君主たる『セルウィン』という人物は、『魔雲の大公』という異名をとる恐るべき力の持ち主らしい。彼が実質上、この世界、『アーツ』の支配者として君臨しているというのだ。

何だか、とんでもない話である。

いいのか！？ こんな世界状況で　！！

僕は、内心、そう思わずにはいられなかった。

しかしながら、これがこの世界の現実、現状なのでした。

「うう　ん、すごいことになっているんだね……」
マジヨンの話を聞き終え、僕はうなった。

「でも、こんな状態でどうやって記憶のかけらを探せばいいんだろう」 何の説明もなしに、僕をこんな場所に放り出したあの時の彼女に対して訴えかける。もちろん、彼女から答えは返ってくるわけはなかったのだが。

「ほしのかげら？」
僕のつぶやきを聞いて、マジヨンは聞き返した。

「うん。 何でもこの大陸に僕の記憶のかけらがあるらしいんだ」
「……」

「し、知っているの？」
僕は、救いを求めるような瞳でマジヨンを見つめた。

「……それって、もしかしたら、ターンが最近、手に入れたという『星のかけら』のこともしれませんね……」
「星のかけら？」

「はい」

「何でも、6つの星のかけらを集めるとどんな願い事でも叶うとさ

れているものらしいのです」

「ど、どんな願い事でも!？」

「はい。その一かけらをもつすでにターンが持っているという噂があるのです」

内心、どこかで聞いたことがあるようなパターンだな と思いながら、僕は力強く何回も何回も頷いた。

希望ができました!

その星のかけらを集めたら、きっと、僕の記憶も甦るんだ。そのはずだ。うん。きっとそうに違いない。そしたら、あの時の彼女のことも分かるはずだ。その時に訴えればいいんだ と。

僕はグツと両拳に力を入れた。

「ダイタさんは、その星のかけらを探すのですか？」

「うん! そのつもりだよ!」

「・・・でしたら、私も一緒に連れていってもらえませんか？」

「え、えええつ !!!!!!!」

僕は声が張り叫ぶほどの大声を出して驚いた。

「ダイタさんは、今、記憶喪失なのですよね。 だったら、この辺の地理どころか、この世界のことも分からないんじゃないでしょうか?」

「あつ」

僕は、この名もなき大陸のことも、ターンの居場所も分からないのだ。下手に一人で行っても迷うのがオチのような気がする。

「ご迷惑ではありませんでしたら、ご一緒させてもらえませんか?」

「えつ、でも・・・マジョンって神官さんなんだよね? それなのに僕と一緒に歩いていいの?」

「はい しばらく、お仕事をお休みさせてもらうことにしますから!」

エヘへとはにかみながら、僕の質問にマジョンは答えてくれた。

「ですから、大丈夫です!」

「はあ・・・」

と、僕は言った。

「でも、準備とかがあるので、ここで、待っていてもらえませんか？」

「こ……ここで……ですか？」

「はい！」

「町で……じゃないんですね」

「あっ」

マジヨンは、ようやくそのことに気付く。

「そうですね。ここは、砂が多くて大変ですしね」

マジヨンは、照れくさそうに頭の後ろをかきながら言った。

そういう問題ではないような気がするんですが。

マジヨンと共にバリスタの港町に訪れた僕は、一人、港でのんびり散歩していた。本当は、マジヨンのいる神殿で待っていていようと思っただが、それは彼女に拒否された。

やっぱり、部外者である。しかも、まだ、出会って間もたたない僕を容易に神殿に入れるわけにはいかないんだろうな。

しみじみと深々とマイペースに僕がそう考えていた矢先のことだった。どこからかかすかな声が聞こえてくる。町の方からではない。海岸沿いからだ。

女性の声だ。声はメロディを伴っている。

「歌？ こんな場所で誰が？」

気になった僕は、港から海岸沿いにへと赴いてみる。

広い砂浜で一人の少女が歌を口ずさんでいた。

蒼い月 満ちかけて

今もまだ 縛るの

震える手を

そつと 空に掲げ上げるの

忘れられた場所は

何も無い虚像のようで

繰り返される日々は

何も生まれないの

誰も知らない星がある場所

誰も知らない悲しみがある場所

不思議な歌詞だ。

「あの」

声をかけるのがはばかられる雰囲気、僕は思わず小声でささやいた。

「えっ」とその声に少女は気づいたのか、僕の方に視線を向ける。

一瞬、僕と彼女の視線が合わさる。

「うわおっ！」と気を抜いていた僕は、少女を見て驚き口をパクパク心臓をドキドキと高鳴らせた。

年頃は僕と同じくらいの少女が立っていた。16か17歳くらいだろうか。とはいっても、僕の歳なんて本当のところは分からなかったりするのだが。どこか憂いに満ちた蒼い瞳と水色の長い髪が特徴的だった。髪は一つにまとめて前に出している。そしてその背中には、白い羽がパタパタとはためいていた。

まるで天使みたいな少女に、僕は、呆然とその少女を見つめていた。

だが、少女の方は、僕を見て何故か青ざめた。

「あっ……」

少女はそうつぶやくと、僕の目の前から走り去ってゆく。

「あの、ちょっと……!」

僕は必死で呼びとめようとした。

だが、その言葉も空しく、少女は南方に見える森の方へと姿を消していった。

「あ、あれ？」

先程、少女が歌っていた場所に、赤く輝くものが見えた。僕は、恐る恐るその場に行ってみると、そこには、きれいな赤いブローチが落ちていた。

「もしかして、これって・・・さっきの人が・・・!!」

「あの、ダイタさん、お待たせしてしまってますみませんでした」
タイミング悪く、準備を済ませたマジヨンが戻ってきた。

「町中にいなかったたので、もしかしたら、ここかも、と思って来てみたのですが、どうやら正解だったようですね」

マジヨンはにっこりと微笑んだ。

「マジヨン！ ちょっといい！」

「えっ？ な」

僕はマジヨンの言葉をさえぎって手を握り締めると、大急ぎで先程の少女を追いかけ始めた。

「た、確か、こっちの森の方に行ったはずだけど・・・」

「ちょっと、ダイタさん、ど、どうしたのですか？」

僕の勢いに少し押され気味のマジヨンが言いにくそうにつぶやいた。

「さっ、さっきまでそこで女の子が、う、歌っていたんだけど、僕を見ると、その森の方へと逃げてい、いつちゃったんだ！ でも、ブローチを忘れていつちゃったみたいで・・・」

走りながらしゃべっているため、なかなか、うまく話せない。

「た、大変ですね！」

マジヨンが僕の言葉に同意する。しかしながら、その後、不安げにこうつぶやいた。

「でも、この森には入らない方が」

「でも、行かないと！」

「えっ！ ですから」

「でも、この森に入らないと渡せないよ！」

僕はきっぱりとマジヨンにそう言つと、森の奥へと入っていた。

「ま、迷つた・・・ね」

僕は、放心状態でそうつぶやいた。マジヨンの言葉をさえぎつて『この森に入らないと渡せないよ！』と言つたことを僕はひどく後悔した。

あの後、僕は聞かされることになる。

この森は、並外れた方向感覚を狂わす効果を持っているため、めつたに近づく者はいないという。そのことを聞いても何とかなる、と意気込んでいた僕だったが、次第にげんなりとして無気力状態に陥ってしまった。

「もっと、早く言つてくれれば・・・」とマジヨンに言いたかった、そう言おうとしたのだが、よく考えてみると、その機会を奪つたのは当の僕自身だった。

僕の脳裏は、あの時の意気込んで森に入った僕を思い浮かべて、ひたすら、後悔という文字の跡を追っていた。

マジヨンはそんな僕を見て、すまなそうに謝罪した。

「ダイタさん・・・すみません・・・」

「僕の方こそ、マジヨンの言葉も聞かずに・・・ごめんなさい・・・」

僕とマジヨンは同時に頭を下げる。そして、お互い、驚いた表情でお互いの顔を見合わせた。

「えへへ、何だか、おかしいですね」

「う、うん」

僕とマジヨンは本当におかしそうに笑った。

そして、真剣な表情で僕は言った。

「とにかく、頑張つて探そうか！ 出口を！」

「はい！」

マジヨンは嬉しそうにそう答える。

「……………」

突然、僕達を多くの男の人達が困んだ。

「あ、あの、すみません！」

僕は、彼らに道を尋ねようとした。

だが、彼らは、僕の言葉など聞こえなかったように、僕達を縄で束縛しようとしてきた。

「ち、ちよっと、何なの!？」

「いけない! どうやら、私達、真紅の森の奥の方まで来てしまったみたいです！」

「えっ?」

「この真紅の森の奥には、羽翼人という種族が住んでいまして、彼らは、外界からの交流を拒んでいるのです！」

「ど、どうして?」

「彼らは『星の民』として、外界にこの森のあらゆる情報がもれないようにこの森を封鎖しているのです！」

「えっ

!!!」

「…………すみません…………すぐにお伝えするべきでしたのに…………」

マジヨンは今にも泣き出しそうな顔で僕を見つめた。

「ち、違うよ! だいたい、この森に入ったのは、僕のせいなんだから……………」僕は、慌てて、そう言い直した。

だが、まっすぐに僕を見つめたまま、マジヨンは悲しげにうなだれた。

ううつ、困ったな…………。

いや、もう、こ、こうなったら!

「てえい!」

僕は、彼らの手を力づくで引き離すと、隠し持っていた旗を取り出す。そして、力強く、旗を振った。

「…………ダイタさん…………!？」

マジヨンは、その光景を見て驚愕する。いや、その旗に書かれている文字を見て驚いたのだろう。

そこには、こう書かれていた。

『降参します』と。

「……………」

羽翼人の彼らは、それを見ても無反応で僕達を強引に森の奥へ連れて行くとしていた。

「ち、ちよっと、降参したんだから、そんなに力強く、引つ張らないでも！」

「……………」

マジヨンは、少し、呆れたような顔で僕を見ていた。でも、先程より、元気が出たような気がするんだけど、僕の気のせいじゃないよね！

「うん、『降参作戦』、大失敗か」僕は、困ったように頭を抱え込む。『降参』したのに、けつちよく、それを聞き入れてもらえずに、僕達は、羽翼人達の村にある小さな牢に閉じ込められたのだ。「えっ！ 作戦だったんですか！」

マジヨンが驚いた顔を見せる。

「私、てつきり、本当にダイタさんが降参したものと思っていました！」

「ははは……………」

半分は作戦で、半分は本気まじだったのだが。

でも、さすがにそれを言ってしまうと、また、マジヨンから冷たい目で見られるんだろうし…………。それは、ちよっと、な…………。

「……………それにしてもどうしましょうか？」

「うーん、まずは、ここから出ないとな…………」僕はそう言いながら、牢の扉に手をかけた。扉の上の部分には格子のついた窓があって、そこから中をのぞける構造になっている。

「誰かいませんか！」

僕は呼びかけながら、扉を開けようと試みしてみる。だが、鍵がかかっていてうんともすんとも言わない。

「だめだ……。」

やっぱり、そう簡単に開いたりするわけないか。

それに、近くに人はいないみたいだし……。

「あの……。」

「えっ！」

上を見上げてみると、格子の隙間から、澄んだ蒼い瞳が二つ、僕達を見つめていた。

「あ、あの時の！」

僕は思わず、大声を張り上げる。僕達に声をかけてきたのは、あの時、海岸で歌を歌っていた少女だったのだ。

「あの、これ！」

「えっ？」

僕が格子の隙間から差し出したモノをみて、少女はあっ、とつぶやく。

「これ、落としたでしょう！」

「……ありがとう……。」

そう言うと、少女は嬉しそうに、ブローチをそつと握り締めた。

「……もしかして……これを届けるために……。」

「うん！ 大切なものなんでしょう？」

「……はい……。」 ほがらかな表情で少女はすごく嬉しそうに微笑んだ。その笑顔はまるで本当の天使のようで、僕の胸は急速にドキンドキンと高鳴っていった。

「あの、私、ふららといいます……。」

「ぼ、僕は、ダイタっていいいます。……よ、よろしくね」

「あ、あなた……話せるの？」

ひたすら緊張し、必死に挨拶をした僕は、しどろもどろですべてを言いきってから、ようやくマジヨンの台詞の不可思議な部分に気が付いた。

振り返ってみると、マジヨンが不思議そうにふららさんを見つめていた。

「ど、どうしたの？ マジヨン」

「う、羽翼人は、外界との交流がないため、お互いテレパシーで会話をすると聞いていたのですが……」

「そ、そうなの!？」

「はい……」

僕の問いにそう答えたのは、マジヨンではなくふららさんだった。……マドロスさんが……マドロスさんが私に言葉を教えてくれたんです……」

「マドロスさん……?」

「このブローチを私にくれた人です……」
しみじみと、そして昔を懐かしむように、ふららさんはつぶやいた。

「マドロスさんは、すごく優しくて、そして、いつも私のことを守ってくれていました。でも、今は……」

「……今は?」

「……今は、もう……会えないんです……」

何で会えないんだろう?

僕の脳裏に当然の疑問が浮かんだ。

ずっと守っていてくれた人が。

「マドロスさんは……マドロスさんは、もう、ここにはいないのですから……」

「えっ?」

「行方不明なん……です……」

「ふ、ふららさん!？」

驚き、僕は彼女の名を呼んだ。彼女の言葉の語尾が急速にかすれた。

「な、泣いているの、ふららさん?」

僕には直接見ることはできない。でも泣いていた。僕に、僕達に

聞かすまいとしているのでだろうか。押し殺した声で「うう、うう」と泣いていた。

彼女の声を聞いていると、僕はむしろように彼女の涙を拭ってあげたかった。少しでも励ましてあげたかった。だけど、僕らの間には、分厚い鋼鉄の扉が一枚横たわって、僕には彼女の涙を拭う術も彼女を励ましてあげる術も存在しなかった。

それに、もし、この鉄の扉がなかったとしても、やっぱり僕にはふららさんを慰めることなんかできはしなかった。僕では力不足なのだ。言葉では何とでも言えるかもしれない。でも、それでは、彼女の心を慰めてあげられない。

「ううっ、ごめん・・・うう、なさい・・・」
ようやく、彼女の嗚咽が少し収まってきた。

僕は、ふららさんが完全に落ち着くまで待つて、どうして、急に泣き出したのか尋ねた。

「自分が不甲斐なかったんです」
とふららさんは言った。

「私は、あの時、マドロスさんを止めることも、守ることもできませんでした。もし私にもう少し力があつたなら、きっとマドロスさんを救い出して、マドロスさんをあんな危険な目に遭わせることもなかったのに。そう思ったら本当に自分が情けなくて、それで涙が止まらなかったんです」

その晩。

僕は、牢屋にあつた寝袋にくるまりながら、まったく寝つげずにいた。だから僕は、夕食の時に出されたパンをかじりながら、じつとふららさんのことを考えていた。

それから自分のこともやっぱり考えた。

ふららさんとマドロスさんは、お互い、結婚を誓い合った仲だったらしい。マドロスさんは漁師で、二人はよく、海岸の浜辺で会っていた。そう、僕とふららさんが始めて出会ったあの海岸で。マド

ロスさんの漁師仲間はもちろん、ふららさんと同じ羽翼人の人達も二人の仲を認め合っていた。

でも、そんな二人にも別れの時はやってきた。

マドロスさん達が大海原の深海にあるとされている『海の真珠』を手にいれるため、旅立つことになった。もちろん、ふららさんは同行を申し入れた。だけど、マドロスさん達はそれを断った。きつと、彼女を危険な目に遭わせたくなかったのだらう。でも、「すぐ帰ってくる」・・・そう言ったのにも関わらず、彼らは帰ってくることはなかった。そう彼らが旅立つてから、もう既に三年もの月日が流れていた。

結果的に、それが、ふららさんを苦しめることになってしまったんだ。

ふららさんは、ずっとこの森で、彼らの、マドロスさんの帰りを待っているのだろうか。もしかしたら、もう二度と帰ってくることはないかもしれないのに。

探しには行かないのだろうか

と、僕は思った。

そう、僕と同じように。

僕は、記憶を探しに。ふららさんはマドロスさんを探しに。探し物は違うけれど、何かを探している。僕もふららさんもそれだけは確かだった。マジョンはマジョンも何か探しているのだろうか。そういえば、僕は、マジョンのことをほとんど知らなかった。パリスタの街の神官であるということ、僕が知っているのはそれだけだった。

いつか、教えてくれるかな。

僕は寝袋にくるまわりながら、静かに目を閉じた。

翌朝。

僕はふららさんに「僕達と一緒に行かないか」と尋ねてみた。

「……えっ……」

「ここで、ずっと、待っているより、きっと、そっちの方がいいと思うんだ！ 絶対！」

でも……、と、ふららはつぶやく。

「僕も探し物をしているんだ……」

「えっ？」

「僕には、マジヨンと出会う前の記憶がないんだ……」

とは、言っても、最近、マジヨンと出会ったばかりだから、全くないといっても過言ではないけれど……。

「もしかしたら見つからないかもしれない……。でも、でも、何もしいより、絶対、そっちの方がいいと思うんだ！」

「……ダイタさん……」

そうですね、と、ふららは、ほがらかな笑みを浮かべた。

その時、今まで黙っていたマジヨンがポツリとつぶやいた。

「……で、でも、ダイタさん、羽翼人の方々は『星の民』として、外界にこの森のあらゆる情報がもれないようにこの森を守っています……。だから、きっと、外界に行ったりするのは無理なのではないでしょうか？」

「あっ……」

「……それに、今、私達は牢屋の中だったりするのですが……」

「・」

「あ、ああっ！？」

ようやく僕はそのことに気付く。

今まで忘れていたけれど、そういえば僕達は捕まっていたんだっけ！ これじゃ一緒に行くどころの話じゃないよ……。

「……お願いします……」

「えっ？」

ふららは決然にそう言うと、小さな鍵を取り出し、カチャと牢屋の扉を開けた。

「ふららさん？」

「ぜひ、私も一緒に行かせて下さい・・・！」
「でも・・・」

僕とマジヨンは困ったようにつぶやく。

「いいんです。たとえ、それがこの森の掟を破ることになっても・・・！」

ふららはそう言つと、ぎゅっと拳を握り締めた。

「私もダイタさんみたいに探しに行きたいんです・・・。かけがえない人を・・・。」

「ふららさん・・・。」

「お願いです・・・！ 私も一緒に連れて行ってください・・・！」
僕とマジヨンは、思わず、お互いの顔を見合わせる。

「うん！ もちろんだよ！」

（というか、僕から誘つたんだし・・・（笑））

僕がそう答えると、ふららは本当に嬉しそうに笑った。

ふららさんってやつぱり本当の天使みたいだな。そんなことを思ってしまう僕だった。

「・・・」

「・・・あ、あれ・・・？」

その時になって、僕はようやく、目の前に一人の男性が立っていることに気付く。どうやら、この人もふららさんと同じく羽翼人らしく、背中に羽があった。

それを見たふららは驚きの声を上げた。

「デルト兄様・・・」

「お、お兄さん・・・なの・・・!?」

「はい・・・」

コクンとふららは頷いた。

もしかして僕達を牢屋から出したことをふららさんが責められるのではないだろうか。

僕は、少し心配になってきた。

「デルト兄様・・・お願いです・・・。ダイタさん達と一緒に
行くことをお許しください・・・」

「・・・」
「もう一度、マドロスさんを探しに行きたいんです！」

「・・・」

もう一度・・・ってことは、前にも探しに行ったのかな？

僕は二人の会話(?)を聞きながら、しみじみとそう思った。

ふららさんはともかく、デルトさんはテレパシーでふららさんに
話しかけているため、僕達には何を言っているのか、さっぱり分
らない。

「・・・」

「有難う・・・兄様・・・」

ふららさんはデルトさんを見て頬を赤く染めた。どうやら、了解
してもらえたらしい。

「・・・行きましょう！ダイタさん、マジヨンさん」

ふららさんはそう言つと、手を差し出した。

「うん！よろしくね、ふららさん」

僕とマジヨンもそれに答えるように手を握り返すのだった。

「ここがフレストの街なんだね」

「はい」

僕は興味津々に周りを見回す。

真紅の森をふららさんの案内にて出た僕達は、フレストの街と呼ば
れる街に訪れた。

名もなき大陸唯一の城、フレーム城の城下街だけあってかなり大き
な街である。商店街にずらりと並んでいる市場、広大な広場に設置
されてある噴水、歓楽街の通りにある多くの酒場や宿屋、中央通り

にある大きな教会、とても一日では全てを見て回るのは無理なくらい大きな街だった。

「バリスタの港町よりすごく大きな街なんだね」

「はい、この名もなき大陸の首都とされています街ですから」

「でも、本当に大きな街ですね……」

ふららはさんは恐る恐る辺りを見回す。ふららはさんはピンク色のヒラヒラのブラウスにあの赤いブローチを胸元に付けていた。そして背中の羽を覆い隠すように紫色のコートを羽織っている。

「そ、そうだね」

「ここで少しでもターンの情報が聞けるといいのですが……」
考え込むように、マジョンは唸る。

「だ、大丈夫だよ！ こ、こんな大きな街だし、ターンの居場所とか、そういう情報とかも分かるよ！ ……きっと……」

何の根拠もなくそう断言する僕を見て、はあ、と溜息をつくマジョンだった。

「お墓もあるんですね……」

ふららはさんは、悲しげにそうつぶやいた。

もしかしたら、マドロスさんも死んでしまっているのかもしれない、そういった悲壮感がふららさんの言葉からは感じられた。

僕は、深刻な表情でぎゅっと拳を握り締めた。

「あれ？ あの人の、何しているんだらう？」

僕は思わずキョトンとする。

一人の青年がじつ とお墓を見下ろしていた。何かを我慢しているかのように歯を食い縛っている。片手には何かを持っているらしく、ぎゅっとそれを握り締めている。

「タ、ターンの野郎め……」

怒りがこもった声でそうつぶやくと、青年は颯爽とどこかに立ち去ってしまった。

「ダイタさん……。今の、確か、ターンって言っていますし

た！」

「も、もしかしたら、何か、知っているかもしれない！」

僕はマジヨンとふららさんを交互に見る。

「追いかけてみよう！」

「はい」

「そうですね」

僕の言葉に二人はコクンと頷いた。

「見当たりませんね」

「うん」

あの青年を追いかけて再び真紅の森に戻ってきた僕達だったが、いつのまにか、彼を見失ってしまっていた。

「確か、こつちの方向に来たと思ったのに……」

僕はうーんと唸る。

「もしかしたら、何処かに抜け道みたいなのがあるのかもしれないね」

「ぬ、抜け道ですか……」

マジヨンの言葉を聞いたふららさんは不思議そうに首を傾げた。

「抜け道って……獣道のようなものですか？」

「うん、まあ……」

「……でしたら、確か、この近くにあつたと思いましたが……」

「え、ええっー!!!」

僕とマジヨンは驚きのあまり、目を剥く。

「もしかしたら、その道を通っていったのかもしれないね」

ふららさんは、あくまでも無垢な笑顔でそうつぶやいた。

い、いや、もしかしなくても、多分、そうだと思うけれど……ね……

。。ふららさんの話だとその抜け道、もとい、獣道を通じていくとパリスタの港町の何処かに通じているらしい。

どうして何処に通じているのかが、分からないかという彼女もその道を通ったことがないらしい。何でもマドロスさんがよく、この

真紅の森に訪れる際に通っていた道らしいが。

「もうすぐ、出口みたいですね」

ふららさんの言うとおり、奥の方から小さな光が漏れていた。

それにしてもこれは獣道とは言わないんじゃないだろうかー!?

僕は周囲を見渡しながら、しみじみとそう思った。周りは硬い岩に覆い包まれていて、薄暗い場所である。明らかに地下通路といった方がいいのではないだろうか。だが、僕のそんなツツコミもむなし、既に僕達はバリスタの港町まで辿り着いていた。

「ここは・・・」

「神殿・・・みたいですね」

思いつきり背を反らさなければ、てっぺんが見えないほど、大きな神殿だった。

僕とふららさんは、胸の鼓動が高鳴るのを感じながら、「ふうつ」と大きく息をついた。

「ダイタさん、ふららさん、早く、行きましょう」

「えっ、でも・・・」

「早く、行きましょう!」

「う、うん」

いつもとは違う動揺しているような声で、マジヨンはそう言った。そんなマジヨンを見て、僕もふららさんもキョトンとする。

そういえば、マジヨンって、ここの神殿の神官さんだった。何か、他の人と会えない理由でもあるんだろうか。

僕は、ふと、初めて出会った時のことを思い出した。

もしかしたら、あの時、僕と一緒に行くことを他の人達には反対されていたんじゃないだろうか!? いや、きっと、そうだ! それなのに、マジヨンは僕達のために!

「マジヨン・・・」

「はい」

「ありがとう」

「えっ? 何のことでしょうか」

唐突にそう言った僕を見て、マジヨンはわけが分からず、動揺した。

「ほ、本当は、僕と一緒に行くことを反対されていたのに、一緒に行ってくれてありがとう・・・」

「えっ!？」

「そうだったんですか。マジヨンさん。本当にありがとうございます」

僕の言葉を聞いて、ふららは深々とお辞儀をした。

「あ、あの、私、反対なんてされていませんけれど・・・!」

慌ててマジヨンはそう叫んだ。両手を力強く横に振ってみせる。

「えっ!？ でも、神殿には入れないって・・・」

「それは別の理由で、今は、神殿には入りたくないのです・・・」

「へっ?」

「すみません・・・」

申し訳なさそうにマジヨンはうなだれた。

思わず、僕は、何かを言いかけそうになったが、これ以上は、何も聞けなかった。

「あの人、見つかりませんね」

「うん・・・」

再び、僕達は、ターンのことをつぶやいていた『彼』の搜索を始めた。

マジヨンの言葉のことも気にならないといえば、嘘になるが、今は、彼を探すのが先決だと思うし。

「あとは、あの、酒場だけですな」

「う、うん」

僕はその酒場を見て、一瞬、言葉をなくした。裏街路の奥に通じる道に古びた酒場がある。まるで今にもつぶれてしまいそうな程寂れてしまっている。

「す、すみません・・・」

恐る恐る僕は扉を開ける。ギイツと低い音をたてながら、扉は開いた。だが。

「だから、ターンのことだ!」

突然、沸いて出た怒声に、僕達は目を丸くする。

「他にもあるだろうが!」

「さつきも言ったはずだ。悪いが、今は、それしかないんだ・・・

。出直してくれ」

酒場のマスターらしい男が、怒声を上げた男を制する。

僕は、いや、僕達は、それをみて「あっ」と声を上げる。怒声を上げた男は、あの時、ターンのことをつぶやいていたあの青年だったからだ。

「くっ、もういい!」

「あ、あの!」

今にも飛び出していきそうな勢いで去っていく彼を、僕は慌てて止めた。

「今、急いでいるんだ! どいてくれ!」

「わあっ!?!」

ドーン

僕は思いつきり、床に這いつくばった。

「ダイタさん!」

マジヨンとふららさんが心配そうに僕を見つめていた。だが、それとは対照的に、彼は僕のことなど、お構いなしに酒場の扉を開ける。もう、こ、こうなったらー!!!

僕は、必死に痛みをこらえながら、体を起こすと、半ばヤケになって叫んだ。

「あ、あーの、ターンのことについて、何か、知っていますよね!

僕達、ターンについて知りたいんです! ターンの持っている

『星のかげら』について知りたいんです! お願いします!」

声の続く限り、僕は必死になって叫んだ。そんな僕の努力が実ったのかは分からないが、彼は僕達の方を振り向いた。

「星のかけら・・・!?」

「は、は、はい!」

僕は大きく頷いた。

「貴様らも『星のかけら』を狙っているのか!」

そう叫ぶと、彼は、突然、僕の胸ぐらをがしつとつかみあげる。

それを見たマジヨンとふららさんが、慌てて彼を止めようとするが、彼はそれを軽く振り払った。そして、僕を恐ろしい形相のまま、詰問する。

「さては、貴様も、この俺の命を狙っている輩か!」

「ち、違います! 違います!」

「嘘をつけ! この俺が持っている『星のかけら』を狙う連中だろうが!!」

意味も分からず、彼に揺さぶられながら、僕は必死になってそれを不定した。だが、彼はそれを信じようとせず、ひたすら問い詰める。

「さあ、吐け! 誰の差し金だ!」

「だ、だから、違います!・・・って・・・えっ・・・!?」

僕はその時になって、ようやく、彼の言葉の不可思議な部分に気づいた。

「ほ、『星のかけら』を持っているんですか!??」

「な、なにっ!? き、貴様、知らなかったのか!」

「えっ、あっ、はい・・・」

僕はコクンと頷く。僕の言葉を聞いて、彼は明らかに動揺の色をみせた。

「何だと!? では、貴様らは、この俺の命を狙う輩ではないというのか!」

「だ、だから、さっきからち、違いますって、い、言ったんだけど・・・」

かすれかすれになりながら、僕は声を絞り出して言った。

「では、何だ。貴様らの目的はなんだ!??」

それでも、僕に、疑いの目を向ける彼に対して、僕は、口をパク

パクさせながら言った。

「そ、その、僕、記憶喪失で、な、何でも、『星のかけら』があれば、ぼ、僕の記憶がよみがえるかもしれないんで……さ、探していたんです」

「き、記憶だとー！？」

その時になつて、ようやく、彼は、僕を掴んでいた手を離す。はあはあつと、一呼吸、置いてから、僕はそれに答えた。

「僕には、何故か、この名もなき大陸を訪れる前の記憶がないんです。でも、その記憶の手がかりになりそうなものが、その『星のかけら』らしくて……」

彼はそれを聞いてふんと鼻を鳴らした。どこか、素っ気ない表情で腕を組んでいる。

「……だから、貴様に渡せ、とでもいうのか！ ふざけるな！

これは、俺のものだ。 誰にも渡さん！」

「そ、そんな！ ひどいです！」

どこか、傍若無人ぶりな彼の態度に、マジョンは力強く抗議した。「ふん。 記憶なんて、そのうち、戻ってくるさ。 気長に待っていればいいことだ」

「お願いです……『星のかけら』を譲って下さい！」

ふららさんはすぐ切ない表情で彼をじっーと見つめていた。両手を前に組んでいる。それは、横から見つめている僕の方が思わず胸をときめかせるほど、真意に満ちた表情だった。まるで、そう、地上に舞い降りた天使のように、僕の瞳には映った。

「い、いい加減に……っ……」

彼は視線をふららさんに向けると、突然、言葉を失ったかのように固まる。彼は、まるで放心状態になったように、まじまじとふららさんの顔を見つめていた。口をぽかんと開け、緊張してしまったかのようにびしっと姿勢をよくしている。

「あ、あの、だ、だめでしょうか……」

今にも本当に泣き出しそうな表情でふららさんは言った。そんな

彼女の手を、彼は、さつと握り締めた。

「な、何を言っているんだ！ もちろん、いいに決まっているさ！」
いきなり、意見を180度変えた彼を見て、僕だけではなく、マジョンも目を丸くする。

「あ、ありがとうございます」

照れくさそうに頬を少し染めながら、ふららはさんは、輝くような笑みをこぼした。

「ところで、貴女のお名前は？」

「ふららです」

「ふららさん。俺は、フレイです。以後、よろしく！」

「えっ！ ちょっと、それって……」

言葉の意味からして、もしかして、いや、間違いなく、僕達についてくるつもりなんじゃ！？

「ふん。貴様に『星のかけら』をくれてやるんだ。そのくらい、当然だろう」

いかにも当たり前のように言う彼、フレイの言葉に対して、僕とマジョンはあきれたような表情で、呆然とその場に立っていた。

「フレイさん、よろしくお願いしますね」

ふららさんだけが嬉しそうににっこりと言うのだった。

第3章 名もなき大陸の支配者

たった、一人の誰かでない。
そうすれば……。

「運命の人ですわ」

突然、こんなことを言われたら、誰だってびっくりすると思う。
でも、それが、もし、本当に起こったことだったとしたら、一体、
全体、どうすればいいのだろうか。

「と、突然、そう言われても……」
僕は困ったように頭を抱える。

再び、フレストの街に戻ってきた僕達を迎えてくれたのは、甘栗色
の髪の女性だった。どこか、気品があふれる様な雰囲気的女性だ。
明らかにどこかの王女様か、お嬢様だろう。

「ダイタ。やるな」 フレイが意味もなく、僕に話しかけてきた。
何がですか??

「あの、お名前をお教え下さいですわ」

「えっ、ダイタ……」

「ダイタ様……? 素敵ですわ?」

だから、何がですか??

僕が困ったように、横目でフレイを見ると、うすら笑いを浮かべ
ながら、にんまりと僕を見つめていた。

わ、笑い事じゃないんだけど……。

「あの、ダイタ様? わたくし、ファミリアと申しますわ」

彼女、ファミリアさんは目を輝かせながら言った。

「あの、ダイタ様」

「えっ? ええ!?!」

ファミリアさんは、真意に満ちた表情で僕に迫った。その瞳はど

こか、憂いに満ちている。

だからね、ほ、本当に何なんですか？？

「わたくしと結婚して下さいですわ？」

「えっー　　！！」

僕は、ひたすら目を丸くする。その時、僕の肩を誰かがポンと叩いた。

「幸せになれよ！　ダイタ。　ふららさんのことは俺にまかせろ！」

フレイは何かを悟ったかのように、僕に言った。

いや、だからね……

「そ、そう言われても……」

「それはだめです！」

僕の言葉をさえぎって、突然、大声で叫んだマジヨンを見て、僕は、いや、僕達は、思わずたじろいた。

「どうしてですか？」

「ダイタさんは、『星のかけら』を探して、自分の記憶を取り戻す旅をしているんです！」

「ダイタ様、お記憶がないのですか？」

「うん。　なぜか、この名もなき大陸に訪れる前の記憶がないんだ・

……」

「そ、そんな……。　そんなのって　　」

ファミリアさんは目を見張って、僕を真っ直ぐに見た後、肩を震わせた。

「そんなのって悲しすぎますわ〜」

嗚咽おえつを漏らし、大粒の涙をこぼすファミリアさんを見て、僕の方がわけもわからず動揺してしまった。

「で、でも、その『星のかけら』があれば、もしかしたら、僕の記憶が戻るかもしれないんだ」

「……そうなのですか？」

「う、うーん、多分……」

そう言われてみると、確かにそうだと言える確証は全くない。ま

だ、フレイの持っている『星のかけら』を見せてもらっていないし。
「わたくし、決めましたわ!」

僕の言葉を聞いたファミリアさんは真顔になった。

「えっ? なに・・・」

「わたくしもダイタ様と共にいます。ダイタ様のお記憶が戻るまで、そして、わたくしのことを考えて頂けるまで、ずっと、そばにいますわ!」

「えっー! ! ! 　それって、じゃあ、一緒に来るつもりなの・・・!!」

意表つかれた僕が聞き返すと、ファミリアさんは両手を胸の前に合わせて祈るように答えた。

「もちろんですわ?」

「ず、すつとつて言うのは何なのですか・・・?」

聞きたくない答えが返ってくるのを予期しているかのように、マジョンは恐る恐る訊く。

「ダイタ様がわたくしと結婚すると言うまでですわ!」

「そ、それって、いつの話ですか・・・!!」

肩を震わせながら、マジョンは言う。どこか怒りがこもった口調である。

「さあですわ」

「さあつてなんですか!」

「あなたには関係ない話ですわ」

「関係あります!」

不遜な笑みを浮かべながら2人はにらみ合う。

「何なの・・・かな」

ひたすら、言い争うマジョンとファミリアさんを見ながら、僕はつぶやいた。

「ふっ、もてもてだな、貴様」

フレイが少し悔しそうに、僕の肩を再び叩く。

「だ、だからね、何なんですか・・・」

力なくつぶやく僕を背に、二人の言い争いはいまだ続いていく。「マジヨンさんとファミリアさん、もう、仲良くなったのですね」「ふららさんが嬉しそうに両手を前に組んでみせる。

いや、それは、違うと思う。

「そういえば、フレイが持っている『星のかげら』をまだ、見せてもらっていなかったよね」

バリスタの港町からフレストの街に行くまでの間、いつでも見せてもらえたはずなのに、すっかり、そのことを忘れていたのだった。ファミリアさんに出会えていなかったら、まだ、忘れたままだったかもしれない。

「そういえば、そうだったな」

軽い調子でフレイはそう言うと、持っている皮袋の中から青色の卵のようなものを取り出した。

「そ、それが『星のかげら』なの？」

「ああ。それにしても、貴様、のんきだな。貴様の方から譲ってくれと言ってきたくせに……」

「えっと……」

忘れていた……なんて言えるわけがない。

『星のかげら』のことを言ってくれなかったフレイもフレイなんだけど……」

「まあ、いいさ。ほら！なくすなよ！」

フレイは思いつき嫌そうに顔をしかめながら、僕に『星のかげら』を渡した。どうやら、いまだに、僕に『星のかげら』を渡すのをためらっているらしい。

「これが、『星のかげら』……って……!？」

僕の手のひらに『星のかげら』が触れた途端、僕の脳裏に不思議な光景がよぎった。

雪景色。

藍色の帽子とコートを羽織った女性。
真摯な瞳で誰かを見つめている。
いや、誰かを待っているのだろうか。

僕には、一目ですぐにそれが誰なのかが分かった。
そうだ。僕にあの時、この名もなき大陸に訪れるように言ったあの女性だ。

ふと、彼女は誰かを見つけたかのように、頬を染めて、はにかむように笑った。

最初に出会った時とは、雲泥うんでいの差だな。

そう思わずにはいられないほど、自然ですごく優しい微笑みだった。傍から見ているこちらの方が照れてしまう。

(お願い・・・思い出して・・・)

ふいに僕の脳裏に初めて彼女に出会った時のことが甦る。あの時、彼女は何を伝えたかったのだろうか。僕に本当は何を伝えたかったのだろうか。

そして――

僕は彼女のことを知っているのだろうか。

「ダイタさん・・・?」

マジヨンの言葉で僕はハツとする。

「あれ?」

「どうかされたのですか?」

マジヨンは心配そうに僕を見つめた。

「今のって……」

「えっ？」

今のって何だったんだらうか。もしかしたら、僕の記憶に関係あることなのかな。

「何か、思い出されたのですか？」

「えっ、そういうわけじゃないんだけど……」

僕は困ったように頭を抱える。そして、先程のことを簡単に説明した。

「夢の女性……？」

「うん。やっぱり、僕の記憶は、その人と関係があるみたいなんだ」

この名もなき大陸のことも『星のかけら』のことも彼女から聞いたことだし。

「で、どういう人なんだ」

にんまりと嬉しそうに含み笑いを浮かべながらフレイは訊いた。

「ど、どういう人って言われても……」

「ほら、あるだろう。綺麗な人だったとか、かわいい人だったとか……」

「え、えっと……」

僕は思わずなんて言っていていいか分からず、言葉を詰まらせていると。

「フレイさん……」

神妙な表情でふららさんはフレイを見つめていた。

「ふららさん！ ち、違うんだ！ これは……」

フレイは必死になって弁解の言葉を模索する。ふららさんとフレイは、ほぼ同時に次の言葉を発した。

「フレイさんも、その人と仲良くなりたかったんですね。 私もお

友達になりたいです」

「あっ、その、なんだ、俺達の今後のために必要だと思っただけさ
！」

「……………」

僕ははつきりと思った。

間違いなく、会話が全く成り立っていないと。

「そういえば、フレイはどうして『星のかけら』を持っていたの？」

僕は何気に前々から聞いてみたいと思っていたことを切り出した。

「俺はもともと、とある盗賊団の一員だったんだ」

ふふん、と得意げに人差し指を立てながら、フレイは続ける。

「狙った獲物は逃がさない、この辺りじゃ有名な盗賊団でな、とはいつても、まあ、秘宝やお宝専門のトレージャーハンターのようなものだったんだ」

「へえ」

「もしかして、盗賊団、『魔のルーク』ではないのですか！」

ファミリアさんの言葉に、フレイは、ああ、と満足そうに頷いた。

「ファミリアさん、知っているの？」

僕は思わず、きよんとする。

「前に、お兄様から聞いたことがありますの。わたくしの兄は、ファミリア王国の騎士団長を

していますからですの」

「ファミリアさんって、お兄さんがいたんだ」

「はい？」

ファミリアさんは照れくさそうに頬を染めながら、嬉しそうに返事をする。

「『星のかけら』も、もともとは、ターンが持っていたものの1つでな……。本当は、ターンが持っていた『星のかけら』、2つとも手に入れるつもりだったんだが……」

フレイは唇をぎゅっとかみ締めながら、悔しそうにつぶやいた。

「……俺達は、奴に、いや、奴らに全滅させられてたんだ……」
フレイは「くそっ」「くそっ」と繰り返しながら、何度も何度も拳を叩き続ける。だが、行動とは裏腹に、フレイの表情は、どこか、

苦しげで辛そうだった。

ど、どうも、何か、まずいことを聞いてしまったかのような……。

僕が申し訳なさそうにうつむいていると、マジヨンが不思議そうに訊いた。

「奴ら？……ですか」

「ああ、ターンと、ターンの右腕と呼ばれる存在、ロクス……、奴ら、二人によって、俺達は全滅を余儀なくされたんだ。俺だけが、なんとか、一人、生き残ることができて、『星のかけら』の……」

つだけは、手に入れることはできたが……」

僕はふと、フレイと初めて出会った時のことを思い出す。
「あっ！ だから、最初に出会った時、『俺の命を狙っている輩か』とか言っていたんだ。」

「ああ」

何だか、ますます、申し訳なくなってきたような……。
本当にもらってしまってよかったのかな……。『星のかけら』

「そんな大切なものだったのに、本当に僕がもらってよかったの……？」

「ほ、本当はよく、ないが……」

フレイは、少し口惜しそうにそう言うと、ちらっとふららさんを一瞥する。

「まあ、愛する人のためだからな！」

フレイは、どこか、かっこつけるかのように、髪をさらっとかき上げ、にっと笑ってみせた。もちろん、愛する人というのは、ふららさんのことだろう。

「つまり、『星のかけら』を手に入れるためには、やはり、ターンと戦わなくてはならないんですね……。それは……」

「それは」からの後ろの言葉は押し殺すようにつぶやきでひどく聞き取りづらかった。だけど、僕は、マジヨンの隣にいたおかげで、

彼女の言葉を最後まで聞き取ることに成功した。

できれば、それは避けたかったのですが――

彼女は、「それは」の後、確かにそうつぶやいた。

「避けたかった」とはどういう意味だろう。

疑念が矢になって僕の胸に刺さった。「避けたかった」。もともと、僕と一緒にいくといった時点で、なんらかの形でターンと出会う、または戦う予測はできたはずである。

そういえば、確か、初めて出会った時、マジョンはターンが『星のかけら』の一つを持っていることを既に知っていたんだっけ。まあ、フレイの話からして、多分、あの後に、ターンは、また、別の『星のかけら』を手に入れたのだろうけれど。

「まあ、何にしてもだ！ あの野郎だけは、ぶっ飛ばさないと気がすまねえ！」

僕の思案は、フレイの叫びによって中断を余儀なくされた。

気を取り直して僕は言った。

「そうだね！」

「ダイタ様、わたくしも頑張って応援しますわ〜？」

「応援……ですか」

「はい？」

いや、応援されても……ね。

「ファミリアさんは戦わないのですか？」

ふららさんがきよとんと首を傾げる。

「わたくしには、戦う手段がありませんもの」

「だ、だから、見ていただけなのでしょうか……」

マジョンの声は落ち着いているかのようにみえたが、やはり、どこか怒りで震えていた。

「見ていただけではありませんわ。応援していますっていいましたの」

「そ、それが見ているだけっていうんです!!」

二人は一瞬、にらみ合って動きを止めた。

そして、肩をいからせた瞬間、二人の口が同時に動いた。

「いい加減にして下さい！」

「あなたには関係ないことですわ！」

「関係あります！」

「関係ありませんわ！」

な、何なのかな……。

僕は呆然と二人の言い争いを見ながらそう思った。

「ちっ、なぜ、貴様なんかこんなにもてるんだ！」

不機嫌そうにフレイは顔をしかめた。

「へっ？」

「マジヨンさんとファミアさん、楽しそうですね。私もお仲間

にいれてもらいたいです？」

いまだに状況が理解できていない僕を尻目にふららは羨ましそうに穏やかな笑みを漏らした。

僕達一行は、フレイの案内によってターンの居城へと向かった。た。

森の中を走る立派な石畳の街道。分かれ道が出現しても、フレイはひよいひよいと迷うことなく進んでいく。

もし、フレイがいなかったら、間違いなく僕達は迷っていただろう。

僕はしみじみとフレイと出会えたことに感謝した。

感激しきりの僕は、道中フレイにあれこれと質問攻めにあった。

そのほとんどがふららさんに関することだった。聞かれること一つ一つに僕は律儀に答えた。

フレイは、ふららさんが羽翼人だということに驚いていたが、それ以上に驚いていたことがあった。

「おい！」

「へっ？」

きよとんとする僕を、フレイは自分のところへぐいっと引き寄せ

と、こっさり耳打ちした。

「ふららさんって、赤が好きなのか？」

「えっ、どうして？」

「いつも、あの襟元につけている赤いブローチを大切そうに見つめているだろう」

「あっ！」

僕は手をポーンと叩く。

「そういうわけじゃないよ！ あのブローチは、ふららさんの彼氏のマドロスさんがくれた大切なものだから……ぐふっ……」

僕は途中で口籠った。何故なら、フレイが突然、僕の胸ぐらをつかんできたからだ。

「な、な、な、なんで……」

怒りの表情のフレイに揺さぶられながら、僕は、必死に弁解の余地を求める。

「何故、ふららさんに彼氏がいることを黙っていやがったんだ！」
「あっ！」

そ、そういうえば、そ……そのことをフレイに話していなかったわけ……。

「さては貴様も、ふららさんのことをねらっているな。　そうだろう！」

「ぢ、ぢがう……って……」

僕は、息つく暇もないほど揺さぶられながら、フレイに、マドロスさんのことを必死になつて説明した。

最初は、「本当か！？　本当か！？」とあからさまに半信半疑の表情を浮かべていたフレイも、そのうちに僕の誠意ある弁明を聞き入れてくれた。

「ふん、なるほどな」

フレイはふんと鼻で笑った。ようやく、フレイから解放された僕は、はあはあ、と息をつく。

「まあ、つまりだ。　そいつは、過去の男ということか！」

フレイはにやりと勝利の笑みを浮かべた。

啞然とした僕を尻目に、フレイは一瞬、ねちつとした笑みを浮かべた後、突然、高笑いをし始めた。

「あつ、だから、違うつて・・・」

だが、そんな僕の声もフレイの耳には届かなかつたらしく、身体を大きく反らして豪快に笑っていた。

マジヨン達はそれを怪訝そうに見つめている。

だめだ。こりゃ。

僕は、ふうつと溜息をついて、がくと肩を落とした。もうだめだ。こうなつたら、もう、何を言っても駄目なような気がする。

いまだに、高笑いをしているフレイを見て、僕はげんなりとするのだった。

「ここがターンの城だ」

ターンの城らしき影がぼんやり見えてきたあたりで、フレイは口を開いた。

それはとてつもなく、巨大な城だった。

名もなき大陸の一面にそびえ立つ巨大な城だとは聞いてはいたが、まさか、これほどまでとは思っていなかったのである。

「それにしても、ここに来るまで、何も起こらないというのはおかしいな」

僕が口をぽかんと開けて城の真上を見ていると、腑に落ちないといった顔でフレイがつぶやいた。

「えっ、何が？」

「馬鹿か！ 貴様は！ ここは奴の、ターンの拠点ともいえる場所だぞ！ 何も起こらないことを不思議に思わんのか！」

「あつ・・・」

フレイに一喝され、僕はようやく、そのことに気づく。

「そ、そういえば、そうだね」

「畏・・・でしょうか？」

マジョンはいぶかしげに眉を寄せる。

「奴らならやりかねないな」

「ふっ、我が主は、そんなことはなさいませんよ」

唐突に背後から涼やかな男の声がした。

「我々は勇猛果敢に正々堂々と戦うことがモットですから」

「何が正々堂々だ！ 俺達と戦った時は、魔法で一掃だつたくせによー！」

フレイがきつ、と彼を睨み付ける。だが、彼は鼻で笑ってそれを受け流した。

「誰かと思えば、あの時、一人で逃げ出したお方ではありませんか」

「ち、違う！ 俺は・・・」

「まあ、恥じることはありませんよ。それが人として当たり前
の行動なのですから」

彼はクククと愉快そうに笑った。

「ロクス！ 貴様！」

フレイは腰の剣の柄に手を伸ばす。そして叫びながら、ロクスに斬りかかろうとした。だが、剣が彼に触れる前に、彼があらかじめ張っていた結界によってはじかれる。

「く、くそっ」

フレイは苦悶の叫びを上げる。

あの時と同じだ。

フレイの瞳に、前にターン達との戦ったときのこと甦る。

俺は、団長や仲間から守ってもらっているばかりで、何も何もできなかつた。

あの時の戦いの時でも、俺は、奴らに一矢報いることもできず、団長を、仲間をみすみす死なせてしまった。

「まだ、するつもりですか・・・」

顔を上げると、ロクスが彼を嘲笑するかのように見つめていた。

嘲笑あざわらわれて当然だ。

確かにあの時の俺は、仲間を守ることもできず、ただ、逃げ切る

ことしかできなかつた。

だが、だが、今は違う！

フレイは、ダイタ達の方を見つめる。

大切な仲間をもう二度と失わないためにも……。
そしてー。

フレイはふららさんの横顔をじつ　と見つめた。

愛するふららさんのためにも！
もう二度と諦めたりはしないさ！

フレイは傷だらけの身体を必死で起こすと、ロクスめがけて剣を振り下ろした。

「ふふふ、ロクスが彼らの相手をしている間、私があるあなた方のお相手をお願いしますか」

僕とマジヨンはまるで金縛りにあつたかのように動けなくなつていた。

僕達の目の前に立っている人物は、明らかに人間ではなかつた。魔物といった方が近いのではないだろうか。赤く燃える瞳は、これ以上ないというぐらい凶悪で陰険である。

それに、どこか身震いするような恐ろしさを感じた。
見るからに尋常ではない姿だつた。

しかも、彼、ターンは、まるで、僕達の動きを見透かしているかのように的確な攻撃をしてくる。そうかと思つたら、僕が剣で攻撃をしても、軽々とそれをかわしてしまふ。

「う……」

僕は痛みをこらえながら、気力だけで立ち上がるうともがく。

「……こ、このままじゃ、まずいね」

節々の痛みを懸命にこらえて上半身を起こすと、僕はつぶやいた。

「は、はい……」

マジヨンは重々しく頷いた。

そして、僕にそつと触れると回復魔法を唱え始める。

マジヨンは主に、回復系の魔法しか使えない。ファミリアさんは、やっぱり、応援だけしかできないらしい。そして、フレイとふららは、ロクスと戦っていた。

あきらかに、どちらの戦いも、僕達が不利な状況であった。傷だらけの僕達に対し、ターンとロクスはほぼ無傷に近い状態だったからだ。

どちらが有利か、誰の目にも一目で分かるだろう。

一体、どうすれば、どうしたら彼らに勝てるのだろうか！。

そんな思いが僕の脳裏によぎった。

どうしたら、彼らを倒すことができるのだろうか。

だけど、何の答えも見つからなかった。

無理なのかな。

やっぱり、無理なのかな。

そうだよな。

僕なんか倒せるんなら、もう、とつくに倒されているはずだもんな。

ごめん。みんな。僕は、もう……。

僕は頭をうもだれ、地面に膝をついた。

「私も一緒に連れていってもらえませんか？」

ふと、僕の瞳に初めて出会った時のマジヨンの顔が映った。

マジヨンは、僕のために一緒について来てくれたんだっけ。

「私もダイタさんみたいに探しに行きたいんです……。 かけがえのない人を……。」

真紅の森の掟を破つてまで、僕達について来てくれたふららさん。「……俺達は、奴に、いや、奴らに全滅させられてたんだ……」
ターン達に仲間を殺されたフレイ。

「わたくしもダイタ様と共にいます。 ダイタ様のお記憶が戻るまで、そして、わたくしのことを考えて頂けるまで、ずっと、そばにいますわ！」

僕なんかを『運命の人』だと言ってくれたファミリアさん。

僕がここで諦めてしまったら、マジョンは、みんなはどうなってしまうんだ……。

僕はぐつと剣を握り締める。

そっだよ。

僕のためについてきてくれてみんなのためにも僕は絶対に諦めたり、逃げたりすることはできない。

そして、決めたんだ。

絶対に、あの夢の女性に会うんだって！

ごっ！

戦いの幕は、ターンの放った衝撃波によって再び切って落とされた。

僕はターンめがけて勢いよく走りこもうとした。

その時だった。

僕の頭の中に聞き覚えのある女性の声が聴こえてきたのは。

(あなたに、ミリテリアの力を。 夢月のご加護を)

あの夢の中の女性の声だった。

「ミリテリアの力……だと!?!」

突然の出来事に、ターンは驚愕する。

僕の周りを不思議な虹色の光が交差した。

マジヨンが、ふららさんが、フレイが、ファミリアさんが僕の視界から消えていった。

「これって……一体……」

気がつくのと、僕の目の前に藍色の帽子とコートを羽織った女性が立っていた。

（ダイタさん、あなたを、私、夢月の女神である、リーディングのミリテリアと認めます）

「ミリテリア？」

（この世界、“アーツ”には、6人の神がいます。通常、魔法は、その6人の神々の力を借りて使われているものなのです）

「力を借りる？」

僕はよく分からないといった表情で首を傾げた。

僕はいつのまにか、最初に彼女、リーディングさんと出会った場所にいた。

僕は、周囲を何度も何度も見回してみたが、やはり、以前と同じように辺りは真っ暗で何も見えない。

僕は、再び、目の前のリーディングさんに視線を戻した。

やはり、不思議なことに、彼女だけははっきりと見ることができ

る。はい。例えば、神官や夢魔使いといった方々は、夢月の女神から力を借りて魔法を使います。そのため、彼らは、主に回復系の魔法を使えるのです）

「夢魔使いや神官って……あつ！　ってことは、マジヨンも夢月の力を借りているの!？」

僕はハツとする。

マジヨンはバリスターの港町の神官さんだし。

（ええ、そうです。また、星魔術師や羽翼人といった方々は、星の女神から、占術師といった方々は、時音の女神から、魔術師や魔

族といった方々は、魔王から力を借りているんです)

「ま、魔王・・ね」

僕は困ったように頭を抱える。

やっぱり、そんなのがいるのか。

(そして、その4人の神々の力をはるかに凌駕する力を持つといわれています、天の魔王、そして地の魔王といった方々がいます)

「へえ、そうなんだ」

僕は何度も何度も頷いてみせる。

最初の頃よりは、少しはましになったとはいえ、僕はまだまだ、

この世界のことにはうとい。特にこういった魔法のことについては(普通、魔法はその神々の力の一部を借りて使われているものなのですが、唯一『ミリテリア』の場合は、その神々、一人の力を最大限に借りて使用することができるようです)

「ええっー！！　じゃあ、僕もマジヨンみたいに回復魔法とか使えたりするの！」

(はい。そして、それとは、別に、ミリテリアでしか使う事ができない、大魔法『レバエレーションズ』を使うことができます)

「そ、それって、こ、攻撃魔法なの！」

(はい)

僕はこみ上げてくる笑いを隠そうともせず、目を輝かせていた。

もしかしたら、ターン達に勝てるかもしれない！

僕の胸に希望の火種がぼうつと一気に燃え上がった。

だが、それと同時に別の疑問が浮かび上がった。

「でも、どうして、僕を、リーティングさんの・・・夢月のミリテリアに選んだんですか？」

(それは、あなたが私にとって大切な人だからです)

「へっ？」

リーティングさんは頬を染めて、はにかむような笑顔を見せた。

僕は一瞬、どこかで見た笑顔だな　と思った。

だが、すぐにそれがどこだったのかが分かった。

あつ、と僕は口をぽかんと開ける。

『星のかけら』に触れた時に見たあの時の彼女の微笑によく似た優しい微笑みだった。

「あつ、えつと」

僕はひたすらあらぬ方向を向いた。顔を赤らめたままで。

（これからよろしくお願いしますね。 マスター）

「ま、ま、ま、マスター!？」

両手を前に組んで、彼女、リーディングは頬を赤く染めながら、とびつきりの笑顔を見せた。

僕はいつのまにか、元の場所に戻っていた。

「ゆ、夢月の力だと・・・!？」

ターンが憎らしげに僕を凝視していた。

「ダイタさん、大丈夫ですか？」

「ダイタ様、大丈夫ですよ？」

マジヨンとファミリアさんが心配そうに僕の所へ駆け寄ってくる。

「あつ、う、うん・・・」

少し戸惑い気味に僕は返事をした。

動揺はあるものの、先程までとは違って、気持ちは不思議と落ちついていった。まるで、追い風に吹かれたときのような、圧倒的な開放感だった。

「馬鹿な・・・な、なぜ、貴様がその力を！」

得体の知れないものを見るようにターンは僕をねめつけた。

焦燥を振り払うように執拗に衝撃波を放つターンの攻撃が、だんだん、鮮明に見えるようになってくる。

こ、これも、ミリテリアの力なの!？」

今まで力を振り絞っていたのが嘘のような開放感に僕はそら恐ろしささえ覚えた。

その耳に、マジヨン達の声が、ひっきりなしに飛び込んでくる。

「・・・それにしても、ダイタさんが夢月のミリテリアなんて・・・」

「ダイタ様？ 素敵ですわ？」

「ダイタ、何だか、よく分からないが、とにかく、やってしまえ！」

「ダイタさん、頑張ってください！」

いつしか、僕には、それらが士気を鼓舞するコーラスのように思えてきた。

その音色に止めどなく気力を引き出され、僕はますます軽快なステップでターンへと迫っていった。

がいん！

もう幾度目か分からないつばぜり合い。

「お、おのれ！」

僕の剣とターンが虚空から取り出した剣がからみ合う。一瞬でも別のことに気を散らせば、瞬く間に体勢が崩れるだろう。そのとき、こらえきれなくなったマジヨンが思いほとばしる絶叫をあげた。

「ダイタさん、頑張ってくださいー！！」

「り、リーディングさん、力を貸して！ レバエレーションズーっ！」

雄叫びを上げた僕の叫びとともに剣が虹色の光に包まれていく。僕は渾身の力を込め、ターンを剣でなぎ払った。

ターンの断末魔の悲鳴はまばゆい光の中に呑み込まれていった。

「ターン様！？」

ロクスが絶叫する。

「貴様の相手はこの俺だ！」

わずかにできた隙にフレイが間合いを詰め、ぶんつと剣を振り落とす。

「愚かな！ 私に剣が通じないのを忘れましたか！」

ざく！

それまで繰り返されていたのと同じ単純な一雑。ところがそれは、

結界を張っていたはずのロクスの体を深く傷つけ、大きく吹き飛ばした。

「ばっ、馬鹿な！ な、なぜ、私の結界が・・・通じないのです！？」

ざっくりと切り割られた肩先を押さえ、ロクスはよろめいた。

「ど、どういうことだ！？」

「ごめんなさい・・・、フレイさん」

いぶかしげに眉を寄せたフレイに、ふららは苦笑する。

「やっと、彼の結界の封印が解けました。 時間がかかってしまつてすみません」

あっ、あの、ロクスの結界の封印を解いていたんだ！？ ふららさん。

僕は内心、心臓バクバクさせながら、その戦いを見つめていた。

「ナイスだ！ ふららさん！」

「あっ、はい！」

フレイはふららさんに対して親指をぐっと立てると、ロクスに突っ込んでいった。

「この私がこの程度で倒されると思っっているのですか！ 結界がなくとも、貴様ごとき！」

「エルドランド！」

ロクスの攻撃を、ふららさんの魔法がさえぎる。

「ロクスさん、私がいることも忘れないで下さい！」

「こ、この私が・・・！」

フレイがロクスの目の前まで迫る。。

「今度こそ終わりだ！ ロクス！」

フレイはロクスに剣を振り落とした。

「こ、この私がああああああああつ！」

ロクスの絶叫が辺り一帯に響き渡った。

終わったんだ。

辺りは痛いほどの静寂に包まれている。

僕は静かに、ターンの城の方向を眺めていた。

これで、ターンが持っているもう一つの『星のかけら』も手に入るんだ！

「あつ、そういえば!？」

僕はその時になつて、やっと、彼女、リーディングさんに、僕の記憶のことを聞きそびれていたことに気づいた。

僕は内心、後悔したが、少し考えた後、こう思った。

でも、大丈夫だよ、きつと！

前みたいいきつと、『星のかけら』が何かを教えてくれるはずだと思っし……。

「やりましたね、ダイタさん！」

マジヨンが僕のところに駆け寄ってきた。

「うん、まあね」

「ダイタ様、すごいですわ？」

ファミリアさんが嬉しそうに僕を抱きしめる。

あつう。

「ファミリアさんは何もしてないでしょう!」

マジヨンが、不服そうにファミリアさんをキツと見つめる。

「本当にすごかったです」

「俺の活躍の方がすごかったがな!」

フレイが僕に向かって、自信満々で言った。

ふと、その時、マジヨンが不思議そうに僕に問いかけてきた。

「それにしても、ダイタさん、いつのまに、夢月の女神様とお会いしていたのですか？」

「へっ?」

「夢月のミリテリアになられたということは、もうすでに、夢月の女神様にお会いしていたということですよね?」

僕はあつ、と声を出す。

「あのね、それがね、あの夢の中のあの人が、夢月の女神様だった

んだよ」

「えっ？」

「リーディングさんっていうんだって！」

「リーディング……！」

マジョンはそれを聞いてハツとする。

確かに、夢月の女神の名前はリーディングという。

だけど、その名前は、ほとんどの場合、神官や夢魔使いといった職業の者達でしか知る機会はないはずだ。

マジョンは改めて、確信した。

やっぱり、ダイタさんと一緒に行けば、何か、何か分かるのかも知れません。

ターンと戦うと聞いた時、本当は、行くことをためらっていた。

もしかしたら、会ってしまつかもしれない。

そんな気がしたからだ。

本当のことを知るの怖い。

だけど、このまま、知らないまま、いるのは、きつと、耐えられないと思うから。

一緒に行きましょうー。

ダイタさんと！

ダイタさん達と！

そしたら、もしかしたら、会えるのかも知らない。

父に！ セルウィンに！

第3章 名もなき大陸の支配者（後書き）

次回、ようやくもう一人の主人公のお話です？

第4章 彼と彼女のそれぞれの事情（前書き）

やっともう一人の主人公が出ます・・・（汗）

第4章 彼と彼女のそれぞれの事情

「ふう……」

魔王城の門前で、彼、アグリーは大きく息をついた。

金色の髪に、澄んだ青い瞳が印象的な青年だ。

だが、そんな外見とは裏腹に、彼の心情は、今、激しく動揺の色をみせていた。

ここが魔王の、地の魔王の城!?

思いつきりを反らさなければつぺんが見えないほど、巨大な城だった。塔がいくつが集まった造りで、敷地はぐるりと森に囲まれている。

森の小道をてくてくと歩くこと数時間。扉から城までは思ったよりも距離があった。

思ったよりも遠かったな。

なだめるように胸を当てた左手からは、自分の鼓動がはっきりと伝わってくる。

「天の魔王、フレイムの力を持つセルウィンを倒すためには、別の同じくらい、力のある魔王から力を借りるしかないんだ。 ミリテリアになるしかないんだ!」

アグリーは、自分を落ち着かそうと、独り言をつぶやき続ける。

彼は、セルウィンを追っていた。

母の敵討ちのために。

だが、セルウィンは、天の魔王、フレイムの力を、ミリテリアの力を持っている。言ってみれば、最強の魔王の力をセルウィンは持っているといっても過言ではないのだ。

例え、他の女神や魔王のミリテリアとなっても、恐らく、彼には勝てないだろう。

唯一、彼に対抗できる力といえば、天の魔王と相反する力を持つ、地の魔王の力だけだ。

だが、相手は魔王だ。

力づくで、自分をミリテリアとして、認めさせるしか方法はないだろう。

きつと、血も涙もない恐ろしい相手だ。

アグリーは、来るべき戦いにさきかけて、腰にかけてある長剣をぐつと握り締めた。

「あれ〜、あれれ〜」

甲高い女の子の声が出た。振り返ると、赤い髪をツインテールで結んだ女の子が、ニコニコと彼を見つめていた。

「あれ〜、お客さんですか〜？」

少女はそう言つと、わい、わい、と彼の周りを飛び跳ねまくる。

「久しぶりだ〜、きつと、レー兄、喜ぶね！」

「あ、あの・・・」

「あのね、お兄さんって、勇者さんだよね？」

「あつ、まあ・・・って、あの・・・」

「やっぱり！ 絶対にレー兄、喜ぶよ！」

少女は、アグリーのセリフに容赦なく、ニコニコと笑いながら割り込む。

「あつ、ほら、入って！ 入って！」

「あの、ここって魔王の城じゃ・・・」

ぐいぐいとアグリーの腕を引っ張る少女に、アグリーは必死になつて問いかけた。

「あつ、そうか！ ごめんね」

少女は、ハツとしたように口に手を当てる。アグリーは、ほつ、と安堵の表情をみせた。

「まだ、私の名前、言っていなかったね！ 私の名前はリバイバル
II エンターティナーっていいいます！ ティナーちゃんって呼んでね
？」

「い、いや、そうじゃなくて・・・ね」

えへへと満足げに笑みを浮かべるティナーとは対照的に、アグリはガクツとうなだれるのだった。

「あいつ、遅いな」

がらんとした空間を真つ直ぐ立ち切るように、赤いカーペットの道ができている。

道先にある立派な玉座には、一人の少年がふんどり返って腰かけていた。

銀色の髪にスカイブルーの瞳の少年、レークスは、いらいらと肘掛けを叩く。

「まさか、あいつ、おつかいすらできないんじゃないだろうな！」
だん！

レークスはいきなり拳を肘掛けに叩きつけた。

食料を調達してくるね！

そう言つて、町へと出かけた彼の家臣であるティナーが一週間、経つても戻つてこないのだ。

「くそっ！」

余計な心配をかけさせやがって！

いても立つてもいられなくなったのか、レークスはひらりとイスから飛び降りた。

「おや、お出かけですか？ レークス様」

耳がとんがっていること以外は人間とほとんど変わらない魔族の青年がレークスに近寄ってくる。

レークスの配下の魔族だ。

「散歩だ！ 散歩！」

レークスは顔をゆがめて、不服そうに叫んだ。

心配だから見てくるとは、間違つても言えない。

「あれ？ あれれ？ レー兄、お出かけなの？」

唐突に、聞き覚えのある甲高い少女の声がした。レークスはぴたりと足を止める。

「ティナー、今まで何処に行っていたんだ！」

レークスは喉が張り叫びそうなほどわめく。

「何処つて、買い物だよ」

「そうだな。 そうだよな！」

のほほんと答えるティナーに、レークスが激しく地団駄を踏みまくりながら迫る。

「だったら、なぜ、丸一週間も帰ってこない！」

ここから町まで二十分もかからない。

どう間違っても一週間もかかるわけがないのだ。

「迷っていました！ です！」

ティナーは、満面の笑みを浮かべて手を上げた。

「前も同じことを言っていただろうが！」

「で、でも、うそじゃないもん！」

ティナーは慌てて手をひらひらさせて、首を勢いよく横に振った。

何なんだ！？

二人のやり取りを傍観していたアグリーは、ただただ呆然とするしかなかった。

魔王の城に来たはずなのに、いざとなったら戦う覚悟もしてきたはずなのに、今、彼の目の前で言い争いをしているのは、十歳かそれくらい少年と十四歳くらいの少女だ。

そして、どこかやる気のなさそうな魔族の青年だけだった。彼は、だらしなさそうにあくびをしている。

この青年が魔王なのか？

アグリーはまじまじと彼を見つめる。

とても、そうには思えなかったりするのだが……。

「あの、あなたが地の魔王……なのでしょうか？」

アグリーは恐る恐る彼ににじり寄り、用件を切り出した。もちろん、来るべき戦いのために、剣の柄をぎゅっと握り締めて。

「ん　　？」

魔族の青年は、ぐいっと背伸びをしながら、これまた、大きなあくびをすると、アグリーをじっと見つめた。

「違う！ 違う！ 向こう！ 向こう！」

彼はめんどくさそうに手を横に振ると、先程から少女と言い争いをしている少年の方を指し示した。

「えっ？」

「レークス様なら向こうだ」

はき捨てるように言つと、青年は玉座の間から出て行ってしまった。

取り残されたアグリーはしかたなく、彼が言っていた少年の方を振り向いた。

いまだに、彼は、少女と言い争いをしている。

「あの、すみません」

恐る恐るアグリーは彼らに近づいていく。だが、彼らは、アグリーの存在など全く気づいていないらしく、ひたすら、わめき散らしていた。

全然、聞こえていない・・・みたいだ・・・。

こうなつたらー！

アグリーは、勢いよく少年に近づくと、がしっと少年の肩をつかんだ。つんのめつたものの、どうにか、少年は踏みとどまる。

「あの！ ちょっと、待ってください！！！」

「何だ、貴様、何か用か！ ん？」

レークスは、まじまじとアグリーを見つめた。ティナーが彼を見てハツとする。

「そう言えば、貴様、見慣れない顔だな。怪しい奴め、ここで何をしている？」

「怪しいって、挨拶する暇もなかったじゃないですか！」

アグリーは抗議の叫びをあげた。

というか、元々、ここに連れてきたのは、彼女、ティナーさんなんだし。

「タイミング悪く、のこのこやって来た貴様が悪い。さあ、吐け。貴様は何者だ！ 貴様の目的は何だ！」

思いがけず、ドタバタしてしまったため、いつもより丁寧に一礼することにした。

「初めまして。僕はアグリー、アグリー＝ピースと言います。地の魔王に会いに来ました」

レークスの眉がぴくりと跳ね上がる。

「俺に会いに、だと!？」

「俺？ ってことはあなたが地の魔王なんですか？」

「ああ」

アグリーはがっくりと肩を落とした。先程の青年が言っていたこととはいえ、あの地の魔王がこんな少年だったとは思ってもいなかっただ。シヨックである。

「あつ！ 思い出した！」

突然、ティナーが声を張り上げた。

「あのね、レー兄、この人、勇者さんなんだって！」

「なにい!？」

レークスはすかさず、アグリーを睨みつけた。だが、すぐに愉快そうににやりと笑う。

「面白い！ 久しぶりに楽しめそうだ」

レークスは拳をぐっと握り締めた。

「あ、いや、僕は……」

「まさか、逃げるわけではあるまいな。勇者ともある者が！」

「なっ!？」

アグリーは、それを聞いてカチンとくる。

この言葉に、彼の勇者としての心に熱い炎を燃え上がらせた。そうさ。

どうせ、元々、戦うつもりだったんだし！

「もちろん、挑戦を受けてたつさ！ だが、僕が勝ったら、僕をおまえのミリテリアとして認めてもらうからな！」

「ふん、構わん！ では、俺が勝てば、貴様は俺の家来になつてもらおう！ それでどうだ！」

「へっ・・・!?」

思いもしなかった言葉に、アグリーは言葉を詰まらせる。

魔王の家来　！？

「ふん。さては、貴様、俺に勝てる自信がないらしいな」
「なっ！」

落ち着きを取り戻しかけていたアグリーに再び、勇者としての魂が一気に燃え上がった。

「い、いいさ！ 勇者は決して負けないさ！」

即答にレークスはにやりと笑った。ティナーはワクワクしながら二人を見つめている。

「交渉成立だな。行くぞ、勇者！」

「来い、魔王！ 僕は必ずおまえを倒してミリテリアになってみせる！」

アグリーは愛用の剣をようやく抜き払う。

「ふん」

レークスの両手に、2つの魔力の炎が燃え上がった。

二人の敵意のこもった視線がからみ合った。

ばうん！

戦いの幕は、レークスの投げ下ろされた炎で切って落とされた。

「おい、アグリー」

魔王城にレークスの居丈高いたけだかな声が響く。

「ちゃんと、食料の調達はしてきたんだろうな。それが終わった

ら、昼食の準備だ！」

私室のベットに寝転びながら、レークスは走ってきたアグリーに命令した。

アグリーがレークスとの戦いに敗れて、はや3日が経とうとしていた。

「はい……」

アグリーは思いつきり力のない声で応える。

まさか、こんなことになるなんてー！？

アグリーの脳裏に、あの時の戦いが甦る。

レークスが投げ下ろした炎を、アグリーは難なく避けた。しかし、その目前に、避けたはずの炎がいきなり現れた。

「くっ」

ばうん！

その炎は、アグリーの目の前で激しい爆発を起こした。一瞬にして、彼の視界が真っ暗になる。

どうやら、両手同時と見せかけて、わずかにタイミングをずらして放たれていたらしい。

それにしても、なんという威力なのだろう。

こつみえても、ちよつとやさつとの攻撃には、僕は耐えられる自信はある。

なのに、たったの一撃で、僕は彼にあっさり、やられてしまったのだ。

「つまらんな。歯ごたえがない」

「やったね、レー兄！」

「ふん、当然の結果だ」

消えゆく意識の中で、そんな彼らの会話が聞こえたような気がした。

アグリーは、げっそりとした表情で小走りにその場から走り去った。

魔王の家来の勇者か。

『光の勇者』、『星の戦士』とうたわれていたあの頃が（といってもまだ3日前のことだけど）すごく懐かしく思えた。

勇者としての風格がもう既にないなー。

そう思うと、自然と溜息が漏れてくる。

リアク。 アクア。

きつと、心配しているんだろうな。

2人とも、まさか、僕が魔王の家来になったなんて、思ってもいないんだろうな。

はあつ。

アグリーはがっくりと肩を落とした。

「遅い！」

「うん・・・」

ラミリア王国の城下町にある酒場で、彼らはうなだれていた。

一人は、バサバサの黒い髪に茶色の瞳の青年だ。じれったらそうに、机をトントンと叩いている。

もう一人は、ピンク色のストレートの髪を一つに纏めている桜色の瞳の女性だ。彼女は、何かを願うように天に祈りを振り仰いだ。

「やっぱり、アグリー様の身に何かあったのではないのでしょうか・・・」

「それしかないだろう！ あいつのことだ。 どんな無茶なことをしているか、わからんだろう！ なあ、アクア！」

「えっ、あつ、う、うん・・・」

頷くものの、心の中では、リアク兄さんの方が無茶苦茶なのではないでしょうか、と思うアクアだった。

「もしかすると、今頃、俺様に助けを求めているのかもしれない！ いや、きつと、そうだ！ そうに決まっている！」

気づかなかった、とばかりに、彼はイスから立ち上がった。そんな彼に、アクアは冷たい視線で突っ込む。

「兄さん、それはないんじゃない・・・」

「行くぞ、アクア！ アグリーが俺様達を待ち望んでいるんだ、急ぐぞ！」

「もう、兄さん・・・たら・・・」

そう止めに入るアクアだったが、それ以上は何も言わなかった。

これ以上、兄に何を言っても無駄なのは分かっていたし、彼女自身もアグリーの身が心配でたまらなかったからだ。
アグリー様、ご無事でしょうか……。

暴走気味の兄とは裏目に、彼女はそつと、アグリーの無事を祈った。

「ここが魔王城か！ うーむ、俺様の家より数十倍はでかいな」
「当たり前でしょう、兄さん！」

恨めしそうな目でアクアはリアクを見つめていた。

「だが、俺様は、こんな場所には住みたくないぞ！ うんうん」

独り言のように頷く兄を見て、アクアは、げんなりとした表情をみせた。

私だけでも頑張らなくてはい！
そう決意を硬くするアクアだった。

「あれ、あれ」

甲高い女の子の声が聞こえた。振り返ると、赤い髪をツインテールで結んだ女の子が、ニコニコと彼らを見つめていた。

「私、リバイバルエンターティナーって言います！ ティナーちゃんって呼んでね？」

「はあ」

二人は啞然として彼女を見つめていた。なんと说着いていいのか分からない、そんな表情で二人は彼女を見つめていた。

「また、お客さんだね、きつと、レー兄、喜ぶね？」

そんな二人の心情を露知らずか、えへへとはにかむティナーだった。

「アグリー！」

「アグリー様！」

「リアク！ アクア！」

城内の薄暗い廊下の中で3人は再会を喜び合った。

「久しぶりだね、2人とも」

「お久しぶりです。 アグリー様」

「無事だったか！」

コクンとアグリーは頷く。

久しぶりにリアクやアクアに出会えて、アグリーは胸の奥がじんと温まっっていくのがわかった。先ほどまで失望やら無念さやらで冷え切っていた分、余計に温もりが強く感じられる。

「ところで、何でおまえ、そんなものを持っているんだ？」

リアクは、アグリーの持っているモップに気づくと、怪訝そうに指で指し示す。

「いや、今、この廊下の掃除をしていたから・・・」

「俺様が言っているのはそういう意味じゃない！ なんておまえがこの魔王城の掃除をしているのか、と聞いてるんだ！」

「そ、それが、ぼ、僕、魔王に負けてしまっ、今、魔王の家来だつたりするんだ」

しばらくの間、誰もしゃべらず、いや、しゃべれず、愕然とアグリーを見つめていた。

リアクは口を大きく開いたまま固まっていた。アクアも呆然としてその場に立ちつくしている。言葉なんて見つからなかった。こんな時、一体、どんな言葉が見つかるというのだ？

「レー兄に負けたんだもんね！」

ぱちりとウインクしたティナーに、リアクはキツと非難じみた視線を送った。リアクはぶすつとした顔のまま、ずいっとティナーに迫る。

そして、きっぱりと言い放った。

「言っとくが、アグリーが魔王に負けたのは偶然だ。　そうに決まっている！」

「え　、そうには思えなかったよ！」

ふてくされたような顔でティナ　はそれを否定する。

「な、なら、今度は俺様と勝負しろ！　ちなみに言っておくが、俺様はアグリーよりも格段、実力が上だったりする」

「そんなわけないでしょう、兄さん」

得意げに、にやりと笑うリアクに、アクアは口を挟んだ。

「さあ、俺様と勝負しろ、と魔王に伝える！　魔王など俺様の手でこてんぱんにのしてくれる！」

「リアク、無茶だ！」

アグリーは慌てて、リアクを止めに入る。

はつきりいって、リアクが地の魔王に勝てるわけがない。なにしろ、リアクは、僕にすら、勝てたことがないのだ。いや、今まで、彼はいろいろな人達に挑戦してきたけれど、誰にも勝てた例ためしがない。

「ふっ、心配するな、俺様は勝つ！　必ずな」

アグリー達の心配をよそに、リアクは、さも自信ありげに叫ぶのだった。

「おい、アグリー」

リアクはきよとんとした顔で目を瞬いた。

「魔王はどこにいるんだ？」

アグリー達は、テイナーの案内で玉座の間までやってきた。玉座に座っていたレークスは、いぶかしげに眉を寄せる。

「えっ、目の前にいるけれど」

「どこだ。俺様には、生意気そうなガキしかいないように見えるが……」

そう言っつてリアクは、キョロキョロと辺りを見回す。

どうやら、彼は、魔王がその辺に隠れているのではないかと疑っているらしい。

「いや、彼が地の魔王なんだけど……」

「な、なにぃー　！！」

リアクは驚きのあまり、絶叫をあげた。そして、レークスに対して、人差し指をふるふると振るわせる。

だが、一瞬、何かを察したかのように、フツと小さく笑った。

「こんなガキが地の魔王だつて？　笑えないジヨックを言うなよ、

アグリー。 どう見たってただの生意気なガキにしかー」

レークスは呪文を唱えると、リアクの足元に炎を噴き上がらせた。よける暇もなく、リアクは炎に包まれていく。

しばらくした後、ゴンと鈍い音がして、リアクはあっけなくその場に崩れ落ちた。もちろん、黒焦げの状態で。

「ふん、子供扱いするな」

リアクを見下ろして、レークスは、不機嫌そうにつぶやいた。

アグリーとアクアは、啞然としてその光景を見つめていた。

「レー兄、やったね？」

ティナーだけが嬉しそうに目を輝かせていた。

「おい、アグリー……」

地の底からわき上がるような呻き声がアグリーを呼び止めた。

「リアク、大丈夫か？」

見れば山のような石材を担いだリアクがよろめきながら城壁に向かっていているところである。

何でもスループットさん（あのやる気のなさそうな魔族の人）達と城の外壁の修復工事を行っらしい。

「兄さん、頑張ってる」

買い物かごを持ったアクアが応援する。リアクは恨めしそうにそれを見つめると、どんよりと抗議した。

「どうして、俺様達も魔王の家来になっっているんだ？」

「ごめん……」

アグリーは申し訳なさそうにうなだれた。

あの後、彼らも、アグリーの仲間だという理由で、魔王の家来にされてしまっていた。あの時、あっさりしてしまった口約束を、アグリーは、今更ながら後悔していた。

「アグリー様、お気になさらないで下さい。 私はアグリー様のお

役にたてるだけで幸せですから」

アクアは頬を染めて、はにかむように微笑んだ。

「ありがとう、アクア」
アグリーも微笑する。

「それにしても、あのガキが地の魔王なんて、いまだに俺様は信じられんぞ！」

疑うような眼差しで、リアクはぼやいた。拳を握り締めて力強く断言する。

「おい、誰がガキだ」

「決まっているだろう！ あのかそ生意気なレークスのガキだ」
背後から聞こえてきた声に、リアクはきっぱりとそう答えた。途端、アグリー達は真っ青な顔になる。

「ん？ なんだ」

あっけからんとした口調でつぶやいたリアクは、背後にいた人物を見て、硬直した。

「この俺の前で、そんな暴言を吐けるとはいい度胸だな」

「うっ……」

案の定、そこにはレークスが立っていた。不適な笑みを浮かべ、リアクを見つめている。

「どうやら、すぐにでも死にたいらしいな」

すさまじいとしか形容できない目つきで、レークスはリアクを睨み付けた。

「うっ……」

「あ、あのー」

慌てて取りなそうとしたアグリーとアクアだったが、レークスの次のセリフで目が点になった。

「ふん、まあ、いい」

マジマジとレークスを見るアグリー達。

「だが、俺のことをガキ扱いするのはやめろ、いいな！」
いきなりレークスは声を張り上げると、その場から立ち去った。

「あいつて、……魔王だよな」

リアクは、ほっと胸をなでおろしながらつぶやいた。
てつきり、自分は殺されるとばかり思っていたからだ。

少なくとも天の魔王、フレイムや魔王、グレイスといった輩は、
気に入らんとせば、あっさりと殺していたはずだ。

「地の魔王って、天の魔王の弟だったよな」

「はい、そのはずですが……」

アグリーの問いかけに、アクアは返答した。

天の魔王を間近で見たことがあるだけに、そのギャップが激しい。

3人は思わず絶句した。だが

「魔王って悪い奴ばかりじゃないんだな」

アグリーには、すぐに嬉しさがこみ上げてきた。

魔王は血も涙もない恐ろしい相手だ。

てつきり、そう思っていた。

だけど、実際は、レークスさんみたいな人もいる。

そう思うと、アグリーの心に大きな希望が出てきた。

「生意気なガキだけだな」

珍しくリアクは、アグリーの言葉を否定しなかった。

ブツブツ言いながらも、どことなく嬉しそうだ。

「兄さんの方が……えっと……」

生意気なのではないでしょうか、と言いたかったアクアだったが、
とっさに言葉を濁らす。

セルウィンに勝てるかもしれない。

天の魔王、フレイムに勝てるのかもしれない。

アグリーは力こぶを作る真似をして見せた。

「絶対に、地の魔王のミリテリアになってみせるさ！」

「そうですね、きつと、すぐです！」

スツキリしたアグリーの横顔を見て、アクアは満面に笑みを浮か
べた。

第5章 始まりの地（前書き）

今回はダイタ達の話です。

第5章 始まりの地

すべての始まりの場所。

そこはどんな地というわけではなく、どんな場所というわけではない。

光と闇が重なっている世界。

彼の地がどこにあるのか。

それは定かではない。

だが、誰しもが心の奥底でその存在を信じ、敬っていた。

それが始まりの地。

この世界、アーツとは別の場所にある世界。

そして、神々や魔王が住まう世界。

長い間、そう信じられてきた。

しかし、一つの出来事が契機となり、時代は変革の時を向かえる。それは――。

「うん、いい天気だな」

僕は、透きとおった空を見上げながら、ぐっーと背伸びをした。

燦々と降り注ぐ太陽の光。歌うように身をすり寄っては奏でられる水の音。透きとおった空気が生命に息吹を宿す。

僕達を乗せた船はあてもなく大海原を進んでいた。

僕は、ぼつと空を眺めながら、また、あの時のことを思い出していた。ターン達との戦いの後、再び、『星のかけら』に触れた途端、僕の脳裏に再び、不思議な光景がよぎったあの時のことを。

辺り一面の雪景色。

僕は必死になって誰かを探していた。

いや、違う。誰かではない。彼女を探していたんだ。

藍色の帽子とコートを羽織った女性。

そう、夢月の女神であるリーディングさんを。

満天の星空の下を、透き通った風が駆け抜けていく。

リーディングさんは、真っ白な雪原の上に立ち、風の中に両手を広げて空を仰いでいた。

無数の星空をそっと見上げ、深く息を吸い込む。心を静めて耳を澄まし、彼女は、意識の全てを星の瞬きに委ねていた。

「遙かなる星達よ……輝ける星達よ……どうか、あの人をお護り下さい……」

それは、いつも通りの彼女の祈りだったのかもしれない。そう、いつも通りの。

しかし、祈りを口にしながらも、リーディングさんは、周囲の空気に、普段とは違う何かを感じているみたいだった。

「……これは」

彼女は不安げに空を見つめていた。

「どうしたのかな？」

僕はうーんと考えてみる。だが、もちろん、考えても分かるわけがない。

「……あの人に危機が迫っているのでしょうか。いえ、たとえば彼に何らかの危機が迫っているとしても、私はあの人を護るだけです。必ず、護ってみせます！」

リーディングさんは、決意に満ちた瞳で、そっと、空を仰いでみせた。

「どういう意味なんだろう？」

僕は、再び、うーんと唸る。

それに、リーディングさんが言っていたあの人って一体、誰のことなんだろうか。

その時、僕の耳に不思議な音が聞こえてきた。くすくすと不思議な

音。いや、笑い声。

驚いて僕は顔を上げる。

僕の目の前で彼女は肩を小さく、ではなく、大きく震わせていた。やがて、リーディングさんは顔を上げ、こらえきれないものを吐き出すように、頬を染めてはにかむように笑った。

笑っている・・・かな？ どうして？

まるで、先程までの深刻な表情が嘘だったかのように思えるほど、彼女は本当に嬉しそうに笑っていた。

どうしたのかな???

ふと、気付くと彼女は僕の方を見つめながら笑っている。

僕、何か、おかしいのかな？

僕はキョロキョロと自分の周りを見回してみる。だが、別に何も変わったところはない。

彼女は笑いを収め、代わりに口をゆっくりと開く。リーディングさんの口から言葉が放たれる。

「・・・ありがとう」と。

「ありがとう」、確かにあの時、彼女はそう言った。あれは、一体、どういう意味だったんだろうか。

(それは、あなたが私にとって大切な人だからです)

僕が彼女の、リーディングさんのミリテリアになった時も、彼女は僕のことを知っているかのような言い方だったっけ。

やっぱり、リーディングさんは、僕のことを知っているのだろうか。

「本当ですね。ダイタさん」

僕の隣で、金色の髪の女性がくすつと笑みをこぼした。腰まで届くほどの長い髪が印象的な女性だ。

彼女の名はマジヨン。

僕が名もなき大陸に訪れたときに初めて出会った仲間だ。

僕は夢の中に出てきた女性、リーディングさんの言葉に誘われて（本当は無理やりだったりするけれど・・・（汗））名もなき大陸に訪れたんだけど、その時、何でも、僕の記憶の手がかりになるらしい『記憶のかけら』のことをマジヨンから教えてもらったんだ。

フレイが持っていた星のかけら。

ターン達が持っていた星のかけら。

少なくとも、星のかけらは、僕になんらかの記憶の手がかりを教えてくださいているみたいだし。 うん。

「あれ、そういえばフレイ達は？」

「ふららは、マドロスさんのことを探してみるそうです」

マジヨンはそう言うと、少し表情を曇らせた。

真紅の森で出会ったふららさんには、結婚を誓い合った恋人、マドロスさんがいた。

マドロスさんは漁師で、二人はよく、海岸の浜辺で会っていた。そう、僕とふららさんが初めて出会ったバリスタの港町の近くの海岸で。マドロスさんの漁師仲間はもちろん、ふららさんと同じ羽翼人の人達も二人の仲を認め合っていた。

でも、そんな二人にも別れの時はやってきた。

マドロスさん達が大海原の深海にあるとされている『海の真珠』を手にいれるため、旅立つことになった。もちろん、ふららさんは同行を申し入れたんだけど、マドロスさん達はそれを断った。きつと、彼女を危険な目に遭わせたくなかったのだろう。でも、「すぐ帰ってくる」・・・そう言ったのにも関わらず、彼らが戻ってくることはなかった。そう彼らが旅立つてから、もう既に三年もの月日が流れていた。

その後、僕はあの浜辺で悲しげに歌っていたふららさんと出会ったんだっけ。

「フレイさんは　ですね」

マジヨンははあっと頭を抱える。

「ふららさんと一緒に駆け落ちするそうです」

「はっ?」

僕は思わず顔をしかめる。

駆け落ち!?

って、きつと、また、フレイだけが思い込んでいることなんだろうな。

僕はうんうんと納得する。

フレイとは、名もなき大陸、唯一の城、フレイム城の城下街であるフレストの街で出会った。なんでも、名のある盗賊団の一員だったらしんだけど、名もなき大陸の支配者であるターン、そして、その右腕と呼ばれる存在であるロクスに全滅を余儀なくされたんだ。でも、その時、フレイだけは何とか、生き残って、ターンの持っていた『星のかけら』を手に入れることに成功したんだけど、そのせいで、ターンの手下から執拗に追われていたらしい。

まあ、だからこそ、最初に出会った時、フレイは、僕達のことをターンの手下と勘違いしたんだけど・・・(汗)

「ははは、フレイらしいね」

僕は、フレイの大胆発言に苦笑にがわらいするしかなかった。

しかも、どういうわけか、フレイはふららさんのことが好きらしい。ふららさんに、マドロスさんという恋人がいることを知っているのだ。

フレイいわく、マドロスさんは「過去の男」らしい。

「じゃあ、ファミリアさんはどこにいるのかな?」

「さあ、船に乗ってからは、お会いしていませんし・・・」

僕の問いかけに、マジヨンは困ったように首を傾げた。

ファミリアさんとは、フレイと同じくフレストの街で出会った。

でも、何故か、僕のことを『運命の人』だっけって言うんだよな。
何でなんだろう???

何でも、ファミリアさんは、スタンレチア家のお嬢様らしいんだけど、お嬢様が一人旅をしているというのも、僕的にはどうなのかな？
と思うこの頃である。

「うーん、じゃあ、ファミリアさん、何処に行ったんだろう?」

「・・・ダイタさん、気になりますか」

「えっ・・・」

驚いた表情を浮かべて、僕は、マジョンを見つめた。マジョンは何故か、顔を上げない。海面に視線を固定させたまま、マジョンは、僕でも驚くくらいの強い口調で言った。

「・・・ダイタさん、やっぱり、ファミリアさんのことが気になるんですか?」

「そ、そ、そういうわけじゃなくて・・・ただ、仲間だし」

食ってかかるという表現そのもののマジョンに気圧されながらも、僕は必死に答える。

「そ、そうですね・・・」

僕の言葉を聞いて安心したかのように、マジョンは嬉しそうに顔を上げた。

何なんだろう?? 本当に・・・。

「はあ」

ひとまず、安堵の表情を浮かべた僕の肩を、ちゃんちゃん、と誰かがつついたような気がした。

「えっ?」

振り返ると、僕達の目の前に、紫色の髪の女性が立っていた。エルフだろうか。いや、それにしても、少し、違うような気が。

「ねえ、ねえ、ダイタっていう人、捜しているんだけど、知らないかな?」

「えっ、ダイタなら、僕のことだけど」

「あなたがそうなのね!」

僕の言葉を最後まで聞き終えずに、彼女は、突然、僕のむなぐらをつかみあげた。それを見たマジヨンが、慌てて彼女を止めようとするのだが、彼女はそれを軽く振り払った。そして、僕を恐ろしい形相のまま、詰問する。

「あなたのせいで、ダーリンとの新婚旅行が！ 夢のハネムーンが壊れちゃったじゃないの！！」

「うわああ！」

突然、彼女が僕を地面に叩きつける。

悲鳴を上げて背中から床に墜落した僕の目の前には、声から予想がついていたとおり、瞳うるうる、口をわなわな震わせた、彼女の顔があつた。

「なっ、なにするんだよ！」

と、僕は抗議しようとした。当然だろうか？ 何だかわけがわから

ないうちに僕は突き飛ばされたんだから。

だが、実際に僕の口から出た言葉は「な」の一字だった。僕が「な」と言った瞬間、猛烈な彼女の平手打ちが僕の両頬を襲ったのだ。

「な」

べしべし！

「なっ」

ばしばし！

「なに」

べちんばちん！

「ななな」

ばっちいいん、どすどす！

まるでトマトのように両頬を真っ赤に腫らし、原型をとどめていないような状態となった僕のむなぐらを、持っていたロープのようなりボンのついた杖で縛り上げ、彼女は鬼気迫るような声で怒鳴った。

「あなたがターンを倒したちゃったから、私の『ターンを倒して、名もなき大陸でダーリンと新婚旅行をする』っていう計画が台無し

になっちゃったじゃないの！」

？ 言っている意味が分からない・・・んだけど。

ビンタを喰らってすっかり働きがにぶってしまった思考回路で、よくよく彼女の話を整理してみると、どうやら彼女もターンを倒すために旅をしていたらしい。でも、僕達が先にターン達を倒してしまっただけ、彼女の計画というか、目的である『新婚旅行先の確保』というのができなくなってしまったらしい。

でもでも、それって早合点にもほどがあるのではないかな。

よくよく考えてみると、別に確保とかしなくてもいいと思うし、ターンはいなくなっただけだから、普通に旅行したり、訪れたりすることはできると思うんだけど・・・。

ともかく、そのことを、僕は、殴られすぎてろれつが回らない口で一生懸命、説明しようとした。

「あ、あのですね」

「何よ、やる気！」

あくまで聞く耳を持つとしない彼女は再び、攻撃態勢に入ろうとする。

「やめる！ フロティア」

突然、彼女の背後から声がした。

振り返ると、青い髪の青年が大慌てでこちらに向かってくる。

「止めないでよ、メリくん。もう、これしかないんだから！」

「くそっ！」

彼は説得は無駄だと思ったのか、抜く手も見せずに銃を構えるとトリガーを絞った。緑色の光線が僕のむなぐらに縛りついていたりボンに命中する。

「うわあっ・・・！」

僕の身体を縛っていたリボンがほどけ、ようやく、僕は自由の身になる。はあはあっと、一呼吸、置いてから、僕は助けてくれた青年を見た。

先程の女性よりは年下だろうか。頭に、サングラスのようなゴー

グルを被っている。手には、金色の銃のようなものを構えていた。

「何やっているんだよ、フロティア！」

「うつつ　、私のリボンが……」

彼女、フロティアさんは、彼の言葉など耳に入っていないかのよう
に、どんよりと破れたリボンをじつ　と見つめていた。そのすさまじい
落ち込み方に、僕だけではなく、マジヨンも何も言えずに、
無言で彼らを見つめていた。

「どうして、見ず知らずの人を襲ったりしたんだ！」

「み、見ず知らず……じゃないもの！　ちゃんと聞いたんだから！

この人達がターンを倒したって！」

「あのな……」

フロティアさんの意味のわからない理屈に、ただただ、彼は頭を
抱えながら言った。

「おまえは、彼らのことを誰かから聞いたのかもしれないけれど、
彼らにとっては、おまえは見ず知らずの人だ。　そんな人に、突然
襲われたりしたら、誰だって驚くだろう！　それに　」

彼は、ずいっと彼女の前に人差し指を立ててみせる。

「おまえが……フロティアが犯罪者にでもなったら、エレニツク
兄さんは悲しむと思うんだけど……」

「うつつ　　！」

「あつ……」

僕はギョツとする。いや、僕だけではない。マジヨンも、彼女に
怒鳴った彼でさえ、わけがわからず、動揺する。

嗚咽を漏らし、大粒の涙を流しながら、フロティアさんは泣き出
した。

「うつつ、うつつうつつ……」

「フ、フロティア？」

「メリ君のばかああああ　　」

彼女の、フロティアさんの叫び声は、船中に届くほどの大音響だ
った。

「うっ、ごめん、なさい」

ようやく、嗚咽が少し収まってきたフロティアさんは、僕に謝罪の言葉を述べた。

最初は「私は悪くないのに」とあからさまに不満げの表情を浮かべていた彼女も、そのうちに僕の誠意溢れる弁明を聞き入れてくれた。

「すっ、すっ、すみませんでした！」

僕は彼女の謝罪を心よく受け入れた。

「ひやに、ほふゃいははれひでもひやるものへふはらッフ……。じえんじえんふえ　ひッフ！　いえ、誤解は誰にでもあるものだし……。それにもう、全然、平気だよ！」
どうみても平気そうではないような口調で、僕は答える。

だが、フロティアさんはそれを聞いて満足したのか、嬉しそうに顔を上げた。僕の返り血を浴びて彼女の黒地のコートが、どこか赤黒く染まっているかのように思えた。

それから、フロティアさん達はどこからか、救急箱を取ってきて、僕のことを治療してくれた。マジヨンも、僕にそつと触れると回復魔法を唱え始める。

「大丈夫ですか？　ダイタさん」

先程の大音響が聞こえたのか、ふららさんやフレイも僕の元へと駆けつけてくれた。

「それにしても、よくまあ、ここまで、痛めつけられたものだな！」

心配しているのか、感心しているのか、分からないような口調でフレイは言った。

僕は、何はともなれ、みんなの優しさ（？）に心を打たれた。たとえ、怪我をさせたのがフロティアさんだったとしても、優しさは優しさだ。

ひとしきり、治療を終えたあと、おずおずとフロティアさんが口を開いた。

「あの、ダイタクくん・・・」

「もう、怪我のことは気にしなくてもいいよ」

苦笑いしながら、僕は答えた。

だが、彼女は首を小さく横に振った。

「ダイタクくん達って、どうやって、あのターンを倒したの？」

フロティアさんはそう尋ねてきた。彼女の言葉には先程までの責めるような調子は含まれていなかった。

僕は沈黙で答えた。

全てを話していいものが、迷ったからだ。ターンのことを話せば、自然とミリテリアのことを、僕の記憶のことを話さないといけなくなる。それに、『星のかけら』のことを話したら、また、ややこしくなるのではないだろうか。

そういう疑惑が僕の心に刺さった。

そんな僕の思いを露知らずか、まっすぐに僕を見つめたまま、フロティアさんは再び訊いてきた。

「どうやって、ターンを倒したの・・・？」

あくまでも彼女は、僕が答えるまで、この問いかけをやめる気はないらしい。

さて、彼女に真摯な瞳で問いつめられて、どこまで、僕は強情を通すことができるだろうか。何となく、いや、既に八割がたはだめなような気がするが。

「フロティア、もういいだろう」

フロティアさんの隣にいた彼が、彼女の肩を手で軽く叩いた。僕は、内心、ほっ、と安堵する。

「で、でも」

フロティアさんが、それでも彼に抗議の声をあげようとつづやいたその時。

「ダイタ様」

「???」

ドタバタ！

突然、僕に向かって、ファミリアさんは、勢いよく抱きついた。

「ち、ちよつと、ファミリアさん！」

肩を震わせながら、マジョンは言った。どこか怒りがこもった口調である。だが、そんなことはおかまいなしに、ファミリアさんは目を輝かせながら僕に言った。

「あの、ダイタ様、聞いて下さいですわ？」

「えっ？ ええ！？」

ファミリアさんは、真意に満ちた表情で僕に迫った。その瞳はどこか、憂いに満ちている。

だ、だからね。一体、何なんですか！？

「ファミリア姉さん！」

彼はファミリアさんを見て、あっ、とつぶやく。それに気付いたファミリアさんは、嬉しそうに彼に手を振った。

「あっ、メル君ですわ！」

「今まで、何していたんだよ。 姉さん」

「『運命の人』を捜していたんですわ？」

ファミリアさんは嬉しそうに、腕を前に組んでみせる。

「あ、あのな……」

彼はそれを見て、はあっ、と溜息をつく。

「一体、それはいつになったら……見つかるんだよ……」

「もう見つけましたわ！」

「あの〜」

僕は目を丸くしながら、恐る恐るファミリアさんに尋ねてみる。

「ファミリアさん……、この人達のこと、知っているの……？」

ファミリアさんは、僕の問いかけに力強く頷いてみせる。

「もちろんですわ！ ダイタ様、こちらが わたくしの弟のメリアプールですの。で、こちらが、わたくしの義姉あねのフロティアさんですの」

それを聞いた僕達は、げんなりとした表情でファミリアさん達を見た。予想はしていたことだが、やはり、ファミリアさんの親族の人達だったらしい。

「メル君、こちらの方がわたくしの未来の夫のダイタ様ですわ？」

ファミリアさんはそう言うと、照れくさそうに頬を赤く染めた。

「えっ、えええええっ

！！」

突然のファミリアさんのセリフに、僕達だけではなく、メリアプールさん達も驚愕する。

「だから、メル君のお兄さんになる人ですよ！」

「な、な、な、何だよ！ それ！」

おろおろとファミリアさんに問い掛けるメリアプールさん。

「か、勝手に決めないで下さい！ ファミリアさん！」

怒りがこもった口調で言うマジョン。

「ダイタ……。いつのまに、そんな仲まで進展していたんだ」

知らなかったとばかりに、フレイは不敵な笑みを浮かべた。にんまりと面白そうに僕を見つめている。

うっ、ぜ、絶対に、フレイは面白がっている。

「じゃあ、ダイタくんは、私の義弟おとこになるのね！ うんうん」

フロティアさんは、何故か、納得したかのように、うんうんと頷いてみせる。

拳を突き上げ、ガッツポーズをしているフロティアさんの勢いに押され、僕がなかなか、ファミリアさんの言葉を不定できないでいると。

「ダイタさん」

真意な瞳でふららさんは僕を見つめていた。

「おめでとうございます。ご祝福を願っていますね？」

ふららさんは、嬉しそうに両手を前に組んでみせた。

「だ、だから、ち、違っつて！」

僕は慌てて、それを不定しようとする。その時、僕の肩を誰かがポンと叩いた。

「既成事実にしておけよ、ダイタ！」

「ちよつと、そ、そんなあ」

あまりにも無責任なフレイの一言に、僕は非難の声を上げた。

「ダイタ様、幸せになりましたよね？」

ファミリアさんはそう言っつて、僕の肩に抱きついてきた。

「だ、だから、違っつんだつて」

だが、そんな僕の叫びは、既に誰にも届くことはなかった。

「はあ」

船上でのわけのわからないドタバタ劇のあと、僕は、一人、海面に映る夜空を見つめていた。

時刻はもう夜だった。空を見上げてモ夕暮れの太陽は見当たらず、その代わり、黄金色の月が、僕達の乗っている船をほのかに照らしていた。

「わたくしもダイタ様と共にいます。ダイタ様のお記憶が戻るまで、そして、わたくしのことを考えて頂けるまで、ずっと、そばにいますわ！」

あの時のファミリアさんのセリフが僕の脳裏に過ぎった。

ファミリアさんは、僕のことを本気で考えてくれているんだよな。

僕はしみじみと溜息を付いた。

僕はどうなんだろう。

僕は自分の心にそう問い掛けてみる。僕にとって大切な人は、愛しい人は誰なんだろうかと。

フレイは、ふららさんを。

そして、ふららさんはマドロスさんのことを想っている。

フロティアさんには、最近、結婚したばかりのエレニツクさん（ファミリアさんのお兄さん（汗））がいる。

メリアプールさんは、何でも、行方不明になっている幼なじみの

スチアさんのことを想っているらしい。でも、そのスチアさんはエレニックさんのことを想っていた、ってメリアプールさんが言っていた。

それってつまり、エレニックさんは、フロティアさんを選んだってことなんだよね。

何でだろうか。

僕の脳裏に当然の疑問が湧いてくる。

どうして、あのフロティアさんを選んだんだろうか???

僕には、よく分からなかった。まあ、僕にとって、フロティアさんは、先程、散々、痛めつけられた相手だから、よく分からないのも無理もないのかもしれないが……。

でも、その結果、スチアさんは、彼らの結婚式の後に、いなくなってしまったんだけど。

じゃあ、僕は。

僕にとって、大切な人は誰なんだろうか。

ふと、何故か、マジヨンの顔が過ぎった。

(どうして、マジヨンの顔が浮かぶんだろう???)

僕はどきどきと胸を高鳴らせ、赤らんだ頬にそつと指先を寄せた。そつえば、マジヨンには、誰か、好きな人がいるんだろうか。

想いを寄せている人がいるのだろうか。

だけど、そのことを考えると、何故か、僕の心に苦痛が重くのしかかってくる。

「どうして、人は誰かを好きになつたりするんだろうか？」

誰に言うでもなく、僕は独り言のようにつぶやいた。決して答えは返ってくることはない。そのはずだった。

「それが『愛する』ということだからだと思います……」

「・・・え？」

返ってくるはずもない言葉に、僕は思わず振り返った。
いつのまにいたのだろうか。

水色の髪をなびかせながら、彼女、ふららはにこつと自然な様子で微笑んで、僕に言った。

「私はあなたが好きです。　ダイタさん」

「ええ!？」

だが、彼女の一言で高鳴り始めた僕の心臓は、次の彼女の一言で凍りつくことになる。

「ダイタさんも、マジヨンさんも、フレイさんも、ファミリアさんも、みんなのことを愛しています」

「・・・」

ふららの表情に嫌味やごまかしの色は、なにひとつ浮かんでいなかった。彼女の表情は、百パーセント純粹だった。僕は　自分でも心外だったが　ふふつと大きく噴き出してしまった。

「えっ?　私、何か、変なこと、言いましたか　?」

何で笑われたのかわからず、きよんとするふららさん。

どうしてって、それはふららの返事が僕の思っていたことと、ごくごく的外れだったからなんだよね　と僕は笑いながら思った。

僕は、すぐにでもファミリアさんに返事をしなくちゃいけないと思っていた。それなのに、なんなんだろうその答えは。それは僕がみんなを「好き」って言うのと同じような意味だと思っただ。だから、僕が言っている意味とは全然、違うし。

「ごめんなさい。　やっぱり、変でしたでしょうか」

「ううん、そうじゃないんだけど」

不安げにつぶやくふららさんに、僕は、満足げに笑みを浮かべた。

「有難う、ふららさん」

僕はすっきりした表情で空を見つめた。何か、もやもやしたものが晴れたような清々しい気分だった。

「ダイタさん、きつと、『愛すること』って、その人のために何かをしてあげたいとかそういうことじゃなくて、自分がその人に、その人のために、何かをしたいと思うことだと思えます。きつと」

ふららさんも頬を桜色に染め、とびっきりの笑顔を見せた。

「ふららさん！」

その時、運悪く、ふららさんを捜しにきたフレイが僕達のところにやってきた。ふららさんの隣に僕がいることに気付くと、すかさず、フレイは僕の胸ぐらをつかんできた。

「ダイタ、貴様、汚いぞ！ ふららさんと、ふっ、ふっ、二人つきりになりやがって！ さては、やはり、貴様もふららさんを狙っているな！ そうだろう！」

「い、いいい、いや、そうじゃなくてね」

怒りの表情のフレイに揺さぶられながら、僕は、必死に弁解の余地を求める。

「ダイタ様、ご機嫌麗しゅうですわ？」

「ぐわあ！」

いきなり、ファミリアさんは僕に抱きついてきた。フレイとファミリアさんのダブルアタックで、僕は既に息つく暇もない。

「ファ、ファミリアさん、何をやっているんですか！」

それを見て絶句したマジョンが、怒りで肩を震わせている。

「挨拶ですわ？」

「どこが挨拶ですか！」

二人はバチバチと火花を散らす。マジョンとファミリアさんにはらみ合ったまま、彫像のように固まっていた。

「で、どうするんだ、ダイタ」

先程まで怒りはどこへいったのやら、フレイは愉快そうに僕を冷やかす。

「ど、どうする……って言われても」

僕はがくつと肩を落とした。

僕の悩みなんて、実際のところ、考える暇なんてないのかもしれない。

そう思わずにはいられなかった。

あああ……。

「ダイタくん達、楽しそうだね」

羨ましそうに、フロティアはつぶやく。

「……フロティア、とにかく、今度は俺の用件だからな。 スチアを捜しに」

「うん、スチアちゃんを捜すんでしよう！」

「あ、ああ」

あっさりそう答えたフロティアに驚きながらも、メリアプールは相打ちを打った。

(スチア)

メリアプールの瞳に彼女の、スチアの笑顔が映る。

桜色のふわふわした髪。薄蒼い瞳。そして何よりも嬉しそうに笑うあの笑顔が大好きだった。

誰よりも傍にいてほしいと思った。

例え、君の笑顔が俺に向けられたものでなくても。 それでも俺は。

「行こう、フロティア！」

「う、うん！」

そそくさと立ち去ろうとするメリアプールの後を追って、フロティアは駆け出した。

船はもうすぐ、ラミア王国へと到着しようとしていた。メリアプールは右手をゆっくりと広げ、手のひらを自分の胸にそっとのせる。俺は生きている、とメリアプールは思った。今はっきりと生き

ているんだ。

俺のために。

そして、 スチア、君のために。

心臓のどくんどくんどくんとという鼓動を感じながら、メリアプールは確かにそう思った。

第6章 星空の下で

「……ダイタさん、ダイタさん」

「う、うくん……なあに？」

立派な寝癖が付いた髪をかき上げながら、僕はひとつあくびをする。

心地よいさざ波の音に、優しく鼻孔をくすぐる潮の香り。

どうやら、レーブンブルクに着いたらしかった。

「やっと、着いたんだ……」

僕はベットからぐったりとした様子で起き上がった。

途中でラミア王国に寄って防寒用の服を買ってきたとはいえ、さすがに、はるか北方にある大陸だけはある。すでに、時刻は夕方近くになるうとしていた。

ちなみに、フロティアさん達とは、ラミア王国で別れたのだった。何でも、彼らは、一度、ラミア王国にいるエレニックさんと会うことにしたらしい。うん。

「ここに『星のかげら』があるんだよね」

マフラーを巻き付けて、僕は栈橋に降り立った。

「はい」

その後に出てきたマジヨンも、無意識のうちにマフラーを強く締める。さすがに雪国だけあって、けっこう……いや、かなり寒い。

「よお、ダイタ」

先に栈橋で待っていたらしいフレイが、僕らに声をかける。

「あっ、ダイタさん」

「ダイタ様？」

その近くでふららさんとファミリアさんが僕達に手を振っていた。

「あ、ダイタ様はお聞きしましたの？」

「えっ？ 何のこと??」

「『星のかげら』のことですわ？」

「あ、それなら……」

真顔で訊くファミリアさんに、僕は少し、戸惑いを感じながらもそれに答える。

「ま、マジヨンから聞いたけど……」

なんとなく気恥ずかしくなって、僕はファミリアさんから視線をそらした。

あの一件以来、なかなか、ファミリアさんとは目を合わせられなかつたりする。

「レーブンプルクの北の雪原にあるんだろう！」

と、フレイが自慢げに言った。

「うん。まずは、街に、レーブンプルクの街に行かないとね！」

そう言っ僕が歩き始めた瞬間、突風が吹きつけてきた。

「うわあっ!？」

僕は思いつきり吹き飛ばされそうになって悲鳴をあげる。

「な、なんだ？ 突然、吹雪ふぶいてきたぞ！」

突然の吹雪に、フレイは驚愕する。

細かい氷のような雪が風に乗って横殴りに僕達に襲いかかってくる。

一体、どうなっているんだろう!？

僕達は目を丸くする。

「ふららさん、大丈夫ですか!」

「あつ、は、はい……」

フレイの言葉にふららさんは頷く。だが、そうは言いながらも、今にも飛ばされてしまいそうだ。

「と、とにかく、街に行こう!」

僕は意識を集中して身体を支えながら、街の方へと歩き始めた。

さほど大きくないが、二十軒くらいの家が立ち並ぶ街に入ると、僕にも普通の状態でないのがすぐにわかった。何故なら、民家も店も戸を閉ざし、人気は全く感じられないのだ。

「だ、誰もいないのかな？」

「いや、声が聞こえるぜ！」

フレイはくいつと街の奥を親指で指差した。

「えっ？」

僕はきよんとする。僕には耳を澄ましてみても何も聞こえない。他のみんなも、やはり、僕と同じように、首を傾げるだけで何も聞こえていないらしい。

フレイって元盗賊団の一員だけあって、耳がいいんだな。

僕はしきりにうーん、と感心する。

僕達は吹雪にまぎれてかすかに聞こえる人の声を頼りに歩き出した。声が漏れてきていたのは街の中心にある広場だった。その端に吹雪を避けるように数人の姿があった。

「やっぱりセルウィンに逆らうべきじゃなかったんだ！」

「この猛吹雪は、やはり、天の魔王の力なのか！」

「どうする？ 逃げるか？」

深刻な表情で話し合う人々の声を聞き留めて、マジヨンが声を上げた。

「セルウィン・・・！」

その声が聞こえたか、全員、僕達の方を見つめた。

「あの、すみません」

「なんだ、あんた達は!？」

街の人達は、警戒心もあらわに、僕をにらんでくる。

「北の雪原に行きたいんですけど、どういけばいいんですか？」

「なに、あんたら、あの『北の雪原』に行くのか！」

信じられないといった顔で街の人達はジロジロと僕達を見つめてくる。僕達は次第に居心地が悪くなってきた。

「どこに行けばいいんだ！ さっさと見え！！！」

「ひいひい！」

怒りの表情のフレイの勢いに圧されて、男は街の北側を指さした。「ここ、ここからずっと、そ、そう、丁度、まっすぐ北に向かったところにある。だが、行かない方がいいと思うが。猛吹雪で既に

何人がが行方不明になっている」

「あ、ありがとうございます！」

僕は一礼して身を翻した。

まっすぐに北ね！

「いこ……うわぁ……!?!」

そこで凍った地面に足を滑らさせて思いっきり、僕はひっくり返った。

「いたたた……」

オシリをさすりながら、顔をしかめて僕は起き上がる。

「だ、大丈夫ですか！ ダイタさん」

「ダイタ様！」

「は……はは……、平気……だよ」

心配そうにしているマジヨンとファミリアさんに、薄ら笑いを浮かべながら、僕は言うのだった。

「あれで大丈夫なのかね？」

街の人々は不安げに顔を曇らせて、顔を見合わせた。

吹雪が荒れ狂う雪原のど真ん中、僕達はひたすら前へと歩いていた。いや、歩かされていたにすぎない。突風が僕達の背中を押してくる。戻ろうにもこの風のせいでも方向転換がきかない。

「みんな！ が、がんばろう！」

僕は寒さで意識がなくなりかけているみんなを励まし続けた。

「もうすぐ、きっと……『星のかけら』が見つかるよ！」

「……そ、そうですね」

マジヨンが力なく頷く。

全員、ダメージがひどかった。凍傷になりかけている上、街で補充した燃料も底をつきそうになっている。

「ぼ、僕はあきらめない……絶対に……」

だが、既に僕も意識は朦朧としていた。僕はそれでも最後の力を振

り絞って、前へと歩き始める。

(それは、あなたが私にとって大切な人だからです)
(?)

何故だか、あの時のリーティングさんの笑顔が僕の瞳に映った。頬を染めて、はにかむような笑顔を見せたリーティングさん。

雪景色 か。

なぜだろう。

すごく懐かしく思えてくる。

どうしてなんだろうか。

僕はふと、初めて、『星のかけら』に触れた時のことを思い出していた。

あの時、見た光景もこんな雪景色だったっけ。

僕は、ははは、と苦笑する。押し寄せる睡魔と疲労と戦いながら、僕はその場に座り込んだ。

僕はこの場所を、この地を知っているのかもしれない。訪れたことがあるのかもしれない。いや、もしかしたら、ここに住んでいたのかもしれない・・・な。

僕は薄れてゆく意識の中、彼女の、リーティングさんの声を聞いたような気がした。

カーニバルの音。

今日はどうやら、お祭りらしい。

って、えっ!?

「あれ?」

僕は気がつくと思知らぬ街に立っていた。いや、見知らぬ街ではない。あのレーブンブルクの街だ。

「あれ? あれ?」

だが、それは、僕の知っているレーブンブルクの街ではなかった。ゴーストタウンのように静まりかえっていたはずの街は、まるで、

何ごともなかったように街の人達で溢れ返っている。

それは、こことは違う別の世界へやってきてしまったのでは、と僕が錯覚してしまうほど、街は賑わいをみせていた。

「・・・どうということなんだろうか？ う、うん」

「あの」

のほほんと考えごとをしていた僕に、誰かが声をかけてきた。

「へっ？」

「お待たせしてしまつてすみません」

金色の髪を揺らしながら、柔らかな笑顔を浮かべた女性が近づいてくるのを見た時、僕は自分の目を疑つた。それは、僕がよく知っている人物だった。リーディングさんだ。でも、どうして彼女がここにいるのだろうか？ それに、僕は別に彼女を待っていないし？

「あつ・・・、そうか・・・」

僕はポーンと手を叩く。

これは幻覚なんだ。

僕は、自分の脳が幻覚をつくり出しているのだと決めつけた。女神の幻だ。って、本当に彼女は女神なんだけど。

きつと、僕は、自分が死ぬという現実をうまく受け入れることができないのだろう。それが、死んでしまった僕を、リーディングさんが迎えにきたとか？

「せっかく、お誘いくださつたのに、遅れてしまつてすみません・・・。ダイタさん」

今度こそ、僕は自分の正気を疑うことになつた。

ぼ、僕がリーディングさんを誘つた？

身の覚えのないことに、僕は頭をひたすら悩ませる。

いや、待てよ。そういえば、あの時、ターンとの戦いの時、リーディングさんは、僕のことを『マスター』って呼んでいなかったか。それなのに、今、リーディングさんは、僕のことを『ダイタさん』って呼んでいるし？ あ、あれ？

「あの」

リーディングさんは、僕の顔を覗き込んで、第一声と同じ言葉を口にした。彼女の言葉は、なぜだか、僕をひどく懐かしい気持ちにさせてくれる。

「ダイタさん、やっぱり、怒っていますよね？」

リーディングさんは、困ったような顔を浮かべ、ちらりと視線を横にやった。

「あつ、いや、そうじゃなくてね。 どうして僕はここにいるのかな……って思っていただけで……ははは」

僕は慌てて、首を大きく横に振った。頭の反応が鈍っているのか、何を言っているのかが自分でもよく分からない。

「ど、どうして……ダイタさんがお誘いくださったことですし……」

「ははは……そ、そうだね」

なぜ、ここにいるのかな？

どうしてもそのことが気になった僕は、直接、リーディングさんに質問をぶつけてみたのだが、やはり、何も分からずじまいだった。「では、行きましようか？」

「えっ、ど、何処へ？」

僕の腕をぐいっと組むと、リーディングさんはニコツと永久凍土えいきゅうとうどの氷さえ溶かすような笑顔を向けた。

「カーニバル。 お祭りですよ！」

「カーニバル？」

「さあ、行きましよう！」

「こっ、こっ、こっ、こっ、こっ」

笑顔の弾丸に撃ち抜かれ、僕がうまく口を動かせずにいると、リーディングさんは「ニワトリさんのまねですか？」とクスクス声を立てて本当におかしそうに笑った。

その笑顔がまたまたハートにクリティカルヒット。僕はますますしゃべれなくなってしまう。

そんな僕に笑いをおさめた彼女はにっこりと言った。

「行きましょう！」

「あっ・・・！」

リーディングさんはそう言って強引に僕の手を引いた。柔らかかった。温かった。ずっと握っていてほしかった。僕はリーディングさんの手を振りほどけないうでいた。

僕とリーディングさんの向かった先はカーニバル用の花で彩られていた広場だった。

「すぐくきれいだね・・・」

「はい」

僕達は手をつないで広場の中央のステージに行った。夕暮れ時の日の光に照らされて、辺り一面、鮮やかな花達が咲き広がっていた。僕はそれを見て、素直に感動していた。

「さあ、踊りましょう！」

「えっ!?!」

僕の手を握り締めると、リーディングさんは軽やかにステップを踏み始める。始めこそ、抵抗していた僕だったが、次第に彼女と踊るのが楽しくなってきた。

僕とリーディングさんは、同じ歌を口ずさみ始める。

生まれた時から

二人にはずっと赤い糸が

つながっていた

生まれたのは

大きくて小さな希望

泣きたいよ

叫びさえも

この祈りが届かないのは

何かを見失っているから

さよならと言えなくて

本当にごめんね

この星空そらに輝く小さな星

あなたのそばにいたかった

初めて歌った歌なのにどうしてだろう。僕はそれを一文字も間違わず、歌えてしまったのだ。

歌い終わると、リーディングさんは僕にニコツと軽く一礼する。僕もそれに答えるように一礼した。

「ダイタさん、次はあちらに行ってみましょうか」

「わっ、待ってー！」

僕はリーディングさんに押されるままに、その場を後にする。

それからというもの、僕とリーディングさんは街の中を駆け回っていた。一緒に大道芸を見たり、フライドポテトやジュースを二人で分け合い、人工河の川辺で水をかけあい、息が上がるまで走り合った。僕は楽しかった。汗をかき、話をして、こうして並んで歩ける相手がいるのがすごく嬉しかった。

僕達は再び、広場の中央にあるステージに戻ってきた。

「ねえ、ダイタさん」

「えっ？」

「もらって頂けませんか？」

いつのまに持っていたのだろうか。両手いっぱい白い花を抱えてリーディングさんが頬を染めて微笑んだ。藍色のコートと帽子が、陽ひの光にまばゆく照らされていた。

「スノーテイルの花です」

「僕に？」

「この街では、大切な人に渡すと、ずっと、ずっと、そばにいられ

る って言い伝えがあるんです」

「た、大切な人 って」

僕は意味を図りかねてあらぬ方向を向いた。耳先まで火照らしたままで。

「ダイタさんのそばにいたいんです。 これからもずっと」

リーディングさんもつやつやした頬を染めて、はにかむように微笑んだ。

「ダイタさん、大丈夫ですか！」

気がつくと、マジヨンが心配そうに僕の顔を見つめていた。視線を動かすと、ふららさんやフレイ、ファミリアさん達も顔を覗かせている。

ここはどこだろうか。

どうやら、北の雪原じゃないみたいだけど
ー。

周りを見回してみると、どうやらそこが宿屋の一室らしいということが分かった。部屋には、僕が寝かされているベット以外にも、もう一つ、ベットが設置されている。

ひょっとして、ここってレーブンブルクの街の宿屋だろうか。

「よく無事だったよな」

フレイが独り言のようにさらりと言う。

「本当ですね」

ふららさんがフレイの言葉に頷く。

「まあ、俺の日頃の行いがいいからだろうな」
にやりとフレイは含み笑いをした。

どこがだろうか？

僕は思わず、問いかけたくなった。

「どこがですか？」

あくまで無垢な表情で聞くファミリアさんを前に、フレイは両膝

と両腕を床に付け、「なにい！」と天を仰いで嘆いた。はつきりいって、オーバーアクションにもほどがあると思うのだが。

僕はベットから起き上がると、若干、苦笑まじりの声でフレイに訊いた。

「どうしてここにいるのかな？」

「どうして、だと！？ 貴様のことが心配だったからに決まっっているだろうが！」

フレイはすごい勢いで立ち上がった。そのあまりの勢いに、僕だけではなく、マジヨン達も、思わず、後ろに一歩下がる。

「い、い、いや、そういう意味じゃなくて、僕達、遭難したはずなのに、どうして助かったのかな・・・と思って・・・」

僕はいささか辛らつすぎる口調で言った。

アゴの下を右手でなでながら、フレイは輝くような歯を見せてそれに答えた。

「ふっ、それはな・・・」

立ち上がるだけでは飽き足らなかつたらしく、フレイは、髪をさらりとかきあげると、「たっ！」と開口一番ジャンプして、部屋のテーブルの上に直立不動ちよくりつぷうの姿勢のままふわり舞い降りた。

僕は思った。いや、恐らく、フレイ以外は、きっと、思っただろう。

テーブルは上に立つたためにある家具ではないと。

「俺達にも分からないんだ」

僕ははあつとため息をつく。

分からないのなら、かっこつけなくてもいいと思う。

「だが、何でも美しい金色の髪の女性が俺達をここまで運んできてくれたらしい」

「えっ・・・それって」

「はい、何でも宿屋の人の話によれば、その方が私達を、このレーンブルクの街まで運んできてくれたらしいのです」

僕の問いに、フレイの代わりにマジヨンが答えた。

金色の髪の女性。

その言葉に、一瞬、僕の脳裏にリーディングさんの顔が思い浮かんだ。

もしかしたら。

「それに、これを私達に渡してほしいと宿屋の人が頼まれたそうです」

「これってー」

『はい、『星のかけら』です」

僕は戸惑いながらもそれをマジヨンから恐る恐る受け取る。

「あれ？ あれれ？」

いつもなら僕が『星のかけら』に触れた途端、何らかの記憶の光景が見れるはずだ。だが、今回は僕が触れても何の変化もない。

うん、どうしてなんだろう。

思わず、僕は首を傾げまくる。

「あっ！」

僕はそこで一つの可能性に気づき、ハッと口を押さえた。

もしかして、遭難した時に僕が見た夢ってこの『星のかけら』がみせた光景なんじゃ!?

「どうかしたのですか？ ダイタさん」

「あっ、いや、今回は何も見えないな　と思って……………」

マジヨンはそれを訊いて思わず首を傾げる。

「そ…そうなのですか？」

「う、うん」

僕が困ったように頭をかいていると、すかさず、フレイが一言、口をはさんできた。

「ニセモノじゃないのか。　そう簡単に見ず知らずの奴に『星のかけら』を渡すわけないだろうしな！」

「きつと、そうですわ！」

フレイの言葉に後押しするように、ファミリアさんは言う。

見ず知らずじゃないんだけどね。

「…………でも、本当によかったですね。　吹雪がやんで……………」

「えっ!？」

ふららさんにそう言われて、僕はやっと窓の方を見つめた。そして驚愕する。

「吹雪が収まっている・・・？」

あれほど吹きすさんでいた風が途絶え、雪も止み、空を厚く覆っていた雲も上空の風に押し流されたかのように消えていた。街には、青く晴れわたった空が顔を出している。

「はい、私達が気がついた時には、すでに、吹雪だったのが嘘だったかのように晴れ晴れとした空模様になっていました」

律儀に、マジヨンが僕にそう教えてくれた。

「もしかしたら、夢月の女神のご加護かもしれませんね」

僕は、マジヨンの言葉を聞いて、ドキンと胸を高鳴らせる。マジヨンは目を見張って僕を真っ直ぐに見つめた後、ニコリと微笑んだ。「そうだね」

と、僕は小さくつぶやいた。そして、透きとおった空を見上げる。

リーディングさん、有難う。

片手を胸に当てて願うように僕は思った。

届かないかもしれない。

届くことはないのかもしれない。

でも、僕は思った。

そして、約束するよ。君が僕を守ってくれているように、僕も君を守るから。必ず守ってみせるから！。

その夜、僕達は、街で開催されていたカーニバルを楽しんだ。

夜空に花開く花火を見たり、射的をしていた時、誤って的外れな場所に飛んでいった矢が人に当たったり(冷汗)、すごく綺麗なパレードを見たり、と僕の胸は休む暇もなくドキドキさせられっぱなしだった。

「すごく綺麗ですね」

「うん」

マジヨンは僕を見た。真っ直ぐな透きとおったスカイブルーの瞳視線が合うと、僕は一瞬、恥ずかしくなって目をそむけてしまった。マジヨンの顔がフツと優しく微笑んだ。

「あつ、えつと・・・」

僕が言葉を詰まらせていると、僕の耳に聞き覚えのある声があった。どこからかかすかな声が聞こえてくる。街ではない。雪原の方だ。声はメロディを伴っている。

生まれた時から

二人にはずっと赤い糸がつながっていた

生まれたのは

大きくて小さな希望

泣きたいよ

叫びさえも

この祈りが届かないのは
何かを見失っているから

さよならと言えなくて

本当にごめんね

この星空そらに輝く小さな星
あなたのそばにいたかった

清流のような美しい旋律だった。

「歌？ 誰かが歌っているのでしょうか」

マジヨンは目を丸くして僕を見た。僕も驚いた表情でマジヨンを

見つめた。

僕はこの歌を知っていた。いや、ついこの間、リーディングさんと一緒に歌ったばかりの曲だ。

「もしかしてー!」

僕は、いてもたってもいられなくなって、その場から走り出していた。

「ダイタさん!」

マジヨンも慌てて僕を追いかける。

リーディングさんにもう一度、会いたかった。

もう一度、会って伝えたかった。

僕達を助けてくれて有難うーと。

そして、あの時の想いをー。

僕の想いをー。

だけでも、僕達が訪れた時には、そこには誰もいなかった。

「はあはあ……」

僕は大きく息を切らしながら、ガクツと肩を落とした。そんな僕にマジヨンは諭すようにつぶやいた。

「想いの強さはカタチになります。きつと……」

マジヨンは僕を見つめた。その眼差しは自愛に満ちている。

「だから、ダイタさんが、夢月の女神様に、リーディング様に会いたいと思っている限り、きつと会えます」

マジヨンの言葉に、虚をつかれたように僕は目を丸くする。それから納得したように頷いた。

「そうだね! そうだよね!」

「はい!」

僕はマジヨンに笑みを向けた。そして、レーブンプルクの街の方を見つめる。

カーニバルの光がほのかに街を照らしていた。それはまるで、僕の心を先程までの深刻な気持ちから温かな気持ちにさせてくれる希望の光のように思えた。

そんな街が見渡せる絶好の位置に一輪の白い花が咲いていた。

僕は、あっ、とつぶやく。

マジヨンは笑みを浮かべて、はにかむように笑った。

「星の灯ほしひのようですね」

僕はそれに応えるように、コクンと頷いてみせた。

僕達の近くで、スノーテイルの花が優しく風で揺れていた。

第6章 星空の下で（後書き）

次回はレイクス達の話です。

第7章 星を包む あまたの夢（前書き）

今回はレークス達の話です。

第7章 星を包む あまたの夢

一寸先は闇、という警句がある。

遠い遠い昔、どこかの国の誰か偉い人が残した有名な言葉だ。

アグリ は、この世に生まれて十九年間、ずっとこの言葉の意味をいまいち実感することができなかったのだけれど、この度ようやくそれを理解することができた。ただし、実感なんかできたって嬉しくなんかなかったのだが。

さて、それがどんな形だったのかというところ。

バタバタバタ、ドタドタドタ！

「レ 兄 ！ 起きてる？」

静まり返った室内に騒々しい足音と声が弾けた。

パンツと扉が押し開かれる。

「あれ〜？ 起きてた」

駆け込んできた少女は部屋の様子を見ると拍子抜けした声を漏らした。

赤い髪をツインテールで結んだ女の子は、部屋の様子をキョロキョロと見回すと、さぞかし残念そうに顔をしかめた。

「ティナ、お前が起こしに来るたびに寝ているわけにはいかん。

物騒だろうしな」

どこか高級感あふれるベットに座った部屋の主は少女をにらみつけた。

少年である。

ティナ と呼ばれた少女より少し年下の十歳ぐらい。銀色の髪にスカイブルーの瞳。『天の魔王、フレイム』の弟といえば、この世界ではほとんど知らぬ人がいない地の魔王、レークスだ。だが、実際のところ、『地の魔王』という言葉だけが一人走りしており、彼

の名と顔を知っている者はほとんどいない。

「えっ、そ、そんなことないもん！」

エへへと笑いながらティナーは手をさりげなく後ろに回した。

「後ろに持っているものはなんだ？」

「ティナーちゃん、お手軽、目覚まし時計用の杖です！」

ティナーは思いつきりひきつった笑いを浮かべる。

「どうやら起きなかつたら、これで叩き起こすつもりだったらしい。

「おまえなあ……」

レークスはこめかみの辺りをポリポリとかきながらつぶやく。

「いい加減にその『レ 兄』というのはやめろ！」

「えっ！ なんで！！！」

「俺はな、貴様の兄貴でも何でもない！」

「レ クスはきっぱりとそう断言した。

確かにそのとおりだったりする。

「でも、レ 兄はレ 兄だし……」

「これからは、俺のことを呼ぶ時は、『様』を付ける！ 『様』を

！」

「ぶう」

ティナーは不機嫌顔でレークスから顔を背けた。そして少し考え
てから、人差し指を口元に近づけて言った。

「じゃ、じゃあ、レ 兄様」

「兄を取れ、兄を！」

「うっ、うっ……」

「おい？」

「……う、うっ……、やっぱり、『レ 兄』じゃないと呼べな

いよ……」

そう言つと、ティナーの瞳から大粒の涙がぼろぼろと溢れ出した。
うっ、とレークスの顔が歪む。

結局のところ、レークスの抵抗もここまでらしい。

罰が悪そうにしながら、レークスはつぶやいた。

「わかった……。わかったから泣くな」
「う、うん？」

先程までの泣き顔が嘘だったかのように、満面の笑みを浮かべてテイナーは答えた。

調子のいい奴だよな。こいつって。

レクスは呆れたように、はあっ、と溜息を付く。

「レクスさん！ ちょっとよろしいでしょうか？」

その時、ドアがパタンと開き、一人の青年が部屋に入ってきた。金色の髪に、澄んだ青い瞳が印象的な青年だ。

「アグリか。で、お前の用は何だ？」

レクスは不機嫌な顔でアグリに訊いた。

いい加減、こいつらにも俺に『様』を付けさせねば！

「あのですね、そろそろ」

言いくそくに用件を切り出そうとしたアグリーのセリフをさえぎって、レクスは言った。

「『俺の家来をやめたい』など言うのではないだろうな！」

「うっ」

アグリは思わず絶句する。実は凶星だったりするからだ。

「ん？ なんだ？ なんだか、とつても不服そうだな。まさか勇者ともあるう者が一旦口にした約束を破ろうなんて考えているのはあるまいな」

「まさか！」

表情に出やすいアグリはレクスにあっさりと見抜かれてしまう。それでも今、この場でそのことを言うことが、どうしても現状打開の方策にあたるだろう。

どんなことがあっても勇者が約束を破るわけにはいかないんだ。今の僕に出来ることはただ、堪え忍ぶことだけだ。ハートに揺るがぬ信念を秘めていればいつか必ず道は開ける。それまでの間に、レクスさんのミリテリアになれるように努力するしかないんだ。それしかない。

「その希望に輝く瞳。さては貴様、邪なことを考えているのだから?。」

レクスがアグリーをジロジロと見て冷やかすように笑った。

「よ、邪よこしまつて! 僕はただ」

アグリーが言い返そうとした時、青年と女性がドタバタと部屋に入ってきた。

「おはようございます。アグリー様」

「よう!」

「おはよう。アクア。リアク」

アグリーは笑みを浮かべながら、それに応じた。どうやら、アグリーはレークスの攻勢に押されながらも、なんとか、逃げる口実を探していたらしい。

「で、貴様らの用件はなんだ?」

レクスは眉間にシワを寄せながら、リアク達に訊いた。

「はい。実はお礼が言いたくて・・・」

「お礼だと?」

「昨日は、私達に素敵なお部屋をご用意して下さいましてありがとうございました」

アクアがレクスに対して、丁重に一礼した。途端、レークスは顔を真っ赤に赤らめて叫んだ。

「ふ、ふん。いらん部屋が余っていた。それだけのことだ」

レクスは知らぬ顔でそっぽを抜くとその場を後にした。

「それにしても、立派だったと思うが。うむ。もしかして俺様の目の錯覚とか、勘違いとかではないだろうか」

「そんなわけないでしょう。兄さん」

それを聞いて、アクアは恨めしそうにリアクを見つめた。

そんな二人を、アグリーは穏やかな笑顔で見つめていた。

そして、昨日のことを思い出す。

昨日、アグリーとともに、レクスの家来とさせられたリアクと

アクアは、レクス達に二階の一室へと案内された。

城の玄関に入ると、正面に赤い絨毯じゅうたんの敷かれた階段があり、左右に分かれて二階につながっていた。その踊り場の壁にアクアの目がいった。

「天の魔王の絵・・・ですね」

「フレイムの絵か！」

ブスツとしてリアクが言う。

「レ兄のお兄さんだよね？」

期待に目を輝かせて飛び跳ねるティナーを見て、レクスは顔をしかめた。

「まあ、レクスのガキよりは、魔王らしいけどな」

あくまでバカにするように言うリアクをよそに、アグリーは絵をマジマジと見つめた。

僕達はこいつと、天の魔王、フレイムと戦わなくてはならないんだ。

だが、今のままの僕達では到底、勝ち目はない。

だけど！

アグリーはレクスを見つめる。

レクスさんが力を貸してくれたなら、地の魔王のミリテリアになれたのなら、きっと、勝ち目は出てくるはずだ。

必ず！

「絶対に、地の魔王のミリテリアになってみせるさ」

そう自分に言い聞かせるようにつぶやくと、アグリーは二階に上っていった。

さらに長大な廊下が続く。だが、薄暗くて陰鬱いんうつな感じだ。

「おまえの部屋はここだ」

レクスが最初のドアを示すと、アグリーは意外な顔をした。

「お部屋、頂けるんですか？」

「当たり前だろう。貴様は俺の家来なのだからな。それくらいの待遇はしてやらねば俺の沽券こけんに関わる。それにここら辺が一番

「明るいのだ」

「僕達のことを心配して」

「そんなわけではないであろうが。ただ、早々にくたばられてはおもしろくないからだ」

そう言った後、レークスはアグリーに改まった口調で尋ねた。

「ところでだ。今後の参考に訊くのだが、今、勇者と呼ばれる奴はどのくらいいるのだ」

「今後の参考、ですか？」

「いつか、俺を倒しに来るかもしれない輩がいるかもしれないからな。ここに暮らす宿代にそれくらいの情報をよこしても罰は^{ほち}当たるまい」

「そ、そういわれても」

「そうだな。どうしてもというのなら俺様が直々に教えてやってもいいぜ！」

アグリーの代わりにそう答えたりアクを見て、アクアはげんなりとした表情をみせた。

兄さんには聞いていないと思うのですが。

意気消沈したまま、アクアは悲しげにそう思った。

アクアがそうしみじみと感じている間に、リアクは自慢げにニコニコしながら説明し始めた。

「まず、勇者というのは強い。そしてなおかつこいい。そして何よりもパーティーの主役だ！」

リアクは力強く拳を握り締めて、自分で自分の言葉に感嘆した。

そんなリアクを、レークスはイライラさせながら睨む。

「そんなことよりもだな。勇者と呼ばれる奴はどのくらいいるのだ？」

「だいたい、百人くらいだな」

「そんなにいるのか？」

「俺様の予想ではな！」

「貴様の妄想など聞いてない！」

らちがあかないと思ったレ　クスは面倒そうに一足飛びに要点を訊いた。

「では、一番強い奴は誰だ？」

「俺様だろうな！」

きっぱりとそう言い放つたりアクを見て、レークスの手がわなわなと怒りで震える。それを見たアグリーが慌ててそれに答えた。

「あの、伝説の大勇者、ラストⅡエンターティナー様です」

「ラストⅡエンターティナー・・・だと？」

レークスはいぶかしげに眉を寄せる。ティナーはそれを聞いてハツとした。

「ラスト様はお優しくてご立派な方です。　僕が勇者を目指したのもその人がいたからで」

「そんなことよりもだな。　そいつの必殺技とか奥義とか弱点とかをな・・・」

「必殺技ですか？」

アグリーの瞳が心なしか輝いた。

「何かあるのか？」

期待を込めてレ　クスは問いたです。

「え　と、長剣をこう構えて『真空剣！　次元斬り』とかいって。

ラスト様は長身ですからかつこよさそうですしね！」

言いながら、アグリーは剣を振る仕草を試みせた。

「真空剣だと？　それはどんなものだ？」

「さ、さあ、どんなものでしょうか？　思いつきですし」

「誰も貴様の、貴様らの妄想など聞いてない！」

困ったように顔を曇らせるアグリーを尻目に、レークスはそう怒鳴ると、激しく地団駄を踏みまくりながらその場を立ち去っていった。

アグリー達はしばらくじっと考え込んだ後、お互いの顔を見合わせた。

「そう言われても、僕達は、まだ、ラスト様に出会ったことがない

しな」

「そうですね」

アクアもどこか疲れたように肩を落とす。

その時になって、しばらく、なにやら、考え事をしていたティナーが真剣な表情で顔を上げた。

「お父さんは生きているんだね」

「えっ？」

いつも能天気なイメージのティナーとは違う真剣な表情にアグリーは首を傾げる。だが、すぐにティナーはアグリー達に、はにかんだ笑顔を向けて言った。

「それじゃ、明日からよろしくね。アグリーさん達！」

「あつ、こ、こちらこそ」

まだ、強ばりの残る笑みを返しながら、アグリーは割り当てられた部屋に入った。

「すごい部屋だな」

思わず独り言が出るほど豪華な部屋だった。机や椅子、ベット、タンスなどの調度類もデザインこそ、どこか古風なイメージっぽい。豪華さでは王国の王家の部屋といい勝負だ。しかも、それが一人に一部屋、与えられているのだ。

アグリーはレクスと言いつばい理由を思い出して頬がほころぶのを感じた。

やっぱり、レクスさんにも自分が気づいていないだけで愛する心があるのかもしれない。優しい心があるのかもしれない。もし、そうなら。

アグリーは自分の使命を新たに大きく頷いた。

がらんとした空間を真っ直ぐ立ち切るように、赤いカーペットの道ができている。

道先にある立派な玉座には、レクスがふんどり返って腰かけて

いた。

その後、アグリー達はレクスに呼び出されて、私室から玉座の間まで移動することになった。何でも重大な任務があるらしい。

「なんだ？ 俺様しかできない任務というのは？」

やる気満々でリアクは問いかけた。

「・・・兄さんにできることでしたら、誰にでもできるのではないのでしょうか」

ぼそりとアクアが口の中でつぶやいた。だが、当の本人であるリアクはそんなことは露しらず、拳をわなわなと震わせ、意気込んで叫んだ。

「で、どんな極秘任務なんだ！」

「極秘任務・・・って大げさな・・・」

アグリーも思わず、ふかふかと溜息を漏らした。

しかしながら、レクスの次のセリフで、リアクのこの熱意は一瞬にして冷めることになる。

「今日の夜、パーティーを行うからその準備をしろ！」

「なにい！？」

驚愕の声を上げてリアクは叫んだ。

「聞こえなかったのか？ 今日の夜、パーティーを行うから、その準備をしろ！ 詳しいことはスル プットやメシアロードから聞いておけ！」

「メシアロード？」

アグリーは首を傾げる。ここに来て早一週間は経とうとしているのに、その人とは会ったことがないのだ。

ちなみにスル プットさんとは、初めて、この城に来た時や城で仕事をしていたりする時によく会っていたりする。

その時、思い出したようにレクスは手を打った。

「いや、待てよ。 あいつは、メシアロードは、やたらと人見知り
が激しいからな。 恐らく、貴様らとは会いたがらないだろう。」

しかたない・・・。 スル プットから聞いておけよ！」

レクスはめんどくさそうにそうはき捨てると、「さつさといけ！」とばかりに手をひらつかせた。

「ご、極秘任務は？　じゅ、重大な任務は？　いつ、一体……」
深い失望感に打ちのめされ、リアクは継ぐ言葉すら見つけれないまま、その場に立ち尽くしていた。

「パ　ティ　はいつもこの時期にやっているんだよ　！」
楽しげにティナーは笑った。

僕達はあの後、スループットさんから必要なものがかれたメモをもらうと、城の門へ向かった。
一緒にとこと僕達の後について来るティナーさんに、僕は勇気を振り絞って聞いてみた。

「パーティーって一体、何のパーティーなんですか？」
それは、アグリー達が先程から感じていた疑問だった。どうやら、僕達の歓迎パーティーというのではなさそうだし。

「というか、あのレクスさんがそんなことをするわけがない。

「それはね、帰ってきてからのお楽しみってことで？」
ティナーはドキドキと胸を高鳴らせながら、赤らんだ頬にそつと指先を寄せた。

まあ、期待はしてなかったんだけど、ね。
神妙な顔つきでアグリーは肩を落とす。

でも、とアグリーは顔を上げた。
ティナーさんの笑い方はいつもの元気いっぱいなものとは微妙に違って、どちらかというところナチュラルな笑顔だった。そういう笑顔を浮かべると、彼女がすごくチャーミングな少女に見えてくる。それほど、とてもともかわいらしい笑顔だった。

きつと、ティナーさんにとっては、このパーティーは何か、特別な意味があるのだろう。きつと。
アグリーはどこか慈愛に満ちた笑みを浮かべながら、ティナーを見

つめていた。

「じゃあ、行ってきます！」

「うん、頑張つてね！」

ラミリア王国へと向かうアグリー達を、ティナーは彼らが見えなくなるまで手を振っていた。彼女のツインテールが、風になびいてふさふさと揺れた。

「なんだ！？ これは！」

リアクがいぶかしげにメモを見つめる。

ラミリア王国に着いたアグリー達は、ひとまず、渡されたメモを見てみることにした。だが、それが全ての間違いであったことに彼らは気付かれされることになる。そこに書かれていた内容は間違いなく、今日中には終わりそうにもないほどの膨大な内容だった。どうやら、城を出る前にティナーが言っていた「頑張つてね！」とは、このことを指し示していたらしい。

「す、すごいですね・・・」

おずおずとアクアは視線をメモに向けた。

パーティー用のケーキや料理の材料の買い物。それから始まって、パーティー用の資金集め（！？）、城内清掃全般、ケーキや料理作り、パーティーの下準備、飾り付け・・・ひたすら・・・エンドレス。アグリー達は口をパクパクさせながら、一体全体、どれから手をつけていいものか悩んだ。

「と、とりあえず、買い物からでしょうか？」

「そ・・・そうですね」

アグリーの問いかけに、アクアはちよつとろたえながらも同意する。

不満を言いたい気持ちもあった。

というか、言いたかった。

だが、実際のところ、その言葉は彼らの口からは出てこなかった。何故なら、彼らの瞳に、出かける前に見た嬉しそうに笑うティナー

の笑顔が脳裏に過ぎったからだ。

「くそっ！ まさか、あのガキ、俺様達の事をロボットか、正義のヒーローかと勘違いしているのではないだろうな！ い、いや、しかし」

喜んでいいのか、怒っているのかわからない口調でリアクはにやりと笑う。勢いに任せて叫んだりアクだったが、一瞬、考え込んだように言葉を切り、そして、続けた。

「それも仕方のないことだな！ なあ、アクア！」
「う、う・・・ん」

とりあえず言われるままに頷いてはみたものの、どうして、そんな考え方になるのがアクアには全く理解できなかった。とりあえず、兄の思考回路に感心しているのか、呆れていいのかが分からず、アクアは首を左右に傾げるしかなかった。

「あつ、はは、じゃあ、とりあえず、手分けして買いに行こうか・・・」

意表をつかれたようにアグリーもたじろいでいた。早く、この仕事を終わらせてしまいたい、そんな気持ちがいじりまじったような低い声だった。

「面白い！ それなら俺様が一番に買い物終わらせて、あのくそ生意気なレークスのガキをジャツフンといわせてやる！」

ビシツと指を突きつけ、リアクはフツと笑うと、早々とアグリー達に背を向けて歩き始めた。

「はあ〜」

残されたアグリーとアクアは呆れた顔で溜息を漏らした。そして、街の裏街道へと向かってゆくリアクを、ただ、ただ、呆然と見つめていた。まるで彼らは、虚を突かれたように言葉を失っていた。いや、言えなかったのだろうか？

それから、しばらくしてから、アグリーがやっと口を開いた。

「な、なあ、アクア。リアクは一体、どこで買い物をするのだろうか？」

「さ、さあ・・・」

顔を青ざめながら、アクアは答えた。
そうなのだ。

アグリー達は確かにリアクに驚かされていた。いや、多分、この場にレークスがいたとしてもきつと、驚かされていただろう。

彼らは思った。

裏街道に、お店はないと。

「えっと、パンとチーズに薄力粉、それに、はちみつに・・・」
両手いっぱい大きな袋を抱えて、アグリーはよろめきながら街の街道を歩いていていた。すでに、彼の視界には茶色の大きな袋しか見えなくなっている。つまり、街道の前の視界はゼロだということだ。だが、それでもアグリーは、動ける限りはと前へと前へと進んでゆく。

だが。

ドンッ！

「うわあっ！」

「きゃっ！」

アグリーと一人の女性が思いつきりぶつかり合い、地面に強く打ちつけられる。大きな袋からは果物やら、パンやらがぼろぼろと零れ落ちた。

「す、すみません」

アグリーは申し訳なさそうに彼女に一礼した。ふと目をやると、彼女の膝からは血がにじみでている。アグリーはさっと自分のハチマキを取ると、彼女の膝にそっと巻きつけた。

「・・・あつ、有難うございます・・・！」

彼女はぺこりとお辞儀をすると、体中の埃を振り払った。桜色のふわふわとした髪に薄い蒼色の瞳の女性は、突然、心配そうに視線をキョロキョロと漂わせた。

「どうかしたの？」

「う、ごめんなさい。私のせいで」

「えっ？何がって、ええっ」

思わず大声で叫びそうになってしまつて、あつ、とアグリーは口を抑えた。

彼女の視線が周囲に散らばっている果物やパンにいつていることに、アグリーはやっと気付いたからだ。慌ててアグリーは、果物やパンらを袋に詰め込み始める。

自分の不注意でもしへマでもしたら、何を言われるか分かったものじゃない。いや、もしかすると、「使えない奴だな！」と怒鳴られたあと、追い出されるがオチのような気がする。そうなつては、地の魔王のミリテリアになるといふのは、まさに夢のまたの夢になつてしまう。

それだけは絶対にさけなくては！

やる気をみなぎらせたアグリーは、それまで以上にばりばりとハイスピードで果物らを集め始めた。もちろん、果物などについた埃を落とすのも忘れずに。彼女もまた黙々とそれを手伝う。

そして、集め始めてからいくらも経たないうちにアグリーは叫んだ。

「よし！これで最後だ！」

アグリーの弾んだ声が街路に響き渡つた。

「全部、見つかつて、本当によかつたですね！」

「ああ、有難う。助かつたよ」

まるで自分のことのように喜ぶ彼女を見て、アグリーは彼女にとびっきりの笑顔を向けた。

全て見つかったことも嬉しかったのだが、見ず知らずの自分のためにここまで付き合ってくれた彼女の優しさが嬉しかったからだ。

「では、私はこの辺で・・・」

穏やかな表情で彼女は微笑んだ。

「本当に有難う」

アグリーも微笑する。

そして、再び、アグリーは買い物の続きをしようと歩き始めた。その時だった。高らかな声が街中に響き渡ったのは。

「ふふふ、見つけたわよ！」

「もう、鬼ごっこは終わりよ！ スチアちゃん！」

アグリーは驚いた表情で後ろを振り向く。

先程の彼女の前に、二人の女性が立ちふさがっていた。

濃紺がかかった黒い髪が特徴的で、はたから見ればまるで双子のように彼女達はそっくりだった。大きな黒いフードが身体を隠すかのように覆っている。フードに隠れていて分かりづらかったが、よく見ると二人とも魔族らしく、耳が尖っていた。

彼女達は先程の彼女、スチアを凝視するかのように見下ろしていた。

「アイズ！ イアズ！」

スチアはまるで嫌なものを見るかのように非難じみた眼差しを彼女達に向けた。

「なあに？ その目は？」

「生意気ね。ドク。 やっちゃってしまいなさい！」

彼女がそう叫ぶと、彼女達の背後から蜘蛛のような魔物が姿を現した。そして、スチアに向かって白い糸を吹き出す。

「きゃっ！」

逃げる暇もなく、糸はスチアに絡みついてゆく。それでも、スチアはなんとかそれを振り払おうとするのだが、全く解ける様子はない。

それを見ていたアグリーは颯爽と彼女達の前に立ちふさがった。

「やめる！ 嫌がっているじゃないか！」

彼女達はアグリーをまじまじと見つめる。

「あら？ 別に嫌がっていないわよね。 ねえ？ アイズ！」

「そうね、イアズ！」

彼女達は、何故、そんなに怒っているのか分からないといった顔で言う。首を大きく左右に振ると、アグリーは全身全霊の力を込め激しく抗議した。

「おまえ達のことじゃない！」

「まあ、おまえですって？」

「野蛮ね」

彼女達はくすくすと笑う。

「ドク！ この生意気な坊やを先にやってしまいなさい！」

そう言っただけで彼女が指をパチツと鳴らすと、先程の魔物がアグリーに対して糸を吐き出す。

アグリーはそれをなんなく避けると、スチアに絡みついていた糸を剥ぎ取る。

「そっちがその気なら！」

アグリーは矢のような素早さで剣を引き抜くと、大きく剣を振りかぶった。

どん！

蜘蛛の魔物が彼女達に向かって吹き飛ばされた。彼女達は、地面に強く打ち付けられる。

悲鳴をあげる間すらない。

何がおこったのかわからないまま、上体を起こした彼女達の瞳に、大きく剣を振りかぶったアグリーの姿が映し出される。

「今のうちだ！」

「あつ・・・は、はい！」

アグリーはスチアの手を取るとそのまま、街の奥へと走ってゆく。荷物はというと、通行の邪魔にならないように、街道のはしっこに置いて。

彼女達は、しばらく動きを止めたままだったが、やがて息をするのも忘れるほど顔を真っ赤にしてわめき出した。

「も、もう許さないわよ！」

「追って！ ドク！」

そう叫ぶと、彼女はビシツと音がしそうなほど鋭く、指先をアグリー達が逃げていった方向に突きつけた。蜘蛛の魔物はカサカサとその方向へと駆けていった。

「どうせ、逃げられやしないのだから……。例え、今は逃げられたとしてもね！」

「ふふ。ミリテリアになってしまった以上はね」

意味ありげにそうつぶやくと、彼女達はフツとその場から姿を消した。

アグリー達は街の奥へ奥へと走っていた。既に街の正規の道から外れ、裏街道へと駆けている。

いつ、また、どこで彼女を捕まえようとするのか、わかったものじゃない　　！！

時々、後ろを振り返りながら、アグリーはそう思っていた。

普通の人間ならまだしも彼女達は魔族だ。もしかしたら。突然背後に現れて、彼女をさらってゆくかもしれない。

来るべき戦いに先駆けて、アグリーはぎゅっと剣を握り締めた。

「？」

だが、予想外のことに何故か後ろからは追ってくる気配はない。

「くっ！」

アグリーはぎりつと唇をかみ締めた。

なら、前、前方からだろうか！

一本道だった街道から出ると今度は四方向に道が分かれていた。

アグリー達は一旦停止する。

「ど、どっちにいけばいいんだろうか？」

アグリーは戸惑った顔を浮かべながら、思考錯誤する。ここで下手に時間をロスしている暇はない。奴らが追いついてくるのも恐らく時間の問題だろう。だが、僕もこの街の道をよく知っているわけじゃないし……。

やはり、適当に進むしかないか！

そう思った矢先、誰かがアグリーの手をぐいと引っぱった。

「えっ？」

突然引っぱられ、何が起こったのかわからないまま、アグリーはすつとぼけた声を出した。ふと振り返ってみると、スチアがアグリーの手をぎゅっと握り締めたまま、先導を切って駆けて出している。

「あ、あの！」

アグリーが困ったようにそう叫ぶが、まるで何も聞こえなかったように、スチアはそのまま、振り向きもせずに前へと進んでいた。

そして、街の中央広場、アグリー達が最初に訪れた場所で、スチアはようやく立ち止まった。

「へえ、ここから広場に出られるんだな」

感心したようにアグリーは、先程通ってきた裏街道へと通じる道を、じつ　と見つめていた。

「ところで、先程の彼女達って、君の知り合いなのかな？」

そう尋ねようとして、アグリーはハツとする。

いつのまにか、彼女はいなくなっていた。

そう、まるでそこには誰もいなかったように。

「どこに行っただらう？」

アグリーは顔を曇らせる。

「アグリー様　！」

「おい、アグリー！」

振り向くと、アクアとリアクがアグリーに対して手を振っていた。

「今、行くよ！」

そう答えた後、アグリーは一瞬、後ろを振り返った。

スチアさん・・・か。

彼女らに捕まったのではないといいのだけど。

アグリーは、両手で拳を作るときゅっと握り締めた。

いや、例え、そうだったとしても、僕が彼女を助けてみせる！

護りとおしてみせるさ！

煮えきるような熱い勇者魂を燃やしながら、アグリーは彼らの元

へと歩き始めた。

余談だが、リアクはやっぱり何も買ってはいなかったらしい。まあ、その分を僕が購入していたから良かったわけなのだがー。

「良くないだろうが！」

仏頂面でリアクは恨めしそうにアグリーを見続けた。

「う・うん」

力なくアグリーは頷く。

そうなのだ。あの戦いの時、僕は荷物を置きざりにしてきてしまったのだ。しかも、それがどこだったのかさえ覚えていない。

「お気になさらないで下さい、アグリー様」

心配そうにアクアがアグリーの顔を覗き込む。

「くそっ　！　このままじゃ、あのくそ生意気なレークスのガキをジャッポンと言わせられないじゃないか！」

頭をくしゃくしゃにしながら、リアクは叫んだ。不満げに激しく地団駄をドタバタと踏みまくる。

この後、小一時間かけて、ようやく僕達は荷物を見つけることができた。

だが、まだ残っている仕事は、それこそ山のようにある。急いで仕事を終わらせようと、僕達は歩き始めた。

「また、会えるかな？」

独り言のようにアグリーはつぶやいた。

「えっ？」

アクアは不思議そうに首を傾げる。アグリーはフツと小さく笑った。

「いや、何でもないよ」

先頭をさっさと歩き出しているリアクを慌てて追いかけるながら、アグリーは真つ青な空を見上げていた。

また、会えるなんてそんな確証はない。

絶対に会えるなんて、それこそ夢のような話はありません。時間を戻す術はないし、未来をのぞくこともできない。

そうだとしても、と、現在から未来、未来から過去へと想いをはせ、僕は思った。

僕達は会えたんだ。

だから、きっと、きっと、また会えるさ！

アグリーはこみ上げてくる笑みを隠そうともせず、リアク達の後をついて行った。

第8章 悲しき女神のみる夢（前書き）

今回の話はティナーの過去話です。

第8章 悲しき女神のみる夢

ずっと、覚悟はしていたの。

レー兄と彼女を救うこと。

それは死を意味することだって。

でも。

暗い闇から再び目をにする温かい光。

そこには、ティナーを守るようにして倒れていた兄の姿があった。

そこから先のことは、ティナーはよく覚えていない。

気がついたときには、彼女と二人、力無く横たわる兄の傍らかたわにいた。

震える指で、兄はティナーの頬に触れた。

「ティナー、ごめんな・・・」

兄の指が、赤い一筋の線を自分の頬に残して崩れ落ちた時、ティナーの心に冷たく重い鍵がかけられた。

ワタシガノゾンダモノハ、ケツシテコンナケツカデハ・・・

ナカツタノニ！

「遅い！」

ティナーがぶすつとした顔で不満そうにつぶやいた。

「そういわれても・・・」

アグリーはふうつと溜息をついて、ガクンと肩を落とした。

アグリー達がやっとの思いでパーティーの準備を終わらせた時には、既に一日が終わりそうな時間帯だったのだ。

不機嫌きまわりないような様子でティナーはぶんぶんと怒る。

「本当だな」

レークスは凄みのある笑みを浮かべて、アグリー達を凝視した。

だが、目は全く笑っていない。

「役には立たないとは思っていたが、ここまでとはな！」

「いや、その実は」

アグリーの言葉とかぶさって、レークスは声を荒げた。

「言い訳など聞く耳持たん！」

レークスは玉座から飛び降りると、憤然とした顔で玉座の間を立ち去った。

「レークスさんって、どうしていつもあんな風なのでしょうか？」

アクアは手を顎に触れると、はあつと溜息をついた。それを訊いたりアクアが呆れたように非難じみた声を上げる。

「あいつはいつも、ああだろうが！」

リアクは興奮さめやらぬ顔でムツとする。

「そうとは」

「そんなことないよ！」

否定しようとしたアグリーの言葉をさえぎって、ティナーははにかんだ笑顔をアグリー達に向けた。先程までの怒りはどこへいったのか、にこにここと笑みを浮かべる。

「どういう意味なのでしょうか？」

「うーん、とね」

アクアの疑問に、ティナーは頭を悩まし、人差し指を立てながら答えた。

「うーんと、レー兄は優しいよ！」

それだけ言っつてとびっきりの笑顔をアグリー達に向けると、ティナーはパーティ 会場へバタバタと駆けていった。

「どういう意味なのでしょう？」

アクアは人差し指を立てて、不思議そうに首を傾げる。そして、何やら思い出したかのように言葉を続けた。

「でも、そういえば、どうしてティナーさんはレークスさんのことを『レー兄』って呼んでいるのでしょうか？」

「そういえば……！」

確かにレークスさんよりティナーさんの方が年上に見える。なのに、何故か、ティナーさんは、レークスさんのことを「レー兄」って呼んでいる。

何でなのだろうか？

神妙な顔つきでアグリーは言葉を呑んだ。

一瞬、アグリーは考え込んでいたが、すぐに頭を切り替える。

いや、まずは、パーティー会場に向かうべきだよな！

そう思うと、アグリー達もティナーの後を追うようにパーティー会場へと向かっていった。

アグリー達が大急ぎで作り上げたパーティー会場は、時間のなさにも関わらず、想像以上の出来だった。室内でのパーティーの準備はどうしても間に合わなかったため、野外にしたのだが、それが功を催したらしい。

満天の星空のもと、レークス達は赤々と燃え上がる炎を囲んでいた。城からアクアが作ったあたりっただけの料理が運ばれ、歌あり、踊りあり、芸芸ありの大宴会状態になっていた。

悪のりして、魔法できついお灸を据えられるレークスの配下の魔族や魔物もいる。

レークスはもうすっかり上機嫌で、ティナーと議論を戦わせていた。

「だあ　め！　絶対にスノ　ティルの花じゃないと駄目だよ！

ねえ、アグリーさんもそう思うよね？」

ヒートアップしたティナーが同意を求めるように、アグリーの肩をトントンと二回叩く。

何でも、パーティー用のブーケの話のことで、レークスさんとティナーさんは言い争いをしているらしい。何でも毎年、この時期には、レークスさんは、ティナーさんにスノーティルの花束をプレゼントするらしいのだ。

アグリーは目を見開き、困ったようにリアク達に助けを求めた。

「そういわれても・・・な」

「そうですね・・・」

アグリーの言葉にアクアは同意する。

「そんなの別にスノーティルの花でなくてもいいだろうが！」

めんどくさそうにリアクはつぶやく。

「スル テイルの花じゃないと駄目なの！」

ティナーの声はさつきより硬かった。キツとした鋭い眼差しでリアクに詰め寄る。おずおずとリアクは一步後ろに下がった。

「な、なんでだ？」

ティナーの迫力に押されて、リアクの声からは力が抜けている。だが、それを訊いた途端、ティナーは顔を真っ赤に赤らめながら、頬をそつと指先で触れた。

「だって、ティナーにとつて、スノーティルの花は特別なものだもの・・・！」

ティナーは瞳を潤ませて念を押すように言うと、城の方向へと転がるように走っていった。

「特別な花・・・か」

ティナーが駆けていった方向をしばらく黙って見つめていたレークスだったが、ガクリと膝をつき、そうつぶやいた。しかし、その声には嫌悪や冷やかしといった調子は一切、含まれていなかった。

屈み込んだレークスは、持っていた白い花を震える手でそつと差しのばしていた。

「ティナー・・・」

白い花びらに触れようか触れまいか迷っているかのように、手を近づけたり離したりしながら、レークスは花に向かって語りかける。

「おまえは、まだ、忘れられないんだな。 いや、決して忘れられないわけがないか。 誰かに置いていかれてしまうことは」

その後の言葉は、押し殺すようなつぶやきですごく聞き取りづらかった。それでも、ほとんど偶然に近い幸運で、アグリーはレークスの言葉を最後まで聞き取ることに成功した。

俺だつて怖いんだ・・・！

彼は「しまうことは」のあと、確かにそうつぶやいた。

レークスさんにしては珍しく弱気なセリフにアグリーは首を傾げた。

「どういうことなんだろうか？」と疑念が矢となつてアグリーの胸に刺さつた。「スノーテイルの花」。確か、それはレーブンプルクに咲いている白い小さな花だつたはずだ。その花を何故、レークスさんがティナーさんに毎年、手渡しているのだろうか。

何か特別な意味でもあるのだろうか？

そこでアグリーはハツとする。

もしかしたら、ティナーさんがレークスさんのことを『レー兄』
つて呼んでいることと何か関係があるのかもしれない。

そういえば、ティナーさんだけ、他の人達とは違つて魔族や魔物ではなく羽翼人だよな・・・。確か、羽翼人つて外界との交流がな
いため、お互いテレパシーで会話をするつて聞いていたけれど・・・。

「レークスさんとティナーさん、一体、どうしたのでしょうか？」

アグリーの思考はアクアの呼びかけによつて、中断を余儀なくされた。気を取り直して、アグリーはリアク達の方を見つめる。

いつのまにか、レークスはアグリー達の元から去つていた。

「・・・分からない。 だけど」

それだけ言つと、アグリーは自分が言つた言葉を頭の奥で反芻はんすうしながら、空に浮かぶ月と星を見上げていた。

城のバルコニーからはラミア王国を一望することができる。それは広い広いこの大陸全土からすれば、彼女の目に映るものはほんの一部だけなのだろうけど、それでもここから見る景色はここが以

前、自分がいた場所とはまるで違う場所なのだということを嫌でも思い出させてくれる。

城からすぐ近くのところには、彼女が先程までいたパーティー会場がある緑生い茂る平原が広がっている。さらにその奥には、深い森が広がっていた。

「ティナー！」

手すりに手をかけラミア王国の風景をぼうつと眺めていたティナーは、背後からの声に振り返った。そこでハツと顔色を変える。その鼻先に、ふわりと優しく甘い花の香りが漂った。

「・・・レー兄、スノーテイルの花、手に入らなかったんじゃないの？」

「いや、一輪だけは何とかな」

苦笑しながら、レークスはティナーにスノーテイルの花を手渡す。

「ありがとう！ レー兄！」

両手で一輪のスノーテイルの花を抱えて、ティナーは頬を染めて微笑んだ。赤いツインテールの髪と純白の服が星の光にまばゆく照らされていた。

「ああ」

レークスは少し照れくさそうに頭をかいた。

「もう、8年も前のことになるんだね。 レー兄と出会ったのは・・・」

懐かしそうにそうつぶやきながら、ティナーは物思いにふける。

そして、少し悲しげな表情のまま星空をそつと見上げた。

そよそよと心地よい風が彼女の赤いツインテールを揺らしていた。

「私も行く！」

真っ白な雪原が広がる街の中、無然とした態度で少女はその場に座り込んだ。その近くで、銀色の髪の少年と金色の髪の少女が困った顔を浮かべ、お互いの顔を見合わせている。

「ティナーはここでお留守番だろう？ お父さんとお母さんに約束したじゃないか？」

少年が優しく諭すように、ティナーの前にしゃがみこんだ。

「でも、でも、やっぱりここで一人でお留守番なんて嫌だよ！」

駄々をこねるように、ティナーが手足をバタバタさせて叫ぶのを見て、うーん、と少年は唸る。それを見た少女は、真剣な瞳でティナーを見つめていた。

少女はふうつと溜息をつくとき表情を崩した。少年もそれを見て、なぜだか不意に、息苦しさを覚えたかのように、はあっ、と溜息をついた。柔らかな笑みを浮かべたまま、少女は言った。

「・・・仕方ないわね。一緒に行きましょう！」

「本当!？」

少女の声に弾かれるようにティナーは「わ い！」と歓声を上げた。少年は一瞬息を止め、すぐに少女に向かって何かを言おうとした。でも、彼が何かを言おうとする前に少女が彼に対して軽くウインクする。

「・・・一人でいる方がきつと辛いわ」

「リーディング・・・さん・・・」

少年はぼかんと口を開けた。

そうか。リーディングさんは僕達と出会う前は、ずっと一人でいたんだもんな。

「いいでしょう。レーナティさん」

リーディングは日だまりのような笑みを浮かべた。レーナティは思わず絶句した。

そして

「うん、わかったよ。一緒に行こう！ ティナー」

「ありがとう！ レー兄！」

レーナティがコクンと頷くと、ティナーは嬉しそうにぴよんぴよんと周りを飛び跳ねまくった。

「はあ・・・」

「ふふ・・・」

「わ、笑い事じゃないよ！ リーティングさん！」

頭を抱えながらぼやいたレーナティに、リーティングはくすつと微笑んだ。

だが、すぐに真剣な顔で、リーティングはティナーに諭すように言った。

「でも、魔王城の前までですからね！」

「えっ　　！！！」

「城には、魔のミリテリアのデリルと魔王グレイスがいるの。はつきりいつて私達でも勝てるかどうか分からないんです」

「・・・」

ティナーは顔を曇らせる。リーティングはすつとティナーの目のぞきこんだ。

「そんな顔をしないで・・・。私達は、うっん、お父さんもお母さんも、みんな、無事に帰ってきます。だから、ね」

そう言うと、リーティングは薬指を立てた。ティナーもまた同じように薬指を立てる。

「約束だよ？」

「ええ！」

二人は薬指をぎゅつと握り締める。

「絶対だよ！　嘘じゃないよね！」

「ああ、もちろんさ！」

ティナーの問いかけに、レーナティが代わりに答える。

「約束だよ！」

「ああ、約束するよ！」

レーナティは確信に満ちた表情で頷いた。

「ねえねえ、レー兄」

「ん？」

魔王城へと向かっている最中、ティナーがレーナティの服をぐいと引つ張った。

「レー兄達っていつもどうやってお金を稼いだりしているの?」

「え、えっ」と

目を輝かせてわくわくしながら問いかけてくるティナーに、レーナティは間の抜けた声を出した。

「そ、そうだな。まず第一に」

レーナティは自慢話をするかのように、人差し指を立てた。

「街や村にある家に無断侵入するだろう。そして、タンスやつぼを調べたりとかだな!」

「うんうん!」

「まあ、例え、誰かに見つかったとしても、とりあえず、『勇者ですから』とか『兵士ですから』とか適当なことを言っていえば何とかなるものだ!」

「うんうん!」

「そして第二に、人助けだな!」

レーナティは指で二を指し示す。

「それで」

促すように、ティナーは目をキラキラさせた。それを見て満足げにレーナティは言葉を続ける。

「誰か困っている人がいたら助ける! そうすれば、『お礼です』とかいって、その街や村の家宝とかもらえたりするかもしれないしな!」

「わあ、ドキドキするね。レー兄」

「ま、まあな!」

ふふんとレーナティは胸を張ってみせた。そんな二人を冷めた表情のまま、リーディングは無言で見つめていた。

どこまで本気なのでしょう?」

リーディングは首を傾げながら、真剣に悩むのだった。

「ねえ、レー兄、これのどこが徒歩、に、二十分なの。もう、一時間は歩いたよ!」

城を目の前にして、ティナーは滝のような汗をかきながらぼやいた。

「うーん。やっぱり、魔王の城のことなんて正確にはよく分からないんだよな……」

ここまで手にしてきた地図を皮袋にしまつと、レーナティは城を見た。

白い尖塔が幾つもそそり立ち、屋根には旗が風にたなびいている。周りを白い城壁が取り巻き、広さもかなりのものだ。

「すごいね」

「ああ」

城を目の前にしてティナーとレーナティは感嘆の声をあげた。しばらくはぼつと城を見つめていたレーナティだったが、すぐにティナーの方を振り向いて言った。

「じゃあ、ティナーはここで留守番だよ!」

「う、う……ん」

レーナティの言葉に、ティナーは戸惑いの表情で顔を背ける。リーディングがそつとティナーの顔を覗き込んだ。

「約束でしょう?」

「う……うん!」

まだ、納得のいかない表情を浮かべていたティナーだったが、一時^{とき}して、首を縦に力強く頷いてみせた。

「ありがとう、ティナーちゃん」

「絶対だよ! 絶対に戻ってきてね!」

「ああ!」

レーナティはそう言つと、魔王城へと歩き始めた。リーディングもそれに続く。

「絶対だからね!」

背後で心配そうなティナーの声がした。振り向かずとも声色だけでどんな顔をしているのかわかる。不安、かすかな恐れ、そして希望。色々な想いをごちゃ混ぜにした、なんとも情けない顔だろう。視線を魔王城に向けたまま、レーナティは手を横に突き出し、びしっと親指を立てた。

「僕達がやられるわけないさ。ティナー。ここで信じて待つてよー!」

「・・・うん!」

泣き出しそうな返事とともに、すすつとティナーの気配が遠ざかった。

ありがとう。ティナー。そして約束するよ。必ず、戻ってくるって。

念を押すようにレーナティは心の中でつぶやいた。

「これって、一体・・・!?」

城門の目の前で、レーナティは拍子抜けしたかのような声を出す。扉にかかる橋は降りたままで、城門も既に開かれていた。誰かが攻めてくるということを考えていないのか、それとも?

「もうすでに、ラスト様とミューズ様が侵入されたのでしょうか?」

「うん」

二人が開け放たれた門をくぐって城の中に入ったところで、リーディングは感心したような声を上げた。

城門から城までには、多くの魔族や魔物が倒れ伏せていた。恐らく、先に侵入した父と母に倒された者達だろう。

「さすがは、時音のミリテリア、ラスト!! エンターティナー様と時音の女神、ミューズ様ですね・・・」

「よーし!」

拳をぎゅっと握り締めて、俄然やる気を出すレーナティ。

「僕達も負けていられないな! リーディングさん!」

「そうですね」

ニコツとリーディングは満面の笑みを浮かべた。

「夢月のミリテリアの僕の力と夢月の女神、リーディングさんの力、デリルとグレイスに見せ付けてやるうよ！」

「はい！」

リーディングは目を見開き、そしてこくこくと頷いた。だが、実際のところ、彼女にとってはただ、レーナティのそばにいただけ、もうやる気の充電は完了だった。

「行こう！」

レーナティがそう叫ぶと、彼らは再び、城の奥へと歩き始めた。

真新しいマント姿の青年が玉座に腰かけようとした時、玉座の間のドアが、何者かによって大きく開かれた。

「やあ、ようこそ、お客人！ お待ちしていましたよ！」

ぱりっとしたスーツと真新しいマントに身を包んだ青年が、ぱさりと大仰な仕草でマントを翻した。

玉座の周囲には、幾人かの魔族がひざまずいていた。

青年はわざとらしく間をおいて、ねちりと嫌な笑いを浮かべた。

「おやおや、よく見れば大勇者、ラストⅡエンターティナーくんの息子レーナティくんではないか。早速、父親と母親が処刑されるところを見に来られたのか？」

「な、なにい！？」

「ラスト様とミューズ様が・・・！」

レーナティとリーディングは目を丸くして驚愕する。

「くくくっ・・・」

青年はレーナティ達からふと視線をそらす。その先には、漆黒ボールのような結界がじわりと浮かんでいた。そこには、ほのかに二人の人影があった。

「父さん！ 母さん！」

「そんな・・・」

予想外のことに、二人の額にじわりと汗がにじんだ。

「あなた方はなす術もなく、ここで見ているといいですよ」

「デリル！」

ざっ、と、レーナティは一步前に進み出た。そのまま、真っ直ぐデリルに近づいていく。

「僕は約束したんだ！ みんなで無事に帰ってくるって！」

「誰にですか？」

デリルのその問いには答えなかった。変わりに、だから、と、レーナティは全身から一気に怒りの炎を燃え上がらせた。

「それを奪おうとするお前は、お前達は、絶対に許さない！」

「面白い、君の成長を見させていただきませよ！」

二人の殺意が、辺りに激しくどす黒い火花を散らした。

「食らえっ！」

だんっ！

宣戦布告するやいなな、レーナティは素早くデリルの懐に飛び込んだ。

デリルがすいっと軽く身をよじり、レーナティの突進から逃れるが、素早くレーナティはデリルに寄り添うように追いつき、重心の移動を利用して剣を抜き払った。

しゅっ！

そのまま一閃。しかし、剣は宙を斬り、代わりにデリルの魔力光が眼前に現れる。

「っ！」

身体を反らすことで、レーナティはなんとかこの攻撃を避けた。

「ごぉおっ！」

「がああああっ！」

「ぎゃあっ！」

目標を失った光は、少し離れたところに着弾。退避しきれなかつ

た魔族が数人、爆発に巻き込まれ、吹き飛ばされる。

「くっ！」

それを見てレーナティは舌打ちする。自分が攻撃を避けただけで、この被害だ。もし、攻撃が結界にでも当たってしまつたら・・・!?

「レーナティさん！ お二人は私が守ります！」

先程の攻撃から逃げおおせたリーディングは、レーナティに向かって大声で叫ぶ。それを聞いたレーナティは、リーディングに対して親指を立てて見せる。

「リーディングさん、頼んだよ！」

「はい！」

レーナティの言葉に、リーディングは力強く頷いた。

その間にもデリルの攻撃は容赦なく、レーナティに襲いかかつてくる。

「がっ！ しゅしゅっ、どどっ！」

城壁や周りの魔族達を巻き込みつつ、レーナティとデリルの攻防は続く。

「ぎいんっ！」

つばぜり合いになり、レーナティとデリルの鋭い視線が近距離で絡み合う。

「くっ！ デリル、貴様、仲間がどうなつてもいいのか！」

先程からの攻防戦に巻き込まれていく魔族達を見て、レーナティは唇をキツと噛み締めた。

「仲間？ いえ、それは違いますよ。 彼らはただの」

「デリルはにやりと唇を緩めた。

「捨て駒ですから！」

「デリルっ！ 貴様！」

レナティは歯がみしながら、デリルを睨んだ。

勝負はほぼ互角。いや、素早さからみれば自分の方が上かもしれない。

かつて戦った時はもっと、強敵というイメージがあったのだが・

・・・

いや、きつと、あの頃は今より、もっと、幼かったからそう見えただろう。

一気に押し倒そうと、レーナティはぐつと両足を踏ん張った。

「ぐつ！」

切羽つまったレーナティの声。

やっとのことで結界を解いたリーディングがハツと体を強張らせ、振り返った。結界から出られたラストとミューズも慌てて、声のしたほうを見る。

体勢を崩したレーナティが、入り組んだ城脇の通路に転がりこんだ。その後を、デリルが追う。

「いけない、あちらは・・・」

リーディングが、鉄砲玉のように駆け出した。

「リーディングさん！」

ミューズは、一瞬、大怪我をしているラストを見て躊躇した。だが、ラストは行けというばかりに、レーナティのいる方向を指で指し示した。それを見て頷くと、すぐにミューズも後を追う。

苦しげに歪んでいたレーナティの顔が、リーディングの目に焼きついていた。

「ぐつ！」

レーナティはいきなりの激痛に、思わず叫んでしまった。

苦しげに振り向くと、背後には、不気味な笑みを浮かべる魔王、グレイスの姿があった。

油断した！？

くそつ！

こんなことなら、もっと姿が見えなかったことに気をつけるべきだった！？

だが、もうそれは、すでに後の祭りだった。

右足はもはや絶え間なく悲鳴をあげている。怪我の痛みに、レーナティの右膝がいとも簡単に屈してしまった。

しまった！

まともにバランスを崩したレーナティはそのまま地面を転がって一撃を避けた。体勢を整えようと、目の前の通路に飛び込む。

ところが、場所が悪かった。

城の周囲に張り巡らせた高く堅固な塀と、城の城壁。それがレーナティの行く手を阻んでいたのである。

「くそっ！ 一体どうすれば！」

考えもなしに、自ら袋小路ふくろこうじに転がり込んでしまった。

右足の痛みやいらだちをごまかすように叫んで、レーナティは身を翻した。

その目前に、壁よりもつと厄介な障害が立ちふさがる。歓喜に目を輝かせ、上段に構えたデリルだった。

「レーナティくん！ 安らかにお眠りください！」

魔力光の一撃が、真っ直ぐレーナティへと振り下ろされた。

「くっ！」

レーナティは唇を噛み締めた。

リーディングが走った。ミューズが走った。だが、間に合わない。だめえ！」

レーナティとデリルの間に、小柄な赤い影が飛び込んできた。テナイナーである。

「テナイナーさん！」

「リバイバル！」

リーディングが、ラストとミューズが悲痛な叫びを上げた。

レーナティは瞳を、大きく開いた。

かばうように手を広げた姿が、遠い昔に見た懐かしい背中に重なる。

幼い頃、ティナーと一緒にスノーテイルの花の周りで駆け回っていたあの頃の。

『レー兄！ 好きだよ？』

真っ白な頭の中で、レーナティは誰かの叫び声を聞いた気がした。

「・・・ティナーっ！」

腕を限界まで伸ばし、レーナティはティナーをかばうようにして倒れた。

そこから先のことは、ティナーはよく覚えていない。

気がついたときには、リーティングと二人、力無く横たわるレーナティの傍らかたわにいた。

震える指で、レーナティはティナーの頬に触れた。

「ティナー、ごめんな・・・」

レーナティの指が、赤い一筋の線を自分の頬に残して崩れ落ちた時、ティナーの心に冷たく重い鍵がかけられた。

私が望んだものは、決してこんな結果では・・・

なかったのに！

何でもあの後、ティナーをかばったレーナティが最後の力を振り絞って、夢月の力である大魔法『レバエレーションズ』を使って、デリルを倒したらしい。だが、グレイスによって城は崩壊させられてしまい、ラストとミューズの行方も分からずじまいになっていた。あの戦いの後、ティナーは延々とリーティングを攻め続けた。

どうして、早く戻ってこなかったの。

どうして、レー兄を助けてくれなかったの、と。

荒れ狂うティナーをリーティングはうまくなだめられなかった。

自分がいたのに、大切な人を守れなかった。

理不尽に目の前で失われていった、マスター（レーナティさん）の命。あの人を守ると誓ったのに。

レーナティのために、何かしたかった。してあげたい、ではなく、『自分』がしたかったのだ。ただ、もうその願いは叶うことはない。

レーナティさんのそばにいたいです。これからもずっと！昔、二人で語り合った言葉。

想像するだけで、リーディングは胸がぎゅっとしめつけられる気がした。

「ティナー・ちゃん・・・」

「うわああ　ん！　リーディングさんのバカあああ　！」

ティナーは泣き叫びながら、一人、魔王城の外へと走ってゆく。

「ティナーちゃん！」

リーディングが最後に見たのは、城に背を向け、脱兎のごとく駆けてゆくティナーの背中だった。

本当は分かっていた。

私が約束を守らなかつたからだ。

魔王の城には入るな、って言われていたのに、約束を破ってしまったから！

ティナーは来た道に戻るように、雪原を走り続けていた。「あっ！」

ティナーの足が抜き出しになっていた木のねっこに引っかかり、転がるようにして倒れ込んだ。ごろごろ、と前転したティナーの体が、どすんと誰かの足にぶつかって止まった。

「うっ、うっ・・・」

目を回しながら、ふと、自分をかばうようにして抱きついた兄を思

い出し、ティナーは心を痛めた。瞳からは大粒の涙が絶えることなく流れてゆく。

「レー兄、レー兄、会いたいよ！」

「ただ、その叫びは届くことはない。」

「ティナーはぐっと持っていた杖を握り締め、きつく目を閉じた。」

「一緒に行きたいとか、そばにいてほしいとか、言葉でどんどん伝えれば、必ず届くと思っていた。でも、それは、本当にレー兄やリーティングさんのためにいいことだったのだろうか？」

「私も行く！」

「軽はずみで言ったあの一言が、レー兄にはどれだけ不安だったのだろうか。」

「『リーティングさんのバカあああつ』！」

「勢いで叫んだあの一言が、リーティングさんには、どれだけ悲しかったのだろうか。」

「閉じたまぶたの奥に、遠ざかっていくレーナティの背中がちらついていた。」

「『レー兄、会いたいよ　！！！！』」

「ティナーはふつと顔を上げながら叫んだ。」

「もう二度と会えない。分かっている。」

「だけど。」

「『貴様、大丈夫か？』」

「『レー兄・・・？』」

「澄んだ青い空のような瞳が、ティナーの顔を覗き込んだ。」

「本物だ。銀色の髪もスカイブルーの瞳も・・・。」

「ティナーの瞳に、ゆっくりと驚きと理解の色が広がってゆく。」

「『レー兄だ！』」

「と、ティナーは叫んだ。」

「『レー兄だ！』」

「と、ティナーはもう一度叫んだ。」

「彼女の顔が理解と喜びの顔で輝いた。」

「レー兄だ！」

ティナーは躊躇なく、少年に思いっきり飛びついた。
「どわ!？」

突然飛びつかれた方はたまったものではない。少年は飛びつかれた勢いでバランスを崩し、ティナーを抱え込むような形で尻餅をついた。ティナーはお構いなしに、ぎゅつと首元にすがりつき、何度もその名を呼ぶ。

「レー兄! レー兄! よかった。生きていたんだね!」

「おい、こら、首っ! 首をしめるなああっ!」

「ああああ、ごめんね! レー兄!」

ティナーは慌てて立ち上がる。そして、瞳を潤ませ、じっと少年を見つめた。

「・・・そんなことよりもだな」

少年は力なくかぶりを振ると、ぽつんと言った。ティナーに視線を向けないまま。

「俺の名はレークスだ。断じて貴様の兄などではない!」

「レー兄じゃ・・・ない?」

ティナーはさつと顔色を変えた。答えはすぐ隣から聞こえてきた。

「えと、まあ、そのままの意味ですよ。このお方は、地の魔王、レークス様です」

隣にいたやる気のなさそうな魔族の青年がそう応えた。意気消沈したまま、ティナーは瞳を潤ませた。

「レ、レー兄じゃないの・・・?」

「残念だな」

「うっ」

ティナーは目を見張ってレークスを真っ直ぐに見た後、肩を震わせた。

「そ、そんな・・・。そんなのって」

嗚咽を漏らし、大粒の涙をこぼすティナーを見て、レークスの方がわけもわからずに動揺してしまった。

「お、おい！ なぜ泣くのだ？」

「だって、だって、レー兄が生きていたと思ったのに、記憶喪失なんて……」

今度は、レークスの目が点になる番だ。

「はあ？ おまえはアホか？ 俺はレークスだ。 何度、言わせれば分かるんだ！」

「えっ？ じゃあ、レー兄とレークスは別人なの？」

「当たり前だ！ それに俺を呼ぶときは、『様』をつける！ 『様』を！」

不機嫌そうにレークスはじろりとにらんでみせたが、ティナーは全く気づかず考え込んでいる。

「ああ、そうなんだね！」

ティナーは手をポンと叩いてみせる。

「やっと、わかったのか？」

レークスが少々の期待を込めて尋ねると、ティナーはなんと重複な顔で頷いた。

「レー兄って双子なんだね！」

「……き、貴様っ！、俺をバカにしているのか！」

肩で息をしつつ、レークスはぴりぴりとティナーを睨みつけた。

「？ あれれ？」

当の本人であるティナーは、彼が何でそんなに怒っているのかが分からず、？マークを浮かばせるしかなかった。

「あのね、レー兄？」

先頭をさっさと歩き始めたレークス達を慌てて追いかけるながら、ティナーはその背中を熱い視線で見つめた。

「レー兄ではないといっているだろうが！」
ぶすつとした顔で、レークスは眉を寄せる。

「私、レー兄のために何かしたい！」

「何か、だと？」

レークスはぽかんと口を開いた。初めてみせた彼の無防備な表情に、ティナーは陽だまりのような笑みを浮かべた。

「はい！」

ティナーはしゃきつと背筋を伸ばした。

「私もレー兄の味方になりたいと思っただけだからレー兄がなんと言おうと、勝手にについてっちゃうもの！」

ティナーはきっぱりと言った。思い切って彼らの後をついて来たのも、そのためだった。

レー兄のために、何かしたかった。してあげたい、ではなく、『自分が』したかったのだ。例え、それが兄ではない全くの別人だったとしても。

けれど、ティナーは、魔法が使えるわけでもないし、特別な力もない。唯一できるのは、レークスの隣に居ること。だから。

ティナーはパンツと胸を叩いた。

「これからは、私もレー兄の力になるね。まだ、未熟者かもしれないけれど、役に立てないのかもしれないけれど、それでも、精一杯、お手伝いします！ だから、一緒に、そばにいさせてほしいの！ ……お願い！ レー兄！」

最後の方は叫びになっていた。

ティナーはすっとレークスの目を覗き込んだ。たちまちレークスは落ち着かなくなる。

だが、この近距離では、視線を逸らそうとしてもうまく逸らせない。

ふと、ティナーが何やら思い出したように、手をポンと叩いた。

「あっ！ まだ、私の名前、言っていないかったね！ 私の名前はリバイバルIIエンターティナーっていいいます！ ティナーちゃんって呼んでね？」

エへへと満足げに笑みを浮かべながら、ティナーは誇らしげに胸を張った。

「……………目眩がしてきた」

レークスがこめかみを押さえ、がつくりと肩を落とした。

「つまり、おまえは俺の家来になりたいというのか？」

「う、うん、そうじゃなくて、えっと……」

目をぐるぐると回しながら、ティナーは唸った。でも答えは単純だ。

ティナーは、持っていた杖を握り締めて笑った。どうか、この気持しが伝わって、レー兄の心に広がってくれますように、と。

「でも、私はレー兄を信じるよ！ 誰よりも信じてるから！」
レークスは絶句した。そして

「……く……く……！ 本当におめでたい奴だな。その根拠のないわけも分からない理屈は、一体どこから来るんだろうな！？」
レークスがにやっと、愉快そうに 本当は面白そうに笑った。

「いいだろう。 貴様を俺の配下として認めてやる！ ありがたく思うんだな！ ティナー！」

どこか、レーナティの微笑によく似た、無邪気な表情だった。
あ……！

ティナーは心の中でつぶやいた。

「地の魔王である俺を信じるなどと……アホなことを抜かしたのは貴様が初めてだ。 羽翼人のくせに、おかしなことをいいおつて」

「正確には、羽翼人と人間のハーフだよ！」

ティナーも頬を桜色に染め、とびっきりの笑顔を見せた。その隣で二人を見つめていた魔族の青年が、退屈そうに一つ大きなあくびをしてみせた。

「私、レー兄に会えてよかったって思っている。 本当だよ！」

「何だ！？ 突然！」

くすつとティナーが思い出し笑いをした。城のバルコニーの上で たんたんつと足を踏み鳴らしながら、レークスは顔をしかめる。

「初めて、レー兄が私に見せてくれた笑顔、今でも私、覚えている

よ！」

「そんなものは忘れる！」

レークスはぼうつと頬を火照^{ひて}らせた状態で怒鳴る。

「えへへ〜？」

はにかんだ笑顔を見せながら、ティナーは思った。

忘れられるわけないもの。

だって、レー兄が初めて私のことを認めてくれたのは、あの時だもん！

幸せそうに、ティナーは胸を膨らませた。

「レークスさん！ ティナーさん！ 大変です！」

城のバルコニーで語り合っていたレークスとティナーを呼ぶ声がした。ふと、耳を傾けてみると、それはアグリー達のような。

「リアク兄さんが焼酎を8杯も飲んでしまったらしいんです。そのせいで、何でも正義の味方についてのことで、会場内で他の方々と議論を言い争っているらしいのです！」

アクアの声はすでに悲鳴にも近い。呆れたように、レークスは頭をかいた。

「何をやっているのだ！」

レークスは左足をバネにしてバルコニーから飛び降りた。

「あっ！」

ティナーの反応が一瞬遅れた。その間に、レークスが地面へと着地した。

一人、バルコニーに取り残されたティナーは、会場内の声に耳を傾けてみる。

正義の味方とは、を題目に、その話は始まっていた。

第一に、オリジナリティあふれる端正、インパクある顔たちが必要だとか。

子供達に親しまれることか(？)

第二に、愛と勇気だけが友達。

孤高のヒーロー。 かつこいいい！ とか。

第三に、時には冷酷。

敵には容赦ない！ とか。

明らかに正義の味方とは矛盾しているのではないのかと思う内容もあつた。」

そこへ怒りの表情のレークスがドカドカと割りこんできた。周囲のリアク達の表情が目に見えて凍りついた。

「何をやっているのだ！」

こめかみをピクピクさせながら、レークスは問いただす。

「いや、あの・・・」

「言い訳など聞かん！」

レークスは左足をだんつと前に出す。

「こ、こうなつたら、俺様の新必殺技で・・・」

「遅い！」

「ぐわあ！」

ずがべし〜ん！ とばかりに、レークスの放った炎の玉によって、リアク達は勢いよく夜空にぶっ飛んだ。そのまま雲を突き破り、星の彼方へと消えていった。

どうやら、彼らはお星様になってしまったらしい。

「リアク！」

「リアク兄さん！」

慌てて、アグリー達は、リアクを追いかけ始める。

「レー兄、やったね？」

「ふん、当然の結果だ！」

嬉しそうにバルコニーから手を振るティナーを見て、威厳溢れる声でレークスはそう叫び返した。

「レー兄、大好きだよ？」

ティナーはにこつと微笑んでみせた。ティナーのつぶやきとともに、持っていた白い花が風でゆらゆらと揺れた。

優しい微風の囁きの中に、ティナーは元気な男の子と女の子の笑い声を聞いたような気がした。

第9章 彷徨う想い（前書き）

今回はダイタ達の話です。

第9章 彷徨う想い

6人の神々。

それは変わらない者。

歳も取らずに、姿形も変わらない。

永遠の時を生きる者達。

変わりゆく者は彼らに憧れを抱くけれど、彼らもまた、変わりゆく者に憧れを抱いたのかもしれない。

僕は無我夢中でその書記を読んでいた。落ち着きのない足が、がたがたとイスを細かく揺らしている。

あれから僕達はレーブンブルクの街を出て、ラミアリア王国にある大きな図書館に訪れていた。

どうしてそんな場所にいるかというところ、少しでも僕の記憶の手がかかりとなる『星のかけら』の情報を得るために、マジヨンがここを紹介してくれたからだったりする。

だけでも、残念ながらそこには期待していたような情報は全くとっていないほど、得ることはできなかった。

でもでも、そこにはとても興味引かれる書記が一冊あった。

なぜなら、それには僕にとって、すごく興味あるような事が、いろいろと書かれていたからだ。

と、ここでその書記について、少しだけ説明を加えておく。どうして少しだけかといえば、僕も『星のかけら』の情報が書かれた本を探す合間に、ほんの少しの時間の間、読んでいただけなので、まだ、少しだけしか知らないからだ。でもほんのちよっぴりしかない時間でそれを半分くらい読んでしまった僕はかなり偉いと思うんだけど、誰もそんなことは聞いていないし知るわけがない。当たり前だけど、

・・・(汗)

6人の神々が歴史上に　つまり、この世界に姿を現し始めたのは、ごく最近のことらしい。ごく最近といっても、正確には、だいたい五百年程前くらいからだ。

この事実には僕は思わず驚いてしまった。

てつきり、『魔法』というのは、もつと昔から存在するものだとばかり思っていたからだ。

うーん。意外だったりする。

彼らは突然この世界に現れ、誰も気付かぬうちに人々に『魔法』という不思議な力を授けた。

彼らが自らの力を人々に授けてからわずか一年間。わずかその間に『魔法』というのは、この世界ではありふれた力となってしまうというわけだ。すごい話である。きつと彼らの実力も大したものなのだろう。そんな彼らの一人でもあって、夢月の女神であるリーディングさんに、僕は『ミリテリア』として選ばれたのだから本当に驚くしかない。

「変わりゆく者って・・・やっぱり人のことだよな」

僕はしみじみと独り言のようにつぶやいてみせた。考え込むようにそつと、片手を顎につける。

「そうですね」

「うわわあああ！」

あまりに嬉しそうなのにつられてマジヨンが僕の手元をのぞきこむと、僕は弓のように全身をしならせ、イスごとひっくり返った。ごちんといかにも痛そうな音に、マジヨンは大慌てででかがみこんだ。

「だっ、大丈夫ですか！　ダイタさん」

「う、うん・・・」

ぶつくりとふくれた後頭部をさすりながら、僕はどこか照れくさそうに言う。癒しの魔法をとマジヨンはそつと手を差し伸べてくれた。

「はあ……」

どうやら、慌てて本を隠そうとしたのが裏目に出てしまったらしい。

何だか、ものすごくかっこわるいところを見られてしまったような気が……（汗）

僕は悲しげに深々と溜息を付くのだった。

「ダイタさん。その本って『星のまどろみ』ですよね？」

意気消沈したまま、僕が振り返ると、マジヨンは懐かしそうにその本を見つめていた。

「う、うん」

マジヨンの真剣な表情に、僕は戸惑いながらも頷いてみせる。

ど、どうかしたんだろうか？

「その本……昔、お母さんに読んでもらったことがあるんです。……私、この『星のまどろみ』が大好きで、よくお母さんに「読んで！」「読んで！」って言って、いつも駄々をこねていたらしいんですよ！」

マジヨンは、ふふつと懐かしそうに笑みを浮かべた。それを見て、僕はちよつとろたえてしまう。

マジヨンの笑い方は、いつものどこか大人じみたようなものとは微妙に違って、どちらかというとすごくナチュラルな笑顔だった。そういう笑顔を浮かべると、実際の年齢よりもずっと幼い感じに見える。それくらいとてもかわいらしい笑顔だった。

僕は少し照れくさそうにしながら、人差し指を立てると、それに応えた。

「そ、そうなんだ」

「はい、死んだお母さんがよく読んでくれた本なんです」

悲しげにそう答えたマジヨンに僕は言葉を呑み込んだ。

マジヨンはゆっくりとイスに座ると、本に視線を落とす。

その様子を見て、僕は胸を突かれた。

そういえば、僕は、マジヨンのお父さんとお母さんのことって知らなかったつけ。

と、いうか、僕は全くといっていいほど、マジヨンのことを何も知らないんだ。いや、もしかしたら、知ろうとしていなかったのかも知れない。

聞くチャンスはいつでもあつたはずなのに……。

泣くまいと懸命にこらえているマジヨンの背中を見て、僕は黙って拳を握りしめた。

僕はなんて無力なんだろう……。

こんな時、マジヨンの力にもなれない。励ましの言葉すらも見つからない。仲間なのに、何もしてあげられないなんて。

自責の念が僕をさいなむように、襲い掛かってくる。

僕は悔しげに拳を握りしめた。

「あ、あの、マジヨン……。」

しかし、僕が続く言葉を口にするより早く、マジヨンは笑みを浮かべた。

そして、本に視線を向けると、声に出してそれを読み始めた。

「……夢月の女神様は、人々を見守ることにしました。

時音の女神様は人々と共に生きることになりました。そして、星の女神様は愛する人のために……、その人とともに生きていと願い、人として生きることを選びました」

「えっ？」

本の一文を読んで聞かせたマジヨンに、僕は肩すかしを喰らったかのような顔になってしまった。

そんな僕に、マジヨンはにっこりと微笑んだ。

「私、この星の女神様の『人として生きる』ことを選んだのは、本当にすごいことだと思うんです」

「えっ？」

僕がきょとんとすると、マジヨンは真剣な顔で僕を見つめた。

「……普通、神々は『永遠の命』を持っています。だから

ら、永遠の時を生き続けます。でも、星の女神様はそれを自らの手で止めてしまったんです。ただ、愛する人とも一緒にいたくて」

マジヨンは瞳を潤ませ、両手をぎゅっと握り締めた。

「神としての記憶も失われ、人として転生していくことは、星の女神様にとって本当に辛かったことだと思っんです。神々にしてみれば、人として生きる時間は、……ほんのわずかといつてもいいのですから。でも、それでも彼女は彼と生きることを選んだんです」

マジヨンはもう一度、ぎゅっと両手を握りしめた。そして大きく息を吸い、切り出した。

「私も星の女神様のような強さを持って生きていきたいんです。

私も大切な人のために、ダイタさん達のために力になりたいんです！」

マジヨンは真剣な眼差しで僕を見つめていた。

僕は何も言えなかった。いや、答えられなかった。それに応えられないかもしれない、マジヨンの想いに応えられないかもしれない、そんな思いが僕の脳裏に過ぎってしまったからだ。

ふとマジヨンが表情を崩した。僕は何故か一瞬、息苦しさを覚えた。柔らかな笑みを浮かべたまま、マジヨンは言った。

「……それが今、私にできる最善のことだと思いますから」

絞りだすかのような細かい声だった。僕はさらに何も言えなくなってしまう。

そんな僕に対して、マジヨンははにかむようにして笑った。

「この杖、死んだお母さんが私に残してくれたものなんです」

そう言いながら立ち上がって、マジヨンは自分の背筋ほどの杖をしっかりと握りしめた。姿勢を正しくし呼吸を整える。

「いつもお母さんは言っていました」

そう言うと、マジヨンはにっこりと微笑んで母の声音を真似た。

「『いい、マジヨン。たとえどんなに願っても、決して時間は止

まっではくれないの。だからね、今、あなたができることを、やれることをしなさい。自分のために、そして誰かを助けるために力を使いなさい。そうすれば、きつといつか、あなたのことを、本当に大切に想ってくれる人が現れるはずだからね。』……………
「……」

「マジヨン……………」

僕はまじまじとマジヨンを見つめる。

「だから、大丈夫です!」

マジヨンは心底からそう信じて拳を握りしめてつぶやいた。

そんなマジヨンを見て、僕は思わず笑みを浮かべてしまった。苦笑しながら、僕はマジヨンに笑いかける。

「そ、そうだね」

「はい!」

マジヨンはにっこりと嬉しそうに頷いた。

僕はすつきりした表情でマジヨンを見つめた。何か、もやもやしたものが晴れたような清々しい気分だった。

本を大事に両手で抱えながら、僕はマジヨンのことを想っていた。そして、ふららさんやフレイ、ファミリアさんのことを想い巡らせた。

みんなに会えてよかった。

信頼できる仲間がいること。

それがこんなにも嬉しく、安心できるものなのだと、僕は心からそうかみしめていた。

「よう! どうだったんだ!」

そう言っつて、図書館の入り口で僕とマジヨンを出迎えてくれたのは、フレイだった。図書館の前で、早々からいるところから察する

と、すぐに調べるのを諦めて出てきたらしい。

「……いや、何も」

僕は困ったように、肩をすくめながらそう答えた。すると、フレイが待っていました！ とばかりににやっと笑った。

「まあ、そうだろうな！」

「へっ……何が？」

「つまり、手がかりってものは、そう簡単には見つかるわけがないってことだ！」

フレイはフツと愉快そうに笑った。

にやけ顔のフレイを軽く睨んで、僕はふてくされたような顔になる。当たり前のことのような気がするんだけど……。

僕はがくつと悲しげに肩を落とした。

「ダイタ様、大変ですわ！」

図書館から出てくるなり、ファミリアさんは僕に勢いよく抱きついてきた。

「ファ、ファミリアさん、何をやっているんですか！」

それを見て絶句したマジョンが、怒りで肩を震わせている。

だが、ファミリアさんはそれを気にもせず、血相を変えて叫んだ。

「大変なんですわ！」

「ど、どうかしたの？ ファミリアさん」

僕は思わずきよんとする。

そんな僕に対して、ファミリアさんは先程と同じ言葉を連呼した。

「たっ、大変なんですの！」

「だから、何が……っ？」

不機嫌にそう言いかけたフレイの言葉が、不自然な形で途切れた。

「おい……何か聞こえないか？」

「えっ？」

緊張した声でフレイに問いかけられて、僕はじっと耳を澄ましてみる。

行き交う人々のざわめきの向こうから、確かに異質に響くものがある。

だが、それがなんなのかまでは、僕には分からなかった。

「あっちの方から聞こえるぜ」

盗賊ならではの研ぎ澄まされた聴覚で、フレイはその出所をひびくさぐり当てた。

フレイって有名な盗賊団の一員だっただけあって、すごく耳がよいんだよな。

僕はしみじみとそう感じた。

フレイがくいつと親指で指し示した場所は、通りを挟んだ向こう側 街の外にある森の暗がりだった。そこへ僕達が目をやった、その瞬間。

「っ!？」

出し抜けに、まばゆい光が噴きあがった。

「な、なんだあつ!？」

片手で顔をかばいながら、フレイが叫ぶ。その横に立つ僕は、この光が、今まさに解き放たれようとしている魔力であることを見抜いた。

「……これって、ミリテリアの力だよ!」

人差し指で指差してから、僕は自分の言葉に思わず驚愕した。

どうして、ミリテリアの力だって分かったんだろう?

疑念が矢になって僕の胸に刺さった。

だが、すぐにひとつの答えともいえる思考が僕の頭を過ぎった。

もしかしたら、これも、僕が夢月のミリテリアとなったからなのだろうか???

腕を組んで、僕は真剣に考えてみる。だが、もちろん、考えこんでいても何も分かるわけがない。

僕が考えている間にも、あふれ出した白い閃光は、激しく明滅を繰り返しつつ、球状に収束していった。薄紫のコロナを陽炎のように立ち昇らせながら、天に向かって一気に駆け昇っていく。

その残光が、空の彼方へ吸い込まれるようにして呑み込まれた時、ぐにやりと蒼穹がねじれた。

墨汁を水面に垂らしたように、渦巻き模様を描きながら、ゆっくりとその一点が歪んでいく。甲高い耳鳴りのような音を立てて、空間そのものが軋きしんでいく。

それは門だ。こことは違う世界 そう、『始まりの地』から、異界の者を招くために作られたゲート。

僕達が聞いた音は、この予兆だったんだ。そして。

硝子細工が砕け散るような音をたて、空が砕けた。数瞬、世界が薄闇へと転じ、淡い緑の光流が大地にめがけて叩きつけられる。まばゆい波濤はとうのその中から、巨大な影が舞い上がる。

銀の翼を力強く打ち鳴らして、異界の空へと飛翔するその姿は。

「……ワイバーン!？」

そんなマジヨンの言葉をかき消すかのように、竜の眷属けんぞくはその顎あごを大きく開くと、眼下の森にめがけて、灼熱の火球を吐き出した。激しい衝撃が地面を揺るがし、街中で人々の悲鳴が幾重にもこだました。

「一体、全体、どうなつてんだ!？」

炎に包まれていく森を前にして、フレイは呆然とつぶやいた。

突如として召喚された翼竜は、森の空を飛び回りながら、次から次へと火球を吐きまくっている。その方向はひとつとして定まってはおらず、四方八方、滅茶苦茶に爆発を生じさせていた。

「とにかく、あのワイバーンを止めないと!」

僕は必死の形相で叫んだ。拳をぎゅっと握り締める。

誰がどんな目的でワイバーンを呼び出したのかは、僕にはわからない。だけど、このままじゃ、森全体が、いや、もしかしたら、この街にも被害が及ぶかもしれない。

今それを止めることができるのは、おそらく、同じミリテリアである僕しかない! ような気がする。多分。

「行こう!」

「はい！」

僕の言葉に応えるように、マジヨンが力強く頷いてくれた。それに少し遅れて、お手上げ、というポーズをしながら、フレイはわざとらしく溜息をついた。

「おい、おい。ワイバーンとやりあう気が……」

フレイは森の空で旋回しているワイバーンを一瞥した。

しばらく、じつと何事か考えこんだ後、ポンと手を叩く。その口元には、にやりと愉快そうな笑みが浮かんでいた。

そして。

「……俺も行くぜ！」

言うが早いか、フレイはワイバーンに向かって威勢よく剣を抜き放った。

「フレイ……！」

僕が嬉しそうに言うと、フレイは凄みのある薄笑いを浮かべた。

「ワイバーンが相手なら、俺の腕をなるってものだ！」

「はははっ……」

さぞ自信ありげなフレイの言葉に、僕は呆れたように苦笑した。

それから聞こえないような小さな声で、フレイはぼそりと言葉を付け足す。

「……まあ、ふららさんのためにかっこいいところをみせたかったから、という気持ちがないわけではないがな」

フレイは一瞬ほくそ笑んだ。

恐らく、僕に聞こえないように言っているんだろう。自分では。

だが、それは僕の耳にはつきりと聞こえてしまったのだった。

まあ、フレイらしいといえば、フレイらしいけれど。

なおも森の空を旋回しているワイバーンに、フレイはゆるみかけた頬をひきしめて言い放った。

「とつと俺の手で退治してやる！　そして、ふららさんにいいところを」

とつさに言いかけた言葉をすかさず呑み込んで、爆炎の中へと駆

け出していくフレイの背中を、僕だけではなく、マジヨンも呆れたような顔で見つめていた。

「ダイタさん！」

やっとの思いでたどり着いた森の入り口。

その場所で、突然僕は声をかけられた。

振り向くと、そこにはふららさんが立っていた。

「ふららさんもここにきていたんだ」

「はい」

ふららさんは僕らにぺこりとお辞儀した。

「俺は、ふららさんのためならたとえ、火の中、ワイバーンの中でさえ飛び込んでいけるさ！」

フレイは少々暑苦しいぐらい力強く、ふららさんに言った。そして、さっとふららさんの手を握りしめる。

普通、火の海を前にしていうようなセリフじゃないと思うんだけど。

激しい脱力感が僕の気力を奪い去る。

そんな僕に追い討ちをかけるかのように、フレイは言った。

「よし、待っていやがれ！ ワイバーン！」

フレイはにやりと勝利の笑みを浮かべた。

啞然とした僕を尻目に、フレイは一瞬、ねちちとした笑みを浮かべた後、突然、高笑いをし始めた。

「………というか、すでにそこにいるんだけど」

だが、そんな僕の声もフレイの耳には届かなかっただらしく、身体を大きく反らして豪快に笑っていた。

マジヨン達はそれを怪訝そうに見つめている。

だめだ。　こりゃ。

僕は、ふうつと溜息をついて、がくと肩を落とした。もうだめだ。こうなったら、もう、何を言っても駄目なような気がする。いまだに、高笑いをしているフレイを見て、僕はげんなりとするのだった。

「一体、誰が何のためにこんなことをしているんだろうか？」

森の中を走りながら、僕は不思議そうに首を傾げた。

「きつと、悪い人ですわ！」

ファミリアさんがきつぱりと言う。

「そうとも限らないんじゃない？」

「絶対に悪い人ですわ！」

拳を突き上げ頭から湯気を立ち上らせているファミリアさんの勢いに押され、気がつくとい僕はこう答えていた。

「そ、そうだね」

「そうですわ！」

「う、うん！」

僕の無理やりな力強い返事に満足げに頷いて、ファミリアさんは話題を戻した。

「早く、その人を止めなくてはいけませんわ！」

「うん、そうだね！」

僕はファミリアさんの言葉に、力強くこくと頷いてみせた。

そして視線を森の奥へと向ける。

吹きつけてきた熱風が僕の意識を否応なしに現実に引き戻している。

行く手に見えた森の大半は真っ赤な炎に包まれていた。その幾つかはすでに手の施しようのないまでに激しく燃えさかっている。木の爆ぜるぱちぱちという音と共に、無数の火の粉がとびかって、視界をオレンジ色に染めあげていく。

「で、どうするんだ？　ダイタ」

フレイがすつとぼけた言葉を口にした。
どうするっていわれても……ね。

「えっと、まずは、召喚した人を探して止めないと」

「まあ、それは、おまえの役目だな」

僕のセリフを遮って、当たり前のことのようにフレイは言った。

「えっ、えええっ　　！！！」

あっさりと言ったフレイの言葉に、僕は度肝を抜かれた。いくらなんでも、僕一人じゃ無理に決まっている。相手はただの魔道士とかではないのだ。ミリテリアだ。

僕一人の力では到底、勝ち目がない。

例え、僕もその人と同じミリテリアとしても……！！

ところが、フレイは何故驚かれたのかわからないといった顔で言う。

「同じミリテリア同士だろうが！」

「そ、そういわれても……」

困ったように、僕は肩をすくめる。

フレイは腰に手をあて、ふんぞり返り、ふんっ、と鼻息を漏らした。

「ワイバーンの方は俺達に任せろ！」

それを聞いて、僕はホッと胸を撫で下ろした。

別に見ているだけ、とかではないらしい。

「あの、ダイタさん……」

そんな僕達の会話が終えたのを確認したあと、おずおずとふららさんが口を開いた。

「えっ、なに？」

「私もその人に会いに行きます」

「そ、そうなんだ　　って、えっ　　！？　　そ、それって、いつ、一緒に行くってこと？」

不覚にも緊張し、どうにか必死に返事を返した僕は、しどろもどろですべてを言い切ってから、ようやく彼女の台詞の不可思議な部

分に気がついた。

「はい、どうしても気になるんです」

僕はぼかんと口を開いた。

き、気になることってなんだろうか。

どうしてもそのことが気になった僕は、直接ふららさんに質問をぶつけてみた。

「気になること？」

「この力は、もしかしたら、『星の力』なのかもしれません。星の女神様のミリテリアの方が引き起こしたことなのかもしれません」

爆風に長い水色の髪をなびかせながら、ふららさんは深く大きな溜息をついた。

羽翼人は、主に星の女神様から力を借りて魔法が使える。言ってみれば、彼らにとつて、星の女神様は最も信頼するべき存在だ。

だからこそ、そんな星の女神様の　星のミリテリアが今回のことを引き起こしたのかもしれないというのは、彼女にとつて、とても信じられないことなのだろう。

「ふららさんが行くのなら、俺も行くか！」

いきなり、意見を180度変えた彼を見て、僕だけではなく、マジヨンも目を丸くする。

確か、フレイはワイバーンを押さえてくれるんじゃないかってっけ。

………(汗)

「フレイは、ワイバーンの方を押さえてくれるんじゃない」

なかったの、僕はそう言いたかった。

有無を言わせないフレイのきつい眼差しさえなければ　(涙)

「あ、ありがとうございます」

照れくさそうに頬を少し染めながら、ふららさんは、輝くような笑みをこぼした。

「わたくしもいきますわ！」

「えっ？ ファミリアさんも？」

意表つかれた僕が聞き返すと、ファミリアさんは両手を胸の前に合

わけて祈るように答えた。

「当然ですわ？」

「……ま、また、応援だけではないですよね」

聞きたくない答えが返ってくるのを予期しているかのように、マジヨンは恐る恐る訊く。

「いえ、もちろん、応援だけですわ？」

「やっぱり、ファミリアさんは戦わないのですか？」

ふららさんがきよとんと首を傾げる。

「だって、わたくしには、戦う手段がありませんもの」

「だ、だから、見ているだけなのでしょうか……」

肩を震わせながら、マジヨンは言う。どこか怒りがこもった口調である。

「見ているだけではありませんわ。応援していますっていいましたの」

「そ、それが見ているだけっていうんです！」

二人は一瞬、にらみ合って動きを止めた。

そして、肩をいからせた瞬間、二人の口が同時に動いた。

「いい加減にして下さい！」

「あなたには関係ないことですわ！」

「関係ありません！」

「関係ありませんわ！」

な、何なのかな……。

僕は呆然と二人の言い争いを見ながらそう思った。

「ちっ、なぜ、貴様なんかこんなにももてるんだ！」

不機嫌そうにフレイは顔をしかめた。

「へっ？」

「マジヨンさんとファミリアさん、すごく楽しそうですね。私も

お仲間にいれてもらいたいです？」

いまだに状況が理解できていない僕を尻目にふららさんは羨ましそうに穏やかな笑みを漏らした。

「どこにいるんだろう？」

僕はそうつぶやきながら、周囲に視線を巡らせた。この騒ぎを引き起こした張本人であるミリテリアを見つけなくてはならない。

しかし、どこにもそれらしき姿は見あたらなかった。

「まさか、呼ぶだけ呼んで逃げやがったのか……」

フレイがムツとしたまま眉を寄せる。

僕はそれを聞いて、神妙な顔で考え込んだ。

その可能性がないとはいえない。いや、むしろそう考えた方が、これだけ好き勝手にワイバーンが暴れ回っていることの説明がつかずもする。

と、というか、それって一番、最悪なパターンなんじゃないだろうか！

止められる者がいない。つまり、あと残るただひとつの方法は、ワイバーンとやりあう以外にない。

だけでも、到底、勝ち目がなさそうな相手だ。

僕は、空を旋回するワイバーンに目を向けた。

瞳に入ってきた衝撃度満開な大きな翼に、僕は全身を震わせた。あまりにも驚いたせいで、思わず「無理だよ！」と僕は口走った。

「どうするんだ、ダイタ！」

大粒の汗をひたすらかきまくっている僕を、執拗にフレイが急かす。

「どうするって言われても……」

そこで僕はハツとした。

猛々しい咆哮をあげながら、紅蓮の空を舞うワイバーン。その姿をじっと見つめていた僕は、翼竜が一定の場所を中心にして、旋回を続けていることに気づいた。

そして不規則に吹き出されるように見えていた火球もまた、あくまでその中心から外に向けてしか、放たれていないということ。

「あそこだよ！ あそこにきつと、星のミリテリアの人がいるはずだよ！」

そう確信して、僕はその場所に向かった。僕の後を追うようにしてマジヨン達も進んでいく。

苦もなく僕に追いつき並ぶと、フレイは愛用の剣をぎゅっと握りしめた。

そして、僕の持っている剣を一瞥してから、おもむらに問いかける。

「で、どうやってそいつを止めるんだ？」

「そのことなただけだ」

苦笑して、僕は自分の考えを説明した。

「話し合ってみるよ！ もし、それでだめだったら、夢月の力である大魔法『レバエレーションズ』を使ってワイバーンを止めてみようと思うんだ」

口にしながら、僕は我ながらいい考えだと目を輝かせた。

「向こうもミリテリアだから、大魔法とか使えたりすると思うけれど、先手を取れたら、少しは有利になるかな、と思うしね」

「安易だな」

フレイが呆れたようにつぶやいた。腰に手をやって溜息を付く。

「まあ、とはいえ、それしか方法はないな」

フレイはニツと笑ってみせた。

「星のミリテリアさんを止めましょう」

ふららはさんにはこりと微笑んだ。穏やかな笑みを浮かべている。

ほんわかした雰囲気の中、ファミリアさんが僕の肩を叩いた。

「ダイタ様、応援していますわ？」

ファミリアさんは期待に目を輝かせながら言った。

「あつ、うん」

僕はどう答えていいのかわからず、ひたすらあらぬ方向を向いた。顔を赤らめたままで。

「ファミリアさんは応援だけでしょう！」

不服そうにマジヨンが言う。

「えっと……」

そんな二人を見て、僕はしゅんと肩を落とし、情けない声でつぶやいた。

せつかく、一生懸命に考えたことだったんだけど……な。深い失望感が打ちのめされ、僕は継ぐ言葉すら見つけれないまま、その場に立ち尽くすしかなかった。

焼け崩れる森の奥に小さな広場のようなものがあつた。周囲の惨状にもかかわらず、やはりそこにはまったく火の気がなかった。

そして、その広場の中央には。

「えっ？」

僕は目をぱちくりさせる。

地面にぺたんかと尻餅をついた格好で、青年が天を仰いでいた。放心状態といつてもいいのかもしれない。

「こ、こんなことになるなんて」

青年はぼそりとつぶやいた。

ぱつと見て、彼の歳は二十歳前後といったところだろうか。レモンを入れた紅茶の色をした髪が、爆風とともに、ふわふわと肩口で揺れている。

広場にいるのは彼だけで、他には誰も人影はない。意気消沈している彼を前に、僕は いや、僕達は思わず、呆然としてしまった。

「あつ」

不意にふららさんがつぶやいた。瞳をうるませて口を押さえる。

「どうかしたの、ふららさん？」

「マドロスさん……」

ふららさんの宝石のような瞳が、青年の顔をそつと覗き込んだ。彼女の瞳に、ゆっくりと驚きと理解の色が広がっていく。

「マドロスさん……?」

ふららはさんはずばやいた。

彼の透きとおったグリーンの瞳が、ゆっくりとふららのさんの姿をとらえた。

「ふらら………?」

「マドロスさん!」

ふららはさんは草を蹴ってマドロスさんに駆け寄った。慌てて意識を集中してふららさんを受け止めるマドロスさん。

ふららのさんの瞳から一粒の涙が零れ落ちた。

「マドロスさん、会いたかったです!」

と、もう一度、ふららはさんは叫んだ。

彼女の顔が理解と懐かしさと喜びで輝いた。

「もう、どこにもいかないで! 置いていかないで下さい!」

「ふらら………」

涙をうつすら浮かべるふららさんに、マドロスさんは胸を突かれたように言った。

「ああ………。もう、どこにも行かない。これからは

ずっと一緒だよ」

マドロスさんが抱きしめると、ふららはさんはしゃくりあげた。

「ずっと………。ずっとですよ」

何度も確認するように繰り返すふららのさんの頭を、マドロスさんは優しくなでる。

「待たせてしまってごめんな」

マドロスさんはふららさんを抱きしめながら、そう小さくささやいた。

余談だが、この様子を僕は鬼気迫る思いで見つめていた。

何故なら、隣にいるフレイがそろ恐ろしいほどの目つきで僕を睨み付けていたからだ。静かな重圧感が僕に重く圧しかかる。

しかも、その後、顔を怒りで真っ赤に染めたフレイがばっちばっちんと背中を叩いてきたので、僕の首がぐらぐらと揺れる。どうやら

僕をノックアウト寸前まで追い込むくらいの勢いで叩いているらしい。

どう見てもただの八つ当たりとしか思えないこのフレイの行動は、僕達がラミア王国に戻るまでずっと続いたのだった。

ああ・・・・・・・・・・（大泣）

第10章 星の構想曲

夢と現実が反語なら、私は夢の世界の夢の存在。

つまり、私はこの世界には実在しない。『あなた』にとって、私は夢。

けれど、実在する『あなた』は実在しない夢の存在を知っているし、存在しない私の言葉は、こうして実在する『あなた』に届く。けれど『あなた』の言葉が私に届くことはない。

あなたは本当に、そこに存在しているの？

夢が覚めれば霧散して、思い出を残さないのが、現実ならざる夢の定め。けれど『あなた』が夢を見なくても、『あなた』が忘れてしまっても私はここに存在しているの。

『あなた』は現実の中でいつまで私のことを覚えていられますか？
ねえ、私が現実で、『あなた』が私の夢であつたら、どうか？
『あなた』は夢の中で、私のことを覚えていてくれますか？

でも『あなた』は実在し、私は夢の住人。私のことなど、時が来たら、いずれ忘れてしまう。

だから『あなた』が少しでも覚えていられるように、私の名前を伝えます。

私の名前は……。

……うん、今はやっぱり言えない。

いつか、私の現実^{ゆめ}がかない『あなた』が私の夢となつたら、『あなた』は私の夢を訪れ、また、私のことを愛してくれますか？

「うん、おはよう」

僕は寝ぼけた声で挨拶をしながら、宿屋の階段を下りてゆく。

「おはようございます。ダイタさん」

「うん、おはよう。マジョン」

大きなあくびをしながら、僕は宿屋の一階にある椅子に座った。

あれから、マドロスさんは、どっと疲れていたらしく、宿屋に着いた途端、ベットに眠り込んでしまった。

ふららは心配そうな顔つきで、眠り続けている彼の顔を見つめている。

どうして、マドロスさんはすぐに、ふららさんに会いにいつてあげなかったのだろう。

僕の心に、疑問が突き刺さった。

あの時、マドロスさん達は大海原の深海にあるとされている『海の真珠』を手に入れるため、旅立つことになった。でも、「すぐ帰ってくる」・・・そう言ったのにも関わらず、彼らが戻ってくることはなかった。そう彼らが旅立ってから、もう既に三年もの月日が流れていた。

どうしてなんだろう？

どうして、そんなにも長い間、戻ってこられなかったのだろうか。それに。

僕は昨日のことを、初めてマドロスさんと出会った場面を、頭の片隅に思い浮かべていた。

突然、森の上空に現れた翼竜^{ワイバーン}。何故か、森の広場の星のミリテリアがいると思われた場所にいたマドロスさん。

そして、彼を見つけた途端、まるで煙のように消えてしまったワイバーン。

いや、それ自体は別に不思議ではない。もともとあの翼竜はミリテリアによって呼び出されてきたのだ。ミリテリアが帰還を命じれば、きつと、この世界から即座に消えてしまふに違いない。

だとすれば。

僕は天井を仰ぐようにして見上げた。

だとすれば、マドロスさんが『星のミリテリア』ってことになる。

まだ、はつきりとはわからないけれど……。

僕は掛け値なしに真剣な顔で、考えた。

でも、もしそうなら、何のために、あんなことをしたんだろうか。いや、もしかしたらそうではないのかもしれない。

考えられることがひとつだけあった。

「暴発……かな」

深刻な表情で僕はつぶやいた。

恐らくワイバンの召喚は、星のミリテリアの者でしか使う事ができない、大魔法なのだろう。けどなまじ巨大すぎるワイバンの力を制御することは、いくらミリテリアとして選ばれた者でも困難なんだろう。

ま、まあ……、僕も、また、あの大魔法『レバエレーションズ』をちゃんと使えるかはちょっと、いや、かなり自信がないんだけどね……(汗)

そして、暴発によって呼び出されたワイバーンは、ミリテリアの制御を受けつけない。その衝動の赴くままに暴走する、じつに危険な状態になってしまうだろう。

「きつと、マドロスさんはその力をコントロールできていないんだろうな」

「えっ？ 何がですか？」

マジヨンの言葉で、僕は回想から現実へと意識を戻した。

僕は戸惑いながら、慌てて首を振った。

「あつ、いや……、き、昨日のことを思い出していただけだよ」

僕は恥ずかしそうに寝癖のついた髪の毛を寝かせながら答えた。

「昨日は大変でしたね」

「うん、そつだね」

僕はあははと力なく笑って付け加えた。

「えと、ふららさんは？」

「まだ、二階でマドロスさんを看ていると思います」

テーブルに皿を運びながら、悲しげな顔でマジヨンは答えた。

「そ、そつなんだ」

僕はやるせない顔でうつむく。

そして、マジヨンが運んでくれた焼きたてのパンをちぎって口に入れた。

「とにかく、僕達もマドロスさんのところに行ってみようか」

重苦しい雰囲気を振り払うかのように、僕はそう提案した。

「まだ、目覚めてはいないのかもしれないけれど、ここでじっとしているよりはずっと、マシだと思うんだ」

「そつですね」

あくまで真剣にマジヨンはうなずいた。

僕とマジヨンは顔を見合わせ、お互い、こくと頷いてみせる。

「じゃあ、行こうよ！」

僕はベーコンを加えたまま、勢いよく立ち上がった。

それを見たマジヨンが溜息をつき、困ったように首を振る。

「それは、朝食を食べ終えてからの方がいいと思うのですが……

……

「あつ……!」

マジヨンの指摘に、僕は顔を真っ赤にして椅子に座り直すのだった。

食事が終わってから、僕達は二階のマドロスさんがいる部屋に向かった。

ドアの前には、明らかに機嫌の悪そうな顔をしているフレイが行く手を阻むかのごとく、立ち尽くしていた。

「あれ、フレイ？ どうしたの？」

僕は怪訝そうに首を傾げた。

しかし、フレイの表情はあくまで硬い。しかも、ひたすら挑戦的にマドロスさんの部屋を睨みつけている。

まだ、機嫌が悪いみたい……だ。

僕は引きつった笑みで、ははは、とつぶやいた。

「マドロスさん、もう目覚めたのかな？」

ドアの前で僕は不安そうにつぶやいた。

「……さあな」

「う……うん」

あくまでフレイの返事は素っ気ない。僕はガクツと肩を落とした。ドアの前でしばらく考え込んでいた僕は、意を決してかのようにドアをノックした。

「あつ、はい」

なかから返事が聞こえる。

ドアを開けて中に入った僕達はおずおずとお伺いを立てた。

「あつ、えっと……、マドロスさんの様子はどうか、と思つて……」

「まだ、目覚めないみたいです」

悲しげにそつつぶやき、ふららさんは僕に視線を向けた。辛そうにぎゅつと唇を噛みしめながら。

僕はそれを見て、たちまち何も言えなくなってしまふ。ぐっと喉を詰まらせ、両拳を握りしめる。

気まずい沈黙だけが部屋の中をじんわりと覆っていく。

その時、男の人の声が出た。

「う……うん……」

ふららさんは驚いて振り返った。いつのまにか、マドロスさんの瞳が開いていた。

透きとおったグリーン色の瞳がゆっくりとふららさんの姿をとらえる。

「ふらら……?」

ふららは口を押さえた。あふれるばかりの涙がボロボロとこぼれ落ちた。

「マドロスさん!!」

ふらはらは頬を桜色に染め、輝くような笑顔を見せた。マドロスさんもそれに応えるかのように、うつすらと微笑み返した。

ドアの前でその光景を見守りながら、僕は二人にとびっきりの笑顔に向けていた。

やがてもうすぐ日が沈むという頃、「ねえ、マドロスさん」とふららが静かに呼びかけた。ふららの口調には前よりもずつと親しみが込められていた。その口調には、三年という時間の壁を完全に超えてしまったことが、はっきりと示されていた。

ふらが言った。

「どうして、あの場所にいたんですか？」

「そ、それは……」

痛いところを突かれて、マドロスさんはぐつと言葉を詰まらせた。そこにすかさず、誰かががしつと、マドロスさんの胸ぐらをつかんだ。

それは、怒りで顔を赤く染めたフレイだった。

息がかかるほど顔を近づけると、フレイはマドロスさんに対してわめき散らす。

「さては、あの惨状は、貴様の仕業だな！ そうだろう!!」

フレイはマドロスさんの胸ぐらを乱暴に揺さぶり、糾弾した。マドロスさんはただ呆然とされるがままになっていた。

「いいか！ ふらはらはずっと真紅の森で待っていたんだぞ！」

それなのに貴様は……」

「やめて下さい！」

揺さぶり続けるフレイを、ふらがさんが制した。

それでもまだ不満げに、フレイは唇を尖がらせる。

「だけど よー！」

「……………お願いします」

語気を上げてそう言ったフレイに、ふららは悲しみに満ちた表情でつぶやいた。

フレイはふららさんを見つめる。

ふららは真っ直ぐ、ひるまない視線でフレイを見つめていた。どこか、全てを見透かしてしまうような優しく、そして強い瞳だった。

フレイはぎりっと唇を噛み締めると、たちまち何も言えなくなってしまう。

ふららはマドロスさんの方を振り向くと、しゃきつと背筋を伸ばした。

「マドロスさん、答えてくれませんか？」

「ふらら……………」

ふららは両手を前に組んで、にこつと微笑んだ。

「私、ずっと、想っていたんです。考えていたんです。マドロスさんのことを」

マドロスさんは何も言わず、ふららさんを見つめていた。

「でも」とふららは続けた。瞳がどこか、力なく沈んだ。

「私はマドロスさんのこと、何も分かっていなかったんですね……………」

私は、あの時、マドロスさんを止めることも、守ることもできませんでした。もし私にもう少し力があつたなら、勇気があつたのなら、あの時、無理にでもついていけばよかったのに」

悲痛な叫びだった。

僕はぐつと胸を詰まらせる。

「そんなことないさ」

と、マドロスさんは微笑みを浮かべながら、小さく首を横に振った。マドロスさんの微笑みはどこことなく寂しげだった。

「すべては、君に真実を話せなかった僕の責任だ。君は悪くない」
マドロスさんは困った顔を浮かべ、ちらりと視線を外した。

マドロスさんの声のトーンにはどこことなく重苦しい陰鬱いんうつなものが漂

っていた。その微妙なニュアンスに僕は小首を傾げた。

ちなみに、この時、フレイが「当たり前だ！」と吐き捨てたが、その辺は置いておく。

「話そうか」

遠い目をしながら、マドロスさんは言った。

「えっ？」

「あの時のこと……」

ふららさんは言葉に詰まり、言葉を探した。

幸い、それはすぐに見つかったらしい。

ひとつづなずいて、ふららさんは言った。

「はい……」

瞳を潤ませながら、ふららさんは柔らかな笑みを浮かべた。

重い沈黙を破るかのように、マドロスさんはそれを語り始めた。

あの時、マドロスさん達が大海原の深海に赴いたのは、『海の真珠』を手にいれるためだった。『海の真珠』は、昔から幸せの呼ぶ幸運の宝石として人々から親しまれていた。

この宝石を手に入れた者は、どんな願い事でも叶うという伝説があつたんだ。

話がそこに指しあたったところで、僕は一瞬、ぼかんと口を開けてしまった。

何だか、それって『星のかけら』のようなものみたいだったからだ。

まあ、星のかけらは、6つ、そろえないと願いは叶わなかったりするんだけど……。

確かに、彼らはその航海は危険が及ぶものだとして理解していた。だからこそ、ふららさんの同行の申し入れを断つたのだらう。

それに、と大海原の深海へ向かう船の中でマドロスさんは自分に言い聞かせていた。これまでだって、同じように自分達では不可能

だといわれる仕事に挑んで、そして自分達は生き延びてきたじゃないか。その経験が、今の自分をつくったのだ。今回だって大丈夫だと。

しかし、大丈夫ではなかったんだ。大海原の深海付近に到着するなり、『海の真珠』を求めて乗り出そうとしたマドロスさん達だったが、すぐに自分達の失敗を思い知らされることになる。

モンスターや魔物がいるかもしれないということは、到底、彼らの頭の中にも入っていた。だが、そこにいたのは彼らの想像以上の数の魔物だったのだ。それに周りは海に囲まれており、しかも船の周り三六〇度を、今まで見たこともない謎の魔物達を取り囲んでいた。移動するにもうまくバランスが取ることができず、思いのほかスタミナを消耗してしまう。

数的にも劣り、地の利も持たないマドロスさん達には、初めから全く、勝機はなかったのだ。

もし、この場に僕がいたとしたら、ここですでに諦めていると思う………（冷汗）

でも、それでも、マドロスさん達は魔物を踏み潰し、なぎ払い、数時間に渡って奮戦した。疲労で腕が鉛のように重くなり、剣を振るうことができなくなると、剣を投げ捨て拳で魔物どもを叩き潰した。マドロスさん達は奮闘し、五十匹以上もの魔物の息の根を止めることに成功した。

うむむ。すごいことだと思う。

でも、そこまでが彼らの限界だったんだ。

ひとりやられ、ふたりやられ、後退につぐ後退の末に、背後には海しかないという場所にまで追い詰められた時、さすがにこれはもうだめだな、とマドロスさんは天を仰いだ。前方にひしめく魔物達の多くは、いまだ無傷で元気なからだをさらしている。それに対して、自分はどうかだろう？ マドロスさんにはもう剣はなく、わずか

に姿勢を変えるだけでも億劫おっくうなほどに、疲れ果ててしまっていた。全身に浴びた傷だつてそう浅いものばかりではない。大地に流れ落ちる赤い血が、もうだめです！ と大声でマドロスさんに知らせている。

戦うための体力も気力も、とつくの昔にすつからかんになっていた。しかも、仲間の船員達も皆、すでに魔物達にやられていた。今、この場に立っている人間ひとは、自分だけなのだ。

マドロスさんは覚悟を決めて考え込んだ。さてどうしよう。このまま魔物達に玉砕覚悟で突っ込むか。背後の海へと飛び込むか。どちらにせよ、生き延びる可能性はゼロよりもずっと低いだろうけど。

「くっ………!!」

決断すべき時がきた。とマドロスさんは思った。

その時、マドロスさんの脳裏にふららさんの笑顔が過ぎつた。

『ねえ、マドロスさん。想いには目に見えない力があるんですよ』
そうだね、ふらら。そのとおりだよ。

想いには力がある。

願えばそれはきつとかなう。

君と僕は例え、離れていても、遠くにいたとしても、ずっと、ずっと、想い続けていれば、きつと会える。

だから、とマドロスさんは思う。僕の声は例え届かなくても、想いは届いているのかもしれない。再び、彼女と導き合わせてくれるに違いない。

「神様」

とマドロスさんは呼びかけた。

誰でもいい。夢月の女神様でも、星の女神様でも、時音の女神様でも、魔王でもいい。天の魔王でも、地の魔王でも誰でも構わない。お願いだ。僕をまた、ふららに会わせてくれ。約束したんだ。必ず、帰ってくるって。だから、頼む。

誰でもいい。

誰か、僕の声に応えてくれ！！

もちろん、誰もマドロスさんの声に応えてはくれなかった。

でも。

突然、「それ」は、マドロスさんにもたらされたんだ。

初め、マドロスさんは、「それ」がやってきたことにまるで気がつかなかった。先に気づいたのは魔物の方だった。最初に、「ぐがああ、ぐがああ」と不気味な声でうめいて、魔物の一匹が後ずさりをした。その魔物の声に不審げに視線を動かした別の魔物が、すぐに恐怖に顔をゆがめた。

マドロスさんは魔物が何に恐怖したのか理解できず、魔物の視線を追った。

魔物はマドロスさんがいる丁度、上空を凝視していた。マドロスさんは空を見上げた。

そして、マドロスさんも「それ」を見ることになる。

マドロスさんの上空でワイバーンが旋回していたんだ。

呆然とするマドロスさんの頭の中に、美しい少女の声が聴こえてきた。それはマドロスさんにとって、聞き覚えのある愛しい人の声だった。

(あなたに、ミリテリアの力を。 星のご加護を)

ふららさんの声だった。

「その力のおかげで僕は助かったんだ」

語り終えたマドロスさんはベットにもたれかかって一息ついた。

僕はもちろん、マジヨンも、フレイも、そして、後からこの部屋にやってきたファミリアさんも、信じられないといった顔でその話にじっと耳を傾けていた。皆、ずっと床を見つめ続けている。

なんとなく体全体が寒いのは、窓が開いているせいだけではないだろう。

「ふっ、ふざけたこと、言いやがって！」

噛み付くような勢いでフレイが吐き捨てた。だが、フレイも明らかに動揺の色を隠せないでいる。

その後ろで、ふららは小さくがたがたと体を震わせていた。

「そんな、そんなことって……」

ふららは、まるで打ちのめされたかのようにつぶやく。

僕は一瞬、マドロスさんと再会した時のふららさんのことを思い出し、胸を痛めた。

これは何かの間違いだ。そう思ってしまいたくなるほど、ふららさんにとって、それは非情な事実だった。

自分が『星の女神』の生まれ変わりだと知らされたのだ。とても平常心でいられるわけがない。

もし僕が同じ立場なら、絶対に反感しか持てないと思う。うんうん。

「気がついた時には、ラミアリア王国のあの森にある広場で何故か倒れていた。そしてその時には、すでに三年もの月日が流れていたんだ」

「三年……」

僕の言葉に、マドロスさんはうつむいたまま、こくと小さくうなずいた。

顔をしかめてマドロスさんは続ける。

「あの後、あのワイバーンが再び、上空に現れたんだ。それから、君達が知っているとおりでよ」

こんなことになるなんて、という前に聞いたマドロスさんのつぶやきが、この時になって初めて僕は理解できた。

やっぱり、ワイバーンをコントロールできていなかったんだ。なにしろ、自分自身で呼び出そうとしたわけではなかったのだから。

だから、あの時、マドロスさんは独り言のようにそうつぶやいたんだ。

実際、僕が、ミリテリアのみが使える『大魔法』のことを教えるとマドロスさんはすごく驚いた顔をしていた。予想外の攻撃を受けた

戦士によく似たうるたえ方だった。

「そう、だったんだ」

納得したかのような声で、マドロスさんはうなずいた。それから、何やら考え込むかのように口元を押さえた。

マジヨンは深々と溜息をつくとき、窓越しから空を見上げた。

「想い………なんですね」

マジヨン？ と僕は口に出さずにつぶやいた。どうかしたんだろ
うか？ マジヨンの言葉は、まるで自分に言い聞かせているみたい
に聞こえた。どこか、そういった微妙なニュアンスがあるように感
じられた。

まあ、僕には、は、はつきりとはわからなかったんだけど……

……(汗)

「ふらら」

マドロスさんはふららさんを自分に向き直らせて、押し殺したよ
うな声で言った。

「決して君を悲しませるつもりはなかったんだ。もし、このこと
を知ってしまったら、君は悲しんでしまう。君を苦しませてしまう。

その事は分かっていたんだ。 だけど、それでも僕は、君に
このことを知っていてほしかったんだ。 君の力で僕は助かった。

そのことを。 僕を恨んでくれてもいい！ だけど、これだ
けは分かっていたほしい！！」

ふららさんはマドロスさんの話を真剣な眼差しで聞いていた。

マドロスさんは最後にこう言って、自分の話を締めくくった。

「僕は君を守りたい。 ミリテリアとしてではなくて………
今更かもしれない。 呆れてしまいかもしれない。 だけど」

マドロスさんは、にこりと柔らかな笑みを浮かべてみせた。それか
ら優しくふららさんを抱きしめる。

肺に息を吸い込んだ。 ためらいも恐れも感じてしまう前に、マド
ロスさんは声と一緒にそれを吐き出した。

「ふらら、君が好きなんだ！ 君を愛しているんだ！！………

・本当に今更だよな。でも」

「そ、そんなことないです！」

ふららさんは首を大きく振った。それから、急に立ち上がり、両手を伸ばして、その手でマドロスさんの顔を優しく挟み込んだ。

「ふらら？」

手のひらを通して、朝の光のようなぬくもりが頬に伝わってくる。どきまぎして、マドロスさんは舌が上手くまわらない。

ふららさんは、決してその事に迷惑な顔をしたりはしなかった。

彼女はにこつと自然な様子で微笑んで、マドロスさんに言った。

「私もマドロスさんのことが好きです」

ふららさんはつやつやした頬を染めて、はにかむように笑った。

両手を前に組んでいる。

「あつ、うん」

頭をかきながら、マドロスさんはあらぬ方向を向いた。耳先まで火照らせたままで。

「これからもずっとそばにいてくださいね、マドロスさん」

「ああ、約束するよ」

マドロスさんの力強い返事に、ふららさんは小さなその手を口に当て、輝くような笑みをこぼしていた。

僕はほつと安堵した。やはり、ふららさんには笑顔がよく似合うと思った。

彼女の天使のような笑顔に、ぼくは胸をどきまぎさせながら指をかませていた。

というか、本当はふららさんは天使ではなくて、本物の星の女神様だったりするんだけどね。

あの子の夜のこゝろ。

宿屋のテラスで物思いにふけるふららさんの姿があった。そよそよと心地よい夜風がテラスの側を吹き抜けてゆく。

そこに、僕はひよっこりと姿を現した。先程、鍛冶屋で鍛え直してもらった剣を、重そうに抱え直す。

「ふららさん、どうかしたの？」

「昔のことを思い出していたんです。マドロスさんと初めて出会った時も、こんな月の日でしたから……」

ふららさんは優しい目で、夜空を見上げるとつぶやく。黄金色のような鈍い金色に染まった月が、薄い雲にかすんでいた。

「そ、そうなんだ……」

僕はグツと唇を噛みしめる。

寂しそうに剣をぎゅっと握りしめると、僕はぼろぼろと涙をこぼし始めてしまった。

だけでも、僕は涙を拭うことはせず、ただ流れるに任せていた。

「ダイタさん、どうかされたんですか？」

突然泣き出してしまった僕に、ふららさんは戸惑いの表情をみせた。

慌てて、僕は涙を拭く。

「いや、たいしたことじゃ……ないから……」

「ダイタさん……」

無理に笑みを浮かべた僕を見て、ふららさんの表情が曇った。

「そう……ですか……」

ふららさんはひとつづつなずくと、僕の隣に立った。そしてそのまま黙って、僕の顔を見つめていた。

僕も特に言うべきことが見つからなかったので、そのままずっと黙っていた。

「何か、悩みでもあるんですか？」

だいぶ間があつてから、ふららさんが言った。

「ど、どうして、そう思うの？」

「そんなの、わかります」

突如、慌てふためいた僕を見て、ふららはくすりと笑みをこぼした。

「普通、こんな時間に、ひとりでぼっ　としている人はいません。

それに、仲間ですから……」

「そ、そうだね」

少し照れくさそうに頭をかきながら、僕は言った。

ときどき、ふららの声が、僕の心に神の言葉のように響くときがある。

まあ、本当に女神様だったりするんだけど……ね……

この晩もそうだった。『思います』『信じています』。それらの台詞にはなんの根拠もなく、何かの保証には決してなりえないことを知りながら、ふららが口にする、まるでそれはすでに約束された未来の出来事のように感じられた。

意を決したかのように、僕はふららさんを見つめた。胸の動揺を抑えるために、大きく深呼吸をする。

「あの、ふららさん……」

「はい……?」

「その、えと……」

などと、下準備をしていたのにも関わらず、やっぱり、僕は口もってしまった。

何故なら、先程涙を流してしまった理由は、まさにそこにあったからだったりする。

「ダイタさん……」

ふららはさんは噛みしめるかのようにつぶやき、うつむき、しかしすぐに顔を上げた。

そして太陽いっぱい浴びたひまわりのような笑顔を僕に向けた。

「あの……話してくださいませんか?」

心の底では、まだ聞くことを恐れている僕がいたのかもしれない。でも自分でも驚くほど素直に、僕は促されるままふららさんに悩みを打ち明けていた。

「ふららさんはやっぱりここに残るんだよね……………」
「えっ?」

ふららさんは、不思議そうな目で僕を見つめていた。
ゆっくりと慎重に一語一語、確かめながら、僕は言葉を続けた。

「その、マドロスさんが見つかったし、ふららさんの旅をする理由もなくなってしまったわけだし……………」
「そんなことないです」

僕の言葉をさえぎって、ふららさんは凜とした声で言った。そしてこつと僕に笑みを向ける。

「えっ?」

僕は呆然としたまま、そうつぶやいた。
何を言われたのかわからなかった。

そんな感じだったからだ。

「これからも一緒にいます。ダイタさん達と」

驚いて、僕は隣に立つふららさんを見た。

一瞬、自分の息が止まっているのではないのかと僕は錯覚した。
ただ息は止まらない。

っていうか、止まってしまったら、めちゃくちゃ大変なことなんだけど……………(冷汗)

「でも……………」

僕はその言葉を口にするべきか迷った。しかし、こらえきれなくなつて、僕は訊いた。

「でも、せつかくマドロスさんと出会えたのに」

「えっ?」

「このまま、僕達と一緒に来たら、また別れ離れになってしまうんじゃない」

そうなのだ。

マドロスさんは、今回の出来事に責任を感じて、あの森『リモノの森』をまた再び、緑溢れるばかりの森にしようと、この街に残ることにしたのだ。

「そうじゃないですよ」

笑顔のまま、ふららは言った。

そして、遠い目をして「だって」と続けた。

「今回は悲しい別れではないのですから。マドロスさんは今回のことが終わったら、真紅の森で私のことを待っていてくれる、って言うてくれました。それにあの時」

ふらはさんはまた、にっこりと笑った。

「君と僕は例え、離れていても、遠くにいたとしても、ずっと、ずっと、想い続けていれば、きっと会える」って、マドロスさんは言っていました。私もそう思うんです。信じていれば、絶対に会えるって」

「ふららさん……」

僕の顔には穏やかな笑みが戻っていた。

そうか、そうだよね。

『想いの強さはカタチになります。きっと……』
マジヨンもそう言っていたっけ。

僕はあの時のマジヨンの顔を思い出す。

ふららさんがマドロスさんと出会えたように、僕もまた、リーディングさんと出会えるの時が来るのかもしれない。

そう思った後、僕は首を大きく振った。

……ううん、きっと、必ず会えるよ！

満足げにひとつうなずいて、僕は言った。

「これからもよろしくね。ふららさん」

僕は笑顔で手を差し出す。

ふららさんも柔らかな笑みを浮かべて、手を差し出した。

「はい！」

僕達はお互いの顔を見合わせて、しっかりと手を握りあった。

「おい、ダイタ……」

声がして視線を動かすと、そこにはフレイが立っていた。まるで僕

達のことを見据えるようにして睨み付けている。

「貴様、いつまで、ふららさんの手を握りしめていやがるんだ！」

「あっ！」

僕達は慌てて、手をさっと引っ込める。お互い顔を真っ赤にしなから。

だが、それでもフレイの怒りはおさまらなかつたらしく、すかさず、フレイは僕の胸ぐらをつかんできた。

「ダイタ、貴様、汚いぞ！ さては、やはり、貴様もさりげなく、ふららさんを狙っているな！ そうだろう！」

「だ、だだだ、だから違うって」

怒りの表情のフレイに揺さぶられながら、僕は、必死に弁解の余地を求める。

「ダイタ様、大変ですわ！」

そう言うなり、ファミリアさんは僕にいきなり抱きついてきた。

「ど、どうかしたの？ ファミリアさん」

僕が呆気にとられて口をポカンと開けると、ファミリアさんは血相を変えて叫んだ。

「昨日、言い損ねていましたのですが、『星のかけら』のありがたわかりましたのですわ！」

「えっ、本当！？」

僕は弾かれるように、笑みを浮かばせた。

そう言えば、ファミリア王国の図書館の入り口で会った時に、ファミリアさんは何か言いたそうにしていたっけ。

まあ、あの後、^{ワイバーン}翼竜の騒ぎがあったりして曖昧になってしまっていたんだけどね……。

「はいですわ？」

ファミリアさんは照れくさそうに頬を染めながら、嬉しそうに返事をする。

「で、一体どこにあるんだ？」

さも興味ありげにフレイが問いかけた。

「何でも、名もなき大陸にあります、バリスタという港町にあるらしいですの」

「えっ？　バリスタの港町に？」

ファミリアさんの言葉に、僕は怪訝そうな顔をする。

『バリスタの港町』。

名もなき大陸の北部に位置する場所にある港町だったりする。

その近くの海岸で、僕はマジヨンやふららさんと初めて出会ったわけなんだけど。

でも、と僕は思う。

初めて名もなき大陸に訪れた時に、マジヨンから名もなき大陸の支配者だったターンが『星のかけら』を持っているということを知かされたのだった。その時は、一かけらだけという話だったんだけど、その後、フレイが持っていた『星のかけら』で、多分、あの後に、ターンは、また、別の『星のかけら』を手に入れたのだろうと僕は思っていた。

でも、だけど、もしかしたら、ターンが持っていたものとは別に、『星のかけら』はどこかに存在していたのかもしれない。別の誰かが持っていたのかもしれない。

そのことに全く、気づかなかった僕も僕なんだけど……

(冷汗)

「何でも、それらしき宝石が、機密船でバリスタの港町に運ばれていたらしいですの」

「き、機密船………?」

僕はギョツとする。

「はいですの?」

ファミリアさんがつつつと僕に身を寄せてくる。

「あの、ファ、ファミリアさん!？」

「ご心配は無用ですわ。わたくしが一緒懸命、ご事情を説明しますわ?」

寄りそってきたファミリアさんをどうしたらいいのか分からず困

り果てた僕は、フレイに視線で助けを求めてみたのだが、素っ気なく目をそらされた。けども、関心がないというわけではなく、うつむいて肩を震わせている。笑っているらしい。

うつつ……（涙）、フレイは絶対に楽しんでる。

そこに駆け込んだのはマジヨンだった。

「ファミリアさん、何をしていますか!」

マジヨンが、ファミリアさんを僕から引き離そうと彼女の服を引っ張った。

「どうして邪魔をするのですの?」

「ど、どうしてって、ふしだからからです!」

「愛しあっている二人が寄りそうことは普通のことですわ?」

ファミリアさんは急に強い口調になって反撃に転じた。両手を胸の前に合わせて祈るように言う。

だが、それにすら負けない勢いで、マジヨンは言い返した。

「普通ではありません!」

「普通ですわ!」

じりつとにらみ合うマジヨンとファミリアさん。

後ろで面白そうに声を上げずに、振り返って笑い出すフレイ。

「何なの……かな」

ひたすら、言い争うマジヨンとファミリアさんを見ながら、僕はつぶやいた。

「ふっ、もてもてだな、貴様」

フレイが少し不満そうに、僕の肩を叩く。

だが、少しの間をおいた後、フレイはにやりと含み笑いをした。

「まあ、こうなったら、俺もふららさんと二人きりになるしかないか」

当たり前のようにそう言い放つと、フレイはさつとふららさんを自分の方に寄り合わせる。

ふららさんはきょとんとした顔で首を傾げた。

そして、不思議そうに人差し指をそつと頬に触れる。

「だ、だからね、何でそうなるのかな……」

力なくつぶやく僕を背に、マジョンとファミリアさんの言い争いはいまだ続いていた。

「皆さん、楽しそうですね。きっと、この場所にマドロスさんがいたら、一緒に笑いあえたと思います」

ふららさんが少し残念そうに両手を前に組んでみせた。

いや、それは、絶対にならないと思う。

それから 僕達が旅立ってから数ヶ月後、マドロスさんの頑張りがいがあったか、リモネの森は無事に美しい森に戻っていた。

そして、森の中央にあった広場には公園が造営された。公園には翼竜の形をした石碑があり、そこには『星のまどろみ』と刻まれているだけ。

そして、入り口には公園の名前が小さく書かれていた。

想い色の公園 と。

第10章 星の構想曲（後書き）

次回はレークス達の話です。

第11章 想いを奏でて（前書き）

今回、お知らせしたいことがあります。詳しいことは後書きに書いています？

第11章 想いを奏でて

レー兄のそばにいること。
小さい頃からそれが私の夢だった。

どんなにレー兄を困らせてしまっても、私はレー兄からずっと離れようとはしなかった。お父さんとお母さんがどんなに一緒に寝ようね、と言っても、私はレー兄と一緒に寝たがっていたんだって。

初めての宝物は、レー兄からもらった大きな水晶がついた杖だった。どんなに可愛いお人形さんを買ってもらっても、私はその杖の方を大切してたってお母さんは言っていた。どんな機嫌が悪くてもグスツていても、水晶の杖を持たせれば歯の生えそろっていない顔で笑って、重い杖を無理やり振り回そうとしてこけそうになっただってお父さんは言っていた。

それから数年後、お父さんとお母さんと一緒に、レー兄が家から旅立ってゆくのを見ながら、私はいつしかレー兄のために何かしたいと思った。なぜだかわからないけれど、そう思ったのだった。

だけど、それ願いはもう叶えられない。

……そう思っていたけれど。

ドンドンッ！

ノックの音も騒々しく、駆け込んできたのは元気いっぱい少女の頃は一四歳くらいだろうか。

赤い髪の毛を頭の上で左右に爆発させたようにまとめている。それ以上に目立つのは、自分の背丈くらいはある長い杖。

「レー兄、起きていますか！」

ベットから上半身を起こしているのは少女よりも年下の少年。さらっとした銀色の髪がトレードマークの少年だ。もっとも、今は寝癖でだらしない形が崩れている。

地の魔王レークス「エンタシス、その人である。

「なんだ？ テイナー？」

レークスは首を回して寝ぼけた声で訊く。

「あのね、今日、リモネの森の方で爆弾テロみたいなのがあったみたいだよ！ 行かなくていいの？」

思い出したのかレークスはうなずいた。

「ああ、あれか。面倒だな。どうせ俺の森の方ではないのだ。

問題ないだろうが」

「えっ　！？」

口を大きく開いた後、ティナーはぶすっーとした顔で不満そうに言う。

「で、でもでも、一応、行つといた方がいいと思うよ！」

「はあっ、仕方ないな」

「じゃあ、早く行こうよ！」

まるで融通のきかない兄の面倒を見るようにティナーはレークスを引っ張り起こした。その間中、楽しそうなニコニコ顔を浮かべているティナーを見て、レークスはげんなりとした顔になった。

こいつがこうやって急かす時は、必ず何かある時だな。

レークスはティナーを不服そうに見上げると、はあっ、と溜息を付く。

と、その時、扉の方から呼び声がした。

「レッ、レークスさん、大変です！」

レークスには振り向かなくても、すぐに相手はわかった。

「アグリーか」

アグリー「ピースである。人々から『光の勇者』『星の戦士』とうたわれている勇者である。もっとも今では、レークスとの戦いに負けて、彼の家来になってしまったという複雑な身分だったりする

のだが。

「で、おまえの用はなんだ？」

「なっ、何言っているんですか！ リモネの森が襲撃されたのかも
しれないんですよ！！」

レークスの顔を見るなり、アグリーはいつも以上にきつい口調で
進言した。拳を力強くぎゅっと握りしめる。

「だから、なんだ？」

「えっ？」

レークスの問いに、アグリーはあからさまに慌てた様子で答えた。
「えっ」と、だからリモネの森が燃えているんですよ。急がない
と」

レークスはアグリーをジッと見て、不機嫌そうに言い放った。

「別に俺の森の方ではないのだ。急がなくてもいいだろうが！」

「そんなこと」

あっけらかんとして言い放つレークスに、アグリーは言葉を失っ
てしどろもどろになる。

「……まあ、いい。暇つぶしに行つてやるか」

レークスはそう言うと、リモネの森の方に向かった。

「はあ」

助かったと一息をついて、小さくなってゆくレークス達の姿を、
しばらく見送っていたアグリーはそうつぶやいた。

そして、慌ててハツとすると、彼らの後を追いかけ始めた。

「ここか」

レークス達はぼっかりと開けた砂地に佇んでいた。それは、到底
そこが森だったとは思えないほど、木は折れ、草地は焼け焦げてい
る。

どうすれば、これほどの大惨事になってしまふのか、アグリーには
全く理解することができなかった。

レークスはその光景を見て、にやりと笑みを浮かべた。

「これは、なかなかの破壊力だな」

レークスは興味深そうに、周りをぐるりと見回した。

どうやら、被害があったのはこの森だけらしい。乾いた砂地には、丈の低い草の固まりがところどころに生えている。

森の周辺には、ひよろひよろとした木が周りを取り囲んでいた。もちろん、街には何の被害もでていない。

「どうして、こんな風になってしまったんだろうか……」
意外そうにアグリーはつぶやいた。まるで、森だけを狙ったかのようだ。その正確さに驚きと恐怖を隠せない。

「うーん」

アグリーはじっと考え込むように、腕を組んでいた。

その時、その肩を、誰かがトントンとつついた。

「おい、アグリー！」

「アグリー様」

「リアク！ アクア！」

後からやってきた二人を見て、アグリーの顔がぱつと輝いた。

鷹揚にビシツと手を上げると、リアクは感心したかのように、何度も何度もうなずいてみせた。

「それにしても驚いたよな。なあ、アグリー！」

「あつ、ああ」

「まさか、これほどのことができる奴が、俺様の他にまだいたとはな！ うんうん」

満足そうに笑みを浮かべたリアクを見て、アグリー達はふかふかと溜息を漏らした。

「そんなことを考えたりするのは、兄さんだけだと思っただけですが……」

アクアが悲しげにそうつぶやく。

だが、そんなアクアの突っ込みも虚しく、すでにリアクの耳には届いていなかった。

「だが、だが……」

リアクがうつむき、細かく肩を震わせた。表情は影が差しして窺い知れない。

きつと、この森の悲惨な惨状を悲しんでいて言葉にならないのだと、アグリーがそう思った瞬間。

「だが！ 俺様よりは格下だろっけれどな！」

リアクはころりと態度を変え、体を大きく反らして笑い始めたのだ。

唾然としたアグリー達を尻目に、リアクはねちつとした笑みを浮かべ、ブツブツと独り言を言い始めた。指折り何かを数えているが、両手ではすぐに足りなくなったらしい。にんまりと笑み崩した顔は、威厳もへつたくれもなかった。

「……バカである。向かうところ敵なしのバカである。リアクの笑い声を聞きながら、通り過ぎてゆく人々の誰もが「なんだったんだあのアホは」という表情を浮かべていた。アグリーもアクアも顔を真っ赤に赤らめてしまう。

その光景をしばらく黙って見つめていたレークスが吐き捨てた。いぶかしげに眉をよせる。

「おい、こいつ、頭でも変になったんじゃないのか？」

「さ、さあ……」

「元々から、変な人だったよ！ レー兄！」

がっくりと肩を落とすアグリーに、ティナーが嬉しそうな声で追い討ちをかける。

アグリーは再び、はあつと深い溜息をつくしかなかった。

レークス達が森だった場所のさらに奥へとどんどん進んでゆくと、突然視界が開けた。同時に騒がしい音が左右いっぱいに広がる。

「アズリアの街ですね」

アクアはぼかんと口を開けて街を見上げた。

「大きいですね」

「ああ、街にしてはかなり大きさだよな」

アクアの言葉に、アグリーも不思議そうにうなずいてみせる。アグリー達もこれほど大きな屋敷を見たことはなかった。金持ちの保養所という場所柄、かなり大きなものだということにはわかっていたが、これほどまでとは思わなかったのだ。アグリー達は圧倒されてゴクリと喉を鳴らすと、とりあえず街の入り口に向かおうと歩き出そうとした。

その時。

ひとりの女性が手に弓を持って駆けてゆくのが見えた。赤いロングヘアーの髪のスレンダーな女性だ。年は三〇歳半ばというところだろうか。どこか、ティナーに似た精悍な女性といったイメージである。

と、アグリー達に気づいたのか、女性は振り向いて、腕を突きつけると鋭い声を上げた。

「申し訳ないのですが、この街は部外者は立ち入り禁止なんです！早く立ち去りなさい！」

森があつた場所の向こうを指差すと、女性は走り去っていった。

「強烈な人・・・だな」

アグリーは圧倒されたという顔で女性を見送っていた。

リアクはそれを聞いて、フンと鼻で笑った。

「まあ、俺様の方が強烈だろうけどな」

「・・・そ、そうですね」

自分であつさりそう認めたりアクに、アクアはうなずくしかない。

「何者だ？ あいつは」

腑に落ちないといった顔で、レークスがつぶやく。どこか、不満そうだ。

ところがティナーからは何の言葉もない。レークスが横を見ると、ティナーは呆然と立ち尽くしていた。

「あつ・・・」

強ばつた声を上げて、ティナーは女性の向かった方を見つめてい

た。息が止まってしまったかのような苦しげな顔だった。

「おい、ティナー？」

レークスはティナーをまじまじと見つめた。

「ティナーさん？」

返事が返らないのを不審に思っ、アグリーがもう一度声をかける。

「あれって」

強ばったままの顔でつぶやくと、ティナーは急に走り出した。

「ティナーさんっ!？」

そう叫んだアグリーの声は、荒地に無駄に響くだけだった。

「ティナーさん、待ってください!」

アグリーがティナーの背中に声をかけるが、聞こえていないのか、どんだん先に進んでゆく。ついには、いつのまにか、アズリアの街の奥にある噴水広場のすぐ近くにまで来てしまっていた。

アグリー達の二〇メートルほど先に剣を磨いている騎士がいる。そして、その周囲にも数人の戦士がいた。

ようやく足を止めたティナーに走り寄り、レークスは耳元でささやいた。

「おい、どうかしたのか？ 急に走り出したりして」

突然のことに、レークスはぶすつとした顔をしてみせる。

ふと、近くにいた騎士がレークス達に気づいたのか、ジッとこちらを見つめていた。

アグリーは急いでティナーの肩を叩いた。

「早く、ここから出ないと!」

ところがティナーは、逆に街の奥へと向かおうとする。慌ててアグリーは彼女の腕をつかんで引き留めた。

「駄目ですよ。ここにいたらまずい」

「いたの……」

アグリーの声をさえぎって、呆然としたまま、ティナーはつぶや

いた。

「誰がだ？」

ふんぞり返ってレークスが訊く。

「間違いないよ。私のお母さんが」

「お母さん？」

思わず聞き返したアグリーの顔を、レークスは凝視する。

「お母さん……だど!?」

レークスはふと振り返って、ティナーをじっと見つめた。

確かにあの女性も羽翼人だったが。

レークスはきよとんとした顔で目を瞬き、肩をすくめてみせる。

と、その時、

「そこで何をしているのですか？」

凜とした女の声に近くにいた騎士は膝をつき、戦士は頭を下げる。

「あつ、えつと……」

さっきの女性がこちらにやってくると、アグリー達を見て呆れた顔になった。

「先程の者達ですね。まだ、いたのですか」

「お母さん！」

ティナーは女性を真っ直ぐに見て叫んだ。

女性はティナーを見た瞬間、驚いて、目を見開いた。

「リバイバル!？」

女性は唾然としてつぶやいた。ティナーの瞳から大粒の瞳がこぼれ落ちる。止まらなかった。

瞳を潤ませながら、ティナーは女性に駆け寄った。

「おっ、お母さん」

「リバイバル！」

彼女 ミューズは、ティナーを強く抱きしめた。

「うっつ……」

「リバイバル、あなたが無事で本当によかった……」

ミューズはティナーを見下ろしている。その眼差しは慈愛に満ち

ていた。

まるでそれは、我が子を見守るかのようなとてもとても優しい瞳だった。

「家族……か」

ティナー達をじつと見つめていたレークスがつぶやく。しかし、その声には嫌悪も冷やかしの調子もなかった。

「俺にはそんなものはわからないな」

レークスは力なくかぶりを振ると、ぽつんと言った。

彼がそうつぶやいたことには、誰も気がつくことはなかった。

「あのね、お母さん」

ティナーは嬉しそうにミューズの腕を握りしめた。幸せいっぱい顔だ。

「なあに？ リバイバル」

ミューズはそれを見てくすりと笑っていた。

満面の笑顔だ。ティナーはずっと待っていた。その顔を。

「お父さんは今、どこにいるの？」

ティナーは人差し指を立てながら、不思議そうに問いかけた。

「このアズリアの街で、魔王と再び戦う準備をしているの。ラストは、その総大将というわけよ」

にこつと笑うと、ミューズは誇らしげにそう答えた。

アグリー達はそれを聞いてハツとする。

「……ラ、ラストって、あの、伝説の大勇者、ラスト「エ」ンターティナー様のことですか！」

「そんな大げさな人ではないわよ」

目を輝かせながら叫ぶアグリーに、ミューズは苦笑まじりの笑みを浮かべた。

興奮冷めやらぬ表情で、アグリーは再び、訊く。

「……………ってことは、あなたは、あの時音の女神、ミューズ様ですよね!」

「ええ」

アグリーの言葉に、ミューズは、慈愛に満ちた笑みを浮かべ、ゆっくりとうなずいた。

どくどくと、急にアグリーの心臓が騒がしくなり始めた。

伝説の大勇者様だけではなくて、時音の女神様にも会えるなんて

……………!

しかも、それがあのティナーさんのお父さんとお母さんなんて

……………!!

そう思うと、ラストに会うのが楽しみになってきて、アグリーはきよろきよろと辺りを見回した。

とにかく、あの、大勇者、ラスト「エンターティナー」様に一目、会ってみたい!

アグリーが高鳴る想いを押さええらずにいると。

「おい、アグリー!」

「うわあ!」

どこから現れたのか、リアクがものすごい勢いでアグリーに迫ってきた。

「なあ、おまえからも頼んでくれないか!」

「はっ?」

リアクは無言を言わず、アグリーに色紙を押し付けてきた。突然のことにアグリーは戸惑いを隠せない。

「なっ、何をだよ……………」

「大勇者様のサインだ!」

恐る恐るアグリーが顔を上げると、腕組みをしたりリアクが不適な顔でこちらをのぞきこんでいた。こころなしか、目元がわずかにほころんでいるような気もする。

アグリーはぼかんと口を開いた。

「かつ、勘違いするなよ。べつ……別にファンとかではないからな！」

力なくビシツと指を突きつけてそう叫ぶと、リアクは、颯爽とアグリー達に背を向けて歩き始めた。

「はあ〜」

残されたアグリーとアクアは、呆れた顔で溜息を漏らした。

「兄さん……、ファンなんですな」

アクアが氷点下の視線で突っ込む。

それに応えるように、アグリーは無言で頷いてみせた。バレバレだった。

彼は彼なりに隠そうとしていたのだろう。だが、誰の目から見ても明らかにそれはうるたえているしか見えなかった。

レークスが吐き捨てるように言った。

「あいつ、やつぱり、頭がおかしくないか」

肯定する者はいなかった。が、不定する者もいなかったのだった。

「ここで少し待っていて下さい！」

ミュージズはアグリー達にそう告げると、ラストの前に進み出た。

レークス達が招かれた場所は、アズリアの街の一角にある大きな屋敷だった。

それは、とにかく大きな屋敷だった。周りにある屋敷とは比べ物にならないほどの大きさだ。

レークス達は、その屋敷の中でも一際広い部屋に案内された。

「ラスト！」

「……ミュージズか、どうした？」

ラストはミュージズを見ると、頷き、報告を促した。

ミュージズはちらつと後ろを見ると、ティナーに手招きをする。

「ティナー！」

「はあ〜い？」

陽気な返事をして、ティナーは前に進み出た。

ラストはハツと顔色を変えた。

「ティナー！」

「えへへ、お久しぶりだね。お父さん！」

満面の笑みを浮かべて、ティナーは手を上げた。

ラストは何も言わず、ただただ、彼女を抱きしめた。彼の目には涙はなかった。

だが、やっと胸を撫で下ろしたかのように、安堵の表情を浮かべていた。

アグリー達は、涙腺が緩むのをこらえきれそうもなかった。

「よかったですね……………」

「ああ……………」

アクアのつぶやきにそう答えるアグリーの瞳にも、なんだか涙が浮かんでいるようだった。

「おい、ティナー」

とたんにはそりとそう言ったのは、そっぽを向いたままのレークスだった。

散々、無視されたままだったためか、かなり不満そうだ。

ティナーはあつ、とつぶやく。

「あのね、レー兄、紹介するね！ 私のお父さんとお母さんだよ！」

ティナーは朗やかに、さっとラスト達を指し示した。

「レーナティ……………」

ミューズはハツと顔色を変えた。そつと、口元を押さえる。

遅れて、ラストが顔をしかめた。

二人とも喜びのあまり、言葉が出なかった。

ティナーと再会できたことだけでも嬉しいというのに、死んだと思っていた息子のレーナティが生きていたのだ。

言葉なんて見つかるわけがなかった。こんなとき、一体、どんな言葉が見つかるというのだろうか？

「レーナティ……………、あなた、生きて」

ミューズはそこで言葉を詰まらせる。
代わりに小さく微笑んで、彼の頭を優しく撫でた。

今、自分の目にしているのが、夢ではないのか確かめるかの
ように。

どんなに運命に翻弄されようと、確かに彼は生きていたのだ
ということ、感じ取るかのように。

「あなたが生きていてくれてよかった……」

ミューズは顔を伏せると、目を閉じて再び微笑んだ。

そして、レークスを優しく抱きしめる。

しばらくバツが悪そうにそれを見つめていたレークスだったが、
意を決したかのように告げた。

「……勘違いするな。俺は地の魔王、レークスⅡエンタ
シス様だ！」

レークスはフンと鼻で笑った。

「ああっ！」とティナーがうめいたような気がしたが、空耳だろう。

「地の魔王……?」

「そういうことだ」

ミューズとレークスが、しばし視線を合わせる。

ラストとミューズは顔を見合わせ、小首を傾げた。ラストが頷い

た。ミューズはラストに微笑みかけ、それからレークスの手をとっ
た。

「……そうなのね」

「ああ」

満足げにそう答えたレークスの顔を、ミューズは熱い視線で見つ
めた。

「レーナティ、記憶喪失なのね？」

ミューズの真面目な問い返しに、レークスだけではなくアグリー
達もひっくり返ってしまった。

「どうしてそうなるんだ！」

「違うの？」

「当たり前だ！」

不機嫌そうにレークスはじろりと睨んでみせたが、彼らは全く気づかずに考え込んでいる。

「じゃあ、まさか、本当に地の魔王なの……。それって」

何かを言いかけて、ミューズは口をつぐんだ。

レークスには、ミューズが何を言おうとして、何をためらったのか、よくわからなかった。

しかし、ミューズが沈黙したのはほんの一瞬だけで、彼女はすぐに顔を上げて言葉を続けた。

「いえ……」

と、すぐにミューズはつぶやいた。

レークスは不満げに腕を組んで、鼻を鳴らした。

「なんだ？」

「……では、レーナティは地の魔王になってしまったというの？」

祈るような困惑したかのような瞳で、ミューズは言った。こころなしか、瞳が潤んでいる。

ラストとミューズの夫婦は困ったような笑顔を浮かべ、お互いの顔を見合わせた。

「きつ、貴様らっ！」

レークスは不機嫌にそう怒鳴った。目を剥いて、拳は小刻みに震えていた。

やっぱり、ティナーさんの親族だな……。

その光景を見守っていたアグリーは、しみじみとそう思った。

「貴様ら、いい加減に」

と、レークスがそう叫びかけた時だった。

「たっ、大変です！」

一人の騎士らしき男が、慌しく部屋に駆け込んできた。
ラストはいぶかしげに眉を寄せる。

「何事だ？」

「そっ、それが、みつ、見たこともない魔物の群れが突如として現れました！」

「なにっ!?!？」

ラストは、声を上げて立ち上がった。すぐに窓の方を見つめる。
「なんだ、あれは!?!？」

ラストは驚愕の叫びを上げた。

その目には信じられないスピードで襲ってくる魔物の姿が映った。
疾風のように駆けてくる。いや、駆けるというより飛んでくるといった方がいい。それくらい速い。

「狙いはこの街か」

ラストは唸り、大剣を構えた。

すぐにでも外に飛び出ようとしたラストとミューズを、レークスの腕がさえぎった。

「なっ?？」

「下がっている……!？」

口元に愉快そうな笑みを浮かべて、レークスは魔物の群れを見下ろした。

「ティナー！ 窓を開ける！」

「はあーい？」

言われるがままに、ティナーは部屋の窓を開ける。

レークスは片足を窓に乗せると、魔物の群れに指を突きつけた。

「こんな雑魚、俺の敵ではない！」

レークスは意気揚々に拳を突き上げた。自信満々に断言する。

「レークスさん、無茶だ！」

アグリーは慌てて、レークスを止めに入った。

いくら、レークスさんが地の魔王だといっても、あの数百にも及ぶ

魔物の群れと一人で戦うのは無茶にもほどがある。それに、みんなと一緒に戦った方が、勝てる確率が高いだろう。それに、とアグリーは思う。

もし、あの魔物の群れがこの街を通り過ぎてしまったりしたら、次はラミリア王国が狙われることになる。

そうなれば、本当にそれこそ、かなり深刻な被害をもたらすことになってしまっただろう。そうなってしまっただけからでは、もう、何もかもが遅すぎるのだ。

だが、アグリーの言葉など、聞く耳持たないといった表情で、レークスは魔物の群れを睨んでいる。

未だに脅威のスピードで迫ってくる魔物の群れの前に、アグリーは緊張した面持ちでレークスを見つめていた。

背中に、少し離れたところで見守るリアク達の視線を感じた。

「レークスさん!？」

我慢できなくなってアグリーが口を開きかけた時、レークスは拳に魔力を込めて、一気にそれを解き放った。

「貴様ら! 地の魔王、レークス様の偉大な力をその目にとくと焼き付けておくのだ!」

不適に笑って、レークスは眼下の街に向かって大音響を上げた。

「くらえっ!」

レークスは念を送るように拳を突き上げる。

ひとつの炎から、ふたつに分裂した炎の魔法はからみ合い、闇に覆われたアズリアの街の地表を駆け抜け、そそり立つ魔物の群れに向かっていった。

青白い閃光が周囲の魔物を呑み込みながらとぐるを巻くように突き進み、そして、中央のいた魔物の群れに激突した。

その瞬間、閃光が弾け、街は真っ白に染まった。

理解を超える破壊と爆発のせいで視覚も聴覚も全く役に立たなくなった。ただ、もの凄いパワーが結界の中で破壊の限りを尽くしているというのが、わかるだけだ。

それが消えると、静寂が街を支配した。

「すっ、すごい！」

アグリーは思わず呆気に取られた。リアクとアクアも呆然と立ち尽くしている。

辺りは痛いほどの静寂に包まれていた。

ラストとミューズは静かに、魔物の群れがいた場所を眺めていた。魔物の群れを消し去ってしまった跡には、まるで何事もなかったように乾いた砂地も石畳みの街道も、平然とそこに存在している。

「ふん、あっけなかつたな」

レークスは手のひらを払って、パンパンと大きな音を立てた。

「すごいね、レー兄！」

ティナーは感心した声を上げながら、街をそっと見上げて、内心、ホツと胸を撫で下ろしていた。

無数とも思えた魔物の群れは、すでにどこにも存在していなかった。

レークスはにやりと笑った。

「当然の結果だ！」

「そうだね！」

笑いながらティナーが応じる。

わああああっ！

そのとき、遠くから突然、大歓声が沸き起こった。

「何事だ？」

「レー兄、あれ、見て！」

ティナーは、窓から屋敷の外を指差した。

街の入り口付近から一斉に、人々が喜びの表情で飛び出してきた。口々にレークスの名を呼びながら、人々はこちらに集まってきた。

すでに安全なところへ移動していたはずの彼らは、至るところから姿を現す。壁の陰から、植え込みの中から、とにかくものすごい数である。

「こいつら、一体、どこに隠れていたんだ!？」

「……………どうやら、こっさり見ていたみたいですね」

驚くりアクに、アクアが髪をかき上げながら言った。

「それだけ気になっていたんでしょね。この街のこと……………」

「……………ふん」

レークスはそっぽを向いて、鼻先をかいた。その耳がほんのり赤いのを、ティナーは見逃さなかった。

「えへへ〜？」

人々に囲まれ苦々しい顔をするレークスを想像し、ティナーはくすくすと笑った。

ミューズはしばらく、ぼかんとしていたが、やがて口元をゆるめた。顔がどんどん輝いてゆく。

「レーナティ！」

「だから、俺は ……!？」

突然、レークスの前にミューズは進み出て、片膝を曲げてレークスに頭を垂れた。

これには、レークスだけではなく、ティナーも、そして、アグリー達も啞然、呆然を通り越してまさに愕然としていた。

ラストだけがひとり、静かにそれを見守っていた。

戸惑いを隠せないでいるレークスに、ミューズはにっこりと微笑んだ。

「わたくし、時音の女神、ミューズ」エンターティナーは、地の魔王、レークス」エンタシス様に力を尽くすことを誓います」

と、ミューズは力強く宣言した。

ミューズはすつとレークスの目を覗きこんだ。たちまちレークスは

落ち着かなくなる。

だが、この近距離では、視線を逸らそうとしてもうまく逸らせない。しばらく黙って見守っていたラストだったが、ミューズの隣に並ぶと、同じように片膝を曲げてレークスに頭を垂れた。

レークスはぽかんと口を開けた。

どこかで見たとある顔だな、とティナーは思った。だけど、すぐにそれがどこだったのか彼女には分かった。

初めてレー兄と出会った時も、あんな顔をしてたよね………？

思い出したように、ティナーは楽しげな笑顔をしてみせる。

「わたくし、時音のミリテリアであるラスト」エンターティナーは、地の魔王、レークス「エンタシス様のお力ぞえとなることを誓います」

と、ラストはきっぱりと言った。

お互いの顔を見合わせると、ラストとミューズは頷きあった。

ミューズは胸に手を当てて、誇らしげに胸を張った。

「その見返りとして」

ミューズはまじまじとレークスを見つめた。不意をつかれたように、レークスは息を呑む。

あくまで真剣にラストが続けた。

「………我が主として運命を共にすることを許されよ！」

「なっ!？」

リアクはぎよっとする。アクアもハツとして口元を押さえた。

「そ、それって………」

驚きの声でアグリーはつぶやいた。

「ラスト様達がレークスさんの仲間になるってこと……だろうかいや、もしかしたら、もっと、深い意味があるのかもしれない………!？」

「何故だ　　!?!?!?!?!」

リアクが絶叫した。眼下の街まで響く大音響である。

落ち着きのないリアクを見て、アクアは慌てて止めに入った。

「兄さん、落ち着いて」

「これが、落ち着いてなんかいられるか！ 何故、あのくそ生意気なレークスのガキが、大勇者様に認められるんだ！！」

「リアク、そんなこと言ったら、レークスさんが……」

アグリーはきよとんとした。てつきり怒るとばかり思っていたレークスが、不適な笑みを浮かべて空を見上げていた。

「……く……く……！ 本当におめでたい奴らだな。やはり、ティナーの親だけはあるな！」

レークスがにやつと、愉快そうに 本当は面白そうに笑った。

「いいだろう。 貴様らを俺の配下として認めてやる！ ありがとうと思うんだな！」

どこか、レーナティの微笑によく似た、無邪気な表情だった。

あつ……！

ティナーは心の中でつぶやいた。

「地の魔王である俺を信じるなど……アホなことを抜かしやがったのは、貴様ら親子だけだな」

「えへへ〜？ そうかもね！」

ティナーも頬を桜色に染め、とびっきりの笑顔をみせた。

何もかもが最高だった。子供の頃からの夢を叶えた感激は言葉にできなかった。

言葉にできない代わりに、私は笑うことでこの感動をみんなに伝えられた。

私は満面の笑顔で笑った。力いっぱい。これからも笑い続ける。

頑張れ。希望を捨てないで。未来があるから、夢はきつと叶うか

ら。

私の思い、笑顔に乗せて届け。レ－兄に。

そして、みんなの心に。

第11章 想いを奏でて（後書き）

お知らせです。

13章から4巻のお話に入りますが、まだ4巻は残っている状態なので12章が終わったら先に番外編のお話をしようと思います。

第12章 いつか溶ける涙

その少年と出会ったとき、彼女は薄青い銀色の長い髪で、顔立ちと身長はまだ少女と呼ぶに相応しい年頃だった。

場所は、リモネの森の中央にある広場で、目の前には丈の低い草の固まりがところどころに生えている。

「迷子か」

というのが少年の第一声だった。

「お父さん？」

というのが彼女の第一声だった

そのとき、彼女は両親を亡くし、預けられていた家から逃げだしていた真つ最中だった。

すべてはそこから始まった。

家族が二度と帰らない、と少女が知ったのは、彼女がまだ幼いころのことだった。

家族が出かけるとき、彼女はとなりの家の夫婦に預けられるのが常だった。その時も、彼女はその家に預けられていた。

すでに預けられてから二週間あまりが過ぎていた。

そろそろみんな戻ってくる頃だな、彼女はそんなふうに思っていた。それまでの経験から、それぐらいのことはわかるのだ。

しかし、その日、戻ってきたその家の主人が彼女に告げる。

「君のご家族は、もう帰ってこないんだ」

主人の顔には、見たことのない厳しさが浮かんでいた。

「依頼人から連絡が届いた。残念ながら、仕事の最中に、二人とも命を落としたそうだ」

「いのちを落とす？」

言葉の意味が分からず、主人の厳しい表情に少し恐怖を覚えながら、彼女は小首を傾げて尋ね返した。

「いのちは落としたりしないよ」

主人は苦しげに首を横に振った。

「そうじゃない。死んだ、つてことだよ」

と、主人は言った。

「二人とも、死んだんだ」

「死んだ？」

少女は驚き、目を見開いた。

「そんなの、うそだよ」

と、少女は言った。

「そんなの、うそだよ！！」

と、少女は叫んだ。

でも、もう主人は彼女の方を見ていなかった。

溜息を付き、まるで彼女の声が聞こえなかったように部屋から出て行ってしまった。

彼女はその場に立ち尽くした。涙が溢れ、止まらなかった。

その晩。彼女がふとんにくるまり、父や母のことをぐるぐると考えていると、居間の方から話し声が聞こえてきた。主人とその奥さんの声だった。

「……あの子のことはどうするんです？」

「心配ない。もう引き受け先は見つけてきた」

「本当ですか？」

「ああ。いつまでもあの娘をここに置いてはおけないからな。」

こういうことは、早い方がいい」

ふとんから出ると、彼女は声が耳に入らないように、耳を押さえた。何か、とても不快な気持ちがあったからだ。

彼女は足音を立てないように通路を歩いて、家の扉を開けると逃げ

出すかのようにその場から走り去った。

彼女は森の小さな木の陰で身体を温めようと身を小さく縮めた。彼女は目をしっかりとつむり、意識を遮断しようとした。もう何も考えないようしようとした。

だけど、その晩、彼女の元に、ついに眠りは訪れなかった。

翌朝、彼女は一人、両親を探して森の中を歩き始めた。

家族のみんなが死んだなんて、彼女はまだ信じていなかった。いつか、両親と再会できると、少女は強く信じていた。

もしかしたら、もう戻ってきているのかもしれない。

そう信じて、彼女は再び夫婦の家を覗き込んだ。

だけど、両親はいなかった。

そればかりか、へらへらと笑いながら、夫婦の夫は、昔、彼女がここに来る前、何度も聞かされた台詞を口にした。

「魔族の子供なんて何をしでかすかわからない。どんな能力を隠し持っているかわからないんだからな。係わり合いにならない方が一番だ」

夫がにこやかにそう言い、妻がまるで悪びれた様子もなく頷くのを見て、彼女は絶望的な気持ちにとらわれた。胸が引き裂かれたかのように痛かった。

彼女は再び、森の奥へと駆け出していった。

歯を食い縛り、手と足を大きく動かし、「お父さん！」「お母さん！」と大声で呼びながら、森の方向へ戻ってゆく。

ふと、森の奥にある広場が彼女の目に入った。いつも、両親と一緒に遊んでいた場所だ。

お父さんとお母さんは、あそこにいるかもしれない。

そう思うといてもたってもいられなくなり、彼女はそこを目指して走り出した。

だけど、そこには両親の姿はなかった。

彼女は膝を抱えて、顔をうずめた。小さく身を縮ませて震わせる。

……それから、何時間が過ぎただろうか。

ふと、遠くから、足音のような音が聞こえてきた。サクサクと落ち葉を踏みしめる足音だ。

「おとうさん？」

少女はつぶやいた。

足音はどんどん近づいてくる。

だが、霧が立ち込めているせいで、誰なのかはわからない。彼女は深呼吸を試みた。

「お母さん……なの？」

少女は再びつぶやいた。

返事はない。彼女は重ねて問いかけた。

「だっ、誰なの？」

「だけど、誰も答えない。」

そして、彼女は霧の中から現れた別の人物の姿を見て、さらなる驚きを体験することになる。

少年だった。彼女と同じくらいか、それより年下の少年だった。

「迷子か？」

怯えた様子で、彼女はキツと少年を睨んだ。

その様子を見て、少年は満足げに頷いてみせた。

「そうか。俺が怖いか。怖いんだな」

少年はにやりと笑った。

彼女はきよとんとした。首を大きく横に振ってそれを不定する。

「なにい!？」

少年の眉がピクリと引きつる。何故だ! とばかりに、頭を掻きながら顔をしかめた。

そんな少年の態度に、彼女は思わず、ぷつと噴き出してしまった。ますます、少年は不機嫌になってしまふ。

少年は少女をしっかりと見据えて、そして尋ねた。

「名前はなんだ？」

「メシアロード……」

「俺はな、聞いて驚くなよ。地の魔王、レークス「エンタシス様だ！」

自慢げにレークスは胸を張った。

だが、メシアロードは首を傾げるだけ。

「ちのまおう、ってすごいのか？」

レークスはこめかみを押さえ、がっくりと肩を落とした。

「……」

一方、メシアロードは心配そうに、レークスの顔を覗き込んだ。

「まあ、いい」

あっさりと言い捨てて、レークスは森の奥へと歩き始めた。

それに続くように、メシアロードも歩き出す。

しばらく歩いていると、大きな街らしき影がぼんやりと見えてきた。

突然、レークスが口を開いた。

「もう、ここまででいいだろう？」

メシアロードは、力なくコクンと頷く。どこか、寂しそうな瞳だ。

「じゃあな」

そそくさと立ち去ってゆくレークスの姿を、メシアロードはじっと見つめていた。

もう、あの人とは会えないの……？

突然、メシアロードの心がざわめいた。

初めて感じる感情だった。

だんだん、メシアロードの胸が熱くなってきた。

また、あの人と会ってみたい。

そう思うと、メシアロードは、頬をそっと桜色に染めた。

翌朝、地の魔王の城に続く道を、メシアロードは一人、走っていた。銀髪はぼさぼさに乱れ固まり、服の裾はびりびりだ。

すぐに脇に生えていた草に足が絡まり、メシアロードはべしゃつと転んだ。

「うつ……」

だけど、痛がっている暇はない。メシアロードはすぐに起き上がり、街道をひた走る。むき出しの膝は、乾きかけた血で赤くなっていた。

あの人のお城まで、あとどれくらいなの？

肺が痛い。体全身が痛い。足が重い。

けれど、レークスがそこにいると思うと、メシアロードはなんだか頑張れる気がした。

不思議だ。昨日まで全く知らなかった人がこんなにポロポロの体に力を与えてくれるなんて。

何をしに来た、と怒鳴られるかもしれない。

だけど、なんだか、あの人の近くへ行ってみたいのだ。巻き込まれてみたいのだ。

「……あつ！」

感慨深げにメシアロードはつぶやいた。

地の魔王の城の門らしきものが、前方に見えてきたからだ。

もう少しで会える！

白い歯をのぞかせて、メシアロードは笑った。

「はあ……」

魔王城の門前で、メシアロードは大きく息をついた。

思いつきり背を反らさなければってペンが見えないほど、巨大な城だった。塔がいくつが集まった造りで、敷地はぐるりと森に囲まれている。

森の小道をてくてくと歩くこと数時間。扉から城までは思ったよ

りも距離があった。

なだめるように胸に当てた左手からは、自分の鼓動がはっきりと伝わってくる。いつもとは明らかに違う、速いビート。

落ち着かないと………。

メシアロードはさすがりつくように、自分の服の袖を握りしめた。

大丈夫………。大丈夫………。

自分に言い聞かせるように、メシアロードは心の中でつぶやいてみせた。何度も何度も深呼吸をしてみせる。

メシアロードは門番に取り次ぎを申し出た。

やる気のなさそうな魔物は、ろくに調べもしないまま、あっさりと中に入れてくれた。

天の魔王の城や魔王の城を守る門番は、顔なじみの相手に対しても、一通りチエックをするのに。

構えていたメシアロードはちょっと拍子抜けしたが、きつと信用してもらえたのだと嬉しくなって、思い切って城に足を踏み入れた。城内は、まだ昼間だということにどこか薄暗かった。窓の数が少ないせいである。

それに廊下は、不思議なほど人気がない。

「あ、あの　っ」

眉を寄せながら、メシアロードがつぶやいたのとほぼ同時に

「なんだとっ！」

ちゅどご　んっ！

「きやあああつ！？」

聞き覚えのある少年の叫びと一緒に、突然、目の前の部屋のドアが爆発し、吹き飛んだ。誰かの切羽詰まった悲鳴がした。

「だ、だから、これがこの城の現状なんですよ。　レークス様！」

「何故、地の魔王である俺の配下がこれだけしかないのだ!？」

「なっ、なあに?」

一瞬、腰を抜かしかけたメシアロードだったが、ぐぐつとこらえた。

あれほど会いたいと思っていたレークスの声が聞こえたのに、無視などできるわけがない。

メシアロードは思い切って、爆発の起きた部屋に飛び込んだ。

「貴様、どうしてここに？」

「レークス様」

本物だ。銀色の髪も、ぶっきらぼうな声も……。

メシアロードは躊躇なく思いつき飛びついた。

「どわっ！」

突然飛びつかれた方はたまったものではない。レークスは飛びつかれた勢いでバランスを崩し、メシアロードを抱え込むような形で尻餅をついた。

「何をするんだ！ 貴様！」

「………ごめんなさい」

メシアロードはぺこりとお辞儀をした。腰からきつちりと折る、丁重な一礼である。

まさか、あっさりと謝ると思っていなかったのか、レークスはたじろいた。

「………まあ、いい」

そう言って、レークスは頭を振った。

「時間の無駄だ。それより、貴様、まだ、何か用か？」

メシアロードはただ黙って微笑んだ。レークスの言葉に対して、軽く頷く。

「………」

渋い顔で、レークスがメシアロードをじろじろと観察した。いつも不機嫌そうではあるが、なんだか普段より余計いらだたしげだ。

「あの、レークス様」

「なんだ？」

「あの………」

指先をにごにごによといじりながら、メシアロードはしょんぼりと肩を落とした。

そして、不安そうにレークスに問いかけた。

「ここで雇ってもらえませんか？」

「なに!？」

「……行くところがないんです」

先程、悲鳴を上げていたやる気のなさそうな魔族の青年がぱんと手を叩いた。

「なるほど。それなら、人員不足は少しは解消されますし、いいんじゃないですか。レークス様」

「うむ」

渋い顔でメシアロードを値踏みするレークスに、やる気のなさそうな魔族の青年が髪をかき上げつつ言う。

「彼女は見たところ、かなりの力を持っているみたいですし、いいと思いますか……」

めんどくさそうに、魔族の青年は吐き捨てた。

見よう見まねといった感じで、まるで雨を手のひらに受けるかのように、彼女に両手をかざした。力を探っているらしい。かなり適当ぼい。

どうやら、彼は、早く、この会議を終わらせてしまいたいらしい。「いいだろう。貴様を俺の配下として認めてやる！ 有難く思うんだな！ メシアロード！」

気がつかなかった、とばかりにレークスは手を打った。

そして、付け加えるように言う。

「……おい、スループット。貴様がこいつの教育をしるよ」

スループットを見て、レークスがにやりと面白そうに笑う。

途端、スループットが恨めしそうにメシアロードを見つめた。

冷めた表情でそれを受け流すと、メシアロードはレークスに力強く宣言した。

「はい！」

かくして、メシアロードの魔王城生活が始まったのである。

それから彼女の時間は瞬く間に過ぎてゆく。
レークスの配下になってから、メシアロードの生活はそれまでと
一変した。

今までは、メシアロードは一人で食事をしていた。預けられていた
家では厄介者扱いされていたし、両親はいつも仕事でなかなか戻っ
てはこなかったからだ。

だが、ここではレークスいわく、「結束は、共に学び、食べて、
寝ることだ」。

もうひとつ、「どんな大事業もまず足元固めから」。

「……もつともらしく聞こえるのだけれど、魔王がそんな
考えでいいのかな？」

そう思いつつ、メシアロードが食堂で黙々とハンバーグ定食を食
べていると。

「一緒に食べよう」

彼女の隣の席に強引に座った赤いツインテールの羽翼人の少女が、
ニコニコと笑いかけた。

彼女は先日、新しく仲間になった、リバイバルⅡエンターティナー
だ。

「……」

黙って彼女を無視し続けているメシアロードは、手で小刻みにナ
イフとフォークを操り、見る見るうちにハンバーグを口の中に放り
込んでゆく。決して、むだ口を叩いたりしない。

「ねえ、ハンバーグ、好き？」

けれど、ティナーはその事は全く気にせず、さぞ興味ありげにそ
う問いかけてきた。

メシアロードは何も言わずにそっぽ向く。

ティナーはにこやかに言った。

「私は好きだよ！ でね、あと……」

ひたすらしゃべり続けるティナーを無視して、メシアロードはレークスの方を向く。

……どうして、レークス様は、彼女を配下にしたのかな？
冷たい視線で、今もしゃべり続けるティナーを見ながら、メシアロードは首を小さく横に振ってみせた。

レークス達と暮らすようになって、メシアロード自身を取り巻く環境は、嵐のように激変した。

それ以前の生活とは、もはや何もかも変わってしまった、まるで別の世界にやってきてしまった、と思うことがあるほどだった。

けれど、もちろん、メシアロードがいるのは、『アーツ』の星だし、世界は以前と何も変わっていない。

レークスの配下となったことは、間違いなく、メシアロードにとってプラスに働いた。

レークス達に対してはなかなか素直にはなれなかったが、メシアロードの心は確実に彼らに癒されていった。

みんなで食堂の食卓を囲んでいるときや、レークスや他の人達と話してたり、言い合ったりしているとき、あるいは、些細な仕事をこなしたりなど、本当に日常の何気ないことをしているときに、世界もそれほど悪くないところかもしれない、とメシアロードはときどき思うことがあった。

そして、そう思える自分に気づいて、とてもくすぐったい感覚にとられるのだった。

もしかしたら、自分はもう、ずっと手に入れたいと願っていたものを手に入れてしまったのかもしれない。

そう思ってしまう。

でもそれだけに、メシアロードはときどき恐怖に駆られることがあった。

こんな穏やかで平穏な日々がいつまでも続くわけがない。

いつか終わりがくるかも。

メシアロードは、半ば盲目的にそのことを確信していた。

もしも、この生活がある日突然失われ、あの厳しい現実の世界にひとりで放り出されたら、私はうまくやっていくことができるのだろうか。

そう考えるだけで、どうしようもなく不安になり、メシアロードは夜も寝つけなくなるほどだった。

ある晩、真夜中にメシアロードはひとり、食堂にいた。

その日もやはり、それについて考え、うまく寝入ることができなかつたのだ。

食卓について物思いにふけていたメシアロードは、人の気配を感じて振り返った。

「こんな時間にどうしたんだ？」

入り口のドアのところにもうとつくに自室で眠っているはずのレークスの姿があった。

「……寝つけなくて」

「そうか」

レークスはひとつ頷くと、彼女の隣にふん取り返って座った。そして、そのまま黙って、肘で食卓を叩く。

メシアロードも何も言わず、そのまま、ずっと黙っていた。

「あの」

だいぶ間があつてから、メシアロードがつぶやいた。

「なんだ？」

「……私、このまま、ここにいていいのかな？」

メシアロードの胸がきりきりと痛んだ。

なら、出ていけばいい、と言われたら、どうしよう。

質問してから、メシアロードはひどく後悔した。

だけど、もう取り消せない。

メシアロードはきつく瞳を閉ざし、身を固くした。胸がぎゅっと苦しくなる。

「……………俺は許さないぞ！」

ギリツときつい眼差しで、レークスがメシアロードを睨んだ。

「貴様がなんと言おうと関係ない！ だいたい、貴様の方から雇ってほしいといったのではないか！ いいか！ 貴様は、一生、俺の配下だからな！」

「えっ……………？」

メシアロードはレークスを見た。

そして、ためらいながら訊いた。

「ずっと、いてもいいの？」

「当たり前だ！ 一生、こき使ってやるからな。 覚悟しておけよ！」

無然とした態度で、レークスはにやりと笑ってみせた。

メシアロードはきよとんとしてから、弾けるように笑った。

「はい！」

気がつくくと、メシアロードの心から、嘘のように不安や恐怖の存在が取り除かれていた。

レークスの言葉が、それらを溶かし崩してしまったのかもしれない。

レークスが言った。

「貴様も早く寝ろよ」

「はい」

メシアロードはレークスの言葉に頷いた。

レークスとメシアロードは立ち上がり、お互いの部屋へと戻った。

……………でもその晩も、やはりメシアロードは寝付くことができなかつた。次の晩も、その次の晩も、メシアロードのもとには安らかな睡眠はやってこない。

夜になり、ベットに身体を倒して、眠りにつこうとまぶたを閉じると、とたんに心臓がものすごい勢いでどくんどくん、どくんどくん、と暴れ出し、メシアロードから睡魔を追い出してしまうのだ。

メシアロードは何かに悩んでいた。

そして何かに動揺していた。

でも、何に悩み、何に動揺しているのか、自分でもまるでわからなかった。

わからないままに、メシアロードの症状は、さらにひどいものとなつていった。

ときどき食事中でさえ、息苦しさを覚えて、食べ物がのどに通らなくなってしまうことさえあった。

それどころが、レークスを眺めているだけで、突然、胸が締められるような思いに駆られてしまうこともあった。

そんな眠れない日々をどれだけ送ったことだろう。

ある日、メシアロードは、自分が恋に落ちたのだと知った。

きっかけは、レークス達がアズリアの街から戻ってきた時のことだ。

帰ってきてから、早々、魔王城の城内で即席パーティーが開かれていた。

新しく、彼女　ティナーの両親が仲間になった。その歓迎パーティーのようなものだ。

でも、実際のところ、ただ、彼女がパーティーをしたかっただけなのかもしれないけれど……。

それはとにかく、魔王城内には今、活気に満ちていた。それは、先日、行われた野外パーティーにも劣らないほどの活気だった。

城のみんなが、生き生きとした表情を浮かべ、弾む動きでパーティーを楽しんでいる。

メシアロードはひとり、バルコニーから森の様子を見渡し、溜息を漏らした。

「何をしているの？」

凜とした女性の声がした。

振り返ると、赤いロングヘアの髪のスレンダーな女性が立って

いた。

彼女の名は、ミューズ＝エンターティナー。

ティナーの母親で、時音の女神らしい。

「別に……」

素っ気なく、メシアロードは答えた。

「そう……」

ミューズが言った。

いつのまにか、うつむいていた顔を上げて、メシアロードは訊いた。

「あの？」

「はい？」

「ラスト……さんと初めて出会ったときって、どんな感じでした？」

メシアロードの言葉に、あくまで真剣な表情でミューズは答えた。

「……衝撃が走った感じ……だったかしら」

と、少しはにかみながら、ミューズは話を続けた。

「別れてしまうとき、思ったの。もう、この人とは会えないの？」

また、会えないのかしら、と。私は動揺に襲われた。この機

会を逃したら、もう二度とこの人とは会えない。そんな気さえし

たの。私の目は、ラストに釘付けにされたまま、彼から目を離す

ことが出来なかったの。……きつと、一目ぼれだったの

ね

ミューズが語ったそのときの彼女の心の動きは、そのまま、メシ

アロードの場合にも当てはまった。

それはそっくり、そのまま、メシアロード自身の心臓に今、起こ

っていることだった。

その後もミューズは、ラストとの馴れ初めの様々なエピソードを

披露したが、例えば、最初、ラストはまるで相手にしていなかつ

たというか、彼女の気持ちを分かっていたいなかった、とか、そのほ

とんどをメシアロードは聞き流した。

メシアロードにとっては、たつた今知った、自分がレークスに恋しているという事実の方がはるかに重要だったからだ。

メシアロードは、そのときまで恋に落ちたことがなかった。ひとり生きていくことに精一杯で、男性と知り合う機会などほとんどなかったのだ。

自分が恋に落ちたと仮定してみると、様々なことが府に落ちた。

……なんて、皮肉なの。

メシアロードは心から思った。

初めて誰かを好きになってみれば、それは地の魔王なのだ。

何も、初めから報われないとわかっている相手を好きにならなくてもいいのに。

と、自分のことながら思って、メシアロードは溜息をついた。

けれど、メシアロードはパーティーが終わっても、その思いをレークスに告げたりはしなかった。

何より、実際に思いをぶつけてみて、それを拒絶されてしまうことが、メシアロードは怖かった。

まして、受け入れてもらえるはずないとわかっているはなおさらだった。

彼は地の魔王なのだ。自分とは立場が違う存在だ。

メシアロードは必死に、自分の思いを封印しようとした。

……でも、そんなことはできなかった。

時刻はもう夜だった。空を見上げて、夕暮れの太陽は見当たらず

ず、代わりに金色の月が、私達の営みを見下ろしていた。
まだそう思ってから一時間しか立っていないだけあって、自分の
心臓のモチベーションは落ちていない。

明日こそは、この思いを封印できるのだろうか？

だけど、例えば、明日いきなり、この思いを封印しなければなら
ないのなら、きつと私には無理だと思う。

時間が止めたり、未来を覗くことができたなら、と私は思う。

でも、もちろん、そんな夢のような話はいらないし、できるわ
けがない。

それにしても、と、現在から未来、未来から過去へと思いをさせ、
私は思った。

まさか、私がレークス様を好きになっってしまうなんて。

「……………何も、初めから報われないとわかってる相手を好
きにならなくてもいいのに」

手すりに手をかけ、メシアロードは独り言のようにぼやく。

「……………そんなこと、分かりませんよ」

穏やかな女性の声がした。

振り向くと、ピンク色のストレートの髪を一つに纏めている桜色
の瞳の女性が立っていた。

彼女　アクアはにっこりと笑みを浮かべながら、メシアロード
の隣に並んで言った。

「……………報われないなんて、そんなこと分かりませんよ」

「……………どうして、そう思うの？」

「その人を好きだと思ったいは消せません。……………それが、
なくなることなんてないんですよ」

アクアは、何かを願うように天に祈りを振り仰いだ。

そうかもしれないけれど……………。

メシアロードが心の中でそう考えて、密かに心で溜息をついてい

ると、アクアは身を乗り出して下を覗き込んだ。

彼女のピンク色の髪が、風になびいてふさふさと揺れた。

アクアの視線の先には、魔族や魔物達がいまつを手に、周囲の見回りをしていた。炎が揺れながら、城の周りを小刻みに移動していた。

アクアが訊いた。

「どうして、報われないなんて分かるんですか？」

「そんなの分かるに決まっています！」

その問いかけに、メシアロードは顔を上げることができなかった。両手をぎゅっと握りしめる。

手すりに視線の固定させたまま、メシアロードは自分でも驚くくらい強い口調で言っていた。

「私とは立場の違う存在ひとなんですから！」

自然とぶつきらばうな言い方になってしまった。

だが、アクアの方は、特に気分を害した様子はなかった。

アクアはにこやかに言った。

「……決して報われないことなんてないです。こうして、

ただ、その人のそばにいるだけで幸せだって思えるんですよ」

「……どうということ？」

「大切な人のために何かをしてあげたい、力になってあげたい、その人を喜ばせてあげたい、……私はそう願っています。

その人が喜んでくれた。……ただ、それだけで、私は、すごく、すごく幸せなんです！」

メシアロードは言葉が出なかった。

そうかもしれない。

と、メシアロードは思った。

私がレークス様のためにできることは、きっとあるはずだから……

レークス様の喜ぶ顔が見てみたい！

レークス様のことが好きだから！

誰よりも絶対に愛しているから！

だからこそ、レークス様のために、私は頑張りたい……！！
メシアロードは手をポンと叩いた。

「……は、はい」

メシアロードは瞳を潤ませて微笑んだ。力なく頷いてみせる。

「……うん」

アクアもつやつやした頬を染めて、はにかむように笑った。

お父さんとお母さんは、あの時、帰ってこなかった。けど
もう一人じゃない。

アクアと別れた後、メシアロードは、無意識のうちにバルコニー
から駆け出した。

心から大切に思う人の名を呼んで。

彼女にとって、新しい何かが始まる瞬間を、夜空の星々が優しく
見守っていた。

第12章 いつか溶ける涙（後書き）

次回から番外編の話になります。

番外編

明日を夢見て（前書き）

今回はダイタの話の番外編です。

「あの、ファミリアさん」

長い道沿いを歩き続けてようやく、そろそろ街並みが見えてきたという頃、僕の隣にいたマジヨンがファミリアさんに呼びかけた。

「どうして、ファミリアさんはダイタさんのことを運命の人だと思っただんですか？」

「あつ、そういえば……」

僕はハツとして、ファミリアさんを見つめた。

そのことは僕も前から気になっていたことだった。

ファミリアさんは何故か最初から――そう初めて出会った時から、僕のことを『運命の人』だと言って言っている。でも、それが何故なのかは、僕は全く分からずにいた。

ファミリアさんとはフレストの街で出会ったのだが、特別、運命の出会いといえるような場面も何かしらの出来事もなかったのだ。

何しろいきなり、ファミリアさんの方から僕に向かって『運命の人ですわ?』と言ってきたのだから――。

「そんなの決まっていますわ!」

ごく当然のことのように、ファミリアさんは満面の笑みを浮かべて答えた。

「もちろん、ダイタ様だったからですわ?」

と、とても嬉しそうにファミリアさんは言った。

その答えを聞いて、僕とマジヨンはガクッと肩を落とす。

「……っていうか、それってはっきり言って、答えになっていないような気がするんだけどな。」

「……それだけ?」

「はい!」

僕が啞然とした表情のままそう聞き返すと、ファミリアさんはまたにっこりと笑った。

それから少し照れくさそうに顔をうつむかせると、ファミリアさんは僕にだけ聞こえるような声でそっと耳打ちをした。

「ダイタ様は私にとって、太陽のように思えたからのですの」
僕が驚いてファミリアさんを見つめ返した時には、ファミリアさんはもうその場から移動していた。

「でも、何だかそう言うのってファミリアさんらしいですね」
呆然とする僕の隣で、マジョンはくすつと笑みを浮かべていた。

（この人と一緒なら、きっと私は輝けると思ったのですの。だって、太陽があるから月が輝くのですもの。）

それは光だった。

- - 夜の森をさまよい続ける彼女を照らす、光。

番外編2 最強勇者の戯言(前書き)

今回はレークス達の番外編の話です。

番外編2 最強勇者の戯言

「ふふふふふつ、最強勇者リアク。ここまでのようだな！」
ハリボテに描かれた、明らかに落書きのような人物が勝ち誇った爆笑を上げた。

「ふつ、貴様こそここまでだ！！皇帝レギオン！！貴様が抱く野望は俺様が必ず阻止してみせる！！」
全世界の正義を体現するリアクが熱く叫ぶ。

「できるものなら・・・」
途端、ブツと音を発して画面が暗くなった。

「あー、いいところだったのにどうして消すの？レー兄！」
と、薄暗い魔王城の一室に明るい声がした。

「あのな、もう何回、観たと思ってるんだ？」

「えつと、まだ5回くらいだよ！」
「もう、5回もだろうが！」

あくまでも嬉しそうに言うティナーに、レークスは陰険な目つきでティナーを見つめた。

「だって、リアクさんが作ってきた自作自演の映画、面白かったんだもの！」

「リアクの顔などもう見飽きたぞ」

ぶすつとするティナーに、レークスはソファにそっくり返って言い放った。

「でもでも、リアクさん、映画第2段も作るみたいだよ！」

「そんなもの、俺は許可していないぞ！」

きっぱりとそう断言したレークスに、ティナーは満面の笑みを浮かべて言った。

「でも、完成間近みたいだよ！」

唐突なティナーのセリフに、レークスは目を丸くして驚愕した。

「なにいい！？」

ティナーはそこでえへへと笑いながら訊いた。

「どうするの？レー兄」

「決まっているだろう！それなりの罰を与えるだけだ」

「レー兄、すごい！」

当然のことのように言うレークスに、ティナーはぱあつと顔を輝かせるのだった。

その後、リアクはアグリー達の証言によると、竜巻に飛ばされたのか、のみ込まれたのか、定かではないらしい。

映画第2段

『最強勇者の最後』

- 完 -

番外編 2 最強勇者の戯言（後書き）

次回から本編に戻ります。

第13章 君がいた物語（前書き）

今回から本編に戻っています。

第13章 君がいた物語

少女というものは、夢に誘われてふわふわと舞い上がってしまうものだと言われているけれど、私 レミイランもまさにそんな一人。

長い黄緑色の長い髪に、どこか幼さの残る顔立ち。一見すれば、どこにでもいる普通の女の子。

けれど私の夢は、砂糖菓子のように甘い恋でも、白馬の王子様に手を差し伸べられることでもない。

ただある人に認めてもらいたいただけ。

私の夢は、夢の世界の夢の存在である私の夢はただ一つ。

ただ一つの夢の実現こそが、私の夢。

私の現実ゆめがかなったら、消えていった夢達は私の思い出となるのかな。

「ふわあああ・・・っ」

気の抜け切った声をあげて、丸めていた背中を僕はぐっつと伸ばした。

顎がつってしまっているのではないかと思えるほどの大きなあくび。

「なんていうか、ものすごく暇だよな」

手の甲で目元をこすりながら、僕はしみじみとつぶやいた。

つぶやいてから、そう思ってしまう自分の神経の太さに、僕は苦笑してしまう。

僕の目的はちっとも果たされていなかったりするんだけど、ね。星のかけらを手に入れるためバリスタの港町に訪れた僕達は、ひとまず二手に別れることにした。僕とマジョンは宿屋の確保、フレイトとふららさんとファミリアさんは、機密船へ星のかけらを譲ってくれるように交渉をしに行ったのだ。

本当は、機密船にはみんなで行きたかったのだが、何でも今、夢月の神殿　フォレシア神殿から『夢の聖女様』が来ているらしい。そのため、今このバリスタの港町は活気に満ち溢れていた。

下手をすれば、宿が取れずに野宿決定になってしまう。

人混みを必死にかきわけて、僕達は何とか宿を取ろうと探し回ったのだが、どこもすでにいっぱいの状態だった。

どこもかしこも取れず、絶望的だった僕に、マジョンが神殿にある併設の宿なら空いているかもと教えてくれたのだ。

でも、併設の宿なんて名ばかりで、二段や三段のベットが押し込まれるだけ押し込まれた小さな部屋が二つあるかぎりだった。椅子も机もなく、ただベットだけがあるいわゆる物置状態といった感じだ。

それでも野道で、焚き火で囲んで雑魚寝よりはマシだと思い、僕達はその部屋を二つ借りることにした。

「そういえば、『夢の聖女』って一体どんな人なのかな？」

人混みでにぎわう町を部屋の窓から見渡しながら、僕はつぶやいた。

夢の夢の聖女　。

僕は彼女のことを全く知らなかった。

どんな人なのか、どうしてそう呼ばれているのか、それすらも知るよしもなかった。

『夢の聖女』っていうからには、やっぱり、夢月の女神であるリ―ディングさんと何らかの関係があるのかな？

それとも……。

「夢をお告げとして与え、そして私達、神官を導いて下さっている方です」

再び、僕があくびをしかけた時、背後から声が聞こえた。

僕は慌てて口をふさいで、後ろにあるドアを振り返る。

そこに立っていたのは、はにかんだ笑顔を浮かべているマジョンだった。

「ええと・・・」

僕は照れ隠しのように頭をかくと、勢いよく座っていたベットから立ち上がった。

そして、戸惑いながらも疑問を口にする。

「それって、神殿の巫女みたいなもの？」

「はい」

マジヨンは僕に笑顔で大きく頷いて、僕の言葉を肯定しつつ、話を自分の方へと持っていく。

「私達、神官の由縁も正にそこにあるんです」

「由縁？」

僕が不思議そうな顔で首を傾げると、マジヨンは少し切ない表情で先を進める。

「つまり、私達は夢月の女神様を信仰していますが、神殿の根幹は、まだまだ夢の聖女様のお告げに頼っているんです。昔、一人の大神官様が食料も水も失い、荒野で一人彷徨っていたそうです。しかも、いつしか霧にまかれ方向感覚すら失っていたらしいのです」
耳慣れない話に、僕は疑問を投げかける。

「てつきり、僕は神官って、ずっと前から夢月の女神様を信仰しているのかと思っていたけれど？」

「いえ、以前から夢月の女神様を信仰していました。夢の聖女様が現れたのはつい最近のことなんです」

「そ、そうなんだ・・・」

僕はそこで頭を悩ませた。

そしてその後、やっとある事に気づき、顔をあげる。

「で、でも、昔のことって・・・」

僕がそう聞くと、マジヨンは少し悲しそうな顔をした。

「数十年前のことなんです。でも、実際に代々の大神官様は彼女の夢のお告げによって導かれ、神殿の根幹は、何故か今も昔も、彼女の言葉から成り立っているのですから・・・」

そしてマジヨンは、少し考えてから言葉を次いだ。

「……彼もその一人でした。彼はやがて、力尽きて大地に倒れました。そして、夢の中で一人の少女が道を示したのです。

意識を取り戻した時、霧もまた晴れつつありました。夢の中で見た景色がそこにあり、彼は少女が示した方向へと歩き続けました。そして一枚一枚ペールをばくように霧は晴れ、その後に現れた景色は……」

マジヨンは言葉を切り、身を乗り出して聞き入る僕に、ちょっとバツが悪そうなのはに candid 笑顔を見せる。

「はつきりとは覚えていないそうなんです……」

僕はガツクリと肩を落とした。

ここまでできて、それはないよ……（涙）

うつつ……

「すみません。そこから先のことは、まるで夢の中の出来事だったらしいというのは分かっているのですが、何を見たのかまでは分からないんです」

マジヨンは目蓋を閉じて黙り込み、歯を食いしばるようにつぶやいた。

「……私達には 母には話してくれてもいいことなのに」

「えっ？」

眉を寄せながら、僕は首を傾げた。

「……ううん、何でもありません」

少しさびしそうな表情で、マジヨンは言った。それは、どこか悲しみに満ちた眼差しだった。

僕は一瞬、ドキッと胸が高鳴る。

そして、何故か僕は、以前、マジヨンが話してくれたマジヨンのお母さんのことを思い出していた。

『いい、マジヨン。たとえどんなに願っても、決して時間は止まってはくれないの。だからね、今、あなたができることを、やれることをしなさい。自分のために、そして誰かを助けるために力

を使いなさい。 そうすれば、きっといつか、あなたのことを、本当に大切に想ってくれる人が現れるはずだからね。」

マジヨンのお母さんが、マジヨンによく言っていた言葉。

マジヨンのお母さんって、本当に強い女性むすめだったんだろうな。

マジヨンの話を聞いていると、本当にそう思う。

でも、と僕は思う。

じゃあ、マジヨンのお父さんってどんな人だったんだろうかと。

ラミリア王国の図書館で、マジヨンはお母さんの話はしていたけれど、何故か、お父さんの話はしていなかった。

どうしてなのかな……？

僕がそう真剣に考え込んでいる間にも、マジヨンは言葉を続ける。

「……そして、彼は夢の中で少女に導かれては目覚めて歩きまわした。 彼は朦朧もうちゅうとした意識で、なんらかの魔物に化まかされているの

ではないかと考えたそうですが、そのままフラフラとついていったそうなんです。 そして彼は遺跡にたどり着き、そこで知識を得た

そうなのです。 ……いえ、もしかしたら、本当にそんな夢

を見たのかもしれませんが。 そして気づくと、彼はまた霧のただ中において、再び意識を失い、そして次に気がついた時はベットの上

にいたそうです。 小さな村の入り口に倒れていたのだそうです。 素性の知れぬ大神官様に、その村の人々はとても親切にしてくれました」

「でも、それだと……」

僕が口を挟みかけたが、マジヨンはにっこりと笑って、それを止める。

「はい、彼も最初は全てが夢だと考えました。 そう考えるのが、一番自然です。 しかし、その後も少女は夢に現れて、彼も少女は、瀕死の彼が頭の中に創り出した幻だと自分に言い聞かせていたそうです。 体調が戻れば、いずれ妙な夢も見なくなると。 けれどやがて、自分が倒れていたその村が、最初に迷った場所から遙か遠く、

大陸さえも超えた場所にあることを知り、彼は激しく混乱したそうです。自分が思っている以上に記憶の脱落があり、旅をしたことを忘れていたのだと彼は考えようとなりました。けれど、少女は夢に現れ続け、彼を誘い続けました。私は堪え切れなくなり、村の人達に別れも告げず、ついにそこから飛び出したのです。少女の導きに従ったわけではなく、少女から逃れようとしたのです」

マジヨンは僕に小さく頷いてみせる。

僕は黙って、けれども少し半信半疑で話を聞いていた。

「う、うん」

あまりにも突飛つな話で、いまいち話が呑み込めない僕はマヌケな声で唸った。

けれど、マジヨンも、そんな反応には慣れている様子で、にこやかな笑顔のまま、先を続ける。

「何の準備もせずに飛び出した彼は、再び荒野で死にかけました。

渇きで朦朧とした彼の耳に、少女はささやき続けていました。

足元を掘れと。彼は逆らう気力もなく、素手で土を掘りはじめました。すると、水が湧き出したそうです。それから少しずつ、

彼は少女の存在と言葉を信じるようになり、彼女のことを夢の聖女と呼ぶようになったそうです」

そこでマジヨンは一息継ぎ、僕を見つめた後、先を続ける。

「お告げは多岐に渡り、しかも確実でした。けれど、直接結果をもたらしてくれるわけではありませんでした。結果を得るには、彼自身が頭を働かせ、自分の足で歩き、手を動かさなければなりませんでした。そして目標が大きくなるに従い、彼一人では実現することが不可能になってきました。彼は仲間が必要と感じ、協力者を求めました。以前の彼であれば、他人にましては魔族や魔物なんかは協力を乞うなどしなかったのですが、次々と実現する夢の魅力は彼を変えてしまったのです。彼は夢を語り、彼らと夢を共有することで、より大きな夢を叶えることに幸せを感じるようになったのです。こうして、のちにあの『魔雲の大公』の異名を

持つセルウィンが誕生したのです」

真顔で言うマジヨンに、僕は一瞬、何を言われたのか分からなかった。けれど顔を引きつらせて、息を吸い込む。

そして。

「セルウィンって、神官だったの!？」

口を半開きのまま、驚いている僕に、さらなる衝撃的なマジヨンの言葉。

「…………セルウィンは、実は…………わ、私の父…………なんです」

「えええええっ

!?!?!?!」

語尾の違いはあるものの、僕は いや僕達は思いっきり声を合わせていた。

……………って？

「えっ？」

僕はハツとする。

そこでやっと、戻ってきていたフレイ達に僕は気づく。

「嘘…………だよね？」

僕は半ばうつろたえながら、恐る恐るマジヨンに訊いた。

「本当のこと…………です…………」

マジヨンは辛らつそうに顔を曇らせた。

「ふざけるなっ!」

そう言ったのはフレイだ。血管が千切れそうなほど、フレイは頭に血を上らせていた。大声をあげるだけでくらくらしそうだ。

しかも、何故かフレイは、突然、マジヨンでなく、僕の胸ぐらをかきつつかみあげたのだ。

意味も分からず、というか、全く意味もなく、僕を揺さぶるフレイに、僕は悲しくなって涙を流した。

隣のふららはさんは反対に、真っ青な顔で目を白黒させている。

「じゃあ、セルウィンの配下なのか!」

「ち、違います!?!?!」

すぱつとマジヨンに切り返され、フレイは言葉を失った。

「私は・・・、私と弟のアグリーは、セルウィンとは関係ありません！ セルウィンは、私の母を殺した仇なのですから・・・。」
「仇・・・。」

僕が訊くと、マジヨンはうつむいたまま、コクンと頷く。

「だ、だけど　な」

「フレイさん」

それでもなお、糾弾しかけようとするフレイを、ふららさんが制する。

「ふららさん・・・。」

フレイが振り向くと、ふららさんは真剣な顔で小さく首を横に振った。

「ちっ・・・。」

煮えきれない様子で舌打ちすると、フレイはベットに倒れこんだ。フレイとしては、かつて名もなき大陸でセルウィンの配下であったターンに仲間を全滅させられたのだ。どうしても、納得できないのだろう。

「そんなことよりですか？」

「そ、そんなこと??？」

場違いなほどの明るい声で言うファミリアさんに、僕は怪訝な顔をする。

「だって、そうですね！ マジヨンさんのお父さんがセルウィンでもそうでなくても、マジヨンさんはマジヨンさんですもの！」

僕はまじまじとファミリアさんを見る。

そして、僕はハツとした。

そっだよ！

例え、マジヨンのお父さんがセルウィンでも、マジヨンはマジヨンじゃないか！

そのことに変わりはない。

僕は一つ頷くと、当たり前前のことを当たり前前のように言えるファミ

リアさんが少し羨ましく思えた。

「……俺も、ふららさんの父君が、例えセルウィンや天の魔王でも君への愛は変わらないさ!」

ふららさんの肩に手を回しながら、フレイは言った。

先程まではマジヨンのこと、責めるような言い方だったのにな。と、僕はしみじみと思った。

というか、いつのまにフレイはふららさんの隣に行ったのだろう。うん。

「みなさん、ありがとうございます……」
そつと涙を拭くと、マジヨンは輝くような笑顔で笑った。

「で、そっちの方はどうだったの?」

僕はホツとした笑顔を浮かべると、フレイに星のかけらのことを訊いた。

意外と早かったため、交渉はお手のものだったのかもしれない。

「だめだ」

「うんうん。だめだったんだ! ……つて!??」

そこで、僕はやっとフレイの言葉の意味を理解する。

僕は目をパチクリさせながら、フレイに訊いた。

「ど、どうして!??」

「何でも、夢の聖女様がお帰りになるまでは、この神殿で、星のかけらは保管しておかなくてはならないんだそうだ」

不満そうな顔で、フレイはそう告げた。

その瞬間、フレイがぎろりと僕を睨んでみせたが、僕はさっと視線を逸らす。

うつつ……。

何でも僕に対して、八つ当たりはやめてほしい…… (冷汗)

「でも、ダイタ様? それが終われば、星のかけらを渡してくれるそうですわ!」

ファミリアさんは、真意に満ちた表情で僕に迫った。

「一週間なんて、すぐですわ」

「いつ、一週間も!?!」

意表を突かれた僕が聞き返すと、ファミリアさんは両手を胸の前に合わせて祈るように答えた。

「はいですわ! でも、ご心配は無用ですわ。愛し合う二人には・

・、一週間は短すぎますわ?」

顔を輝かせながら僕を見つめ続けるファミリアさんに、僕は何も言えず、たじたじとなってしまう。

「えっと……」

「愛し合ってなんかいません!」

僕の言葉をさえぎって、突然、大声で叫んだマジヨンを見て、僕は思わずたじろいた。

「愛し合っていますわ!」

そう言って、ファミリアさんはつつつと僕に身を寄せてくる。

あつう………。

「愛し合っていません!」

マジヨンが僕をファミリアさんから引き離そうと、僕の服を引っ張った。

「愛し合っていますわ!」

ファミリアさんも、負けずと僕の服を引っ張り返す。

「どうして、いつもわたくしの恋路を邪魔するのですの!」

「どうしてって……」

「愛し合う二人が一緒にいることは当たり前のことですわ! それとも、マジヨンさんも、ダイタ様のが好きなのですよ!」

ファミリアさんは急に強い口調になって、反撃に転じた。

「わ、私は……その……」

顔を真っ赤にして説明しようとしたマジヨンは、ふとあることに気づいた。

「あ、あの、私、ダイタさんに見せたいものがありました! ダイ

タさん、一緒に来て下さい！！！！」

「あっ　　！！！！」

フレイ、ふららさん、ファミリアさんの三重奏があがるより早く、マジョンは僕の手を引っ張ると神殿の奥へと駆け込んだ。

「ふっ……やるな、ダイタ」

羨ましそうに、フレイはにやりと笑った。

「ずるいですわー！」

悲痛なファミリアさんの叫びをかき消すかのように、ふららさんはほがらかな笑顔で言った。

「ダイタさん達、楽しそうですね。私も一緒に遊びたいです？」

いや、遊びじゃないし　　。

僕はマジョンに引きづられて、神殿の一番奥の部屋の前に立っていた。

ほかの部屋とは感じが違うドアである。重厚感がある、頑丈そうな造り。ドアノッカーも、神々しい聖女を模したものである。

これまで見た限り、神殿のドアはどれも大して違いのないデザインをしていた。儀式の間、祭壇の間などは、さすがに特別な造りをしてきたが。

ということとは、ここ、特別な部屋なのかな？

ノックをしてから、マジョンはそつとドアを押した。しばらく使われていなかったのだろうか。手がたえが少し重く、引っかかるようだった。

「夢の聖女様の肖像画です」

部屋に踏み入れた瞬間、僕の視線は壁に釘つけになった。

「これって!？」

僕は吸い寄せられるように壁に近づいてゆく。

壁には豪華な額で守られた大きな絵が、一枚飾られていた。

長い黄緑色の髪、大きな瞳、ふっくらした頬、細い身体、吸い込まれそうな美少女だった。僕と年代で、まるで生きているように額縁の中で微笑んでいる。

絵だというのに、どこか不思議な感じがひしひしと伝わってきた。それほど、満ち足りた、とても温かな少女の肖像画だった。

僕は自分でも理由が分からなかったのだが、その少女の顔を見つめていると不思議と心が落ちつくような感じがした。

僕は胸元で指を組み合わせると、ぼうつと夢見心地ゆめみこころちでつぶやいた。「こんな素晴らしい絵、想像とかじゃ描けないよね。こんな聖女がいるなんて、……会ってみたいな！」

「ずいぶん、気に入ったみたいですね。ダイタさん」
マジヨンはにっこりと微笑んだ。

マジヨンも気に入った絵なのだろうか。肖像画から視線を外していなかった。

「こんな素晴らしい絵が、ひっそりと飾られているだけなんてもったいなさすぎるよね。ここの大神官様に頼んで、もっとばばんと飾ってもらったら！」

口にしなから、僕は我ながらいい考えだと目を輝かせた。

「ねえ、早速、お願いしに行こうよ！ マジヨンも一緒に行こう」
「待って下さい！」

マジヨンは僕の袖口をつかみ、悲しそうに見上げた。

「この絵はだめなんです」

「そんなの言ってみないと分からないと思うんだけど？」

マジヨンは僕を見据えて強く言った。

「……この絵はだめなんです。私も素敵な絵だとは思っていません。でも、それだけじゃないみたいなのがして……」

そう言うと、マジヨンの頬にそつと涙が伝わった。

それを見て、僕はぎゅつと唇を噛み締めた。

そういえば、マジヨンのお父さんであるセルウィンは、彼女の導きによって変わったって言っていたっけ。

「マジヨン・・・」

僕は声を震わせてそう呼んだ。

だが、何故か、次の言葉が出てこない。

マジヨンは涙のうるんだ瞳で僕を見返すと、涙を拭いて言った、
「ダイタさん、そろそろみなさんのところに戻りましょうか？」

「う、うん」

僕はそう言ったが、言葉に戸惑いの色を隠せないでいた。

そして、そんなマジヨンに何もしてあげられない僕の不甲斐なさに心を痛めていた。

「で、どうだったんだ？」

「えっ？ 何が？」

戻ってくるなり、フレイにそう耳打ちされて、僕は首を傾げてみせた。

そんな態度にげんなりときたのか、フレイはこれ以上とない直球なセリフを吐く。

「だ・か・ら、二人つきりはどうだったんだ？」

「へっ・・・？」

フレイに真顔でそう言われて、僕は思わず、取り乱してしまふ。顔を真っ赤にしながら、僕は慌てて答えた。

「ど、どうって、肖像画を見ただけだよ」

僕が慌ててそう取り繕うと、フレイは不満げに僕を見た。

「本当のことか！」

「本当だってば！」

ムキになって反論する僕を、フレイはうさくさげに見つめた。そして、ひときわ荒く鼻息を付いて、

「やっぱり、怪しいな」

「だから、違うんだってば！」

必死に弁明しながら、だんだん僕は淋しくなってきた。

僕って信用性がないのかな。

はあっ……。

「ダイタ様、今度はわたくしと二人つきりになりましたでしょうか？」
「ファミリアさんがそう言っつて、僕の腕をぐいっつと引っ張った。」

「あの、えつと……。」

僕は慌ててその場から立ち去ろうとするのだが、ファミリアさんが僕にしがみついで動けない。

「離れて下さい！ ファミリアさん！！！」

と、怒りの表情のマジヨン。

「嫌ですわ！ わたくしはもう、ダイタ様のそばを一時も離れませんわ！」

「にくいな、ダイタ」

と、ファミリアさんの大胆なセリフに、不遜な笑みを浮かべるフレイ。

「これからはずつとずつと、一緒ですわ！ ダイタ様？」

「不潔です！ ダイタさん！」

マジヨンの叫びに、僕はうめいた。

話かもうすでに、やばい方向に言っているような……（涙）

「た、助けてほしい……。」

僕は二人の女性にもみくちやにされながら悲鳴を漏らす。

混沌のありさまと化している光景を、一人離れて穏やかな目で見ながら、ふららさんは肩をすくめてみせる。

「私もずつとずつと一緒になります。ダイタさんと」

ふららさんがそう言っつて、はにかんだ笑顔を僕に向けると、フレイも容赦なく、僕に殴りかかっていった。

ああっ……。

その後、やっと開放された僕は一人、月明かりを頼りに夜道を散歩しようとしていた。

「ただ、誰もいない夜道を一人散歩するのは少し淋しい気がする。ひとまず歩き始めようとした僕は、人の気配を感じて振り返る。月明かりも差さない暗い神殿の壁に、そつとよりかかる一人の少女の影。表情も姿も闇に溶けて朧おぼろげだけど、けれどそれが誰なのかは、すぐに気づく。」

「君って、夢の聖女様だよな？」

「人影は動かず、何も答えない。」

「違うの？」

「人影は答えず、ただじつと、僕を見つめている気配だけが続く。」

「黙っていないで何か言つてよ。」

「微動だにしない。」

「応えたくないなら、それでもいいよ。でも、どうしてここにいるの？」

「そして初めて、姿と同じく闇に消え入りそうな微かな声で少女は応える。」

「あなたに会いたかったから……。」

「僕は怪訝な顔をする。」

「どうして？」

「あなたに会えば、あの人に会えるかもしれないから。」

「あの人って？」

「彼女は無言で答えた。」

「僕に関係ある人？ それとも、僕に記憶がないことに関係ある人？」

「彼女からの答えはない。」

「僕はじつと、彼女を見つめていたけれど、やがて肩から力が抜ける。」

「うん、わかった。じゃあ、もう用はないよね？僕はこれで！」

「えっと……。」

「私はレミイラン。あなたとはまた会えますよ。ダイタさん」
「僕は凍りついた表情で、レミイランさんを見つめる。」

彼女は微笑みを絶やさず、僕を見つめた後、闇に溶け込むように姿を消した。

「あっ、あれっ?」

僕はそこでやっと、自分の手のひらにある『星のかけら』に気づく。

僕は何度も何度も、首を傾げてみせた。

あの人が僕に渡したのかな?

でも、レミイランさんは、僕とは直接、話して、いや、会ってもないはずなのに……???

不思議に思いながらも、僕はぎゅっと星のかけらを握りしめた。

そして、思う。

レミイランさん、あの人は一体、何者なのだろうか　と。

第14章 終の彼方 そして始まり

「ここって、どこだろう？」

僕はふと見上げた空が、先程までの空とは違っているのに気づいてつぶやいた。

そして、周りを見回してみる。

いつのまにか、空は夜空から昼の真っ青な空に変わり、場所も神殿の前から森の中深くに分け入った場所に変わっている。

「どうということなんだろう？」

僕は不思議そうに首を傾げる。

相変わらず、緑の梢しやうの向こうに見える空には、穏やかな青空にふわふわとした白い雲が浮かんでいる。

僕はしばらく、周りをキョロキョロと見渡しながら、森の奥へと進んでいった。

だが、誰一人の姿もない。

「うん、誰もいないのかな？」

僕がそうつぶやきかけた、その時だった。その耳が遠く聞こえる歌声を捉えた。

さよならと言えなくて

本当にごめんね

この星空そらに輝く小さな星

あなたのそばにいたかった

懐かしい声と旋律。あの時、レーブンプルクの街で、リーティングさんと一緒に歌った歌だ。微かなその声と、言葉までははっきりと聞き取れないが、そのフレーズだけは不思議と耳に残る。

「リーディングさんの・・・声？」
それは細く悲しげで、今にも消えてしまいそうな女の子の、いやリーディングさんの声だと分かったとたん、僕は声に向かって走り出していた。

歌に導かれて、森の奥へと僕が駆け出してゆくと、そこには小さな小屋があった。その小窓の向こうに見えるのは、確かにリーディングさんだ。

リーディングさんは寂しそうに、誰に聞かせるというわけでもなしに、たった一人で歌を歌っている。そこは、小さなベットがあるだけの、小さくて薄暗い部屋だった。

僕の瞳には、リーディングさんはまるで暗闇の中の一輪の花のように見えた。

僕は歌を邪魔したらいけない気がして、立ち去ろうとする。だが、なかなか、彼女から目が離せないでいた。

もしかしたら、そんな彼女の姿に見とれ、声をかけることも、立ち去ることすら忘れていたのかもしれない。

「あの時の歌を歌っているんだ。リーディングさん」

僕はあの時の、レーブブルクでの出来事を思い出し、顔を赤らめてみせる。

けれど、彼女の声は小さく、無粋な壁に隔てられ、ここまで来て
もなおその言葉までは、はっきりと聞き取れない。

僕はもつとリーディングさんをよく見ようと、そしてもつと歌をよく聞こうと、無意識のうちに小窓にへばりつく。

「あっ・・・！！」

その時、僕は思わず、小窓の隅に落ちていた金属片を踏んでしまう。バリイと鋭い音がし、わざと歌を邪魔するかのようになり、無粋な音を響き渡らせる。

「誰？」

リーディングさんが気づいて、顔を上げる。

僕は照れながら、最初の質問をした。

「ねえ、リーディングさん、久しぶりだね。　どうして、ここにいるの？」

その質問の意味が分からなかったのか、リーディングさんは不思議そうに僕を見る。

僕は慌てて、思いつくことを片っ端からまくしたてる。

「レーブンブルクの街の北の森で僕達を助けてくれてありがとう！　ずっと、伝えたいと思ってたんだ。　本当にありがとう！」
片手を胸に当てて願うように僕は言った。

リーディングさんは小窓に近づき、僕を見つめながらささやいた。
「あの、誰ですか？　お会いしたこと、ありましたか？」

僕はその言葉に驚愕し、表情が凍りつく。

まるで、予想外の攻撃を受けた戦士に、よく似たうるたえ方だった。

「なっ、何言っているんだよ……。　僕を名もなき大陸に導いてくれたのは、リーディングさんじゃない！」

僕は動揺を隠せずにいた。訴えかけるかのごとく、叫んだ。

だけど、リーディングさんは黙って首を横に振るだけだった。

どういうことなんだろう？

リーディングさんが、僕のことを知らないはずがないのに……
・！？

僕はうーんと頭を悩ませてみるが、もちろん、何も分かるはずがない。

僕は大きな溜息を付くと、気を取り直して言った。

「僕はダイタだよ。　リーディングさん、もしかして、この部屋から出られないの？」

「鍵がないと開かないんです。　私にかまわず」

「じゃあ、鍵を探してくるよ。　絶対に君を助け出すから！　約束するよ！」

僕はリーディングさんの話を最後まで聞きもせず走り出した。だが、数歩もいかないうちに戻ってきてしまう。

そして、間の抜けた声で訊いた。

「鍵つてどこにあるの？」

「私に構わず、早く逃げて下さい！ もうすぐ、私を捕まえて、私の 夢月のミリテリアになろうとするあの人達が戻ってきてしまいます！ 早く、逃げて下さい！」

小さな悲鳴を上げるように、リーディングさんは叫ぶ。

でも、僕は笑顔のまま、畳かけるように「鍵」と繰り返す。

そんな僕の強引さに参ったのか、リーディングさんは小さな声でそれに応える。

「……あの人達が持っています」

「じゃあ、ここで待っていたら、会えるよね！」

僕がそう笑顔で言っていると、リーディングさんはさらに顔を青ざめる。

「そんなことより、早く逃げて……」

「心配しないでよ。 約束したでしょう！ 必ず助けるって！ だから、大丈夫！」

はかない声でそう訴えかけるリーディングさんに、僕は小指を立てて、小窓に押し付ける。小指をからませる約束の仕草だ。

けれども、リーディングさんは両手を後ろに隠して悲しそうに首を振る。

「必ず、君を守ってみせるよ！」

僕はそんなリーディングさんにつこりと笑いかけたが、リーディングさんは両手で顔を覆ってうつむいた。

「お願い！ 早く逃げ」

リーディングさんの声をさえぎるように、高らかな高尙が響き渡った。

「それはもう無理な話だ！」

「えっ？」

背後から突然聞こえてきた罵声はせいに、僕は驚いて振り返る。

すでに、数人の男の人達に、僕は囲まれていた。僕はいくつもの剣に突きつけられ、とても逃げられる状態じゃない。

彼らは僕を森の奥へと投げ出して、ことさら乱暴に扱った。

「ふん。 貴様も、夢月のミリテリアとなるうとする輩か」

「ちっ、違うよ！ 僕はリーディングさんを助けたくて！」

僕がそう訴えても、まだ彼らはいぶかしげに眉を寄せる。

彼らはもう一度、うさんくさげに僕を見つめた。

そして、ひときわ荒く鼻息をついて、

「やっぱり、怪しいな」

「だから、違うんだってば！」

必死に弁明しながら、だんだん僕は悲しくなってきた。

「まあ、いい。 我々の姿を見られた以上、生かして返すわけには
いかな！」

彼らの中で一番、偉そうな男は、嬉しそうにニヤリと笑った。それは偉そうにしているが、そう振る舞い扱われることが好きなだけで、中身の伴わない俗物の笑いだ。

「くっ、くそっ！」

僕が顔を上げた時、その目の前には男の剣の剣先があった。

あの男は興奮にその目を見開き、薄笑いさえ浮かべて、僕の眉間に剣先を突きつけている。

「やめて下さい！」

そう叫んだのはリーディングさんだ。

「私、できるかぎり協力します。 だから、もうやめて下さい！」
それを聞いて、男はにやりと笑う。

「最初から、そういう態度を取ればいいんだ。 が、今後のためにも逆らった代償は高くつくってことを、二度と俺に逆らう気など起こさぬように、その目に焼き付けてやる」

そして、剣先を僕に向けたまま、リーディングさんを、他の彼らを、横目でゆっくりとじらすようにねめつける。

「これで、俺は夢月のミリテリアか！」

男はにやっつと満足げに笑った。

僕は悔しかった。この男にとって自分は、リーディングさんに言

うことを聞かせるためだけの存在でしかないことが悔しかった。僕がここにいることで、リーティングさんが意に沿わぬことに従わせられようとしている。

死ぬ気で逆らうことはできるだろうが、それこそがリーティングさんを苦しめることになる。自分がいなければ、いやもつと強ければ、夢月の力を使えば、負けはしれないと思う。いや、せめて、こいつらの好きなように振る舞わせたりはしない。

それなのに、何故か、全く夢月の力が使えない。僕は悔しげに拳を震わせる。

力が欲しい、こいつらを倒せるような力を、リーティングさんを護れるような力が欲しいと、僕は心底思った。

その時だった。

ターンと戦ったあの時のように、僕の頭の中に聞き覚えのある女性の声が聴こえてきた。

「あなたに、ミリテリアの力を。 夢月のご加護を」
それは確かに、リーティングさんの声だった。

気がついてみると、リーティングさんがまるで祈るように僕のことを見つめていた。

そして、僕とリーティングさんの周りを、不思議な虹色の光が交差していた。

「ミリテリアの力・・・だと!？」

突然の出来事に、男は驚愕する。

いや、彼だけではない。彼のその仲間も恐怖で顔を歪めている。

「ゆ、夢月の力だと・・・!？」

彼らは怯えた表情で僕を見ていた。

特に寸前まで偉そうに振る舞っていたあの男は、今、目の前で起きた突然の出来事に、今までの強気な態度も忘れ、慌てふためき逃げ出した。

そして男が動いたとたん、僕は軽快なステップで男へと迫っていつ

た。

そして、持っていた剣を抜き払う。

「り、リーディングさん、力を貸して！ レバエレーションズー
っ！」

雄叫びを上げた僕の叫びとともに、剣が虹色の光に包まれていく。僕は渾身の力を込め、彼を剣でなぎ払った。

「ひっ、ひいいい……！！！」

何とか致命傷を避けた男は、僕を一目見ると、一目散に逃げ出した。彼の仲間達もそれに続く。

僕は彼らが落とした鍵を拾うと、小屋の扉を開ける。

「ダイタさん、大丈夫ですか？」

扉が開くと同時に、リーディングさんが僕の元に駆け寄ってくる。

「ありがとう。リーディングさんが僕を助けてくれたんだよね」

剣を柄に直した僕は、まず大きく深呼吸し、そして笑顔でリーディングさんに向ける。

するとリーディングさんも、今にも泣きそうな、けれどほっとしたような微笑みを返した。

「あの、ダイタさん」

しばらくして、リーディングさんがおずおずと僕に語りかける。

「ん？」

きょとんとする僕に、リーディングさんは真意の眼差しで見つめた。

「私も……、私も、あなたと一緒に連れて行ってもらえませんか？」

「へっ？」

リーディングさんは頬を染めて、はにかむような笑顔を見せた。

「ずっと、そばにいたいんです！ ダイタさんのそばに！」

そしてリーディングさんは、何も言わずに僕にしっかりと抱きついてきた。

僕はただ、顔を真っ赤に赤らめて、照れくさそうに頭をかいてい

るしかなかった。

「ダイタさん、大丈夫ですか!」

気がつくのと、僕の目の前にはマジヨンの姿があった。

いつのまにか、僕は元いた場所に、神殿の前に立っている。

「あれ?」

「どうかされたのですか?」

マジヨンは心配そうに僕を見つめている。

「リーティングさんは……」

「えっ?」

マジヨンはきよとんとする。

そして、ある事に気づき、ハツとした。

「……いえ、ダイタさん、一人でしたけれど」

マジヨンは申し訳なさそうに、顔をうつむかせた。

そしてその時、僕が持っていた星のかけらを見て、驚く。

「白昼夢でも見たんじゃないのか」

「いまだにその事に気づいていないフレイが、呆れたようにつぶやく。」

今のって何だったんだろうか。

もしかしたら、僕の記憶に関係あることなのかな。

「あの、何か、思い出されたのですか?」

「えっ、そういうわけじゃないんだけど……」

マジヨンにそう聞かれると、僕は困ったように頭を抱える。

そして、夢の聖女であるレミランさんに出会ったこと、先程のリーティングさんのことを簡単に説明した。

「あの、夢の聖女様に……?」

「うん。何だか、僕のことを知っているみたいだった」

僕はそう言っつて、自分の手のひらにある星のかけらをじっと見つめる。

「この星のかけらも、どうやら彼女からもらったものみたいだし。うん。」

「で、どういう人なんだ」

「にんまりと嬉しそうに含み笑いを浮かべながら、フレイは訊いた。「ど、どういう人って言われても……」」

「僕はやっぱりといった顔で慌てる。」

「フレイなら、絶対にそう聞いてくると思った……」。

「僕はそう思うと、がっくりと肩を落とした。」

「ほら、あるだろう。綺麗な人だったとか、かわいい人だったとか……。いや、聖女様だから、可憐な人か！」

「え、えっと……」

「僕は思わずなんて言っていていいか分からず、言葉を詰まらせていると。」

「フレイさん……」

「神妙な表情でふららはさんはフレイを見つめていた。」

「ふららさん！　ち、違うんだ！　これは……」

「フレイは必死になって弁解の言葉を模索する。ふららさんとフレイは、ほぼ同時に次の言葉を発した。」

「フレイさんも、その聖女様とお会いしてみたいんですね。私も」

「お友達になりたいです」

「あっ、その、なんだ、この世界のことを知ること必要だと思っただけさ！」

「……」

「僕ははつきりと思った。」

「間違いなく、会話が全く成り立っていないと。」

「僕達は次の日、神殿の祭壇の間に訪れていた。前の晩に、マジヨンに頼んで『夢の聖女様』であるレミイランさんの謁見を申し込んでもらったのだ。」

「僕はもう一度、『夢の聖女様』に会ってみたいと思っていた。」

もしかしたら、何か僕のことについて、知っているのかもしれない。何か、僕の記憶について、手がかりがつかめるかもしれない。

そう思って、マジヨン達にそのことを相談したら、意外にも全員、それに賛成してくれたのだ。特にフレイは、絶対に反対すると思っていたから、喜びもひとしおだ。

まあ、フレイが大いに賛成してくれた理由は言うまでもないのだが。フレイに今回のことを話した後、しばらく、フレイはじつと何事か考えこんでいたが、ポンと手を叩く。その口元には、にやりと愉快そうな笑みが浮かんでいた。

そして。

「……いいぜ！」

言うが早いか、フレイは僕の肩を叩く。

「フレイ……！」

僕が嬉しそうに言うと、フレイは凄みのある薄笑いを浮かべた。

「いや、なに、俺もおまえに言われるまでもなく、そうするべきだと思っていたからな！」

「ありがとう……！」

さぞ自信ありげなフレイの言葉に、僕は何だか嬉しくなる。

それから僕に聞こえないような小さな声で、フレイはぼそりと言葉を付け足す。

「……まあ、夢の聖女様に会ってみたかったから、という気持ちがないわけではないがな」

フレイは一瞬ほくそ笑んだ。

恐らく、僕に聞こえないように言っているんだろう。自分では。だが、それは僕の耳にはっきりと聞こえてしまったのだった。

まあ、フレイらしいといえば、フレイらしいけれど。

僕は苦笑しながら、肩を落とした。

やがて僕は、祭壇の間の重々しい扉を押し開ける。

「ここに、夢の聖女様であるレミイランさんが……」

部屋に入った僕は、驚嘆の声を漏らした。今までの部屋とは違い、この部屋は、無数の小さな水晶で満たされていたからだ。天井はおろか壁にまで埋め込まれた水晶が煌めく様は、聖女の部屋にふさわしく、まるで星空のように美しかった。

「お待ちしていました、ダイタさん」

部屋の奥に響いた静かな声に視線を移すと、黄緑色の長い髪の少女が微笑んでいた。白いワンピースに、瞳と同じ赤色のリボンを髪と胸元につけた、美しい少女だ。

あの時は暗闇でよくは見えなかったけれど、あの夜で出会った時とは全く違う服装だった。

「こんにちは、レミイランさん」

レミイランさんは一番に部屋に入ってそう挨拶した僕に顔を向けると、何を思ったのかこんなことを言い出した。

「私のことは、レミイでいいですよ。ダイタさん」

「へっ？」

驚いたように、僕は目を見開く。

少なくとも最初に出会った時は、こんな感じの性格の女性だとは思ってもいなかった。てっきり、無口でお堅いイメージの人だなと思っていたのだが。

そんな僕の心を代弁したかのように、レミイさんはくすつと笑う。

「あの時はごめんなさい。つい、あなたに見とれてしまったの」

彼女のその言葉に、ピクツとマジョンが、フレイが、ファミリアさんが反応する。

「どういうことなんでしょうか？」

「どういうことですか？」

ムツとした顔のまま、マジョンとファミリアさんが僕に言い寄ってきた。

「いや、あの……」

「ダイタ、おまえ……、意外と罪な男だったんだな」

少し悔しそうに言いながら、フレイは僕の肩を叩いてきた。

うつうつ、フレイは絶対に勘違いをしている！ 間違いなく、勘違いをしている！？」

僕は慌てて、顔の前で手を振った。

そして、それを不定する。

「ちっ、違うよ！ ただ・・・」

だが、ファミリアさんは僕に最後まで言わせない。

「ご心配はありませんわ、ダイタ様！ わたくしはダイタ様と、これからはずっとずっと、そばにいることになりますから大丈夫ですわ？」

と、どさくさにまぎれて、ファミリアさんは僕に抱きついてくる。
あうつ・・・。

そのとたん、マジョンは怒りで顔を真っ赤にしながら叫んだ。

「何をしているんですか、ファミリアさん！」

「愛し合う二人には、普通のことですわ？」

「普通じゃありません！」

マジョンはそう大声で不定すると、二人は不遜な笑みを浮かべたまま、にらみ合いを始める。

「みなさん、楽しそうですね」

ただ、一人、ふららさんだけがほがらかな笑顔でそうつぶやいた。

僕はその隙に助けを求めて、レミイさんに声を上げる。

「どうして、僕のことを知っているの？」

僕がそう聞くと、何故か、レミイさんは僕に顔を向けたまま黙り込んでいる。

先程までの優しい笑みはすでになく、厳しい表情で僕の前に立っていた。

「私はあなたのことを見ていたわ。 ずっと」

厳かな声でレミイさんは言う。

「夢月の女神であるリーディングがあなたのことを知っているように、私もあなたを知っているの」

僕のことを見据えるように、そして喰いいるかのように見るレミイ

さんを見て、またも不思議な気持ちになった僕は、聞かずにはいられなかった。

「リーディングさんのことを知っているの？ それに、やっぱり、僕のことを知っているんだね！」

「ええ。ダイタさん……」。聞いて下さい」

僕に背を向け、レミイさんは高い天井を見上げる。

「私には、この世界の手が手に取るように分かるの。これから起こる未来も、そして、今までのことも。だから、お告げとして、みんなに夢で教えてあげられる」

「何で、夢で、なんだ？」

フレイが不満げに、疑問を口にする。

それを聞くと、レミイさんは硬くなげに、それに答えた。

「確かに、言葉で伝えた方が早い場合はあるわ。ですが、ほとんどは、はるか遠くの地で起こること、夢で伝えるしかないの」「なるほどな」

納得したかのように、フレイは大きく頷いてみせた。

「あ、あの……」

僕は言いにくそうに、おずおずと口を挟む。

「それで、どうしてレミイさんは、僕のことを知っているの？」「だけでも、レミイさんはその質問には答えずに、ただ静かに告げた。

「ダイタさん、あなたは大きな流れの中で、厳しい運命を背負わされています。それはこの世界の運命をも変えてゆくことなの」「僕が!？」

驚きを隠せない僕に、レミイさんは振り返る。

「ただ、ひとつだけ……、忘れないで下さい。あなたの未来は、あなたの手の中にあります。どんな過去が待ち構えていても、何があっても、自分が正しいと思う道を選び取って下さい。そして自分の選択を信じて下さい。忘れないで」

「レミイさん……」

混乱する頭を整理できないながらも、僕は言った。

「その、突然、そう言われても、僕には……………」

「そうですね。ごめんなさい」

レミイさんの表情に優しさに満ちた笑みが戻る。

「でも、何かあった時には、私の言葉を思い出して下さいね」

そう言ったレミイさんは、微笑んではいたが、どこか寂しげだった。

「ダイタさん……………」

祭壇の間でレミイさんとの謁見を終えた後、僕はマジヨンに呼び止められた。

「どうしたの？ マジヨン」

「私、分からなくなりました」

どこか、沈んだ表情のマジヨンに、僕は首を傾げる。

「私、ずっと、夢の聖女様を恨んでいたんです。父が変わったのは、あの人のせいだから……………。でも…………、分からなくなっていました」

マジヨンはうつろな瞳のまま、顔をうつむかせる。

「私、ずっと前に、ここの神殿に入りたくないって言った時がありましたよね。それは、あの時も、夢の聖女様がいたからなんです。僕はそれを聞いて、目を丸くする。

「えっ？ でも、あの時は、別に何の噂とかもなかったじゃない！？」

驚きを隠せない僕に、マジヨンは悲しげな表情を見せる。

「何でも、あの時はお忍びできたそうなのです。でも、私は、どうしてもあの人のことが許せなくて。あの人のいる神殿から逃げ出してしまいましたかったです。そんな時、ダイタさんと出会って……………」

マジヨンの瞳から幾度となく、涙がこぼれ落ちてゆく。

「う、ごめんなさい。私……私……私……」
今にも消え入りそうな声で言うマジヨンに、僕はきっぱりと言った。

「じゃあ、レミイさんに感謝しないとね！」
「えっ？」

マジヨンは虚を突かれたように、ぽかんと口を開けた。
僕はにこつと満面の笑みを浮かべる。

「だって、そのおかげで、マジヨンに出会えたんだから！ マジヨンと一緒に旅ができるんだから！」

僕はしゃきつと背筋を伸ばした。

「だから、謝ることなんてないよ。マジヨンに出会えて、ふららさんやフレイヤファミアさん達に出会えて、僕は本当に本当に、幸せなんだから！」

「ダイタさん……」

マジヨンは嬉しそうに胸に手を当て、天を仰いだ。

「ありがとうございます」

「う、うん」

僕はあらぬ方向を見つめた。顔を赤らめたままで。

「こ、これからもよろしくね。マジヨン」

「はい！」

マジヨンもつやつやした頬を染めて、日だまりのような笑顔を見せた。

人は目覚めたとたん、夢を忘れる。

現実であれば、遺跡という痕跡を残すこともあるけれど、人の想い出にも刻まれず、霧散する^{むさん}のが現実ならざぬ夢の定め。

私は夢の世界の夢の存在。

私の姿は見えても、人はいずれ忘れてゆく存在。

何度私が人の夢を訪れても、人は私から目を逸らし、目覚めたときに、私の姿も声も、私と出会ったことすらも、全て忘れてしまふもの。

それでも、何万人もの夢を訪れ、何万回の夢を紡げば、微かな私の足跡が、現実世界で影響を及ぼすことが、ないではない。

私は運命の糸を紡ぎ、機はたの上に模様を描き出そうと苦心する。

けれど糸は、いつも私の指をすり抜けて、それぞれの模様を描こうとのたうち回る。

私の夢は、夢の世界の夢の存在である私の夢はただ一つ。

ただ一つの夢の実現こそが、私の夢。

私は必ず、私の夢を実現してみせる。

私が目覚めを手に入れた時、今ある現実が夢となる。

その時、私が何者なのか、『あなた』が思い出せるように、私はこうして今を綴る。

『あなた』に会える時は、もうすぐなのだから……。

第14章 終の彼方 そして始まり（後書き）

次回はレークス達の話です。

第15章 運命との出会い（前書き）

最近、更新が遅れぎみですみません（汗）

第15章 運命との出会い

ドゴゴーン、グワワーン。

「レー兄、レー兄ってば！」

地の底からわき上がってくるような轟音こうおんと唇音しんおんに負けない大声が呼ぶ。

「まだ、早いだろぅが……」

高級感あふれるベットのの中から寝ぼけた返事。

起こしに来たらしい少女は赤い髪を頭の左右でぎゅっとまとめて、爆発したように広がっている。

「予定を変更して、これ（・・）で起こそうと！」

エヘへと笑いながら、少女は手をさりげなく後ろに回した。

その手には、自分の背丈くらいはある長い杖を持っている。

どうやら起きなかったら、これで叩き起こすつもりらしい。

と、その声が聞こえたか、ベットに横たわっていた少年が低く唸りながら上体を起こした。まだ、目は覚めていないようだ。目をこすりながら、伸びをする。

見たところ、少女とあまり変わらない年齢の少年だ。十歳くらいだろうか。

銀色の髪にスカイブルーの瞳の少年が上体を起こすと同時に、隣の机に置いてあったタオルは風もないのに勝手に舞い上がり、少年の肩のあたりではためく。

「何事だ。ティナー？ おちおち寝ていられないではないか！」

ようやく、ベットの脇にいるのが誰かわかったのか、少年は腹立たしいと声を上げた。もつとも、言葉ほど怒っている様子はないのだが。

「それどころじゃないよ！ レー兄！ なんか凄いのが出てきて、このお城を壊しているんだよ！」

ティナーと呼ばれた少女は少し不満そうに杖を隠すと、どこか楽

しそくに物騒なことを言った。

「なんだと？」

「すごいよね？」

あくまで嬉しそくに言うティナーに、レークスは陰険な目つきでティナーを見つめていた。

じつと何事か考えこんだ後、ポンと手を叩く。その口元にはにやりと愉快そうな笑みが浮かんでいた。

「面白い。望むところだ。地の魔王の恐ろしさを永遠に刻みこんでやる、この俺に挑んできた、どこかのバカのお天気な脳みそにな！」

余裕の高笑いを放つと、ビシツと指を突きつけ、レークスは立ち上がった。

そんなレークスに、おずおずとティナーは心配そうに声をかけた。大げさに手を広げてみせながら。

「でもでも、すごく強そうだったよ！ レー兄！」

「俺よりも強い奴などいない！」

きっぱりとそう断言したレークスに、ティナーは明るくすつとぼけた声で訊いた。

「じゃあ、天の魔王よりも強いんだね？」

ティナーのその言葉に、レークスは顔をしかめる。

「どうして、そこでフレイムを引き合いに出す？」

ぶすつとした顔でレークスは叫ぶが、ティナーはまるで聞いていないらしく、言葉を続けた。

「で、どうするの、レー兄。行くの？ 行かないの？」

「行くに決まっているだろうが。城の塔から見てやるから、おまえも来い、ティナー」

鷹揚おつようにティナーに命じると、レークスは塔に登っていった。

登るに従って外から派手な音が聞こえてきた。合間にズーンと地震のような振動。

城から離れたところには森が広がっている。

その森のど真ん中に巨大な魔物が立っていた。

身の丈は城の塔に達し、二本の足で歩くたびに地震を起こしている。豪腕で塔を薙ぎ払い、マントで竜巻を起こす。頭には二本の角が伸び、目は溶鉱炉のように真っ赤に燃えている。しかも、確実に城を破壊しているようだ。

「俺の城になんてことしやがるのだ！　どこのどいつだ！」

「アグリーさん達の知り合い」

唐突なティナーのセリフに、レークスは目を丸くして驚愕した。

「なにい！？」

ティナーはそこでエへへと笑いながら、言い直す。

「　　じゃなくて、全く知らない人だよ！」

「……真顔で冗談を言うな」

大きな溜息をつくとき、レークスはガクツと肩を落とした。

こいつの場合、冗談なのか、本気なのかがいまいまいち分からない。じろりとらんでみせたが、ティナーは全く気づかず考え込んでいる。

「でも、アグリーさんの全くの知らない人っていうわけじゃないみたいだよ！」

「どういうことだ？」

少々の期待を込めて尋ねると、ティナーはなんとも複雑な顔でうなずいた。

「えっと、そのことを聞くのを忘れちゃいました。　てへへ？」

ティナーはしゅんと肩を落とすし、情けない声でつぶやいた。やっぱり、質問と答えが今ひとつつかみ合わない。

「ええい、もういい！　貴様に聞いた俺がバカだった」

直接アグリーに、そのことを確かめさせればいいだろう。

ティナーを振り払うように、ざかざかと歩き始めたレークスをティナーが引き留めた。

「ねえ、レー兄」

「なんだ？　もう、おまえと話すことはないぞ」

レークスがそう言い放つと、ティナーは我が意を得たりとばかり目を輝かせて説明を始めた。

「あのね。このパターンだとね、必殺技を弾き返されたヒーロが一旦こてんぱんにやられて、新たな新必殺技を覚えるために地獄の特訓をするんだよ！」

「おい、それはリアクの入れ知恵か」

不満そうなレークスを無視して、ティナーは断言した。

「それでね、その新必殺技で逆転勝利を収めるんだって！」

「つまり、なんだ、ここで俺がやられて、これからずっと特訓シオンが続くと言いたいのか、おまえは？」

今までの苛立ちを思い出したのが、レークスはくわっと目を見開いてティナーに噛みついた。

ティナーも負けじと、きよとんとした顔のまま、レークスに訊いた。

「違うの？」

「違うわい！」

レークスはブツブツ言うティナーにそう言い放つと、思いついたようにティナーに言いつける。

「ああ、そうだ。アグリーも呼んでおけよ」

「ええっ！ 今から？」

面倒くさそうに、ティナーは首を傾げた。

「緊急時に来れんような家来なら、罰を与えるだけだ」

「レー兄、すごい！」

当然のことのように言うレークスに、ティナーはぱあっと顔を輝かせた。

「ふっ、当たり前のことだ。騒ぐな」

レークスは前髪をかき上げた。本人はキメてみせたらしい。

だが、当のティナーは、そのことには全く気づいていないらしい。

「見せしめのためにも、後で徹底的に教え込んでやる！」

「何を教え込むの？ レー兄」

ティナーは首を傾げた。

「お勉強とか？」

「おまえは知らなくていいのだ。さあ、とつとと行くぞ！」

レークスはごまかすかのように、威勢よく拳を突き上げた。

「こいつは素晴らしいな」

レークスが感嘆の声を上げたのは、城の惨状を見てだ。

その言葉に即座に反論したのは、金色の髪と澄んだ青い瞳が印象的な少年だ。

「どこが素晴らしいんですか！　せつかく造った城をこんなにメチャメチャにされたんですよ！？」

彼　アグリーが腕を振って城を示す。

塔は中程でへし折られ、木は蹴り飛ばされて木が木の上に乗っている。石畳で舗装された道路は陥没し、でかい足跡がハンコのように押されている。

「この壊しっぷりはある意味、芸術的だぞ」

「レー兄には及ばないけれどね！」

ティナーはそう言って、はにかんだ笑みをレークスに向けた。

とたん、レークスは満足そうににやりと笑う。

「そう誉めるな、ティナー。照れるではないか」

「誉めてはいないと思いますが……」

無然とした態度で言うレークスに、アグリーはげんなりとする。

「あの、アグリー様」

アクアが遠慮がちにつぶやく。

「どうかしたのか？　アクア」

「もう、そこまで迫ってきているみたいですよ」

困ったように顔を上げたアクアの目と鼻の先には、巨大な魔物の姿があった。次の一步でレークス達を踏みつぶせる距離だ。

ゴウツと風を切って、足が接近してくる。

「心配するな、アクア」

リアクはフツと鼻で笑う。

「こんな奴、俺様、一人で」

リアクはそう言い終える前に、その魔物の大きな右手に吹き飛ばされてしまう。悲鳴を上げる暇もなく、リアクは空高く舞い上がった。

「リアク！」

「兄さん！」

アグリーとアクアの悲鳴がはもる。

「どうして、ここにクロレスがいるんだ……」

アグリーはぎりつと歯ぎりした。

「やはり、貴様の知り合いか！」

レークスがさかさず言い寄るが、アグリーは愕然とした様子で立ち尽くしていた。見れば、アクアもがたがたと体を震わせている。

「……あ、あいつは、アグリー様が、た、倒したはずなのに」
怯えるかのように、アクアはつぶやく。

そんな、そんなことって……

これは何かの間違いだ。そう思ってしまっただけ、目の前のクロレスは以前、戦った時と変わらない雰囲気漂わせていた。

クロレスが生きているはずはない。確かにあの時、倒したはずなのだから。

アグリーは、そしてアクアはそう思う。

しかしやはり 目の前の魔物は、アグリー達が以前戦った魔物
クロレスだった。

「どうして、ここにクロレスがいるんだ！」

アグリーが再び、同じ言葉を叫んだ途端、 魔物がぴたりと止まった。

「アグリー……今の声は、アグリーピースか」

魔物とは違う別の声が、辺りにこだまする。

「貴様、何者だ！」

「おや、わたくしのことを覚えていらっしやらない？ 薄情な方で

すねえ」

魔物の肩先で、男が笑った。敬語こそ使っているものの、倣岸しこうがんな響きがある。

どこかで聞いた声だったが、どうにも思い出せない。

どこだ？ どこで聞いたんだ？

アグリーは記憶を思いつ切りかき回し、思い出そうとした。

ところが、脳がちりちりと熱くなるばかりで、抽象的なイメージしか引き出せない。

意思を無視し、頭が思い出すことを拒否しているようだった。ただ何故か、嫌な予感だけがしていた。

「無理もないかもしれませんね。だいぶ昔のことですから。ですが、お嬢さんの方は覚えていらっしゃったようですがね？」

ちらり、と男がアクアに視線をやった。鋭く暗い眼差しに、アクアはびくんと背中を震わせた。

「また、お会いしましたね、お嬢さん。以前はどうも」

「おい、どうしたのだ？」

いぶかしげなレークスに答える余裕もなく、アクアは震える唇をこじ開けた。

「嘘……、嘘です！ あなたが生きているわけがない！ 私達の街を滅ぼしたあなたが生きているわけがない！」

「そう、ですね。私とクロレスは以前、アグリー＝ピース、あなたに倒されたのですから」

その言葉に、突如、アグリーの心に動揺が走った。

生きているはずがない。

そう心の中で何度も何度も繰り返すが、アグリーの目の前にいるのはまぎれもなく、あの時戦った男だった。

アグリーは、喉を裂かんばかりの大音響を上げる。

「貴様は……ブレインなのか！？」

「ご名答。アグリー＝ピース、あの時の恨みを晴らしに参りましたよ」

襲撃者ブレインが、にたりと笑って一礼した。

「ほう、あいつらに敵がいるのは驚きだが、つまりだ。少しは魔王の配下として染まってきたということだな」

その様子を、いつのまにか遠巻きにして見つめていたレークスが感嘆の吐息を吐く。

「わくわくするね！ レー兄」

ティナーは指をからませながら、胸をどきまきさせた。

「なにがだ？」

「勇者と巨大怪獣の戦い、ドキドキするね？」

うつとりと瞳を輝かせ、ティナーはこくこくと頷いた。

「そ、そうか……？」

レークスが呆れたように首を傾げる。

巨大怪獣ではないと思うが。

そんな二人を尻目に、アクアは両手を胸に当て、動揺を隠せないまま声を張り上げた。

「どうして、どうして、あなたがここにいるの！」

「簡単なことですよ。わたくしがあの時、本当は死んでいなかった。それだけのことです。もっとも、このクロレスを復活させるのには、いささか時間がかかってしまいましたけれどね。しかし、まさかわたくしも、あなた方があの地の魔王の城にいるとは思いませんでしたがね」

「そんな……」

今度こそ、アクアは打ちのめされた。よろけたところを、がしりと誰かにつかまれる。

それは怒りで顔を赤く染めた、リアクだった。

「貴様は、俺様が倒す！」

「先程、クロレスにやられた負け犬が、余裕ですな」

ブレインがすっと、ごつごつとした手のひらを前に突き出す。

「やかましい、元祖負け犬！」
リアクは愛用の剣を抜き払う。

「あいつが剣を使うところは初めて見るな」

珍しいものでも見るかのように、レークスは吐き捨てる。

「いつも、レー兄に、剣を抜く前にやられているもんね！」

「まあな」

ティナーがそう言って微笑むと、レークスは満足げに頷いてみせる。

「今度こそ、倒してみせる！」

アグリーは指を突きつけてそう宣言する。

そして同じように、アグリーも愛用の剣を抜き払った。

「私達の故郷を滅ぼしたあなただけは、許さない！」

アクアは手のひらを前に広げると、呪文を唱え始める。

その光景を、ブレインがさも愉快そうに眺めた。

「面白い、あなた方の成長を見させていただきますよ！」

どこから調達してきたのか、刃の光もまばゆい新品の洋剣を、ブレインはがちゃりと構えた。

「ブレイン」

ざっ、とアグリーは一步前に出た。そのまま、真っ直ぐクロレスへと、ブレインへと近づいてゆく。

「セルウインの配下である貴様を、今度こそ倒してみせる！」

「それは、どうでしょうか？」

決然とした表情でそう言い放つアグリーに対して、ブレインはにやりと余裕の笑みを浮かべた。

戦いの幕は、クロレスの怒りの咆哮が放たれるとともに切って落とされた。

「くっ！」

アグリー達は申し合わせたように、左右に散ってそれを逃れる。だが、それは、細胞が分解するかと思える程の重低音で、周囲数十キロを揺るがした。

塔が唇音で崩れ、逃れていたアグリー達全員がシヨック状態で落ちてゆく中、レークスとティナーは耳を押さえてつぶやいた。

「すっ、すごいね……」

「うるさいだけだ」

感心したように目を輝かせたティナーとは逆に、レークスはうんざりしたかのように抗議の声を上げた。

「こ、こうなったら！」

リアクは額を押さえながら、不機嫌に唸った。

「俺様の新必殺技で……」

右足をだんと出すと、リアクはびしっとクロレスに言い放った。

「超ウルトラスーパースペースラルデラックスエキスサイトシルバーデンジャラスキ~~~~ツク　!!!!!!」

リアクは長い必殺技を叫びながら、そしてクルクルと回りながら、クロレスにキックを炸裂させた。パキツと鈍い音が響き渡る。

「やったな！　リアク！」

アグリーは思わず歓声を上げた。

だが。

「ぐあっ!？」

リアクはいきなりの激痛に、思わず叫んでしまっ。

そして、絶叫する。

「何故だ！　何故、俺様の新必殺技が効かないばかりか、俺様の足がやられるんだ!？」

右足を押さえて、右膝がいと簡単に屈してしまったりリアクを見て、アクアはげんなりとした表情をみせた。

「やっぱり、兄さん、骨を折ってしまったんですね。」

意気消沈したまま、アクアは悲しげにそう思った。

どうやら、敵を倒すどころか、リアクは逆に攻撃をして骨折をしてしまったらしい。

アクアがそうしみじみと感じている間に、リアクは自信ありげにニコニコしながら、再びかるうじて立ち上がった。

「ふっ、なかなか、やるようだな。俺様にここまでのダメージを与えた敵は、貴様が初めてだ。だが、俺様の新必殺技はあれだけではないぞ！ 喰らえ！ 必殺技、パート?!?!」

リアクはクロレスに向かって、勢いよく飛び跳ねる。

「波動流派雷風獄炎ヘッドバット　　ッ!!」

リアクの放ったヘッドバット　　つまり頭突きは、クロレスの胸に命中する。

「こ、今度こそ、やつ、やったのかな？」

アグリーは恐る恐るつぶやく。

言っていることとは違い、まるでそんなことはあり得ないような言い方だ。

すかさず走り寄ったアクアが、リアクに声をかける。

「大丈夫？　兄さん」

アクアは真剣な顔でリアクの前にしゃがみこむと、リアクの右足に治癒魔法をかけ始めた。

「何をやっているのだ。俺様は……」

荒い呼吸の合間に、リアクはつぶやいた。

頭と脇腹を抱え込むようにしてリアクは咳き込んでいる。

「何故だ！　何故、俺様が攻撃する度に俺様にダメージが返ってくるんだ!?!?!」

困惑したリアクは、再び大声で絶叫した。

そんなリアクの様子を、アクアは悲しげな表情のまま、見つめていた。

兄さん、まだ、自滅していることに気づいていないんですね。

アクアははあっと溜息をついて、がくんと肩を落とした。

それに、とアクアは思う。

今まで、兄はいろいろな人達に挑戦してきたんだけど、誰にも勝てた例ためしがなかったはずなのだ。

でも、間違いなく、そのことを兄に指摘しても、それが伝わることはないだろう。

そう思うと、尚更、アクアは思いつきり傷心してしまうのだった。

「何がしたいのか、分かりませんね」

ブレインは楽しげに笑った。

そして、アグリーに視線を向ける。

「次は、あなたの番ですよ。アグリー＝ピース」

不適に笑うブレインに、アグリーは黙って剣を構えた。

「ふっ、以前は、まぐれでかろうじて勝てた我々の前にひるみませんか」

ブレインは嘲笑するかのようにつぶやくと、クロレスに振り返った。

「アグリー＝ピースは、わたくしの獲物ですよ。手を出さないで下さいね」

そしてまた、アグリーを見た。

「ふふふっ、いいでしょう！ あなたには、再びお見せしましょう。

このわたくしの力を」

ブレインは陽気に笑うと、虚空から剣を取り出した。炎に包まれた真つ黒い剣だ。

それはブレインの愛用の剣で、かつて戦った時、アグリー達を散々苦しめた剣だった。

「終わりですよ。アグリー＝ピース」

剣を一字に振るって、ブレインは近づいてきた。

アグリーは応戦しようと試みるが、一瞬早く、ブレインの横薙ぎに放った剣が衝撃波を伴ってアグリーを襲う。

「くっ！」

アグリーはかろうじて、その攻撃を踏み留めることに成功する。

だが、次の瞬間、ブレインの放った巨大な炎のドームがアグリーを包み込んでいた。

「アグリー様！」

アクアが小さな悲鳴を上げる。

「アグリー！」

リアクが顔を上げて、声の限りに叫ぶ。

だが、何の返答もない。

「あっ！」

ティナーが驚いて、目を剥くように顔を上げた。そつと手を口元に触れる。

そんな彼らを見て、にやりと勝利を確信するブレインとクロレス。平然としていたのは一人だけ。乾いた表情で成り行きを見守る、レクスだけだった。

「アグリーが貴様に、貴様らなんかにやられるわけがない！」

噛みつくような勢いで吐き捨てるリアクの後ろで、アクアはがたがたと肩を震わせていた。まるで、今起きたことが信じられないように身体を強張らせる。

アグリー様は大丈夫……。

そう信じているのに、何故か震えが止まらなかった。

アクアは床の上に座り込むと、身体を固く丸めて震え始める。彼女の見開かれた目は何も見ておらず、口は空気を飲み込もうと開閉を繰り返すが、けれど胸は呼吸の兆候をなかなか示さない。

「アクア、しっかりしろ！」

リアクがアクアの手をしっかりと掴むと、アクアは少し落ち着いたのか、リアクの胸に抱きつく。

「さあ、終わりにしましょう」

アクアを守るようにその前に立ったりアクに向けて、ブレインは剣を構える。どうやら、一緒に切り裂くつもりらしい。

「やばいよ、レー兄！」

ティナーが今にもやられそうなりアク達から目を背けて、声を上

げる。

が、レークスは腕を組んだまま動かない。

「レー兄!!!!」

ティナーが我慢できずに声を上げた時、

「なにい!」

ブレインの悲鳴がこだました。

「えっ?」

ティナーはびっくりして、ブレインがいた方向を見る。

そこには、ティナーの父であるラストが立っていた。その隣には、ティナーの母であるミューズも微笑んでいる。

どうやら、ブレインの一瞬の隙について、ラストが間合いを詰め寄って、彼に致命傷を与えていたらしい。

その背後で、アグリーが荒い呼吸を立てながらも、にこりと笑みを浮かべていた。

いささか、傷を負っているようだが、大丈夫なようだ。

「アグリー!」

リアクはガッツポーズをしながら、嬉しそうに叫んだ。

アクアは声が出なかった。

ただ、大きく頷くと、少し寂しげに笑った。彼女の瞳から、涙かぼるぼるとこぼれ落ちてゆく。

「この……こわっばがあっ!」

残されたクロレスは、怒りの咆哮を放つ。「原子すら残らぬほどに粉碎してくれるわ!」

クロレスは右腕を振りかぶった。拳の周りに炎が渦を巻いて轟音を発する。

「次は貴様か」

ラストは腕を組んだまま、平然と炎の熱気を受け止める。

「砕け散るがよい!」

クロレスは言い放つや、炎の拳をラストに叩きつけた。ラストの何十倍もある巨大な拳が炎とともに迫る。

「ラスト様!?」

避けようとしてもしないラストに、アグリーは悲鳴を上げる。
だが。

「これで終わりか」

ラストはほんの数ミリも動かずに右手だけで、パンチを受け止めていた。

すごい………!

アグリーは思わず、感嘆の吐息を漏らす。

「な、なんだと!?!」

クロレスの驚愕をよそに、すかさずラストが詰め寄り、抜く手も見せずに剣を振った。それと同時に、クロレスの身体が両断され、クロレスが力を失って倒れる。

「我々の存在をわかっていなかったようだな」

ラストは一息つくと、まだ息のあるブレインをあざ笑うかのよう
に言った。

「おのれ………」

怒りに震えながら、ブレインは周囲を見回す。

「もう、手はないだろう」

ラストがブレインに剣を突きつける。そこに苦しげなアグリーの
声が重なった。

「ブレイン………、貴様の最後だ!」

青い顔をして叫ぶアグリーを見ても、ブレインはただ不遜な笑みを
浮かべているだけだった。

「………無駄なことです。我々の今回の使命は貴様らを、ア
グリー……ピース、貴様を倒すことではないのですから」
「なにい!」

アグリーはそれを聞いて、驚きの声を上げる。

ブレインは傲慢な笑みを浮かべると、愉快そうに言葉を続けた。

「我々の今回の使命は、地の魔王を天の魔王の元に連れてゆくこと
なのですよ。もっとも」

ブレインはラストを一瞬、睨むと、フツと冷笑を浮かべる。
「あなた方のせいで、地の魔王には会えずじまいでしたがね」
そこで、ブレインは苦悶の声を上げた。

「ふふふっ……で、ですが、すべてはあの（……）方の思惑どおりに事は進んでいますよ。ま、魔のミリテリア、ス、スチア、ローゼンブルも、魔王グレイス様の手に落ちたのですから」

最後にアグリーを睨みつけたブレインは、がっくりと地面に倒れ伏せた。

戦いが終わった後も、アグリーは、いや、アグリー達はその場から一步も動けないでいた。気まずい沈黙だけが続く。

「どうということなんだ！」

アグリーは心の中で激しく詰問する。

何故か、アグリーの心に、言い知れない不安と恐怖が襲った。

魔のミリテリア、スチア、ローゼンブル。

アグリーの瞳に、以前、ラミア王国で出会った時のスチアの笑顔が過ぎる。

あの時、やはり、あのアイズとイアズという魔族にさらわれてしまったのだろうか。

それに、魔のミリテリア。

「どうということなんだ？」

「くっ……」

アグリーはぐっと言葉を詰まらせた。拳を突き立てたまま、ふるふると肩を震わす。その顔は一気に、まだ熟れていないリンゴのように、青ざめた表情に変わってしまう。

それにと、アグリーはレークスを見つめる。

あの天の魔王が、何故、今更になって地の魔王を、レークスさんを求めているんだろうか？

ブレインが言っていたあの（・・・）方・・・って？

アグリーはきつく唇を噛み締めた。先程の戦いで「おろみず」の勝利も、手放
しで喜ぶ気にはなれなかった。まるで、心に氷水をかけられた気分
だった。

「アグリー様！」

「おい、アグリー！」

振り向くと、アクアとリアクがアグリーに対して手を振っていた。
既に、レークスさん達は先に階段を降り始めている。

「今、行くよ！」

そう答えた後、アグリーは一瞬、後ろを振り返った。

スチアさん・・・。

彼女が本当に、あの魔王グレイスのミリテリアなのか。

アグリーは首を大きく横に振り、両手で拳を作るときゅっと握り
締めた。

いや、例え、そうだったとしても、僕が彼女を、魔王グレイスか
ら、魔のミリテリアという束縛から救い出してみせる！

必ず、護りとおしてみせるさ！

煮えきるような熱い勇者魂を燃やしながら、アグリーは彼らの元
へと歩き始めた。

第16章 夜空しか知らない(前書き)

今回はアグリーがメインです。そして久しぶりに夜に更新です？

第16章 夜空しか知らない

夜が明ける頃、アグリーはみなが寝ている中を一人起き出す。どうしても、いかなければならないところがあるからだ。

城の廊下に隠しておいた荷物を拾い、みんなを起こさないように外に出る。

スチアを、魔王グレイスの魔の手から救い出す！

そう決意を固めたのは、クロレスとブレインとの戦いの後だ。気づかれないようにそつと準備を整えていた。

「アグリー、水くせえんじゃないのか」

「リアク!？」

城門を出た直後、すぐ側から声をかけられ、アグリーは飛び上がるほど驚いてしまった。

「魔王のところに行くんだろ。なら、俺様の力が絶対に必要だろうな! だよな!」

リアクは、自分で自分の言葉に納得するように何度も何度も頷いてみせた。

アグリーは思わず、げんなりとした表情をみせる。

「……兄さんの力は必要ないと思うのですが」

そつと、物陰からアクアが顔を出す。

「そんなことはないだろう! 俺様なしで、魔王グレイスに勝つことなど不可能に決まっているからな!」

それはないと思うのですが……。

恨めしそうな目で、アクアはリアクを見つめていた。

それを見て、アグリーは苦笑してしまう。

どうやらリアクとアクアには、アグリーの考えなどお見通しだったらしい。

「それにしても、敵もなかなかやるな!」

突然、思い出したかのように、リアクはふふんと得意げに鼻を鳴

らした。

「はあっ？」

アグリーはびっくりして、目を丸くした。

そして、絶句する。

何故なら、リアクが凄みのある薄笑いをしていたからだ。

「だってそうだろう！ いきなり、そのスチアって子をお持ち帰りとはな！」

その言葉に、アグリーだけではなく、アクアも啞然とする。

だがそんなリアクに即座に反論したのは、アグリーではなくアクアの方だった。

「兄さんってば！」

感情を露にするアクアに、リアクはたじたじとなってしまう。

そんな二人を、アグリーは呆れながらも、穏やかな笑顔で見つめていた。

そして、昔のことを思い出す。

あの時も、初めてリアクとアクアに出会った時も、こんな感じだったな。

アクアになだめられるリアクと、リアクを穏やかに諭すアクアを交互に見やりながら、アグリーは一人と初めて出会った場面を、頭の片隅に思い浮かべていた。

「兄さん、これからどうするんですか？」

「決まっているだろう！ この俺様に無礼を働いた奴をそのままにしておいては、俺様の最強勇者としての沽券こけんにかかわる」

「兄さんは、別に勇者でも何でもないと思うのですが……」

「そんなわけないだろう！ 俺様以外に勇者と呼ばれるにふさわしい奴はいないだろうが……！」

「そんなわけないでしょう。 兄さん」

「……う、うん、……なんだなんだ、騒々しいな。」

せつかく人がぐつすりスリーピングで良い気持ちになっていたのに。暗闇の中で突然聞こえてきた二人組の騒音にも似た話し声に、アグリーはいたたく気分を害した。

「何なんだよ！」

怒鳴って、アグリーは跳ね起きた。

そして、アグリーは気がついた。

……ええと、ここってどこですか？空はどこまでも続く青空が広がっていて、地面には草木が生い茂り、どこからか鳥の鳴き声が聞こえてくる。

そして、跳ね起きたアグリーの顔を、見覚えのない二人の人物が目を丸くしてじっと凝視していた。

一人は、ピンク色のストレートの髪を一つに纏めている桜色の瞳の女性だ。年はアグリーより、少し年上くらいだろうか。

彼女は、まるで何かを願うかのように、天に祈りを振り仰いだ。

もう一人は、バサバサの黒い髪に茶色の瞳の青年だ。それも、ピンク色の髪の女性よりは四、五歳年上の青年だった。

彼はじれったらそうに、アグリーをじろつと睨んでいる。

と言うか、だからここはどこなんだ？

そして、彼らは何者なのだろうか？

混乱で頭がビクバンになりそうだったので、アグリーは慌てて記憶の糸を辿り始めたのだが……。

実はさかのぼることほんの数分か数十分か数時間か、とにかくちよつと前。

やはりアグリーは自分に何が起きたのかさっぱりわからない体験をしていた。

アグリーが目を開けると、深くフードを被った誰かの顔があったのだ。

「あの、大丈夫ですか？」

「えっ？ あ、は、はい、どうも」

響いてくるような少女の声に、反射的に反応してから、「え」と、僕はどうなったんだっけ？」と当然の疑問がアグリーの頭に浮かんだ。

そして、これまた、当然のことながら、アグリーの頭は混乱した。とにかく現状確認と、周囲を見回した。

それから目をゴシゴシとこすってみた。もう一度目を見開いて左右を見る。

けれど何度目をこすっても、どれだけ目を凝らしても、結果はすべて同じだった。

周囲の風景は、まるで何もない殺風景と化している。ここがどこなのか、それさえも全然わからない。

しかたなく、アグリーは目の前のフードの人物に視線を移した。

全身をすっぽりと真っ白なコートで包み込み、フードで隠れて顔の表情を読み取ることができない。ただ、その奥からあどけなさが漂う大きな赤い瞳がアグリーの顔を見つめていた。

「お待ちしておりました。光の勇者、アグリーピース」

「へっ？」

動揺している時に突然衝撃的な言葉をかけられれば、誰だって声を高めて叫ぶに決まっている。

アグリーは声を裏返しながら、フードの人物の顔を凝視した。

「ええっ！」

さらにマヌケな声のアグリーの喉から踊り出た。

フードのその奥に潜んでいた顔は、長い黄緑色の髪、大きな瞳、ふっくらした頬、細い身体、吸い込まれそうな美少女だったからだ。歳は、アグリーよりは少し年下に見えた。

「私は夢の聖女、レミイラン。あなたに、夢のお告げをお伝えします」

「お告げ？」

アグリーの瞳が心なしか輝いた。

「ということは、この星に何か危機が迫っているんですね！」

熱い勇者魂を燃やすアグリーに、冷めた表情のまま、レミイはゆつくりと首を横に振った。

「違います」

気まずい沈黙が、空間の中をじんわりと覆っていく。

「そ、そうですね……。そんなわけないですよ……」

重圧に耐えかねたのは、やっぱりアグリーの方だった。落ち着かないように、視線をきよろきよろと漂わせている。

しばらく何回か深呼吸をしてすっかり冷静さを取り戻すと、アグリーは訊いた。

「じゃあ、お告げって何なんでしょうか？」

「まもなく、エローゼという街に災厄が訪れます。それを防いでほしいのです」

「災厄……ですか!？」

消えかかっていた熱い勇者魂を再び燃やすと、アグリーは力強く叫んだ。

「それって一体」

「けどそんなアグリーの質問には答えずに、レミイはどこからか剣を取り出し、それをアグリーの目の前に置いた。

「夢の聖剣です」

と、レミイはアグリーに言った。

アグリーはしげしげと目の前に置かれた剣を眺めた。どこか不思議な感じのする剣だ。

「あの、それで僕は何をすれば」
「けれど、レミイは無表情だった。」

アグリーの問いかけには答えずに、彼女は言った。

「お願いします」 と。

そつだそつだ、そつでした。再び、アグリーは周囲に視線を巡らせた。

そうか。ここはエローゼの街か。

何だか自然も多いし空気も綺麗だし、全然災厄が起こるなんて思えなくてちょっとばかり拍子抜けだけど。

ということは、この目の前にいる二人はやはりエローゼの町の住人なのか？

などと、状況分析にいそむアグリーに、青年の方が不機嫌そうに声をかけてきた。

「おい、おまえ、のほほんとした表情を浮かべているが、状況がわかっているのか？」

「えっ？ ああ。ここエローゼの街だよね？」

アグリーがそう答えると、ピンク色の髪の女性は不安そうに青年を見た。

「兄さん……、何だか、この人、わかっていないみたいですよ」

「えっ？ じゃあ、ここエローゼの街じゃないのか？」

「ここがエローゼの街だった、の間違いだろっが！ それより、自分の体をよく見てみる！」

言われるまま自らの体に視線を落として、アグリーは目を剥く結果となる。

な、なんだ、これ？

何故かアグリーの手足が、ロープで縛られていたのだ。

何故、僕が縛られないといけないんだ？

たまらず、アグリーは訊いた。

「こ、これってどういうことですか？」

「どういうこと、だと？ この最強勇者であるリアクディプ様の命を狙っておいて、ただですむとも思っていたのか？ これから即刻、さらし首の刑に処してやる！」

「さ、さらし首イ！？」

時代錯誤な上に衝撃度満開なフレーズに、アグリーは全身を震わせた。

あまりにも驚いたせいで、思わず「どうということなんだ！」とア

グリーは口走った。

「ちよつ、ちよつと、待つて下さい！」

「ジタバタするな。見苦しいぞ！ おまえも暗殺者ならば、死して屍拾う者なし、の精神でいたらどうだ？ なあ、アクア！ 俺様なら、当然そうするが！」

「……そ、それは兄さんだけだと思つのですが」

意気消沈したまま、ピンク色の髪の女性は悲しげにそうつぶやいた。

「さあ、吐け！ 誰の差し金だ！ ブレインか！ それとも、クロレスか！」

「だ、だから、何のことかわからないんですが……」

アグリーがそう説得を試みても、リアクと名乗った青年はただ、「はあっはっはっはっはっはっ！」と高笑いを上げていた。

「冗談ではない！」

と、アグリーは思った。

僕には、エローゼの街を災厄から守るといふ使命があるのだ。

なのに、エローゼの街に来た早々、すぐに殺されてしまうというのか？

光の勇者、アグリー「ピース。

エローゼの街の災厄を防ぐ前に、さらし首の刑によって死亡。

マヌケすぎるし、バカすぎる。

この街を守る前に、そんなバカな目に遭つてどうしろというんだ！

ロープで縛られているので、アグリーは手足の自由を失っていた。

だから、首だけを左右にじたばた振つて、アグリーは全身全霊の力を込め、激しく抗議した。

「お願いです！ はっ、話を聞いて下さい！！！」

「往生際が悪い奴だな。そろそろ観念したらどうなんだ？ なあ、アクア！」

「すれすれのところで、兄さんに当たらなかつただけなのではないでしょうか……」

悲しげに、アクアはボソリとつぶやく。

「とにかく、だ。これでもう弁解する気など失せただろう！ さあ、誰に頼まれ、俺様の命を狙った！ ブレインか！ それとも、クロレスか！ 言え、言うんだ！ さつさと吐けば、それなりにあつさり風味な処刑方法にしてやるぞ？ さあさあさあ！」

リアクに首をつかまれぐわんぐわんと揺すられながら、アグリーは必死に釈明した。

アグリーは名もなき大陸のバリスタの港町から旅立つたばかりで、夢の聖女様からエローゼの街の災厄を防いでほしいと頼まれたあと、気づいたらここにいただけで、リアクのことなんか何も知らなかつたし、すべてはただの事故なんだと。

リアクはうさんくさい表情を浮かべて言った。

「怪しいな」

「本当なんですってば！」

アグリーは抗議の声を上げた。

「うむ」

リアクは腕を組んで十秒ほど考え込んだ。

「よし、わかつた」

やがて顔を上げて、彼は言った。

「おまえの話、信じてやってもいいぞ」

「本当ですか！ じゃあ、僕を自由してもらえるんですね？」

「それは、却下だ」

一瞬にして、アグリーの喜びは複雑骨折してしまった。

「ど、どうしてですか！」

「おまえはその災厄っていうのを防ぎにきたのだろう？ なら、俺様も、この最強勇者である俺様が行くのは当然のことだ！」

リアクは、にやりと凄みのある含み笑いを浮かべた。

「兄さんが行っても、邪魔になるだけだと思うのですが……」

がはつと両手を広げて雄叫びを上げるリアクに、アクアが氷点下の視線で突っ込む。

あ、しまった。

どさくさに紛れて言った言葉をすっかり聞いていたんだ。

アグリーははあつと溜息をつくど、がっくりと肩を落とした。

「あの」

不意にアクアが、それまでとはがらりとトーンを変えた声を出した。

「えっ？」

激しい混乱の中をさまよっていたアグリーは、いつのまにかうつむいていた顔を上げてアクアを見た。

「私達も、一緒に行かせてもらえませんか？」

アグリーは即答できなかった。

急に一緒に組もうと言われても、一体なんて答えたらいいんだらうか？

それに、彼らを危険に巻き込む形になる。

って、あれ？

「行くって……、エローゼの街じゃないのか？」

アグリーがそう訊くと、アクアは悲しげな表情を浮かべた。

「エローゼの街は、ほんの数時間前に滅びてしまったんです。ブ

レインという魔族とクロレスという魔物によって……」

アクアは表情を曇らせた。胸に手を当てて、瞳にうつすらと涙を浮かばせる。

てことは、つまり、僕が気絶しているうちに、エローゼの街は滅びてしまったということなのか!？

アグリーは悔しげに言葉を呑んだ。拳をふるふると震わせる。

その隙について、リアクがひよっこり口を挟む。

「よし、こうなったら、さっさとブレインとクロレスを追いかける

ぞ！ アクア、それに」

拳を突き上げて叫ぶリアクだったが、ふいに言葉をさえぎり、ア

グリーの顔をまじまじと見つめる。

そこで、アグリーはハツとする。

「……………そういえば、自己紹介もまだだったんだ！」

アグリーは思わず言葉に詰まり、言葉を探した。

だが幸い、それはすぐに見つかった。

ひとつ頷くと、アグリーは言った。

「僕はアグリー。アグリー…ピース」

それから、顔をしかめて付け加えた。

「一応、夢の聖女様には、『光の勇者』だって言われたんだけどね」

「光の勇者に、最強勇者と魔法使いか。悪くない組み合わせだな

！」

不敵な笑みを浮かべて、リアクは何度も何度も頷いてみせた。

「そうだな」

アグリーはそう言って、にっこりと微笑んでみせた。

「そうですね」

つられて、アクアも笑みを浮かべる。

アグリーは、リアクとアクアを見据えると、今度こそ、しっかりと

と言った。

「これから、よろしくな。リアク、アクア」

「はい！」

アクアは嬉しそうに笑みを浮かべた。

「よろしくな、アグリー！」

リアクもぶっきらぼうな言い方だったが、力強く答えた。

アグリーは笑顔を二人に向けた。

そして、思った。

戦いだ。

アグリーは空を見上げると、両拳をぎゅっと握り締めた。

ついに、アグリーにとって、初めての魔族との戦いが始まること

していた。

そんなこんなでブレインとクロレスが向かったとされる西を目指して二時間後、アグリーらは問題の敵と遭遇することができた。

クロレスは、巨大な悪魔のような魔物だった。身の丈は国の城の塔に達し、二本足で歩くたびに地震を起こしている。頭には二本の角が伸び、目は溶鉱炉のように真っ赤に燃えていた。

ブレインは、すらりとした長身に、ディープブルーの髪の毛の端正な顔立ちの青年だった。

恐らく、かなりの上級魔族なのだろう。

「リアクは、僕と一緒に、まずはクロレスから攻撃しよう！ アクアは後方から援護して！」

「アグリー様！ にっ、兄さんが……」
戦に備えて、アグリーが指示を飛ばしていると、アクアが突然、悲鳴まじった声を上げた。リアクがいつのまにか、いなくなっていたからだ。

アグリーは指示を止め、眉をしかめた。

「えっ？」

「あ、あれは」

『今度こそ、貴様らの最後だ！』

アクアが言い終わる前に、アグリーらから見るとただの黒い点であるそれは、なにやらメガホンを使って話しかけてきた。

『俺様は、サイイイイイイ』

メガホンを使って叫びながら、黒い点がコマのようにくるくると回転を始めた。それに合わせ、声が近づいては遠ざかる。なんだ？

一体、何のショーが始まったんだろうか？

『キョウウウウウウウウウ』

語尾を果てしなく伸ばしながら、まだまだ黒い点は回転を続けた。すでに見ているだけでも二十回以上は回っていた。もしあれがリアクダと仮定して、あんなに回転して三半規管がおかしくはならないのだろうか。

『勇・者！！！』

スババアアン！！！！

どこからともなく効果音が鳴り響き、同時に黒い点は回転を止めた。よく目を凝らしてみると、手足をびしっと伸ばして見事に決めポーズを作っている。どうやら三半規管の方は大丈夫のようだ。

『リアアアアアクツツ！』

ドツカアアアアアーン！！！！

黒い点が叫ぶと同時に、今度はその背後から巨大な花火が打ち上がった。

アグリーも、アクアも、ブレインやクロレスの面々も、ただただ啞然とその光景を見つめていた。

「あつ、こちらを指さしたみたいです」

アクアが、律儀にアグリーに報告した。

黒い点がまた叫んだ。

『さあ、勝負だ！ クロレスにブツレイイイーン！』

「・・・タ、ターンを決めながらこちらに向かってくるんです」

アクアはそうつぶやくと、深々と溜息をついた。

「・・・バカである。向かうところ敵なしのバカである。」

アクアの言葉を聞きながら、アグリーも、いや、ブレインやクロレスの誰もが「なんだったんだ？ あのアホは」という表情を浮かべていた。

ブレインが吐き捨てた。

「私の名前はブツレイイイーンなどではありません。ブレインです」

クロレスが言った。

「いいからブレイン、とつとあんなアホはぶちのめしてくれろわ

！」

エローゼの街の言いがかりや、アグリーらの前方でくるくるターンをしていたリアクを目の当たりまにして、アグリーは激しく脱力し、ついで初めての戦いで緊張していた自分のバカさ加減を笑い出しそうになっちゃった。

それから、夢の聖女様のお告げは一体なんだったんだ、と怒りさえ覚えた。

あんなバカが仲間なら、この戦いは絶望的だ、と愕然もした。ところが、だ。

それらの考えは戦闘が開始するとすぐに打ち砕かれてしまった。リアクは確かに、全くといっていいほど、役に立たなかった。だが逆に、アクアはかなり魔法に優れていた。

アグリーの剣は、直接的な攻撃しか役に立たない。

それにアグリーは今回が魔族との初めての戦いで、どちらかといえば無鉄砲で、ときどき思慮に欠ける行動をとってしまいがちだった。アクアの魔法は、治癒魔法だ。

穏やかな性格が災いしてか、彼女はさして攻撃魔法が得意ではない。

しかしその分、アグリーよりは魔族とは戦い慣れしており、常に冷静で落ち着きを失わなかった。

そんな具合にアグリーとアクアはお互いの短所を長所で補うことができた。

ふたりのパートナーとしての相性は悪くなかった。むしろ、最高と言いついてしまってもいいほどだった。

次第に、アグリー達はブレインとクロレスを追い詰めていった。

「はあああああっ！」

ざくっ！

それまで、アグリーが繰り出していたのと同じ一雑ひつじか。

ところがそれはタイミングを凶っていたはずのクロレスの体を深

く傷つけ、大きく吹き飛ばした。

ざっくりと切り割られた肩先を押さえ、クロレスがよるめいた。どっと吹き出した^{あぶらあせ}脂汗が、ぼたぼた地面に落ちていく。

やがてクロレスは、力尽きたかのように地面に倒れ伏せた。

「なっ……貴様、今どんな小細工をしたのですか!？」

それを見たブレインが、驚愕の声を上げた。

「ありえません。なぜ、貴様ごときに、クロレスが……!？」

「これが、光の勇者の実力だ!」

胸を張ったものの、理由を知りたいのはアグリーの方だった。

今、夢の聖剣に後押しされるように、急に体が軽く感じたのだ。追い風に吹かれた時のような、圧倒的な開放感だった。

「バカな……今のは錯覚です。そう、そうに決まっていますよ!」

得体の知れないものを見るように、ブレインがアグリーをねめつ

けた。

「ふっ」

ブレインは突然、にやりと笑うと、虚空から剣を取り出した。

それは、炎に包まれた真っ黒い剣だった。

「がいん!」

「こ……今度こそどうです! これならば、小細工は使えませんかよ!」

かみ合った刃が、二人のちょうど中央地点でかく震えた。一瞬でも別のことに気を散らせば、瞬く間に体勢が崩れるだろう。

「は……はあああああああ!」

雄叫びを上げたアグリーの刃が、じりじりと確実に、ブレインを押しやり始めた。

「バカな……バカな!？」

「はあああああ!」

ばん！

ついにアグリーのパワーがブレインを上回り、刃をはねのけた。続けざまにアグリーは渾身の力を込め、ブレインに剣を振り下ろした！

一撃に耐えかね、バランスを崩し、ブレインはどさつと倒れ伏せた。

そしてやがて、ブレインはクロレスとともに消滅していった。

「勝ったのかな？」

アグリーは独り言のようにつぶやいた。

リアクはしばらくぼかんとしていたが、やがて口元をゆるめた。

顔がどんどん輝いていく。

「当たり前だろうが！ 当然、俺様達の勝ちに決まっている！！！！

この最強勇者である俺様がいるのだからな！！！！！！」

最初にクロレスによって吹き飛ばされ、気絶していたにも関わらず、がばつと立ち上がると、リアクは豪快に笑い始めた。

その高笑いに、アクアは悲しげに顔をしかめた。

「兄さんは、何もしていないでしょう……」

きっぱりと言い放つと、アクアはアグリーにとびっきりの笑顔を向けた。

「やりましたね、アグリー様！」

「ああ！」

アグリーは空を見上げると、噛み締めるかのように応えた。

「それにしても意外だったな」

リアクの言葉で、アグリーは回想から現実へと意識を戻した。

リアクは掛け値なしに真剣な顔で、アグリーに言った。

「まさか、あのレークスのガキも一緒についてくるとはな！」

「一緒に行くわけではない。貴様らを見張っているだけだ！」

「えっ？」

アグリーは突如聞こえてきた第三の声に固まってしまった。

ぎこちない動きで後ろを見る。案の定、銀色の髪の少年と赤いツインテールの髪の少女が立っていた。

「アグリーさん、私達も一緒に行くよ！」

ティナーは楽しそうに言った。

そして人差し指を立てると、えへへとはにかむ。

「お城は、お父さんとお母さんが守ってくれるしね！」

アグリーに視線を固定させて、レークスはしっかりとした口調で付け加えた。

「スループットとメシアロードもいるしな」

アグリーとアクアは嬉しそうに顔を見合わせ、リアクが張り裂けんばかりの絶叫の雄叫びを上げた。

「では出発するぞ！」

先頭をさつさと歩き始めたレークスを慌てて追いながら、アグリーはその背中を熱い視線で見つめた。

もしかしたら、レークスさん、僕達のためにわざと？

だとしたら、これほど嬉しく素敵な口実はない！

アグリーの胸に、喜びの火種がぼつと一気に燃え上がった。

魔王は残虐にて、冷酷無比。

レークスさんに出会う前までは、僕達もそう思っていた。

しかし、レークスさんはこうして、僕達と一緒に来てくれようとしてくれる。

レークスさんは、やっぱり他の魔王とは違うんだ！

「おい！ 何をもたもたしている！ さつさつについて来ないと置いていくぞ！」

「はい、今行きますっ！」

バリスターの港町の神殿に帰ったら、姉さんに言わなくちゃな。

噂よりずっと、地の魔王は優しくかったってことを！

アグリーはこみ上げてくる笑いを隠そうともせず、レークス達の後をついて行った。

「ここにスチアがいるんだな！」

感慨深げに、青い髪せんとうの青年がつぶやいた。

白い尖塔せんとうが幾つもそそり立ち、屋根には旗が風にたなびいている。周りを白い城壁が取り巻き、広さもかなりのものだ。

「すごいね」

「ああ」

魔王城を目の前にして、フロティアとメリアプールは感嘆の声をあげた。

しばらくはぼつと城を見つめていたメリアプールだったが、すぐにフロティアの方を振り向いて言った。

「スチアを、魔王グレイスから救いだそう！」 「うん、頑張ろうね！」

「あ、ああ」

あっさりそう答えたフロティアに驚き隠せずにながらも、メリアプールは相打ちを打った。

(スチア)

メリアプールの瞳に彼女の、スチアの笑顔が映る。

桜色のふわふわした髪。薄蒼い瞳。

そして何よりも、嬉しそうに笑うあの笑顔が大好きだった。

昔、スチアが言ったことがある。

『 想いには力があるの』

あれは多分、スチアと初めて会ってから少し経ったぐらいのときだ。

意味を図りかねて、まだ、幼かったメリアプールは首を傾げてしまった。

だけど、今のメリアプールになら、どうしてあの時、彼女がそんなことを言ったのか理解できるような気がした。

何事も諦めてしまいがちだったメリアプールの愚を、彼女は遠巻きにいさめていたのだらう。きつと。

そうだね、スチア、そのとおり。

想いには力がある。

願えば、それはきつとかなう。

だからスチア、必ず、魔王グレイスから 魔のミリテリアという束縛から救い出してみせるよ！

そう、約束するよ。 君を守ると！

第16章 夜空しか知らない（後書き）

最終巻の5巻はまだ沢山残っているのと小説のデータが紛失してしまいましたので（汗）更新はかなり先になりそうです？とりあえず、番外編の方が先になくなりそうなのでそちらを先に載せていきたいなと思います。

番外編「ライム・ア・ライト」に出てくるキャラクター紹介（前書き）

かなり久しぶりの更新だったりします？5巻の方はまだ当分、なくなりそうもないので（汗）、今回は番外編に出てくるキャラクターの紹介を載せています。

番外編「ライム・ア・ライト」に出てくるキャラクター紹介

ラト

人の年齢で20歳くらい

家を飛び出してきたばかりの頃、ミルドレットの街でララティアと出会った。面倒くさいことは苦手だが、責任感は強いらしく、何事も最後まで貫こうとする。ちょうちょと呼ばれる種族。

ララティア

16歳

ラトのことをお父さんと呼ぶエルフの少女。この時代より未来の時代から来た。天然ボケな一面と腹黒い一面の二面性を持っている。

えびこ

ララティアの後を追ってやってきたエビフライのような生き物。暴走気味な性格でいつもラトはひどい目に遭わされている。

ラミ

25歳

旧都ソルレオンの街の酒場で働いている女性。大らかで温和な性格。

ルカ

27歳

記憶喪失の青年。記憶の手がかりとなっているサークジェイドを探している。生真面目な性格。

アリエール

ルカの側にいる人語を話す黒猫。現実的な性格。紅茶が好きらしい。

番外編「ライム・ア・ライト」に出てくるキャラクター紹介（後書き）

12月上旬くらいから番外編の更新をしていこうと思っています。
内容的には第1章から第4章くらいに起こった話だったりします？

ライム・ア・ライト(前書き)

今回から本編の番外編のお話です。

ライム・ア・ライト

これは、ミリテリアマスターと呼ばれた少女と魔法戦士イグニードの青年のお話。

それはまだ、ミリテリアマスターという存在が、伝説とされていた時代。

かつて勇者の導き手と呼ばれ、聖女として称えられ、世界の希望の一端を引き受けていたミリテリアマスターとしての力を持つ少女は、過去で不思議な生き物と記憶のない青年と人語を話す黒猫に出会う。

今では少女は、その不思議な生き物のことを 親しみを込めて、
こう呼んでいる。

『お父さん』と。

ライム・ア・ライト(第一章、星空の幻想)(前書き)

今回からしばらくライト視点のお話です？

ライム・ア・ライト（第一章、星空の幻想）

「お父さん、あのね、私ね、本当のお父さんとお母さんを探しに行きたい！」

「……はあ？」

思いもよらなかつた言葉を告げられて、俺　　ラトは、ただただぼかんと口を開けるよりほかなかった。

すべては、その一言から始まった。

辺りは、優しく甘い花の香りで満ちていた。一面、天使の羽をまき散らしたように真っ白な花畑だった。

足を踏み入れた誰もが、心を和ませてしまう、ミルドレットの街にある庭園。その中に一つだけ異彩を放っているものがあつた。

でんとそびえる巨大な門。外とこの街を隔てているその門は、金屬のように鈍く光り、唐突にそこに存在していた。

そこへ赤い髪の少女がどたばたと走ってきた。

少女の名前はララティア。あどけなさの漂う大きな青い瞳で、髪と同じ赤色のリボンを髪と両腕につけた、可愛らしい少女である。白いワンピースから伸びる、透き通るような華奢な腕。ちょこんとした少しとがった耳が、彼女がエルフであることを示していた。

少女の視線の先にはイスとテーブルが置かれ、籐とうのイスには不思議な小動物らしきものが座っていた。まるでそれは、人の手がそのまま、生き物になつたような生き物だった。少女の姿を認めると、その生き物は「ん？」と言わんばかりに目を見張った。

顔中を真っ赤にして、少女はおぼつかない足取りで近づいていった。

「お父さん！　あのね、私ね、本当のお父さんとお母さんを探しに行きたい！」

「……はあ？」

思いもよらなかつた言葉を告げられて、俺　　ラトは、ただただ
ぽかんと口を開けるよりほかなかつた。

ララティアは、俺のことを『お父さん』と呼んでいたりするが、実
は俺はララティアの本当のお父さんではなかつたりする。

何でもララティアは、この時代より未来の世界から時を越えてやっ
てきた時、初めて出会つたのが俺だつたため、俺のことを本当のお
父さんと勘違いしてしまつたわけだ。

そして、俺が『お父さん』ではないと分かつた今でも、ララティア
は俺のことを『お父さん』と呼んでいる。

まあ、俺も今では、そういう呼称で呼ばれるのも悪くないかな、と
思つてしまつている。まあ、最初の頃は、面倒くさいと思つてい
たりもしたのだが。

あれから、ララティアも本当の両親のことは何も話さなくなつた。
きつと、ララティアも本当の父親と母親を探すのは諦めたのだらう、
と俺は思つていた。いや、そう信じたかつたのかもしれない。

だからこそ、俺はまさか、ララティアがそんなことを言い出すとは
思わなかつたのだ。

そんなラトの思惑とは裏腹に、ララティアは嬉しそうに言葉を続
けた。

「お父さんも一緒に探してくれるよね？」

「あ、あのな……」

ラトはうろたえ、そして困り果てた。これは、いつものララティ
アのわがままとは、わけが違う。ララティアの両親については、何
の手がかりもないのだ。名前も、歳も、そして、どこに住んでいた
のかも……。

困る理由はそれだけではなかつた。

もし、ララティアが本当の両親と出会つたらどうなるんだろうか？

俺とはもう、永遠にお別れかもしれない。

ララティアはそんなラトの気持ちを汲み取つたのか、優しい笑み
を浮かべて言つた。

「私のお父さんは、お父さんだよ！」

「ララティア」

だんだん、ラトの胸が熱くなってきた。

ララティアが、俺のことをお父さんと呼んでくれている。俺が本当のお父さんではないと分かった今でも、それは決して変わらない現実だ。例え、本当にララティアの両親が見つかったとしても、きっと、ララティアは俺のことを『お父さん』と呼んでくれるだろう。いや、絶対にそのはずだ！

ラトはぐぐつと拳を握りしめていた。

それに、ララティアの本当の両親にも興味が湧いてきた。

ララティアみたいに、天然ボケな奴らなのだろうか？

いや、ひよつとすると、ララティア以上に腹黒いのかもしれない！？

うん、意外にも、ララティアとは似ても似つかない性格かもしれないな……。

ちよつと想像がつかない。でもはっきりしていることは、ララティアのあの天然ボケで腹黒い両極端な性格は、どちらかの性格を受けついた性格だろう、ということだ。そうでなくては、どちらかが天然で、どちらかが腹黒いということだ。

「いいよね？ お父さん！」

ララティアに穏やかにのぞきこまれては、もうラトに断る理由など思いつくはずもなかった。

イスも机もラトにとってはそうとう重たいが、ララティアのためなら、持ち上げてぐるぐる回したっていい！ そんな気にすらなくて、ラトは瞳をらんらんと輝かせた。

まあ、実際のところ、イスや机を振り回すなんて、そんな馬鹿げたことは絶対に、俺はしないが……。

「……仕方ないな」

しぶしぶ承諾するラトに、ララティアはとろけるような微笑みを向けた。

「お父さん！ 有難う！」

そう言つと、ララティアは躊躇なくラトに思いきり飛びついた。
「ぐわっ！」

突然飛びつかれた方はたまつたものではない。ラトは飛びつかれた勢いでバランスを崩し、ララティアを抱え込むような形で尻餅をついた。ララティアはお構いなしに、ぎゅつと首元にしがみつき、何度もその名を呼ぶ。

「おい、こら、首っ！ 首をしめるなああっ！」

「ああああ、ごめんね！ お父さん！」

そんなやり取りをしているラト達の後ろが、急に騒がしくなった。どやどやと、何者か達が乗り込んできたのだ。

ラトの耳に訊きなれた男の大音量の哄笑が轟いた。

「誰だ？ この下品な笑いをする奴は」

手でラトは耳をふさぐと、嫌そうに背後を見る。そして、絶句した。

居合わせたララティアも身構える。

そして、その中から、哄笑と共に、騎士風の男の人影が現れた。

「誰だ？」

ラトが詰問すると、騎士風の男は兜の鉄仮面に手をかけた。

鉄仮面を上げたそこには、端正な顔立ちのいかにも騎士であることを象徴しているような男の姿があった。

「おまえは！？」

全員が驚いた顔をしたのに満足そうに頷き、男はラトを睨みつけた。

「久しぶりだな！ 小動物に、小娘！」

が、ラトは腕を組んで唸るだけ。

「こいつ、誰だったか？」

「お父さん、ほら、アレだよ！ サルさん！」

「そんなわけないだろうが！」

ララティアも思い出せないのか、小首を傾げる。

「えっ と、サタ 何とかさんでしたっけ？」

「いや、白菜騎士団の何とかではなかったか？」

何とか、思い出そうとするラトとララティア。

そこに、えびフライのような生き物がラト達の前に進み出た。

「お久しぶりっス！ 頑張っているっスか？」

「頑張っているっスよ！」

ララティアがそれを見て、嬉しそうに右手を上げて応える。

だが、対照的にラトは嫌そうに顔を背けた。

「貴様っ！ 何の用だ！」

「遊びに来たっスよ！」

「遊びに来るなよ！」

ラトは吐き捨てるように言った。

この生き物 えびこは、ララティアと同じ時代、つまり未来からララティアを追ってやってきたらしい。最も、えびこはララティアのことを知っているらしいが、ララティアの方はというと、えびこのことは全く知らないらしい。

だから、えびこが何でララティアを追ってやってきたのかさえ、俺は知らなかったりする。まあ、知りたくもないが。

かなり無責任な性格で、我を忘れると暴走する始末の悪い奴だったりする。そのせいで俺は、殴る、尻尾で蹴られるなど、こいつに散々な目に遭わされたのだ。これで、えびことの再会を喜んで受け入れる奴がいるとすれば、そいつはただのマゾヒストだろう。

「わ い！ えびこさんだ！ えびこさんだ！」

ラトの思いなど露知らず、ララティアは喜びの表情でとび跳ねた。「こらっ！ 私のことを忘れるな！」

すっかり忘れられてしまった騎士風の男は、頭を怒りに真っ赤に染めて怒鳴った。

「え い！ もう、いい！ 私は、白炎騎士団のサタナエル様だ！」
サタナエルは力強く宣言すると、誇らしげに剣を突き立てる。そ

「こには、これ見よがしの勲章が刻んであった。」

「そういえば、そんな名前だったな」

「わざと、間違えたであろう、貴様ら！」

「いや、剣の勲章を見たら思い出した」

「そんな仰々しくて品の悪い勲章なんて、一度見たら忘れられないもんね！ お父さん！」

「そうだな」

ラトとララティアがうんうんと頷く。

「くっ……」

遊ばれていたと気づいて、サタナエルは拳を震わせた。が、すぐに思い直して静かに口を開いた。

「小娘！ 貴様をサークジエイド様の元に連れていくという我らの使命は、貴様らのせいで散々失敗させられた！ しかも、我らの主であるサークジエイド様をも倒してしまっ、そのふてぶてしさ！」

「誉められているみたいだよ、お父さん！」

「どこがだ　　！！！」

にっこりと笑うララティアに、ラトは肩すくめて怒鳴った。

「で、一体、何の用だ？」

ラトは仕切りなおすと、とりあえず、用件を聞いてみた。

サタナエルはその態度が気に入ったのか、鷹揚おつように頷き、笑顔を浮かべる。

「我が白炎騎士団に入団したまえ！」

「はあ？」

ラトは思わず、目を丸くした。

サタナエルはそれを見て、満足げに頷いてみせる。

「はっはっはっは。身に余る光栄に驚くのも無理はない。貴公達の方、我が主であるサークジエイド様を倒してしまっ方、さすがにうに相應しい」

「あのな……」

ラトは呆れたように溜息をつく。

それから顔をしかめ、すぐに反論した。

「それなら、サークジェイドの仇討ちをするのが正しくないか？」
事実、ラト達は彼 サタナエルの主であるサークジェイドを倒したのだ。普通なら、サークジェイドの仇討ちという方が正しいだろう。

「確かにそうだろう。だが、しかし、我が白炎騎士団は、古めかしただけで何の役には立たない形式にはしられず、有能な人材は積極的に取り入れる方針を採っている。であるから、貴公らも、白炎騎士団で思う存分その腕を振るうがよい」

ラトは無言でサタナエルを見つめていた。

当然、感激しているわけではない。むしろ、啞然、呆然を通り越してまさに愕然。

ラトはサークジェイドのことか、ララティアの本当の両親探しのことか、そういうこともすっかり頭の片隅に放り出して、ただただ思っていた。

こいつら、学習能力ないのかよ！ と。

あれだけ、サークジェイド様、サークジェイド様と何度も何度も称えていた奴らが、その主が倒されるとあっさり、自分らの騎士団の反映のためだけに動いている。どうやら、サークジェイドに従っていたわけではなく、ただ自分らの騎士団の名声を得るためだけに動いていたに過ぎないらしかった。

まあ、事実、そうだろうが……。

ラトはきつぱりと吐き捨てた。

「帰れ！」

「ぬっ！？ 小動物、貴様っ！」

剣を振り上げ、サタナエルは空気が震えるほどの怒声を上げる。

ラトはその大声を真正面から受け止め、そして悠然と言い返した。

「速攻、帰れ！ この筋肉ゴリラ！」

「ぬぬう、返す返すも無礼千万！」

怒りに打ち震えるサタナエルに、背後から部下の一人が声をかけ

る。

「サタナエル様、お心を乱される必要などありません。しよせん、浅慮せんりょな小動物、神すら嫉妬するその美を解せぬです！」

兜を脱ぎながら、背後から一歩進み出たのは、二十歳前後の青年だった。意志の強そうな眼差し、真一文字に引き結ばれた口元、いかにも熱血漢然とした好青年に見える。

「おお、ベクル！ やはり、貴公は話が分かる！」

「もちろんであります」

ベクルがそう答えると、残る四人も次々と、

「ですとも！」

「なんだな！」

「そうですね！」

「そうですねよ！」

口々に褒め称える。誉められたベクルは、満面の笑みになった。

「わあっはっはっはっは、見る、小動物！ 間違っているのは、貴様の方だ。やはり、私こそが正義！」

ほとんど、猿芝居の域である。

見れば、さすがのララティアもうんざりとした表情でうなだれていた。

まあ、無理もないだろう。

「サタナエルさんは、やっぱりお話が長いね」

疲れたように、ララティアは溜息をついた。

うなだれている理由はそっちかよ、とラトは心の中で突っ込んでしまう。だが、確かに話が長いのも事実である。

「確かに、どっかのバカみたいに話が長いな」

たまらずラトはつぶやいてた。

「バカは君っス！！！」

ラトはハツとして、背後からの声に振り返った。いや、振り返ろうとした。でも、それより早く、かなり強い衝撃がどんっ！ とラトの背中を打った。

どんっ！

「ひどいっス！！」

「うえっ！？」

ドカツ！

ラトは誰かに押されて、そのまま地面に激突した。

「ぐええっ！」

悲鳴を上げて背中から床に墜落したラトの目の前には、声から予想がついたとおり、瞳は怒りで真っ赤に染め、口をわなわな震わせ、たえびこの姿があった。

「何するんだ、貴様！」

と、ラトはえびこに抗議しようとした。

当然だろう？

何だか分からないうちに俺は突き飛ばされ、あげくの果てには地面に激突ペツチャンコになってしまったのだ。これで怒りも疑問も抱かなければ、そいつはきっと仏さまかただのバカだし、俺は仏でもバカでもない。

だが、実際に俺の口から出た言葉は「な」の一字だけだった。

俺が「な」と言った瞬間、猛烈なえびこの平手打ちが俺の両頬を襲ったのだ。

「な」

べしべし！

「な」

ばしばし！

「なに」

べちんばちん！

「………ああ」

ばつちいいん、どすどす！

人はこうはなりたくないものである。人じゃないが。

まるで虫歯なのに歯医者に行くサボリ続けた子供のように、いやそれ以上に両頬を真っ赤に腫らし、グロッキー状態となったラトの

むなぐらをつかみ上げ、えびこは鬼気迫る声で怒鳴った。

「君はどうしていつもそうっスか！ もっと、人を信用するべきっスよ！」

言いたいことは分かったが、腹ただしいのも事実だった。

確かに信頼は必要だろう。それはおれも思うし、実感できる。

だが、少なくともえびこは信頼できる相手には至らなかった。むしろ、俺にとって最も疑わしい相手に相違なかった。

「ハッ！ つい、我を忘れてしまったっス!?」

ようやくえびこがそのことに気づいたのは、サタナエルが「あわれだな、小動物」とほざいてから、かなりの時間が経過していた。

空を見上げても、夕暮れの太陽は見当たらず、その代わり、月がラト達の営みを見下ろしていた。

既に、サタナエル達の姿はなく、ララティアだけが一人、心配そうにラトを見つめていた。

「す、すまなかつたっス」

「謝って許されると思っっているのか！」

ラトは即座にえびこの謝罪をはねのけた。

えびこは瞳にクエスチョンマークを浮かべる。そして即答した。

「許されるはずっス！」

「許すか！」

カッとなつてつかみかかって足払いを喰らって、見事にラトは転がされた。ラトはよろよろと立ち上がりながら、再び、えびこを問い詰めた。

「貴様！」

「つい、って言ったら、やっぱり怒るっス・・・か？」

「当たり前だ!!!!!!」

「・・・・人には、誰でも間違いはあるものっスよ!!!」

「・・・・」

・・・・俺はラト。この世界に正義と勇気と愛の素晴らしさを教えに来たスーパーヒーローだ。今日の敵は暴走星人えびこぞ。さ

あ、俺の必殺デストロイガーチップで悪の手先を粉砕だ！

「お父さん！ お父さんってば！ 遠い目をして現実から目をそらしても、事態は何にも変わらないと思うよ」

「おまえが言うな、おまえがっ！」

えへへと笑いながら言うララティアに、ラトはげんなりとした。

ラトは溜息まじりに訴えた。

「で、これからどうするんだ？」

「本当のお父さんとお母さんを探す！」

「っスね！」

とてつもなく無責任な答えが返ってきた。

「どうやってだ？」

ラトの言葉は正鵠を射ていた。

ララティアとえびこはそう訊かれると、だらだらと嫌な汗を全身にかき始めた。

「き、きつと、何とかなると思うよ！ お父さん！」

「そうっスよ！」

えびこもそれに続く。

「……それに、もしもの時には私がえびこさんをズタズタにすれば、きつと、何とかなるよ！」

突如、凄みのある薄笑いをしたララティアに、えびこは「ひいっ

！」と悲鳴を上げて硬直した。

「それも、そうだな」

ラトは構わず、その言葉にうんうんと納得してみせる。

ララティアは瞬時にして表情を切り替えるという特技の持ち主だ。最初の頃は、一緒に行動している時、俺はいつもその天然ボケなテンションと腹黒いテンションについていくのに苦労させられたものだ。

この時もそうだった。突然、腹黒い調子に変化した彼女の声に、俺とえびこは面喰らってしまった。まあ、俺はえびこよりララティアと一緒にいた時間が長かったためか、立ち直りが早かったが。

混乱しきっていた思考がどうにか収まり、えびこは素^すつ頓^{とん}狂^{きやう}な声を上げた。

「ひっ、ひどいっす　　！！！！！！」

「ひどいのは、貴様だ！」

ラトはすかさず即答した。

「大丈夫だよ、えびこさん。もしもの時の話だから！」

ララティアはそんなえびこの動揺を無視して、落ち着いたトーンの声で言った。そして、人差し指を頬につけると、えへへと笑う。

「まあ　　」

ララティアは一瞬、冷たく目を細めた。

「もしもの時には　　ね」

ララティアはくすりと笑った。それは、ラトから見てもぞら恐ろしいほどの微笑だった。

ラトはたまらずつぶやいた。

「危険思考になっっていないか？」

ラトはぴりつと張りつめた何かを感じて、目を見張った。

えびこは何でもないことのようにさらりと答えた。

「き、君の育て方に問題があるからっスよ！」

「人のせいにするな！」

ラトはカツと血を頭に上らせて、そう叫んだのだった。

ライム・ア・ライト（第一章、星空の幻想2）

そんなやり取りがあった次の日に、ラトはララティアを伴って出発した。ミルドレットの街を出て、ラト達は以前、ララティアの内に眠る力、つまりミリテリアマスターとしての力を狙っていたサークジェイドが居城としていた旧都ソルレオンに向かった。

旧都ソルレオンの門をくぐる前に、ララティアはつぶやいた。

「ラムさん、今もここの酒場で働いているのかな？」

「さあな」

ララティアの言葉もどこ吹く風という感じで、ラトは無表情にそう言った。

ラトとララティアがラムと最初に会ったのは、まだ二人が出会ってから間もない頃のことだった。その当時のラトは、ララティアのことなどただ疎ましい存在としか思っていなかった。家を家出同然で飛び出したラトには、頼るべき相手もなく、進むべき道もなかった。サークジェイド達からララティアのことを守るといふ使命も、えびこのしつこいくらいのミリテリアマスターに関する長い話も、ラトにとってはさしたる方針にはならなかった。そもそも、ラトはこの当時、ララティアのことを本当に自分の娘だとも、大切な仲間とも思っていないかったのだ。

これから俺はどうすればいいんだ？

そんなふうにはラトが迷っている時、ラムはラトの前に現れた。

その時、ララティアは自分が使ってしまった路金稼ぎのため、必死になって酒場の仕事をこなしていた。

ラトはそんなララティアのことを、ただ無関心に見つめていた。

「こんにちは、ララティアちゃん」

うわおっ！ と気を抜いていたラトはいきなり聞こえてきた女性の声に驚き、口をパクパク心臓バクバクさせる。

視線をやると、ララティアの後ろに小柄な少女が立っていた。小

柄、といつてももちろんララティアよりは年上の女性らしい。

まだあどけなさが漂う大きな紫色の瞳と腰まで届く長い薄赤色の髪が特徴的だった。クリーム色のワンピースを身にまとい、その上から青地に花柄模様のプリティなエプロンをかけている。そしてその背中には、髪色と同じ色の大きなリボンが申し訳なさにパタパタとはためいていた。

ラトは呆然とその女性を見つめていた。ラトの心臓がバクバクとラトの意志と一切関係なくわめきちらしていたのは、何も突然その女性が何の前触れもなく話しかけてきたからというばかりではなかった。

そう、その女性はすごくすごくプリティーだったのだ。おっとりとした口調から受ける印象は、元気はつらつといったララティアとはまるで対照的で、癒し系な感じの女性だった。

口をパクパクさせたままじつと見つめるラトの視線に気づいたのか、彼女はニコツと永久凍土の氷さえ溶かすような笑顔を向けてくれた。

「こんにちは。初めましてさんですよね？」

「こっつ、こっつ、こっつ、こっつ、こっつ」

笑顔の弾丸にハートを撃ち抜かれ、ラトがうまく口を動かさずにいると、彼女は「ニワトリさんのまねですか？」と、クスクス声を立てて本当におかしそうに笑った。

その笑顔がまたまたハートにクリティカルヒット。

ラトはますますしゃべれなくなってしまう。

そんなラトに、笑いをおさめた彼女はにっこりと言った。

「初めまして、私はラミって言います。ここの酒場で働いていたりします。よろしく願いますね？」

「おっ、俺は　その、えっと・・・」

「私のお父さんだよ！」

ラトの言葉をさえぎって、ラトの様子をおかしそうに見ていたララティアが、ペシペシとラトを叩きながら言った。

「お、お父さん？」

ラミは怪訝そうに首を傾げた。

「誤解を招くようなことを言っな！」

「で、でもでも、本当のことだし……」

ラトが不機嫌そうに叫ぶと、ララティアはふてくされたように顔を俯き、頬を膨らませる。

ラミの疑問に答えるように、ララティアは言った。

「私ね、この時代より未来から来たんだよ！」

「未来……から？」

「うん！」

ララティアが大きく頷いてみせると、ラミは顔を曇らせた。

「……私やルカと同じね」

ラミは悲しそうな表情で、確かにそうつぶやいた。その言葉は、押し殺すようなつぶやきでひどく聞き取りづらかった。それでもほとんど偶然に近い幸運で、ラトはラミの言葉を聞き取ることに成功した。

「同じ」とはどういう意味だろうか？

疑念が矢になってラトの胸に刺さった。「同じ」。まるで自分もララティアと同じように未来からやってきたような台詞だ。

「あの……ラトさん」

ラトの思案は、ラミの呼びかけによって中断を余儀なくされた。気を取り直して、ラトは言った。

「なっ、なんだ？」

「ララティアちゃんのことを大切にしてくださいね」

ラミはラトをじっと見つめた。

「……」

ラトは何も答えない。いや、答えられなかった。ララティアの力を狙っている奴らから、ララティアを守ること。この時、ラトはいまだに、ララティアのことを守ろうとする気持ちに到達できないでいた。

ラムミはひとつ頷くと、ラトの前に立った。そしてそのまま黙って、ラトの顔を見つめていた。ラトも特に言うべきことがなかったため、そのままずっと黙っていた。

「大切な人に会えないのは、本当に辛いことだから……」
だいぶ間があつてから、ラムミが言った。

「……そうだね」

そう答えたのは、ラトではなくララティアだった。少しだけ悲しそうな顔をして頷いた。

「どうして……」

その質問を口にするべきかどうか、ラトは一瞬、迷った。しかし、こらえきれなくなつて、ラトは訊いた。

「どうして、そんなふうに当たり前のように言えるんだ？」

「えっ？」

ラムミは不思議そうに首を傾げた。

ラトは肺に息を吸い込んだ。ためらいも恐れも感じてしまう前に、ラトは声と一緒にそれを吐き出した。

「大切な人なんて、俺にはいないからな！」

それを口にした瞬間、ラトは驚くほど冷静な気持ちでいられた。そして、分かっていた。ラムミはきっと、俺のその言葉を聞いて、ひどく困惑した、それでいて迷惑そうな顔をするだろう、と。そして俺に、申し訳なさそうな声でこう言うのだ。ごめんね、と。

でも、現実には、ラムミは迷惑な顔をしたりはしなかった。彼女はニコツと自然な様子で微笑んで、ラトに言った。

「そんなことないわ」

ラムミは首を大きく振った。それから急に両手を伸ばして、その手でラトの顔を優しく挟み込んだ。

「おい？」

手のひらを通して、朝の光のようなぬくもりが頬に伝わってくる。ラトはどきまぎして、舌が上手く回らない。

「そんなことないわ、ラトさん」

と、ラミは再び言った。

「ラトさんのそばには、ララティアちゃんがいるわ。あなたのことを一番、大切に思っているのはララティアちゃんだから……」
ラトさんは決して独りではないの。ララティアちゃんがずっと一緒なのだから。あとは、あなたがそれに気づいてあげるだけ」

「ララティアが？」

「ええ」　ときどきラミの声が、ラトの心に神の言葉のように響く時がある。この時がそうだった。『大切に思っている』『ずっと一緒にいる』それらの台詞には何の根拠もなく、何かの保証には決してなりえないことを知りながら、ラミが口にする、まるでそれはすでに約束された未来の出来事のように感じられた。

ラミはすうっとラトの顔を開放し、彼に微笑みかけた。ラミの両手が離れても、ラトの頬には彼女のぬくもりが残った。そのぬくもりが、ラトの不安や恐怖を溶かし崩してしまったのかもしれない。気がつく、ラトの心から、嘘のようにそれらの存在が取り除かれていた。

ラミは言った。

「だから、大丈夫」……そうなのかもな」

ラトはラミの言葉に頷いた。

ラトはラミを見て、それからララティアを見た。そして一度、空を見上げた。澄み渡る青い空。流れていく白い雲。

再び、二人に視線を戻した時、ラトの心は決まっていた。

「まあ、しばらくは、ララティアと一緒にやってもいいかもしれないな」

と、ラトは言った。

どうしてあの時、自分はラミの言葉を受け入れてしまったのだろうか、と後になってラトは何度か考えることがあった。

いつもの　つまりその当時のラトなら、そんな申し出を聞き入れるはずはなかった。知ったことか、と即座にはねつけていたはず

だ。でも、あの時のラトはそうしなかった。それがとても不思議で、ラトはその後何度もあの時のことを振り返った。

そしてある日、ラトはひとつの結論にたどり着くことになる。きっと、俺はあの時すでに、ラミにやられてしまっていたのだらう。

ラミは言った。

「ララティアちゃんのことを大切にしてくださいね」

本当はラトは、その言葉に、こんな人間がいたのかと衝撃を受けた。ラトは『ちょうちょ』と呼ばれる種族で、人間ではない。間違はなく、自分はララティアの父親ではないと感じていた。だからこそ、ララティアから『お父さん』と呼ばれると、ラトは苛立ってしまった。

だけど、この時、ラトは言葉を失った。ラミの台詞はこれ以上ないというぐらい的を得ていた。

そして、ラミの存在。ラミが言った「大切な人に会えないのは、本当に辛いことだから……」という言葉に、ラトは強い反発を覚えたが、本当はもつとずっと深いところで、その言葉はラトの心臓打ち貫いていたのだ。ラトはあの時、気づいていなかったけれど、いや、自分では気づけないほどに、深い深い感動を覚えたのだらう。

それはひとつの救済だった。

ラミの生きる姿勢と言葉は、失望と絶望という高い壁に囲まれたラトの世界に差し込まれた一条の光だった。

いや、すべてを決定づけたのは、本当はもつと前のことだったのかもしれない。それはラミと出会った時に、何もかも決まっていたことだったのかもしれない。

最後に、ラミは言った。

「だから、大丈夫」

大丈夫。それは独りではないという意味だったけれど、でも何故か、その言葉を口にした瞬間、ラミの姿が、ラトの中で今は亡き母

とだぶった。『ちようちよ』である母と『人間』であるラミとではまるで容姿は違ったが、母もラミも優しく穏やかで、だけどしっかりと芯の強い女性だった。

多分、自分は、ラミに失ってしまった母を重ね合わせていたのだ。だから、最初は腹を立てていたはずなのに、ラミの最初の言葉に迷い、二度目の言葉を受け入れてしまったのだろう。

ようやくラトが自分の中でそう結論づけることができたのは、この日の出会いからもうサークジエイドを倒して、しばらく時間が経過してからのことだった。そして実のところ、その時にはもう、すでに何もかもが手遅れになっていた。

大切なことに気づくには、人生はあまりにも短すぎるのかもしれない。

「ねえ、お父さん」

そろそろ酒場が見えてきた頃、ララティアはラトに呼びかけた。

「なんだ？」

と、ラトは顔をしかめた。

「あの、サタナエルさん達とも出会ったのも、ここだったよね？」

「そうだったか？」

「そうだったよ！」

ラトはララティアを見た。珍しく、ララティアの顔には微笑が浮かんでいなかった。

「あいつらのことは忘れる！ バカがうつる」

「もう、うつっていると思うよ！ お父さん！」 ラトが茶化すとララティアはようやくかすかに笑った。

「それにしても、あれからサタナエルさん達、どこに行っちゃったのかな？」

「知るか！」

ラトは慚然として、ララティアの言葉に応えた。

ララティアは苦笑を浮かべ、手にしていた街の地図を見つめた。そして、また口を開いた。

「お父さんは、サタナエルさん達のこと、気にならないの？」

「元々、敵だった奴らのことなんか、気にする方がおかしいわい！」
「ぶう……」

ララティアは傷つけられた表情で、顔を俯かせた。しかし、すぐに顔を上げ、また、太陽をいっぱいに浴びたひまわりのような笑顔をラトに向けた。「お父さん……、サタナエルさん達のこと
が好きなんだね！」

「違うわい！」

苛立つ心のまま、ラトは声を限りに叫んだ。

ララティアを見やりながら、ラトはサタナエル達と初めて出会った場面を、頭の片隅に思い浮かべていた。

サタナエル達と初めて出会い、そして戦ったのは、ラミと出会ってから間もない頃のことだった。

サタナエル達の主、つまりサークジエイドは、ララティアの内に眠るミリテリアマスターとしての力を狙っていた。

ラト達が生きるこの世界は、人々からアーツと呼ばれている。その名の意味するところはよく分からない。誰が名づけたのかも知らない。恐らく、この星の神々がそう呼んでいたのを、いつのまにか人々の間に浸透したのだろう。

アーツは巨大な海と、いくつかの大陸によって成り立っている。大陸の大きさは様々で、大きな大陸と呼べるようなものから、小さな島と呼べるものまである。

それらの大陸に住む種族も多種多様だ。人間。人より耳が尖ったよ
うなエルフ。天使を思わせる容姿の羽翼人。人の手のひらに似た容
姿を持つちようちよ。そして、魔族や魔物。

もしかしたら、他にも別の種族が存在するかもしれない世界。それがアーツだ。

ラト達が今いるのも、もちろんアーツにある大陸のひとつだった。そもそもこの世界には、六人の神々がいる。天の魔王、地の魔王、夢月の女神、魔王、星の女神、時音の女神。普通、魔法は、このうちの一人から力を借りて使うものである。だが、ミリテリアと呼ばれる存在は、そのうちの一人の力を最大限に借りて発揮することができる。

だけど、ララティアはそれとは違った。実は、六人の神々すべての力を借りることができらしい。なんて言うと、まるで本当にそれができるみたいに聞こえるかもしれないが、実際はそう大したことではない。できるかもしれない、その可能性がララティアにはある、というだけなのだ。それだけの話だ。そんなことはすべて嘘だと思えるくらい、ララティアは星の魔法、つまり星の女神から力を借りる魔法ぐらいしか扱えなかった。ただ、ララティアの場合、普通の人も魔力の潜在能力キャパシティーがはるかに高かった。それが、サークジェイドに見出され、目をつけられた原因だった。

「うわっはっはっはっは、ついに見つけたぞ、ミリテリアマスターを！」

突如、その騎士風のあの男は、ラトとララティアの目の前に現れた。それは、ララティアの酒場での仕事が一段落し、ひとまず宿屋に戻ろうかという時だった。

ラト達をさえぎるように、男は酒場の扉で立ちふさがっていた。そして、その背後には、彼の部下らしき五人の人間の姿もあった。彼らを見て、ララティアは顔をしかめた。

「お父さん」　あくまで真剣な表情で、ララティアは言った。

「もしかして、お父さんの知っている人？」

「こんな変な奴ら、俺が知っているわけないだろうが！」

疑いの目で見えるララティアに、ラトは表情を険しくした。

「それもそうだね！」

納得したかのように、ララティアはうんうんと頷く。

「じゃあ、人違いだね！」

「そうだな」

そう言ってきびすを返すラト。そしてそのまま、ララティアとともにその場から立ち去ろうとした。だが。

「待ちたまえ、貴様ら！」

男の仰々しい剣幕に、ラトは思わず立ち止まった。ラトは嫌そうな表情を浮かべて、その男に振り返る。その顔は、これ以上、この男達の相手をするのを、あからさまに嫌がっていた。

嫌そうにするラトとララティアに、男は自慢げに声をかけてきた。「小娘、貴様、光栄に思うがよい。我らが主、サークジエイド様のお力になれるのだからな」

「お父さん……」

ララティアは恐ろしげに男を見ると、身を震わせた。

「この人、変質者だよ！ 怖いよ！」

青い顔で自分の肩を抱きしめて、ララティアは震える声で漏らす。

「そのようだな」

ラトは頭が痛そうに顔をしかめた。

「へっ、変質者だっ！？」

騎士風の男は拳を握りしめ、前屈みになって全身を震わせた。だが、すぐに平然を装うと、自慢げにこう告げる。「貴様ら、よく聞くがよい。私はあの、かの有名な白炎騎士団の隊長、サタナエル様だ」

よく通る声で名乗ると、サタナエルは無意味に白い歯をきらめかせた。

……酒場に静寂が満ちた。唯一聞こえる音は、サタナエルの足で地面を叩くトントンという音だけだった。他の誰もが、自分の発する言葉を失い、固まっていた。

最初に硬直が解けたのは、ラトだった。ラトはララティアの耳元にそつとささやいた。

「……知っているか？ ララティア」

「知っているわけないよ、お父さん」

ララティアは、にっこりと笑って言った。

ララティアがそう言うのと、すぐに他の酒場の人達のひそひそ話が始まった。

「おい、おまえら、あいつ、知っているか？」

「いや、見たことない。おまえは？」

「まったく記憶にございませぬ。もしかして、自称騎士団とかいうやつかなんか？」

「ひよつとすると、劇団員の人とかかもしれないな。でも、もし劇団員なら、あんなセンスしてるところを見ると、間違いなくへぼだな」

「どつちにしろ、知らないっていうのは申し訳なくないか。誰も自分のことを知っている人がいないと知ったら、がっかりしちゃうかもな」

「でもホントに知らねーから仕方ないだろう。下手に知っているとか言ったら、いらんサインとかもらったり、出演作とか訊かれてもつと厄介なことにならないか？」「どつちにしても、『変質者』だぜ。それに、あの『かの有名な』って自己紹介が、あまりにもありきたりで古すぎないか。やっぱりああいうことをするのは、売れない奴に決まっている」

「おつ、おのれ」

酒場の人達のヒソヒソ話がダメージを与えたのか、泣きそうな声を出して、サタナエルは体を屈め、「うむむむ」と眉間にしわを寄せて唸り声を上げた。

ラトとララティアは、いくら考えても彼が誰なのか分からなかった。他の酒場の人達も、それは同様のようだった。

ついに業を煮やしたサタナエルは、地団駄を踏んで叫んだ。

「もう、いいわ！ 命拾いしたな、小娘」 そう吐き捨てると、そのままサタナエル達は立ち去っていった。

ララティアがぼつりと言った。

「何だったんだろうね？ お父さん」

「さあな」

と、ラトは言った。

サタナエル達がララティアの力を狙ってやってきたことをラト達
が知るのは、それからもう少し後のことになる。

その時にはもう、ラト達はサタナエル達の相手は慣れっこになっ
てしまっていたが。

「うわっはっはっはっは、見つけたぞ、ミリテリアマスター！」
ラト達を待ち伏せしていたサタナエルは腕まくりをして、ラト達
の前に立った。

それを見た瞬間、ラトはげんなりとした表情をみせた。すでに、
今日、一日で三度目の遭遇だからだ。

「サタナエルさん達、いつも大変だね」

「全くだな」

嫌そうな顔をして溜息をついたララティアに同意するように、ラ
トは大きく　そして深く頷いてみせた。

「いつもいつも、感心だな」

「もう、ストーカーは犯罪なのにね」

そう言っていていそいそと立ち去ろうとしたラト達を、即座にサタナ
エル達の部下達が取り囲んで足止めした。

そんなラト達に、サタナエルが鼻息も荒く言い放つ。

「小娘、いい加減、諦めるがよい。あまり、私の手を煩わづらわせるな」

「えい！」

「ぐえっ！」

ぐいっ、べちゃっ！

とっさにララティアは、サタナエルのマントを引つ張った。つん
のめったサタナエルはカエルのような声をあげ、無様に地面に顔面
を打ちつける。一度ついた勢いはそれだけでは収まらない。さらに
数メートル前転したところで、ようやく止まった。サタナエルはそ
のままぐったり地面に突っ伏す。

しばらく、辺りに不気味な沈黙が降りた。

「サタナエル、様？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・おい！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

サタナエルの部下達の呼びかけにも、ラトの呼びかけにも、サタナエルは答えない。サタナエルの部下達の血の気が、一気にざざーっと引いていった。彼らは大慌てで、サタナエルをがくがくと揺さぶった。

「サタナエル様、目をお覚まし下さい。サタナエルさま！」

事を起こした張本人であるララティアは、あくまで感心のなさそうな物言いで告げた。

「サタナエルさん、さらに顔色青くなっているみたい」

「ああっ！ しつかりなさって下さい、サタナエル様！・・・・・・こ、こうしている場合ではありません！」

ベリルがそう断言すると、彼らはさっとサタナエルを抱え込んだ。そしてそのまま、サタナエルを持ち上げると、そそくさとその場から立ち去っていった。

胸元に指をからませながら、ララティアが何気ない表情のまま、ラトに訊いた。

「何だったんだろうね、お父さん」

「さあな」

ラトはそう答えると、呆れたように深い溜息をついた。

旧都ソルレオンは、外からの期待を裏切らないだけの活気に満ちていた。大通りの両脇には露天が並び、見たこともない食べ物や雑貨類を売る客引きの声が飛びかう。酒場に繋がる路地には奥行きがあり、入り組んだそこはまるで迷宮のように見える。ラト達も初めて訪れた時には、見るものが全てが新鮮に映った。

初めて訪れた時、幸い、ラトの懐にはいくらかの余裕があったの

で、露天でおいしそうな芳香を漂わせていた串焼きを買い、それを二人で（？）かじりながら辺りを見て回った。少し筋張った肉だったが、甘辛いタレがよくからんで思ったよりも美味しかったのを覚えていいる。そして、ララティアが食べ過ぎだろう、と思えるほどの食べ物を買ひ占め、初日で全財産を失ったのも、ラトはしっかりと根に持っている……のだが。

サタナエル達との何度目かの遭遇のあと、ラト達は泊まっている宿屋に戻るため、大通りから離れた脇道を歩いていった。

「おっと、気をつけるよ！」

脇見をしながら歩いていたせいで、ラトは誰かとぶつかってしまった。

「あ、すみません」

ララティアがそう謝ったのにも関わらず、男は見向きもせず人混みの中に消えていった。

途端、ラトは非難をこめた眼差しで、キツとその男を射抜いた。

「なんだ、あいつ」

「何か、慌ただしい人だったね」

などと感想を漏らして、ラトとララティアは再び歩き出す。

ラトが懐から財布が消えているのに気がついたのは、それからしばらく経ってからのことだった。

「くそお」

ラトが興奮さめやらぬ顔で叫んだ。怒りのあまり、拳を小さく震わせる。

街を一回りしただけで、もう日は西に傾きつつあった。顔を覚えていない男を捜すには、この街はあまりにも広すぎる。

ラトは途方に暮れ、徒労に不平を漏らす脚（？）をなだめながら、すぐそこにある階段に座り込んだ。ここは街に入ってきたのとは反対側の、北の外れのような場所だった。ゆるやかな坂になっており、坂に沿って建てられた家々を石の階段がつかないでいる。その一番上には、

大きな鐘楼を備えた大聖堂が建てられていた。

今は夕日に照らされ茜色に染まるその壁は、日中は眩しいほどの白色なのだろう。大聖堂は厳肅な雰囲気にも包まれ、悠然とそびえている。

それを見て、ラトは急に惨めな気持ちになった。

「はあ〜」

ラトはそう溜息をつくくと、夕焼けに紅く染まる空を見上げた。

このままでは今夜の宿代もままならない。さっき、酒場で初の給料祝いということで食べさせてもらったばかりだからまだ空腹は感じないが、それもいつまでも保ちはしないだろう。財布には贅沢さえしなれば、まだ、次の酒場の給料日までには宿に泊まれるお金が入っていたというのに。

苦悶の表情を浮かべて「うーん」と唸っているラトの様子を、ララティアは無言のまま、まじまじと見つめていた。

そして。

ララティアはハツとした。

お父さんはきつと、あの人にお金をプレゼントしたんだ！

その照れくささや動揺を隠すために、こうしてわめき散らしているようにララティアには思えた。

うんうん、そうに決まっているよ！

それなのに、私、てっきりお金は盗まれてしまったのだとばかり、思ってしまったなんて！

ララティアは急にいたたまれなくなってきた、大きな瞳をうるうると潤ませた。

「うう、お父さんは、優しい人なんだね……」

その唐突な行動に驚いたのか、ラトは目を丸くした。

「おい！ どういう意味だ？」

「だっ、だつて、見ず知らずの人にお金をあげるなんて……、お父さんは、やっぱりすごいよ！」

「はあっ？」

ラトは虚を突かれて、いぶかしげに眉を寄せる。

ララティアはぐずぐずと鼻をすすりながら、指を胸元でからませた。

「私、お父さんの気も知らないで、ずっと、盗まれたのかと思っちゃっていた。ああ、別に無理して隠さなくてもいいよ。お父さんの気持ちは、娘の私がよくわかってるからっ！」

「おい！」

ラトはぶすつとした顔をして、冷たくララティアを横目で見た。

だが、ララティアはそれには全く気づかず、さつとラトの両手を握りしめると瞳を輝かせながら言った。

「無一文になっちゃったのは辛いけれど、これからも頑張ろうね、お父さん！」

「人の話を聞け！」

ラトは、半ばやけくそでそう叫んだ。

しかし、当のララティアには、その言葉は全く届いていないのだった。

「……いい話っスね」

だが、そこに突如、エビフライのような生き物が、ラト達の前にトコトコと進み出た。そして突然、その生き物の左右の瞳からは、ナイアガラの滝もかくやというほどの大量の涙が凄まじい勢いで流れ落ちていった。

「感動的っス！ 素晴らしいっス！」

「お、お父さん、どうしよう？ どうしよう？」

「……ほっとけ」

泣きじゃくるその生き物の姿に、ララティアはどうしていいのかわからずオロオロその場を行ったり来たりするばかり。

ラトはというと、ただ呆れたように呆然とその場に立ち尽くしていた。

結局、その生物の涙の大洪水が沈静化したのは、それから十分も

経った後のことだった。

「うう……っス……」

と、未だぐずつき、ララティアのハンカチで涙を拭きとるその生き物に、警戒心もあらわにしながら、ラトは尋ねた。

「貴様、何の用だ？」

「こんにちは、えびこっス！」

瞳をきらめかせ、満面の笑顔を浮かべて、えびこはピシッとポーズを決めた。折良く風が吹き、見事な尻尾が優雅(?)になびく。

「こんにちはっス！ えびこさん！」

えびこの挨拶に応えるように、ララティアは嬉しそうに右手を上げてえびこの言葉使いを真似た。

それを見て満足げに微笑んだえびこに、ラトはすかさず突っ込む。

「また、変な登場の仕方だな……！」

「変ではないっス！」

ラトの言葉に、えびこは鋭く反論した。別に意外なことではなかった。むしろ当然のことだろう。当然でなかったのは、えびこの次の行動だった。

バシッ！

カッと、えびこは怒りで瞳を真っ赤にした。そして、速射砲のようなジョブが三連打で、ラトの顔面を砕いた。ラトはそれに耐えられず、よろめき崩れ落ちてゆく。だが、ラトをダウンに追い込んだ程度では、怒れるえびこは満足しなかった。

「バシッ！」

一発。

「バシッ！ バシッ！」

二発。

「バシッ！ バシッ！ バシッ！」

三発。

「バシッ！ バシッ！ バシッ！ バシッ！ バシッ！ バシッ！」

四発五六発七発八発とにかくいっぱいだ。

消えいく意識の中で、ラトはひたすらこう思っていた。

こいつだけは殺す！ 絶対に殺す！ と。

「ハッ！ つい、我を忘れてしまったっス！？」

ようやくえびこがそのことに気づいたのは、それからかなりの時間が経過してからのことだった。空を見上げて、夕暮れの太陽は見当たらず、その代わり、月がラト達の営みを見下ろしていた。

ララティアはどこからか救急箱を借りてきて、ラトのことを治療してくれた。さすがにララティアは夢月の女神の力。つまり、回復魔法は使えなかったので、こうして治療するしかない。

ラトは、そんなララティアの優しさに心を打たれた。もしえびこだったら、間違いなくこうはいかないだろう。きっと、親切顔で「痛いところはないっスか？」とか言いながら、大複ビンタをしてくるに決まっている。

ひとしきりの治療が終えたあと、えびこがおずおずと口を開いた。「すまなかつたっス」 えびこはぺこりとお辞儀をした。腰からきつちりと折る、丁重な一礼である。

それでも納得いかないような表情で、ラトは不機嫌そうに吐き捨てた。

「き、貴様！」

「そっ、そんなことよりっス」

ラトの言葉をさえぎって、えびこはバツが悪そうに大きな汗をかくと、さっと話題を変えた。しらじらしいえびこの態度に、ラトはげんなりとする。

「逃げたな！」

怒りで打ち震えるラトを無視して、えびこはさらに言葉が続けた。そして、どこか状況を楽しんでいるかのようにならなラト達を見回した。

「君はこれから、ララティアと一緒に暮らしていくことになると思っスが」

「もう、とっくに暮らしているわい！」

と、ラトはすかさず言葉を挟む。

「……と、とにかく、ララティアを立派に育ててほしいっす！」

「すでに、立派ではないと思うが……」

ラトの即答に、えびこは再び、大きな汗をかいた。

「そ、そんなことないっす！」

首を左右に大きくブルブルと振ると、えびこはピシッと音がしそうなほど鋭く指先をラトに突きつけた。

「うわべだけで物事を判断してはいけないっす！ 目や耳だけに頼るから、迷いが生じるっす！！ 心の眼を開くっす！ さすれば外観や目先だけの言葉に惑わされることなどないっす！ さあ、開眼っす！」

えびこは決めポーズを解き、ピシッと自分の額に手を触れる。

「決まったっす！」

「あの、えびこさん」

と、ララティアが遠慮がちに口を挟んだ。

「何っすか？」

「素晴らしい言葉だと思うんだけど、えびこさんが言うところこれほど似合わない言葉はないと思うよ！」

ララティアが正直な感想を述べる。ラトもそれに同意するように大きく頷いてみせた。

「そ、そんなはずはないっすよ！？」

必死でごまかすえびこをチラッと見て、ラトは投げやりで訊いた。

「で、実際のところ、何の用だ？」

ラトにそう聞かれると、もったいぶったようにえびこは咳払いをしてみせる。

「サークジエイドが、ララティアの ミリテリアマスターとしての力を狙っているみたいっす！ だから、サークジエイドから、ララティアを守ってほしいっすよ！」

えびこは拳を突き上げてラトに向かって力強く叫ぶと、意味もな

く胸を張る。

「それだけかよ……」

と、ラトは言わずにはいられなかった。

それを聞いて、えびこはカッと目を見開いた。

「それだけとは何事っスか!? 君はひどいっス! ひどすぎるっス!」

自然とからだに力がこもっていた。えびこの拳が小刻みに震えていた。

「君は最低っス!」

と、えびこは続けた。

「ララティアは君の娘っスよ! 君のことを一番、信頼しているっスよ! それなのに……君はひどすぎるっス!」

しばらくの間、ラトもえびこも黙っていた。ララティアもふたり(?)に口を挟むことなく、会話の成り行きをにこにこしながら見守っていた。

ラトが先に口を開いた。

「……俺は、ララティアを守るのは当たり前だから、それだけかよ、って言ったんだが」

と、ラトは言った。

再び、先程より気まずい沈黙が、辺りをじんわりと覆っていった。身じろぎもせず、というか戸惑いの表情を浮かべながら、えびこはラトを見続けた。

やがて、重圧に耐えかねたように、えびこは視線をきよろきよろと漂わせながら訊いた。

「……サークジエイドから、ララティアを守ってくれるってことっスか?」

えびこはもう一度、同じ疑問を口にした。自分で意識してそうしたわけではないが、のどから出たのは絞り出されたような声だった。

「ララティアはまあ、一応、俺の娘だから……な」

ごく当然のことのように答えたラトに、えびこは慌てて叫んだ。

「そ、そうだったっすか!? 意外っス!!!」

「どういう意味だ!」

えびこの予想以上の驚愕ぶりに、ラトは思わず刺々しく言った。その間に、ララティアが邪気のない口調でえびこに聞いた。

「えびこさんも守ってくれるんだよね?」

「ぎくっス!」

ん………?

えびこはわざとらしく咳払いをした後、とびっきりの笑顔で言った。

「………む、無理っスよ。今、心身を鍛えていて忙しいっス!」

「そうなんだ」

いつのまにかうつむき、何事か考え事をしていたラトが顔を上げた。

「………だいたい、貴様が守ればいいことだろうが!」

またもやえびこが「ぎくっ!」と飛び跳ねた。

「まあ、いい」とつぶやいて、ラトは姿勢を正した。

えびこからララティアに視線を移すと、ラトは言った。

「さっさと野宿するところを探すぞ!」

相変わらず仏頂面でそう言うと、ラトはララティアに背中を向けた。

「はーい!」

元気はつらつといった感じでララティアはそう答えると、そのまま、ラトの後を追いかけるように走ってゆく。

「愛っスね!」

誰に言っているのかわからない言葉で締めくくった後、謎の高笑いを残して、えびこはその場から姿を消した。

ラトとララティアは、どうにか夜露をしのげそうな場所を探して辺りを見回した。長い階段を昇り、大聖堂の敷地に足を踏み入れると人気のない庭園が姿を見せた。これだけの大きな建物だ、無人と

いうことはないだろう。しかし、この庭園の片隅でラトとララティアぐらい一夜をしのいでも、中の人間にはわからないのではないだろうか。

「まあ、ここなら野宿しても、バレはしないだろうな」

ラトはどこか投げやりな口調で、そうつぶやいた。

大聖堂の前は、ちよつとした高台になっていた。端まで歩くと、ラトはそこに設けられた鉄の柵にもたれかかる。そこから、紅く染まった旧都ソルレオンが一望できた。ここから見ると、この街全体がまるでちつぽけな存在のように見える。

「今夜はともかく、明日はどうするか・・・だな」

ラトは溜息を吐いて、柵の上にあごを乗せた。

「ねえ、お父さん」

ララティアはふいにラトの隣に並ぶと、ぎりぎり聞こえるぐらいの小さな声で呼びかけた。

「・・・ん？」

ララティアの声はちゃんとラトに届いたらしい。ラトは街からララティアへと顔を動かした。

「お父さんは私のこと、好き？」

ララティアは笑顔でラトにそう訊いてきた。突拍子もない問い掛けに驚いて、ラトは隣に立つララティアを見た。

ララティアは笑みを収めると、その代わりに真剣な表情で口をゆつくりと開く。ララティアの口から言葉が放たれる。

「私は大好きだよ！」

まるで自分に告白するかのようなセリフに、一瞬、自分の息が止まるのではないかとラトは錯覚する。だけど、息は止まらない。ゆつくりと慎重に、一語一語確かめながら、ラトはララティアに聞き返す。

「急に、何だ？」

「私、お父さんに会えてよかったと思っている。本当だよ！」

ララティアがふふっと思い出し笑いをした。ラトはそれを見て、

ちよつと いや、かなりうるたえてしまった。

「何だ？ 急に改まって」

「なんとなく！ そう言いたかったの」

ララティアは、ぱあつと顔を輝かせて笑った。そして、人差し指を口元に寄せる。

不意に言われた言葉に、またラトは驚いてしまった。

「あのね」

突如、ララティアは遠い目をして、夜空を見上げた。

「ひよつとしたら、私、お父さんに『ありがとう』って言うの、これが初めてだったかもしれない……」

本当は初めてではなかったが、ララティアには本気で言った記憶がなかった。

「だからね、いつも私と一緒にいてくれてありがとう！」

ララティアはそう言っつて、ラトに陽だまりのような笑顔を見せた。

「ああ」

ラトはそっぽ向いて、鼻先をかいた。その顔がほんのり赤いのを、ララティアは見逃さなかった。

ララティアはつやつやした頬を染めて、はにかむように笑った。

「お父さん、これからもよろしくね！」

と、とてもうれしそうにララティアは言った。

人生というのは長い長い旅なのかもしれない。人はみんな自分でも気づかないうちに何かを得るために旅をして、そして何かを得たときに本当の答えが分かるのかもしれない。

だとすると、俺はこの時も旅のどの辺りにいて、何を得るために旅をしていたのか。

今の俺には、はっきりとそれが分かる。そして、この時のララティアの言葉の本当の意味も。何事にも無関心だった俺に、ララティアとの出会いが与えた本当のものが何だったのかも、俺がララティアに求めていたものが何なのかも、すべて俺には分かっている。

そして本当はこの晩、俺はそれらのことを気づくべきだったということも。

……どうして俺は、いや俺達は、事前に自分の運命を知ることができないんだ。

結局、この日は夜更けすぎまで、ララティアの話に付き合わされてしまった。

ライム・ア・ライト(第一章、星空の幻想2)(後書き)

次回から第二章です。

ライム・ア・ライト(第二章、あなたと再会の約束を)(前書き)

今回から第二章です。

ライム・ア・ライト（第二章、あなたと再会の約束を）

イヤな空だ……。

明け方に起きたラトはそう感じた。

朝焼けがまるで赤さびのように赤い。

空気が肌に吸いつくように湿っぽい。

気温は低くないはずなのに、悪寒が走った。

朝日の温かさはあるはずなのに、まるで素通りしていくような感じをラトは恨めしく思った。何故なら、この不気味な感覚を暖めて解きほぐすことができないのだから。

サークジェイドがララティアの ミリテリアマスターとしての力を本格的に狙ってくる、というえびこの言葉も気になる。何か事件でも起きそうな空模様だ……。そんなことを考えながら、ララティアが眠っているはずの寝袋にラトは向かうが、何故かすでもぬけの殻だった。注意散漫になっていたのか、ラトはいつもみたいに、すぐにララティアを探す事はせず、昨日と同じように鉄の柵にもたれかかると街を一望する。

「で、これから、どうするかだな」

ラトは寝ぼけた声でそうつぶやくと、溜息を吐いた。

「……………それにしても、ララティアの奴、どこに行ったんだ？」

先に、ララティアを探すか。

そう腹を決め一人顔いたラトは、視線の先に偶然、大聖堂に続く階段を昇ってくる人影をとらえた。人影？ いや、違う。それは、人ではなかった。黒猫だ。瞳が大きく、黒目がくりくりしてなかなか愛らしい顔立ちをしているのだが、普通の猫よりはどこか冷めた眼差しをしている気がした。

二匹（？）の距離が普通に言葉をかわせるくらいになってからやっと、黒猫はその場に立ち止まった。

「……………！」

何故か驚いたように目を見開き、黒猫は息を呑む。もちろん、ラトとは初対面だ。なのにそこには憎悪と哀しさが入りまじっているように思えた。

どうして、そんな顔をするんだ!?!?!

ラトは思わず、声をかけようとした。

だが、黒猫はラトを見て驚いているのではなかったらしい。

「この波動は……、まさか、あれが目覚めるのかしら……」

黒猫は空を見上げると、表情を険しくした。それから小首を傾げた。

突如、どこからともなく、鐘の音が聞こえてきたからだ。

ラトが辺りをきよろきよろと見回していると、黒猫は真剣な表情を浮かべて言った。

「……時間がないようね。ルカに知らせないと」

そう告げると、黒猫はその場からフツと姿を消した。

高台はまた一瞬にして静寂に戻った。取り残されたラトは、ただただ呆然としていた。

「猫がしゃべった!?!?」

鉄柵を持つ手をわなわなと震わせながら、ラトは驚きのあまり、声を張り上げた。エビフライのような姿のえびこをいつも見ているとはいえ、猫がしゃべるというあまりにも衝撃的な現場を目撃し、ラトは言葉を失ってしまった。

ラトは一度、自分を落ち着かそうと、深く大きく深呼吸した。ふと横を見ると、街へと続く階段が目に入った。

ラトは無理やり表情を取り繕い、もう一度、階段を見た。

「とにかく、追ってみるか!」

などとぼやきながら黒猫を探しに街に戻ったラトは、街中を覗き込んで、そして見回して、我が目を疑うことになる。

「誰もいないのか!?!?」

ラトは目を疑った。街には、黒猫どころか、人一人いない。

大聖堂から街に戻ってきたラトが見た光景は、まるで何かの終末を思わせるほどはかなく荒涼たるものだった。

「どうなっているんだ？」

途方に縲れたように、ラトは周囲を見回す。自分が場違いなところにいるような気分なのか、居心地悪そうにブルブルツと身を震わせた。

「とにかく、探してみるか」

自分に言い聞かせるようにつぶやきながらも、ラトは街中をドンドン進んでいく。足取りは言葉ほど迷ってはいないようだ。

「それにしても、本当にララティアはどこに行ったんだ？」

まだ、サタナエル達にさらわれたかもしれないという可能性に気づかないラトの緊張感の全くない独り言。一応、身を隠しているつもりなのか、家の壁から壁へとラトは駆けていった。

「それにしても誰もいないっていうのは、本当に殺風景だな」

好き勝手な批評を加えながら、ラトは歩き続ける。

やがて道は行き止まり、街の門にたどり着いた。しばらく迷った拳げ句、ラトはビシツと指を指して自信たっぷり宣言した。

「こつちだな」

断固とした足取りでラトが歩き出した直後、背後から誰かの話声がした。

「……………そのようね」

ラトは振り返って、声の出所を見当づける。

「やつぱり、こつちだな」

あつさりと言を翻すと、ラトは声のした方向へと向かっていった。そこには、先程の黒猫と銀色の髪の青年が立っていた。

「遅かったようだな」

銀色の髪の青年は辺りを見回すと、ぽつりとつぶやいた。すると、先程の黒猫が、彼を静かに見据えて言った。

「まだ、チャンスはこちらにあるわよ……………」

真面目な声色に、ラトはぱちくりと瞬きした。やはり、猫がしゃ

べったのは聞き間違いとかではなかったらしい。

「そのようだな。奴らは何故か、焦っている。その証拠に、奴らはミリテリアマスターのみならず、この街の人々全てをさらっていった……」

「そのようね」

青年が哀しげに街から目を逸らすと、黒猫は静かに頷く。

「奴らの狙いが分かるまでは、うかつにこちらからは手を出せないか……」

「少なくとも、レベル1の魔法戦士イクニードでは相手にならないわ」

「だけど」と、黒猫は言葉を続ける。

「彼が、サークジエイドが、あなたの失った記憶の手がかりを持っていることは間違いないわ」

黒猫の言葉に、青年は意を決したかのように顔を上げた。

「……」

俺はもう少し、この街を探ってみる。アリエールは先に行っていてくれないか」

「分かったわ。気をつけてね、ルカ」

「ああ」

アリエールの言葉に、ルカはそう応えた。それを訊くと、アリエールは再び、その場からフツと姿を消した。

その直後、不意にルカが、ラトが隠れている壁を振り返って告げた。

「さて、何用だ。モンスター」

「まさか、俺のことか！」

ラトは突然のことに動揺しまくった。

だが、それとは対照的に冷静な眼差しで、ルカはラトが隠れている壁の方を鋭く睨みつける。明らかに敵を見るかのようなその眼光に、ラトは思わず、身を震わせてしまう。

「貴様も、サークジエイドの使いの者か！」

「違うわい!!!」

そんなラトの言葉にも、ルカは耳を貸さなかった。

ラトを見据えると、ルカは吐き捨てるように言った。

「ちようどいい。貴様らがさらったミリテリアマスターのことを吐いてもらおう！」

「だから、違うって言っているだろうが！」

ラトは絶叫した。そう叫んだのだが、その時にはすでに、ルカは自分の剣の柄に手をかけていた。

ルカは、力強く断言するかのように言った。

「すべての悪夢を終わらせてもらう！！！」

「人の話を聞け！！！」

ラトは半ばヤケになって叫んだ。

だが、ルカは無言で抜く手も見せず、ラトに剣を突きつける。ラトは思わず、声にならない悲鳴を上げた。

そして

ドカン！　ズガン！　ドガガアーンツツツ！

ルカは、何度も何度もラトを吹き飛ばすのだった。

この後、ラトがどうなったのかは言うまでもないことだと思っ。

「おかしい！？　サークジエイドの使いの者がこんなに弱いとは……！」

信じられない者を見るかのように、ルカはうめいた。途端、ラトは不機嫌そうに毒づく。

「……悪かったな！」

ルカはまじまじとラトを見つめた。そして、押し殺したような声で訊いた。

「まさか、サークジエイドの使いではないのか！」

「だから、さつきからそう言っているだろうが……！」

即座に、ラトは勢いよく叫んだ。

しばらく、ルカは何事か考え込んでいたが、ちらりとラトの方を見ると、そのまま視線を止めた。

「すまない。どうやら、間違いだったらしい」

ルカはそう言って、あっさりと自分の非を認めた。

それでも、ラトは不満そうに、ルカから顔を背ける。

「謝れば、許されると思っているのか！」

不審そうに眉根を寄せながら、ラトはふてくされる。

そんなラトの剣幕に、ルカは苦笑する。それから静かにこう告げた。

「ここは危険だ。君も俺達と来るといい」

「はあ？」

意味を図りかねて、ラトは硬直した。だが、ルカはラトの答えを聞く前に、ラトとともにその場から姿を消した。

「ここは？」

思わずという様子で、ラトはつぶやいた。

そこには、旧都ソルレオンが眼下に広がっていた。

強い陽射しがラトに降り注いだ。ルカの髪をなびかせる風は、どこかさわやかだ。白い雲がラトの目と鼻の先に見える。そして、二階建て二部屋の小さな家。家の隣には、大きなのつぼの木。裏側には、ちよつとした高台がある。これ全部を取り巻いているのは、緑溢れる平原だ。周囲には一面の空が広がる、一軒きりの空に浮かぶ小さな島。それが今、ラト達がいる浮遊島だった。

「俺達のアジトだ」

ラトの問いに、ルカは軽く答えて、そのまま家の中へと入っていきこうとする。

「おい！」

ラトはそんなルカを呼び止めようとしたのだが、ルカは気にせず家の中に入っていった。

その場に一人、取り残されたカタチとなったラトはぼやくように

つぶやく。

「置いていきやがった！」

そして、家の方をちらりと見ると、ラトは不満そうに腕を組んだ。「仕方ない。行くか……」

深い溜息をつくとき、ラトは慌てて、ルカの後を追うのだった。

からんころんとドアについているベルが鳴って、ドアを開いたらトが見た光景は、ルカとアリエールと呼ばれていた黒猫が何やら深刻な会話をしている真つ最中だった。

「どうだ？ アリエール。サークジェイドの居場所は判明したのか？」

「ええ、場所はここ、旧都ソルレオン。かつて異界への扉があった場所よ」

「やはり、奴は異界への扉を開こうとしているのか！」

ルカの表情がわずかに動いた。「くっ！」。口に出してはそう言

った。
「ええ。恐らく、始まりの地に存在する『天の魔王』と契約を交わす気だわ」

「それには、ミリテリアマスターの力が必要というわけか……」

ルカは頷き、アリエールの横に並んで、壁に背を向けもたれかかった。
「……そうね。ミリテリアマスターだけではなく、他の街の

人々さえもさらっていったのは、その成功の確実性を増すため……
・・なのかもしれないわね」

「なにい！？」

突然のラトの叫び声に、アリエールは目をぱちくりと瞬きする。

ラトはアリエールの戸惑いなんて関係ないように、続けざまに言った。
「……」

「そんなことのために、ララティアはさらわれてしまったのか！！」

「……今までの、そのことに、事の重大さに全く気がつかなかったラトだった。」

ラトは思わず動揺し、あちらこちらを円を描くように回り始める。当然、そんなことをしてもどうにもならなかったりするのだが、それでも何かしなくては気がすまなかったらしい。

「……彼は？」

アリエールが無表情のまま、ボソリとつぶやいた。
ルカが静かに応える。

「あの街に残っていたモンスターだ。敵かと思ったのだが、あまりにも弱かったのだな」

「悪かったな！」

すかさず、ラトが突っ込む。

「……そうね。サークジエイドの使いの者なら、あんなマヌケ面はしていないわよね！」

「貴様らあああああ！！！」

立て続けの暴言に、ラトはついに怒りの咆哮を上げた。

だが、ルカは全く気にせず、先を進める。

「あのまま、あの街に置いておくわけにはいかないからな。それに何か、知っているようだ」

「わかったわ……」

アリエールは小さくそう頷くと、促すようにラトの方を向く。ルカも同じように、ラトを見つめた。

「何か、納得いかないが……！」

ラトは仕方なく、ララティアのことを彼らに話すことにした。ミルドレットの街の庭園でララティアから突如、『お父さん』と呼ばれたこと、ララティアと同じく未来からやってきたえびこに、ララティアを守ってほしいと言われたこと、ララティアのミリテリアマスタールとしての力を狙って、サタナエルとかいうバカな奴らが襲ってきたことなどを、ラトは要点だけをふまえて簡潔に話した。

「……。やっぱり、サークジエイドの使いの者が

現れていたみたいね」

「……ああ」

アリエールの言葉に、ルカは顔を曇らせる。

アリエールは一呼吸おくと、少し考え、ラトに訊いた。

「ところで、その『えびこ』っていう人物は何者なの？」

「なにい！？ 貴様らの知り合いじゃないのか！」

なっ、なんだと！？ とラトは驚愕した。

今までの話の流れだと、えびこもこいつらの仲間だと思っていたのだが！？

というか、それなら、一体、えびこは何者なんだ？？？

ラトは秒速千キロのスピードで、パニックの谷に落とされた。

「……残念だけどね」

あくまで無表情で、アリエールはそう答えた。

「なるほどな。そいつが彼女をさらっていった可能性が高いか」

ルカがそう結論づけた、その時だった。

辺りに突如、砂嵐が巻き起こった。まるで音に例えれば、ドンという感じだ。

足元から突き上がってくるような衝撃が、ラトだけではなく、ルカやアリエールにも襲いかかる。そして、その衝撃の発生ポイントから、見慣れた生き物が姿を現した。

「違っつスよ！」

その生物は高々と片手を掲げ上げた。

途端、ラトは呆れたように溜息をつく。

「おい！ いきなり、出てくるなよ！」

「いきなりではないっス！」

そう叫び終わると、えびこは瞳をきらりと輝かせた。

そして、何の前ぶれもなく、えびこはビシビシとまるで音が聞こえるかのよう、拳を何度も何度も打ち込み始めた。それから、足をペタペタと足踏みさせながら、「戦いでは何よりも自信が大切っス！」と繰り返し、ひたすら繰り返し、つぶやいていた。

「このようにして、自分自身の心身を鍛えて、出てくる機会を見守っていたっス！」

まるで一仕事終えた時のように、えびこは満足げな表情で言ってみせた。

「余計、悪いわい！」

ラトはキツ、とえびこを睨みつけた。

「……敵か！」

声がして、ラトが視線を動かすと、いつのまにか、ラトの後ろにルカが立っていた。ルカの背後には、アリエールも顔を覗かせていた。

ラトは二人の表情を見て、思わずド肝を抜かれた。ルカだけではなく、いまいち表情のわからないアリエールの顔にも、冷酷な顔を浮かべているように見えたからだ。

「……そのようね」あくまで冷めた口調で、アリエールは言葉が続ける。

「いや、だから違うっスよ!？」

慌ててそう不定すると腕振りまじりで、えびこは必死で無実を訴えかける。

だが、あくまで聞く耳持たずといった感じでルカは剣を突きつけるのと、えびこに迫り寄った。一步、また一步とまるで死刑執行人のよう。

じりつと、えびこはずり下がった。とびつきり大きな汗をかき、頭の中で、アラームがけたたましく鳴り響いているのは間違いないだろう。

「ちょうどいい。貴様らがさらったミリテリアマスターのことを吐いてもらおう！」

ルカはえびこに鋭く言った。一瞥に、思いもかけない凍土のような厳しさを宿して。「……はっ、話を聞いてほしいっス！」

どんっ！ と無情にも、えびこの背中が壁にぶつかる。額には、びっしりと珠のような汗が噴き出した。

逃げ場はない。アラームは最音量。

それでも、えびこは周囲に視線を走らせ、身を守ってくれそうな避難場所を探したが、小さな家の小さな一部屋にそんなものがあるはずはない。

そんなえびこの行動に、アリエールは冷たく目を細めた。

「…………サークジェイドの使いの者が見苦しいわね」

「すべての悪夢を終わらせてもらう！」

ルカはそう宣言すると、えびこに剣を突きつけた。

ひいっス！ とえびこは悲鳴まじった声を上げた。

「…………たっ、助けてっス！」 えびこは懇願した。だが。

バキベキバキベキっ！

「ぎゃああああああっ

ス!!!!!!」

ルカの容赦ない強烈な剣さばきを喰らい、えびこはたまらず悲鳴を上げた。

ルカは手を休めず、攻撃を続ける。

「自業自得だな」

思わず、ラトは笑った。皮肉ぽい笑い方だった。

旧都ソルレオンでのえびこの怪しげな行動や言動の数々。砂嵐を起こしてでの登場の仕方。そして、突然の不可解な行動。…………

…………エンドレス。

彼らが敵と判断するのは、むしろ当然のことなのかもしれない。

「ひどいっス！」

えびこは必死の形相で訴えかけた。すでに、ボロ雑巾のようにへろへろになっている。

そんなえびこを、ルカは真剣な眼差しで見つめた。

「おかしい！？ サークジェイドの使いの者がこんなに弱いとは…………

…………！」

「だから、さつきから違ってたっているっス

!!!!!!」

えびこは抗議の叫びを上げた。傷だらけのまま、よろよろと起き

上がる。

ルカは少し神妙なトーンで言った。

「まさか、サークジエイドの使いの者ではないのか！」

「信じてほしいっス！」

「信用性ないだろうが！ 貴様は！」

ムツと、ラトが頬をふくらませる。

しかしえびこは、完璧に何食わぬ顔でまじまじとルカ達を見つめた。自分の無実を必死で訴えかけるかのごとく。

しばらくしてから、ルカは言った。

「すまない。どうやら、間違いだったらしい」

「・・・そのようね」

アリエールもそう言っつて、あっさりと自分の非を認めた。

「やっと、信じてもらえたっスね！」

えびこはパツと目を輝かせ、放すもんかとはかりにラトの手を握りしめた。

嫌そうにえびこの手を引き離すと、ラトは刺々しく言った。

「俺は信じていないけれどな！」

「愛は必要っスよ！」

カツと、えびこは怒りで瞳を真っ赤にした。そして、速射砲のようなキックが三連打で、ラトの顔面を砕いた。ラトはそれに耐えられず、よろめき崩れ落ちてゆく。

だが、ラトをダウンに追い込んだ程度では、怒れるえびこは満足しなかった。

「バシッ！」 一発。

「バシッ！ バシッ！」

二発。

「バシッ！ バシッ！ バシッ！」

三発。

「バシッ！ バシッ！ バシッ！ バシッ！ バシッ！ バシッ！」

四発五六発七発八発とにかくいっぱいだ。

消えいく意識の中で、ラトはひたすらこう思っていた。
こいつには学習能力がないのかよ！ と。

「ハッっス！ また、我を忘れてしまったっス！」
「殺す！」

あくまで能天気なえびこのセリフに、殺気まじった声でラトは告げた。

まるでえびこが憎悪の対象であるかのように。
というか、まさしくそうなのだが。

「ところで、あなたは何か、知っているようね」

「そのようだな」

振り向くと、しばらく沈黙を守っていたアリエールが、真剣な瞳でこちらを見つめていた。その背後には、ルカも顔を覗かせていた。

「………そうなのか？」

ラトはえびこに小声でささやくように訊いた。

そう聞かれて、やっと状況を思い出したのか、「そうだったっス！」

「そうだったっス！」とえびこはいっせいに騒ぎ出した。

「わ、忘れていたっス！！」

「忘れるなよ！」

呆れたようにラトは溜息を付く。

「サークジェイドの使いの者に、ララティアがさらわれてしまった
みたいっス！」

「知っているわい！」

吐き捨てるようにラトは叫んだ。すでに（とっくの昔にというわけではないが）、知っていることだ。べつに意外なことではなかった。意外でなかったのは、えびこの次の台詞だった。

「しかも異界の扉を開く準備は整った………って言っていたっス！」

「なっ、なにいいいいい

！？」

ラトは声が張り叫びそうな勢いで叫んだ。だが、そんなラトとは

裏腹に、ルカとアリエールは落ち着きのあるような声で言った。

「もうすでに準備は整っているということか」

「……………予想以上に早いわね」

「……………ああ」

「急いでその旧都、……………なっ、何とかにいくべきっスよ！」
背筋をピンと伸ばして、左手をビシッと伸ばして、えびこは訴えようとした。訴えようとしたのだが、名前が思い出せず、彼は大粒の汗を出した。

アリエールはそれを見て、冷やかに溜息をついた。そして哀れむようにつぶやく。

「……………この街、旧都、ソルレオンよ」

「それっス！そこに行くべきっス！！」

うつろな視線でラトは思った。

俺達のこと、見守っていたんじゃないのかよ……………！！と。

その晩。

ラトはルカ達の家で泊まることになった。電気を消して寝袋にくるまりながら、ラトはまたもや寝付けずにいた。だから、ラトは元々ララティアとともに食べるつもりだったポテチをばりばり食べながら、またもやじつとララティアのことを考えていた。

それからやっぱり自分のことも考えた。

半ばやけくそだったとはいえ、あの時、ララティアを『守る』つて約束したのだ。それなのに、奴らにあっさりララティアを連れ去られてしまった。

そうだ……………。あの時はどうせ、酒場にも行ったんだらうと鷹をくくっていた。大聖堂の高台の上で、のんびり景色を眺めてしまっていた。その結果がこれだ。

俺はララティアのお父さんだった。例え、本当はそうでなくとも、ララティアにとっては、俺は『お父さん』だった。請われてお父さんになったからには、俺にはララティアの信頼に応える義務がある。

応えるように全力を尽くす義務もある。たとえとつくにララティアの失望を買っていたとしても、俺には諦めることなんて許されない。そんなことはできない。

それにララティア。俺はララティアを守りたい。ララティアはなんだかんだいっても、俺を信じてくれていた。彼女がいなかったら、もしいなくなってしまうたら、俺はまた、あの厳しい現実の世界にひとり放り出されても、以前のようにやっていくことができるのだろうか。そう考えるだけで、どうしようもなく不安になり、恐怖に駆られてしまう。

前に、ラミがこう言っていたことがある。

「会いたい人に会えない辛さは、本当にすごく悲しいことなのだから……」

本当にそうだ。あの時は、彼女の言っている意味がよく分からなかった。でも今は少し分かる。何故なら、今、この場には、俺の隣には、あいつが……。ララティアがいないのだから。宿屋で、酒場でララティアと会えることが毎日楽しかった。だから、俺はララティアに会いたい。そして今度こそ、あいつらの手から守ってやりたい。

こんこん。

思考の迷路に彷徨っていたラトを再び現実世界へと戻したのは、突然のノックの音だった。

こんこんこん。

時計を見ると、深夜の一時を回っていた。もうすでに皆、寝ている時間だ。

こんこんこん。

いったい、誰だ、こんな時間に俺の部屋のドアを叩くのは。

ラトはうさん臭さ半分、不満と怒りも半分でドアを睨みつけた。

「……誰だ？」ラトはできるだけ不機嫌な声を出すよう努力しながら、ゆっくりとドアを押し開いた。

「……少し、いいか」

物静かな青年の声がした。

ラトが顔を見上げると、ルカがラトを見据えるようにして立っていた。

ライム・ア・ライト（第二章、あなたと再会の約束を2）

ルカが案内した先は、二階にあるバルコニーだった。

「なんなんだ、一体……」

などとぼやきながらルカについていったラトは、バルコニーから外の風景を一望して、見渡して、我が目を疑った。

「ここって……い、移動しているのか？」

そうなのだ。浮遊島は、まるで飛空艇のように空を移動していたのだった。

ラトは手すりに手をかけ、その異常な風景をぼうつと眺めた。

それは広い広いこの世界全土からすれば、俺の目の映るものはほんの一部だけなのだろうけれど、それでもここから見る景色はここがすでに旧都ソルレオンとはまるで違う所なのだということも嫌でも思い知らせてくれる。

この小さな浮遊島のすぐ近くの眼下のところには、緑生い茂る平原が広がっている。それなのに、しばらくして視線をやると、氷に閉ざされた大地が見えてくる。かと思えば、さらにしばらくしてから見渡すと、地の裂け目からマグマさえ見える、灼熱の大地の姿もある。

この浮遊島のスピードは、一般的にかなりメチャクチャなのだろう。そうでなければ、凍土と熱帯と平原がこの短時間で見れるなんて、絶対にありえることじゃない。

しばらく間をあけたあと、おずおずとルカは口を開いた。

「おまえは、『ラミ』を知っているか？」

「貴様、ラミの知り合いなのか!？」

驚いた表情を浮かべて、ラトはルカを見た。

ルカは小さく首を横に振った。

「わからない。だが、俺はラミを知っているかもしれない。ラ

ミは、何か言っていないかったか？」

ルカはそう尋ねてきた。

何も言っていないかった、そう答えようと思ったラトだが、ふと以前出会った時につぶやいていたラミの言葉を思い出した。

「会いたい人に会えない辛さは、本当にすごく悲しいことなのだから……」

そうだ。

あの時の彼女の言葉には、俺を責めるような調子は含まれていなかった。もし俺を責めようとして言ったのなら、俺は間違いなく猛烈な反発を覚えたはずだ。

それにむしろあの言葉には、どこか自分に言い聞かせるようなニュアンスみたいなのがなかったか？

会いたい人って、もしかしてルカのことか？

ラトは考え込むように腕を組んだまま、沈黙で答えた。

まっすぐにラトを見つめたまま、ルカはまた訊いた。

「何か……言っていたのか？」

ラトはルカに真摯な瞳で問いつめられて、何故か、いつものように強情を通すことができなかった。

見つめられて三秒ほどでラトはあっさり口を割り、ラミが言ったあの言葉のことを話し出していた。

「……と、いうわけだ」

心の底では、誰かに聞いてもらいたがっていたのかも知れない。

自分でも驚くほど素直に、ラトは促されるままルカに事の次第を打ち明けていた。

それに、ラミのあの言葉のことだけではなく、いつのまにか、ララティアのことさえも話してしまっていた。

ルカは、そんなラトの話を真剣なまなざしで聞いていた。

「おまえの話を聞いて、一つ思ったことがある」

ふいに、ルカの言葉がラトの耳に飛び込んできた。

ラトはルカを見た。ルカは言った。

「おまえの言うララティアは、ラミに似ているな」

「ラ、ララティアと？」

と、ラトは言った。

「ララティアって、俺がさっき話したララティアのことか！？」

「ああ」

「あのララティアとラミが似ている？ い、一体どこがだ？ 冗談だろうが！」 確かに、最初はラトも、ララティアとラミは似ているとは思った。だが、結局は外見だけが似ているだけで、中身は間違いなく似ていない。

ラミはあんな暴走気味な性格ではないし、聞いたことをすぐ忘れるような頭の持ち主でもない。それに何より、ララティア特有の、人に無理強いするようなこともないだろうし。

「そういうことではない」

「どういうことだ？」

ラトはきよんとする。

「ラミも、おまえとララティアとの関係のように、俺に複雑な感情を持っていてらしい」

ラトはぼかんと口を開いた。

複雑な感情って、一体何のことだ？

そんなラトの思いとは裏腹に、ルカは最初に口にした言葉を再び発した。

「俺は……やはり、彼女を、ラミを知っている？」

ルカは少しだけ悲しそうな顔をして、首を小さく横に振った。

「……わからない」

そんなルカの言葉を聞き終え、ラトは不思議そうになった。それから首を傾げた。

「おまえ、もしかして、記憶がないのか？」

ラトは怪訝そうにする。

それまでのルカの物言いでは、明らかにそうとしか考えられない。

だが、それには答えずに、ルカはラトから視線をそらし、夜空へと視線をやった。

「……いや、すべての答えは、サークジエイドが握っているはずだ」

「聞けよ！」

吐き捨てるように、ラトは叫んだ。

だが、当然、ラトの言葉はルカに届くことはなかったのだった。

翌日、ラト達は再び、旧都ソルレオンの門をくぐった。

旧都ソルレオンは、不気味なほど静まり返っていた。

普通なら、守備兵が多数待機して、門兵や巡回の兵だって必ずいるはずだろう。

でも、ここにはそういった役割を果たす人間はいなかった。

というよりもどのような種類の人物も見当たらなかった。何しろ、街の人々は全て、すでに連れさらわれてしまった後なのだから。

石畳の道に響くのはラト達の足音だけで、いかなる気配も感じ取ることができない。当然、あるべきものがないことが、ラト達の不安を増大させていた。

「本当に、ここにサークジエイドがいるのかよ！」

それまで敵に気づかれぬように無言で進んでいたラトだったが、ついに我慢しきれなくなつて、ラトはアリエールを問い詰めた。

「間違いないはずよ」

あくまで冷静な物言いで、アリエールは言った。

「だが、もぬけの殻なのはどういうことだ！ そのサークジエイドとかいう奴は、すでに別の場所に新たな居城を構えたんじゃないだろうな！」

「だが、あれを見る」

ルカは二匹(?)の会話に割って入った。

「家や壁には、ちゃんと灯かりが灯っている」　ラト達がそれまで

通ってきた道には、門も通路も家も、決して真っ暗ではなかった。だからこそ、ラトはルカ達に告げられるまで、ララティアがさらわれたのだとは微塵にも思わなかったのだ。

「……少なくとも、ここに人がいることは間違いないようだ」
そんなルカの言葉にも、ラトは納得しなかった。すかさず食ってかかる。

「それなら、何で誰も外にいないんだ！」

街の人はいないにしろ、サークジェイドの配下の者はいてもおかしくない状況のはずだ。

「それは」

ルカがラトの疑問に何かを答えようとした、そのときだった。

「ルカ……?」

見覚えのある赤い髪の女性が口を押さえたまま、ルカの目の前で進み出た。

そしてルカの顔を凝視した。

「えっ？」

と、今度は勝手に言葉が彼女の口をついて出た。

ルカは、彼女を無言で見つめていた。

まるで何かを訴えかけるようなその眼差しに、どこか見覚えがあったからだ。柔らかな笑みにも。彼女の顔と立振舞いの向こう側に、丘と何かを自分に請う彼女の姿が見えた気がした。

『自分を嫌いにならないで』

頭の中で声が響いた。

ルカは一瞬、言葉を失った。

俺は彼女を知っている……のか？

「ラミ……?」

ルカはただ一言だけ言った。

「もしかして、ルカ？」 動揺するラミは、ルカにそう聞き返した。
宝石のような美しい瞳が、ルカの顔を覗き込んだ。

ラミの瞳に、ゆっくりと驚きと理解の色が広がってゆく。

「ルカ！ 会いたかったわ！」

と、ラミは叫んだ。

彼女の顔が理解と懐かしさと喜びで輝いた。

「おい！」

「ぐええ！」

ラミはそう言うと、思いっきりルカを抱きしめる。

その反動でルカは尻餅をつき、ラトはそのまま、二人の下敷きとなった。

「会いたかった。会いたかったわ」

ラミはとても嬉しそうに笑うと、何度も何度もそうつぶやいていた。

「こんな目に遭うなら、会ってほしくなかったわい！！」

二人の下敷きとなってしまったラトは、激しく不満そうにそう絶叫した。

「おい！」

しばらくの間、呆然としてラミを見つめていたルカだったが、不思議そうに顔をしかめた。

「えっ？」

ラミは首を傾げる。

ルカは真剣な瞳でラミに告げた。

「貴様は誰だ？ 何故、俺のことを知っている？」

ラミはそれを訊くと、悲しげに表情を崩した。

ルカは何故だか不意に、息苦しさを覚えた気がした。

柔らかな笑みを浮かべたまま、ラミは言った。

「……覚えていないのね」

「……すまない」

「いいのよ。あなたが生きていてくれた、それだけで……」

私は

ラミは少しだけ悲しそうな顔をして、首を小さく振った。

あれは多分、まだラミがルカと離れ離れになってしまふ前の出来事、ララティアがいた未来での事だ。

誰もが生まれた時から名声を得ているわけではないように、あるいは生まれたその時から罪人としての宿業を背負っているわけではないように、もちろんルカも生まれた時から、人々に恐れられてはいなかった。

そう、彼が自らの力を使うまでは。

「くるな！ 化け物め！！」

人々は殺意に満ちた声でルカを罵った。

「近寄るな！ うわあああ　　！！！！！！」

誰かがそう叫んだ。

「ルカ、気にすることないわよ」 彼らのやりとりを聞いていたらミが突然声を荒げた。ムツと表情を曇らせる。

「気にしてないさ」

その言葉を耳にした時、ルカは表情を浮かべずにそう言った。

驚いた様子もなければ、何を言われたのかわからないといった戸惑いの表情も一切浮かべていなかった。

ルカはまるで、何か微笑ましい出来事でもあったように微笑した。

ラミはそれを見て、少し表情を曇らせた。

「本当？ ルカはいつも気にしているのに、無理して言っていない？」

「そうかも・・・な」

ルカは微笑みをより深くして顔を上げた。

「やっぱり、嘘じゃないの！」

「自分の力を恨んでも仕方ないさ」

ラミは、ルカの表情を見つめ直した。

驚きも苦悩のかけらもない微笑。

でも、どこか寂しげな姿だった。

「そうかもしれない」

ラムはぼつりとつぶやいた。
もしかしたら、ルカは私の目の前からいなくなってしまうかも
れない。

この時、何故だか、そんな不安が過ぎつて離れなかった。
急にその思いが、ラムの胸に重くのしかかってくる。

ラムは胸元に手を当てるように言った。

「でも……でも！」

「でも？」

ルカは鸚鵡返しにつぶやいた。

ラムが何を言おうとしているのか、まるで想像がつかなかったか
らだ。

ラムは真つ直ぐにルカを見据えた。

「自分を嫌いにならないで」

ラムは、はつきりとそう言った。

「私はあなたのことが好きだから、誰よりも好きだから……
……！」

ラムは顔を赤らめながらそう告げた。どこか、つぶやくような囁
み締めるような声で……。

「だから、私のそばからいなくならないで」

微笑んで、ラムは胸の前で腕を組んでみせた。

願うことは祈り。祈ることは力だ。

それは比喩的な意味でも正しいかもしれないけれど、それでも私
の場合は、完全なる現実であるように願った。

でも、この後、ルカは私の前から姿を消してしまった。聞いた話
によると、彼は黒の導師『サークジェイド』に会いに行ったらしい。

でも、それが本当のことなのかは、私には分からなかった。

何故なら、彼は決して『力』を求めてはいなかったのだから……
……。

サークジェイドに会いに行く理由など、始めからないのだから。

「うっ、うっ……」
気がつくのと、ラムはその場で膝をつき、泣いた。ずっと泣いていた。

ルカの笑顔や、彼と過ごした楽しかった思い出が、何度も何度もラムの頭を過ぎっては消えていった。

泣きながらふと、ラムの脳裏に、あの時の会話の内容が蘇った。自分の力を恨んでも仕方ない、とルカは言った。

その通りかもしれない、とラムは思った。

「……すまない」

ルカは申し訳なさそうに、再びそう言った。

ラムは小さく首を横に振った。

「違うの。悔しいの」

「悔しい？」

「あなたの力になれなかったことが悲しいの」

ルカの問いに、ラムはそう答えた。

「そんなことはない」

ルカの表情が不審に揺れた。ラムはきよんとする。

「えっ？」

その時初めて、ラムはルカが自分のことを見つめていることに気がついた。

ラムの瞳の表情が、「理解不能」に切り替わった。

それでも、ルカは言った。

「何故だか分からないが、そう思うんだ」

「ルカ……」

ラムは頬を染めて、日だまりのような笑みを浮かべた。

「一応、主役は俺なんだが……」

すかさず、ラトが割って入る。

だが、そんなラトの叫びなど露知らず、ラムは言葉を漏らした。

「ルカ！ この鍵を使って！」

ラムはそつと、ルカに銀色の鍵を渡した。

「これは……？」

ルカは怪訝そうに鍵を見つめる。

「この鍵で、地下に、サークジエイドのいる地下に行けるはずよ」

「わかった……」

ラムの言葉に、ルカは力強く頷いてみせた。

どこで鍵なんか、手に入れたんだ？

というか、何故、ラムは無事なんだ？

そう疑問を抱かずにはいられないラトだった。

「ルカ」

真意の眼差しで、ラムはルカを見つめた。

「なんだ？」

「気をつけてね」

「ああ」

そう答えるルカに、ラムはとろけるような微笑みを向けた。

「心配するな」

ラトは力強く宣言した。

だが、別にラムはラトの心配をしているわけではなかった。

ライム・ア・ライト(第二章、あなたと再会の約束を3)(前書き)

今年最後の投稿です？

ライム・ア・ライト（第二章、あなたと再会の約束を3）

一旦、ラミと別れたラト達は、旧都ソルレオンの街を探し回って、ようやく見つけた地下への入り口に進もうとしていたが、そこである人物と遭遇し、思わずその場に踏み留まってしまった。

「おい！」

肩を震わせながら、激しい怒りのオーラを帯びたラトが叫んだ。

「なんっスか？」

「何でここにいるんだ？」

吐き捨てるように言って、ラトはえびこを睨みつけた。

そうなのだ。先に旧都ソルレオンに出発したはずのラト達よりも早く、しかも、鍵つきの扉の奥にえびこはいたのだ。

ラトでなくても、疑問を抱くに決まっている。

「もちろん、先回りしていたからに決まっているっスー！」

えびこはきつぱりと言った。

怒りで震えた声で、猛然とした態度で、ラトはえびこに詰め寄る。

「俺が聞いているのは、どうして俺達よりも先にいるかってことだ

！！！ しかも、何故、鍵つきの扉の奥にいるんだ！！！」

「ごく当然のことのように、えびこは答えた。

「愛があれば、何でもできるっスよ！」

「できるか！！！」

ラトは声を張り上げた。

「それより、気をつけるべきっスよ！」

不意にえびこが、それまでとはがらりとトーンを変えた声を出した。

「この先は迷路になっているみたいっス！」

「だから、俺達を待っていたのかよ！」

ラトはしれっつつぶやいた。

「ぎくっスー！」

えびこが、「ぎくっ！」とばかりに飛びはねた。

その間に、ルカは真剣な顔でえびこを睨みつけた。

「やはり、敵か」

「……そうね」

冷やかな眼差しで、アリエールも同意する。

「えっス!？」

えびこは一瞬、何を言われたのか分からず首を傾げた。

だが、すぐに事の重大さに気づき、激しく動揺し、えびこは声を荒げた。

「違うっス! 信じてほしいっス! ラトくん!」

「俺に振るな!」

ラトはすかさず反論した。だが、その反論が命取りだった。

ラトの目を見据えると、ルカは言った。

「……そうか。貴様ら、最初からグルだったのか……」

冷めた目つきで見下ろしながら、ルカはそう告げた。

そして、ラトとえびこに剣を突きつける。

「たっ、助けてっス!」

えびこはラトの手を掴むと、救いの手を求めた。

「俺に助けを求めるなよ!」

「みつ、見捨てないでほしいっス!」

速攻で引き離そうとするラトに、必死で掴み返すえびこの図。いつまで経っても終わらないその光景に、ラトは思わず絶叫した。

「俺を巻きぞえにするな!」

「今、この手で……、すべての悪夢を終わらせてもらっ!」

「俺は無実だ!」

しかし、そんなラトの言葉も、すでにルカの耳には届いていなかった。

そしてこの後、ラト達は再び、ルカにひどい目に遭わされることになるのだった。

「何とか、誤解が解けて一安心っスね……」

えびこはホッとして胸をなでおろした。

そんなえびこに、ラトが苛立つように言い放つ。

「誰のせいだ！」

えびこは瞳にクエスチョンマークを浮かべた。

そして、当然のことのように、ラトに言った。

「正義の味方に誤解はつきものっスよ！」

「そんなはずないだろうが！」

苦虫を噛みつぶしたようなラトの声に、えびこは不敵に笑う。

「と、とにかく、頑張るっスよ！」

しゅぱぱぱっ！

えびこは、疾風のごとくその場から走り去っていった。

「逃げたな……」

ラトはムスツとした顔のまま、しばらくの間、えびこが走り去っていった場所を鋭く睨んでいた。

地下の通路を抜けラト達がたどり着いたのは、巨大な鋼鉄の扉の前だった。物々しい紋様が扉の一面に描かれて、それだけで一種異様な雰囲気をかもし出していた。この向こうで何かが待っている。そして、ここにララティアがいる。

否応なく高まる緊張感に、ラトは息を呑んだ。

「ようこそ」

ラト達は、一斉に身構えた。扉の向こうから、誰かの声が聞こえてきたのだ。

誰だ？

ラトは息を凝らし、周囲の様子に警戒をはらう。でも、四方に延びる通路のどこにも、何ら変わったところはない。

だが、動揺をあらわにするラトとは逆に、ル力達は落ち着きのある様子で扉を見据えた。

「久しぶりだな、サークジエイド」

「くっ……くっ……くっ……」

サークジェイドは姿を現さないままに、ラト達をまるであざ笑うかのように哄笑した。

「貴様を倒して……、すべての悪夢を終わらせてみせる！」
苛立ちを滲ませて、ルカが叫んだ。

「あなたに出来ませぬかな！……くっ……くっ……くっ……」

哄笑の残響音を残して、サークジェイドの声は消えた。

ラト達は顔を見合わせた。

「畏、ね」

と、アリエールはルカに言った。

ルカは頷いた。

誰の顔にも思案の表情が浮かんでいた。それに、隠し切れない不安も。先程のサークジェイドの声の様子では、やはりラト達は待ち伏せされていたのだ。このまま先に進むのは、あまりにも危険なことではないだろうか。誰もがみな、その不安を抱いていた。

「それが、なんだ？」

沈黙を破ったのは、ラトの声だった。

「今さら、畏の存在とか、気にしても仕方ないだろうか！」

ラトの言葉に、虚勢の色はなかった。

「それに見ろ」

と、ラトはそのまま続けて、ラト達が来た方向を指差した。

「先程の様子では、魔物どもが俺達の様子を把握していてもおかしくない状態だ！ こんな状況で、街に戻る方が危険じゃないのか？」

「確かに、そうだな」 ルカは、ラトの言葉に大きく頷いてみせた。

ラト達の方針は決まった。

ラトの自信に満ちた言葉が、ルカとアリエールの心に勇気を与えていた。

「行くぞ」

と、ラトは言った。

ルカとアリエールは頷き合い、そして、その巨大な扉を押し開い

た。

その向こうに広がっていたものは

そこは、巨大な広間のようだった。人間ならゆうに千人は入れるであろう広大な空間で、天井は巨大なドームになっていた。その天井には、金色の髪の毛の青年が描かれた巨大な壁画が飾られ、壁にはステンドグラスがはめられていた。ラト達が押し開いた扉から一直線に豪華な真つ赤な絨毯が敷き詰められていて、そしてその遙か先には、宝石がいくつもはめ込まれた、きらびやかな玉座があった。

その玉座に、彼はいた。

冷たくて、鋭い顔立ちの男だった。暗い目つきをしていた。銀色の髪と、どこかルカに似た印象を受けたけれど、でもよく見ればルカとは違い、左目が隻眼となっていた。そしてその隻眼には、何やら機械のような装置が備わっていた。

「くくくつ！ 逃げずにここまで来るとは感心ですね！」

玉座の上からラト達を出迎えた彼 サークジイドは、楽しみにそう笑うと、両腕を胸の前でくの字に曲げて勢いよく立ち上がった。

ルカは一步進み出ると、静かに告げた。

「貴様を倒して、すべての悪夢を終わらせてみせる！」

「あなたは、…… 本当に全てを忘れてしまったのですね」

「なにっ!？」

動揺もあらわに、ルカが叫ぶ。

そんなルカを、サークジイドはさぞ得意げに言った。

「自分自身のことも、そして、私があなたの兄だということも！」

「なにい!?!」

「な、なんだと……!?!」

ラトの絶叫とはもるかのようになり、完全に冷静さを失った顔で、ルカは言った。

ルカだけではない。アリエールの表情からも、あらゆる生気が失われていた。

「あなたは、あの時、私に助けを求めてきたのですよ。自分自身の抑えきれなくなった力を、私に抑えてもらうために、ね」

ただ一人、顔色も失っていない男が、得意げに笑いながら言った。ルカは、そんなサークジェイドを無言で睨んでいた。

「……だが、私にとってはそれは好都合だった」

ルカの表情を見て、サークジェイドはにんまりと笑みを浮かべた。「貴様の持つ力を、全て奪うチャンスだとね！」

そう叫ぶと、サークジェイドは左目を指し示す。

動揺もあらわに、ラトが叫んだ。

「なんだ？ あれは！」

「サーチスコープ……か」

「なんなんだ、それは？」

驚きも隠せずにラトが問い返すと、サークジェイドはラトの疑問をさえぎるかのように語り始めた。

「……このサーチスコープで、貴様の力を奪えるはずだったが、まだ完全には制御できず、貴様の力を奪うまでには至らなかった」

「無視するな！」

ラトは顔をしかめ、すぐに反論した。

だが、サークジェイドはそれでも言葉を続ける。

「まあ、そのおかげで、貴様は記憶を失いはしたが、な！」

「すべては貴様のせいだったというわけか……！！！」

「まあ、そうなりますか」

サークジェイドの表情は動かない。

まるで、ごく当然のことぐらいしか思っていないようだ。

反してルカの額には、深い怒りのシワが刻み込まれていた。

自分が記憶を失った理由も、そしてミリテリアマスターである少女や全く関係のない街の人達を誘拐したのも、すべては力を求めようとするサークジェイドの策略だった。人の心を踏みにじる冷酷なサークジェイド。絶対に許せなかった。

「では、アリエールの呪いも、すべては貴様が……！」

「アリエール？ ああ、そいつか」

ルカの肩にいるアリエールを見据えると、サークジェイドは傲然と胸を反らして言った。

「彼女は一部始終を見てしまったからね。口封じせねば、ならなかったのだよ」

アリエールは打ちのめされたように顔をうつむかせた。絶望の沈黙が、彼女を押しつぶそうとしていた。

「貴様だけは、俺が倒す！」

アリエールは顔を上げた。

ルカが、壮絶な目つきでサークジェイドを睨みつけていた。

「くくくつ……！」

「俺を無視しやがった罪は重いからな！」

ルカの代わりに、ラトが怒りの表情で叫んだ。

だが、大した理由ではないのは間違いない。

ルカは言った。

「貴様を倒して……、すべての悪夢を終わらせてみせる！」

「くくくつ！」

サークジェイドは楽しげに喉を鳴らした。

「あなたが、私に勝てるはずがない！」

サークジェイドとの戦いは始まった。

左右に分かれ駆け寄ったラトとルカが、剣を振り落とす。その攻撃を、いとも簡単にサークジェイドは防いでみせた。圧倒的な力と圧倒的な存在感だった。ラト達がこれまで培ってきた力が、このサークジェイドには通じない。相手は一人で、こっちは二人だということに、そのことの不利も全く感じさせない。とはいえ、こちらも実質上、ルカ一人がサークジェイドに攻撃をしていると言ってもいいだろう。ラトは攻撃する以前に、サークジェイドに速攻で吹き飛ばされているのだから。

「私こそが、ミリテリアマスターとなるにふさわしいのだ！」

そう叫びながら、サークジェイドは手にした剣を横薙ぎに振るった。それを受け止めようとしたルカの手から、剣が弾き飛ばされる。無手になったルカにとどめを刺そうと、サークジェイドは剣を振りかぶった。

「ルカ！」

と、ルカの名前を呼びながら、アリエールはサタナエルの一撃を止めようと、ルカの剣をくわえるとサークジェイドに向けて放った。それをわずらわしそうに剣で払いのけ、しかもまるで何事もなかったようにサークジェイドはすぐに動き出した。

「くらえええええつ　　！！！！！」

サークジェイドに斬りかかりながら、ラトが絶叫した。渾身の力を込めて、サークジェイドの頭上に剣を振り下ろす。しかし、わずかに剣は頭部からはずれ、サークジェイドの右肩へと突き刺さった。

「おのれ〜」

ラトのサークジェイドへの攻撃が初めて命中し、サークジェイドの肩から激しい鮮血が噴き出したのが、それでも彼は意を介さない。ラトとルカは危険を顧みず長接近戦を挑み続け、アリエールは後方から二人を援護した。それでも、サークジェイドは倒れない。まるで、不死身の戦士のように、サークジェイドはラト達の前に立ち続けた。

でもやがてついに、最後の時がきた。

ラトは自分の持っていた剣を、サークジェイドに向けて放り投げた。

ラトを侮って視線をルカに移していたサークジェイドは、まともにその一撃を喰らってよろめいた。

その隙をついたルカが、全身全霊の力を込めて水平に薙いだ。

サークジェイドはそのまま、見えない刃に全身を切り刻まれて吹き飛ばされた。

「くくくつ……、もう、貴様らは終わりだ……。」 息も絶えに、サークジエイドはよろめきながら起き上がった。

「なにい!?!」

剣を再び構え直したルカだったが、呆気にとられてサークジエイドを凝視した。

立ち上がったサークジエイドは何を考えたのか、突如せせら笑いを始めた。

「くくくくつ……!」

そして、その場一帯を巻きぞえにしながら、サークジエイドは爆発に包まれた。

「自爆しやがった……!」

ラトはぼつりとつぶやいた。

「これで終わったのか……?」

ルカは唇をクツと噛んだ。

結局のところ、記憶は取り戻すことはできなかった。だが、サークジエイドとは決別することはできた。後は、人質となっていたミリテリアマスターの少女と旧都ソルレオンの街の人達を救い出すだけだ。

ルカの言葉に、ラトが相づちを打つ。

「……. だろうな」

「……. いいえ。残念だけど、まだみたいね」

アリエールは少し自嘲気味に言った。

「このままでは、天魔が甦ってしまうわ」

意表をつかれたように、ラトとルカはまじまじとアリエールを見つめた。

「天魔……. だと!?!」

「えっ? 天井さん!」

「違うわい!」

「じゃあ、展覽さんか!」

「全く、違うわい! って、おい!?!」

うつむいていたラトは、がばつと顔をあげた。そこには見慣れた少女がはにかんだ笑顔を浮かべて、ラトを覗き込んでいた。

「お父さん！ やっぱり、来てくれたんだね！」

「ララティア！」

目の前に立っていたのは、あのララティアだった。

どうやら、先程からのラトの独り言に答えてくれていたのは、彼女らしい。

ラトはたまらずつぶやいた。

「ララティア、おまえ、どうしてここにいるんだ？ というか、どうやって逃げ出して来れたんだ？」

ラトにそう聞かれると、エヘへと笑いながらララティアは事情を説明し始めた。

「実はね、大聖堂の高台でお父さんと野宿した後、朝起きたら何故か、牢屋の中にいたんだよ！ 不思議だよね！」

不思議なのは、ララティアの思考だと思うが。

あの時、すぐにララティアを探さなかった能天気な自分のことは棚に上げて、ラトはしみじみと思った。

「でもね、見張りの牢番の人がね、こつくりこつくりと居眠りしていたの！ だから、颯爽と鍵を取って逃げ出してこれたんだよ！」

ラトはすかさず、くるりとル力達を見た。

その途端、ル力達はさつとラトから目を逸らした。

よくよく考えてみれば、サークジエイドの部下というのは、あのサタナエル達とかなのだ。ろくな人選ではない。それとも、適当に集めただけの寄せ集めの集団なのだろうか？ いや、それにしだって、もう少し、ちゃんとした部下を探せよ！

すでにこの世にはいないとは分かっている、ラトはサークジエイドにそう突っ込みたかった。

ララティアはアリエールに声をかけた。

「それより、天井さんがどうしたの？」

ララティアの聞き方は、まるで本当の猫に話しかけるような話し

方だ。アリエールの前に進み出ると、ひょっこりとその場にしゃがみこんだ。そして、にこやかに笑う。

「……天魔よ」

戸惑いの表情のまま、アリエールはうろたえる。

「奴が呼び出そうとしていたのは、天の魔王ではないのか？」
ルカが真剣な表情で訊いた。

「彼はそのつもりだったのでしょうけれどね……」

「天魔……か、厄介だな」

「そうね……」

悲しみに満ちた瞳で、アリエールはそうささやいた。

「天魔というのは、そもそも何なんだ？」

ラトは不満げにアリエールに訊いた。

「天魔というのは、天の魔王の配下よ。ただ」

「ただ？」

一瞬、アリエールは言葉を呑んだ。しかし、すぐに平静になって。
「ただ、無差別に破壊だけを望む……、魔物よ……！」
「なにい！」

ラトは驚きのあまり、声を裏返った声を出してしまった。

ルカは、そんなラトを静かに見据えて言った。

「……このままでは、世界は滅びてしまいかもしれない」

「大変だね、お父さん」

「のんきな奴だな」

まるで他人事のように言うララティアに、ラトは呆れたように溜息をつく。

「お父さんが天井さんを倒してくれるんだもんね！」

「勝手に決めるな！」

満足げに微笑んだララティアに、すかさずラトは突っ込む。

「……天魔よ」

戸惑いの表情をさらに深くして、アリエールはつぶやいた。

「……少なくともそいつを倒さなければ、世界は終わりとい

うわけか」

「……………そうね」

と言って、アリエールは溜息をついた。そして、表情を改めた。突然、ラト達の目の前で砂嵐が起こったからだ。

「お待たせしましたっス！ えびこっス！」

「待っていましたっス！」

いつものえびこらしい登場の仕方に、ララティアは片手を掲げて歓喜の声を上げた。

ラトはとてつもなく嫌そうに顔を背ける。そして、怒りのこもった声で叫んだ。

「誰も待っていないわい！」

「仲間は一人でも多い方がいいっスよ！」

えびこの反論に、ラトはそのまま不機嫌そうに視線を反らしていたが、ちらりとえびこの方を見て視線を止めた。

「貴様は何もしないだろうが！」

「ぎくっ……………ス！」

やっぱり、今回も鑑賞するだけのつもりか……………！

えびこはわざとらしく咳払いなどをした後、とびっきりの笑顔で言った。

「そ、そんなことよりも大変なことになってしまったっスね！」

「逃げたな！」

苛立つように、ラトは拳を震わせた。その時だった。

「行くぞ！ アリエール」

「ええ……………！」

先程まで無言だったルカとアリエールはそう言い放つと、その場から姿を消した。

不意を打たれたえびこは、目に見えてたじろいた。本来なら普段のえびこなら、怒鳴るところなのに言葉が出てこない。

「早い……………！」

ラトは思わず、感心してしまう。

やはり、ルカ達もこいつのあしらい方が分かってきたということか………!

ためらいがちに、えびこはようやく叫んだ。

「む、無視しないでほしいっス!」

「置いていかないでよ!」

えびことララティアの声が、絶妙なタイミングではもった。

ある意味、正しい判断かもしれないな。

ラトだけがそうしみじみと思っていた。

「と、とにかく、追いかけるべきっス!」

えびこは力強く拳を震わせると、そのまま拳を突き上げた。

よほど、無視されたことを根に持っているに違いない。彼の瞳は

怒りを帯びたように、真っ赤に染まっていた。

「貴様、気合入れすぎだ!」

どこか乗り気じゃない様子で、ラトは言った。

そんなラトを見ると、えびこはまるで活を入れるかのようにこつ

叫んだ。

「頑張ってくるっスよ!」

「なら、貴様が行け!」

途端、えびこは大きな粒上の汗をかいた。

「今、準備体操中っス………」

「何のだ?」

ど、どうしよう………。

言い合いになりかけた二人の間で進退窮まったララティアだった

が、道はえびこのこんな一言で切り開かれた。

「とにかく、頑張ってくるっスよ!」

「頑張ってくるっス!」

ごまかすかのようにえびこが再び、先程と同じ言葉を口にした。

そして、それに応えるかのように、ララティアがそれに続く。

「いい加減、真似するなよ!」

呆れたようにラトは溜息をつく。

だが、それ以上は追求してこなかった。

ララティアは笑顔でこう言った。

「行こうよ、お父さん！」

「ああ」と、ラトは応えた。

この頃はやけに素直だな。ララティアは。

ラトが嬉しそうな笑みを浮かべて、そう思った瞬間だった。突然、ララティアの表情が一変した。

「それに」

ララティアは一瞬、冷たく目を細めた。

「もしもの時には、私が天魔そいつをスタスタに！」

ララティアはくすりと笑った。その表情は、ラトから見てもそれら恐ろしいほどの微笑だった。

「………うっ！」

思わずラトは、天魔と戦う前から身震いさせてしまつたのだ。

「………遅かったか」

ルカが、動揺をあらわにしてつぶやいた。

「そのようなね………」

動揺を隠せず、アリエールはささやくような声で答える。

虚空の彼方にそれはいた。

無音の世界。

その静寂はひび割れていた。そこに次元を割って出てくる人間の眼球のような白い珠。

次元の狭間に動く瞳。ゆっくりとゆっくりと瞳は開いた。

真空なのだ。音など聞こえるわけない。しかし、重い音を響きかせて瞳は動く。

漆黒の海に強引にねじこまれた部品のようだ。

それは人の瞳の形をした魔物、『天魔』と呼ばれる存在だった。

そしてそれは、この空間に滑稽なほど不釣り合いのようにも見えた。この空間の間に、ルカの重く厳格な声が響いた。

「……………なら、天魔ごと、滅ぼすまでだ！」　ルカはそう宣言すると、剣を抜き払った。

「すべての悪夢を終わらせてもらおう！」

ルカは天魔に向かってそう叫んだ。

その時、一瞬だけ天魔の瞳がよどんだ。

「!?!」

静寂　アリエールが先にそれに気づいた。

「待って！　ルカ！」

地面が低くうなった。ルカはその場から跳んだ。地面の空間ごとバリバリと裂けてゆく。

その直後、裂け目から巨大な手がグニヤリと現れた。それは天魔の拳だった。

天魔の巨大な手がシャアツとルカに襲いかかった。

「ルカ！」

アリエールは悲鳴を上げた。

超音速の速さで掲げ上げられた天魔の拳が、ルカの身体を捕らえようとしたからだ。

くそっ、避け切れん！

ルカは唇を噛みしめた。

「ルカ！」

その時、ルカと天魔の間に、小柄な赤い影が飛びこんできた。ラミである。

「ラミさんっ！」

アリエールが悲痛な叫びをあげた。

ルカは瞳を、大きく見開いた。

かばうように手を広げた姿が、遠い、決して取り戻せない懐かしい背中に重なる。

『だから、私のそばからいなくならないで』

真っ白な頭の中で、ルカは誰かの叫び声を聞いた気がしていた。

「ラミっ！」

腕を限界まで伸ばし、ルカはラミの手をつかんで引きずり倒した。そのすぐ脇の地面に、ドカツと天魔の拳が突き刺さる。

「!？」

舌打ちしながら拳を空間に戻す天魔に、どこからか炎の魔法が放たれた。

天魔が避けると地面がえぐれ、粉塵が巻き上がる。煙幕代わりの一撃だった。

「ルカさん、こっちです！」

それは、ルカが追い込まれたと察して駆けつけた、ララティアの援護射撃だった。

その隙をついて、どうにかルカとラミは天魔から離れた。

「だ、大丈夫……? ……ルカ」

小刻みに震えながら、ラミがささやくような声で言った。

「ラミ、どうしてここにいる？」

ルカのその言葉に、ラミは寂しげに笑った。

「ここは危険だ。今すぐ、ここから離れろ！」

ラミは哀しげに首を振った。そして、ぽつりとつぶやいた。

「優しいね……」

「ラミ？」

「ルカは優しすぎるよ……」

ラミは寂しそうに目を伏せた。

「前に言ったことがあったよね。自分を嫌いにならないで、って。

私はあなたのが好きだから、誰よりも好きだから、だから、私のそばからいなくならないで、って」

力ない笑みを浮かべ、ラミはかすかに首を振った。そして、ルカに向かって手を伸ばした。その手をルカは握りしめる。

「私にとって、それが一番守ってもらいたかった願いだっ……
。あなたは何も覚えていないかもしれないけれど……!」

ラムは笑顔のまま、そう言った。

ルカは何も言えなかった。いや、何も答えられなかった。遠い目をして、「でも」とラムは続けた。

「それでも、あなたは私にとってかけがえのない人だから……、こんな私でも、あなたの役に立てたら、……。それだけで、私は幸せだから……。」

せわしい息の下でそれだけを話すと、ラムはルカに微笑んだ。

「だ……から……。」

すぐるようにそつつぶやくと、ラムはまるで力が抜けたかのように仰向けに倒れこんだ。

ルカは急いでラムに駆け寄り、抱きかかえた。

「ラム……！」

ルカは、ホッと安堵の吐息を吐く。

どうやら、気絶してしまっただけらしい。

すかさず走り寄ったアリエールが、ルカに声をかける。

「……ルカ」

何かを訴えかけるような目でルカを見上げたまま、アリエールはそれだけ、つぶやいた。

「アリエール、ラムを頼む！」

アリエールは小さくコクンと頷いてみせた。

「絶対に天魔を止めてみせる……！」

ルカが叫び、背中 of 剣を再び引き抜いた。

剣を構えたまま、ルカは一步前に進み出て、ゆっくりと歩み寄る天魔に対峙した。その背中を見て、アリエールは祈るように目をつぶり、天を仰いだ。

「おい！」

突如、ラトが怒りの表情で、ルカを呼んだ。

「いい加減、俺達を無視するな！ だいたい、貴様らだけでいいとこ横取りはないだろうが！」

無茶苦茶のことを言いながら、ラトは地団駄を踏みまくった。

「倒れたヒロインを救う主人公、……素敵ね！」

うっとりと自分の言葉に酔いしびれるようにララティアが言うと、ラトはこちらにも怒りの矛先を向けた。

「主人公は俺だ！」

無然な態度でそう断言するラトを無視して、ララティアはルカ達に告げた。

「あの、ルカさん！ 私達も一緒に戦います！」

「すまない……！」

ルカが申し訳なさそうに言うと、アリエールがハッと顔を強張らせた。

「来るわ、ルカ！」

「ああ！」

「おい！ ちよっ……」

ラトが声をかけるよりも早く、ルカは天魔に向かって駆け出していた。それに続く形で、ララティアは魔法を唱え始める。

ラトはひとり、唇をなでながら叫んだ。

「主役は俺だ！
だだっ！」

ラトは唐突に、天魔の方に突っ込んでいくのだった。

ラミはルカ達の家のベッドで眠らされていた。静かな吐息をたてている。

その寝顔を、ラト達は心配そうな顔で見つめていた。

その時、ラミが目を覚ました。

「……う……ん」

「ラミ？」

「あれ？ 私、確か」　そこで、ラミはやっと、ルカの存在に気づく。

ルカはラミを見た。まっすぐな透きとおったグリーン瞳　、ラミは一瞬、固くなった。ルカの顔がフツと微笑んだ。

「無事か？ ラミ」

ラミは動揺したように戸惑った。

「ル、ルカ！」

ラミはまじまじとルカを見た。そして、照れくさそうに顔を背けると、そつと指を頬に触れた。

「う、うん、大丈夫だよ！」

「・・・そうか」

ラミは小さく頷くと、顔を上げてルカの顔に再び視線を戻した。ラミはこの時、本当に本当に驚いていたのだ。自分が無事だったことではない。ルカが自分のことを心配してくれたことに驚いていたのだ。それに、ルカの笑顔　、そんな彼の笑顔を見たのは、彼と離れ離れになってしまいう以前の、あの時以来だった。もしかしたら、これは夢かもしれない？

そんな馬鹿馬鹿しい疑念が浮かんでしまうほどに、ラミは呆気にとられていた。

ラミの疑問を無視して、ラトがしみじみとつぶやいた。

「かなり無茶な奴だな」

「愛だね！　お父さん！」

ララティアがそれを見て、嬉しそうに右手を上げて応える。

だが、ラトは不満そうに顔を背けた。

「そういう問題か！」

そんなラトとララティアの会話を無視して、ラミはまたつぶやいた。

「ルカ」

「なんだ？」

ルカが聞き返すと、ラミが何か言いたげな顔をしてルカを見た。

「ラミ………？」

ラミのその表情が、ルカに何かを思い起こさせた。

『あなたの力になれなかったことが悲しいの』

あの時のラミの言葉がよみがえった。

「無事でよかった………」

「ラミ………」

ラミは柔らかな笑みを浮かべた。それに応えるように、ルカも微笑する。

「………」

気がつくとき、アリエールは信じられないものを見るように、ルカを見つめていた。

アリエールは愕然としていた。

ルカにとつて、ラミさんは大切な存在なのね………。

急にその事実が、アリエールの胸に重くのしかかってきた。

「アリエール………？」

「ア、アリエールさん………」

突然、押し黙ったアリエールを、不思議そうにルカが見つめていた。

ルカが、ラミが、アリエールを呼んだ。

だが、アリエールはすぐにその場から駆け出していた。

どんな顔をして、ルカを見て話せばいいのかわからなかったのだ。

「………アリエール」

呆然とした表情でつぶやくルカに力はない。

「………ルカ」

ためらいがちに、ラミはルカの名を呼んだ。

ルカは怪訝そうに首を傾げる。

「………ラミ？」

「早く、行ってあげなくちゃ！ ねっ！」

ラミは哀しいというより、嬉しそうな口調で言った。

それを見たルカは一瞬、顔をしかめたが、すぐに頷いた。

「……すまない」

そう言ってアリエールの後を追いかけていくルカの背中を、ラミは息を呑んで見守った。まるで身体に電撃が走ったように硬直する。

「……」

「よかったのかよ、これで！」

途方に暮れた顔で、ラトはラミに訊く。

「お父さん」

「な、なんだ？」

「これも、一つの愛だよ！」

ララティアはラトに笑みを向けた。

ラトは思わず、戸惑う。

「そういうものなのか？」

「愛は愛だよ、お父さん！」

ララティアは即答し、意味ありげにラトを見た。

ラトは顔をしかめた。

「それでわかるか！」

ララティアからすぐに顔を背けて、ラトは叫んだ。顔中を真っ赤

にさせたままで。

「えへへっ！」

ララティアもつやつやした頬を染めて、はにかむように笑った。

「本当はわかっていた……」

ラトの背後から、ラミの声が聞こえてきた。つぶやくような囁みしめるような声だったから、それは独り言だったかもしれない。

「ルカが本当に好きな人……、それがあの人だって……」

「

「……」

アリエールは、浮遊島にある小さな高台でぼんやりと景色を眺めていた。

「アリエール……」

浮遊島から見える異常な風景をぼつつと眺めていたアリエールは、背後からの声に振り返った。

「いいの……？ そばにいてあげなくて……」

「ああ」

ルカは頷くと、アリエールの横に並んで言った。

「あいつは強いからな。俺なんかよりも……！」

噛みしめるように、ルカは言った。ルカはアリエールを見た。

アリエールは寂しげに言った。

「……信じているのね」

「……ああ」

そう言って頷くと、ルカは遠い目をして、「だが」とつぶやいた。

「えっ？」

アリエールはきよとんとした。

ルカは真剣な表情で、アリエールを見た。

「今は、おまえの方が心配だ」

「……」

「おまえのことだから、一人で無理をしていないか？」

「そんなことないわ」

アリエールはそう答えたけれど、すぐにアリエールは「そんなこ

と」と、言葉を詰まらせた。

「サークジエイドを倒したというのに、おまえの呪いは解けなかつ

た。……それは、おまえが元に戻ることをためらっているか

らではないのか？」

「……」

ルカの言葉は正鵠を得ていた。

アリエールは言葉を失い、言葉を探し、でもやっぱり見つからな

かった。

ルカは言った。

「アリエール……」

「ごくん、とアリエールは唾を飲んだ。」

「……わかっていたの」

小刻みに震えながら、アリエールはささやいた。消え入るような声だった。

「ラムミさんが、あなたの大切な人だって……。……でも言い出せなかった。……いえ、本当は分かりたくなかったのかも知れない」ルカは、アリエールの言葉を無言で聞いていた。アリエールはきゅつと唇を噛みしめた。

「言えば、あなたは私の元から去ってしまう……。……そんな気がしたの。……ずっと、怖かったの。私が元の姿に戻ったら、戻ってしまったら……あなたは私の元から立ち去ってしまうかもしれない。……それが怖かった。だから」

アリエールの言葉をさえぎって、ルカは言った。

アリエールはハツとして、ルカを見た。

「えっ？」

「これからもそばにいるさ。ずっと……！」

そう言うと、ルカはアリエールの手を握りしめた。

力強く　そう、もう決してこの手を離さないように。

意味を図りかねて、アリエールはぽかんとする。だがすぐに、柔らかな笑みを浮かべて、嬉しそうに笑った。

「ルカ……」

アリエールはつぶやいた。

「ルカ、ありがとう……」

アリエールは再び、つぶやいた。アリエールの瞳から一粒の涙がそっとこぼれ落ちた。

その瞬間、アリエールの身体は金色の光に包まれた。

その光が消えると同時に、ルカの目の前に澄んだ青いロングの髪の毛が立っていた。

それは本来のアリエールの姿だった。

「えっ？」

「アリエール！」

「ルカ、私、元に戻れたの？」

アリエールは涙で潤んだ目で、ルカを見返した。

ルカは優しいが、毅然とした声で言った。

「ああ」

そう言うと、ルカはアリエールを抱き寄せた。

アリエールがささやくように、つぶやくように言った。

「ルカ、これからもずっと、そばにいてね」

「ああ、約束する……！」

ルカはアリエールに向かって、きっぱりと言った。

「うん……！」

ルカの言葉に、アリエールは力強く頷いた。その一言は、アリエールの心を大きく突き動かした。

理由なんて、何もいらない。

ルカと一緒にいることに、何故、理論武装する必要があるのだろうか？

アリエールはルカと一緒にいる理由を一度は見失ったが、ルカのそばにいる動機を新たに見出した気がした。

いつのまにか、二人の目には涙が浮かんでいた。アリエールには、ルカの姿がにじんで見えた。

俺がララティアの本当のお父さんじゃない。

それを知ったのは、あの天魔との戦いの後、ルカ達と別れてからすぐ後のことだった。とはいっても、それをえびこから知らされても俺は別に驚いたりすることはなかった。

ララティアは明らかにエルフだ。『ちようちよ』と呼ばれる種族である俺とは全く違う風貌だ。前々から俺の娘ではないだろうな、

とは薄々感じていたことだ。別に驚くことはない。

それなのにどうしてだろうか？

あ後にえびこに呼ばれて泊まっていた旧都ソルレオンの宿屋の部屋から出た瞬間、ラトは息を吐き出した。俺がララティアのお父さんじゃない？

本当のお父さんじゃないのか……？

ラトは自分が嬉しいのか悲しいのか、よくわからなかった。本来のラトなら、そのことに間違いなく喜びを感じたはずだ。ララティアを守るという使命や、彼女の側について旅をする必要はもうないんだと考えれば、そう思うのがラトらしくかった。その答えで充分満足できるはずだった。それなのに、どうして俺は、そこに一抹の寂しさやわずかな痛みを感じたのだろうか。

この時、俺は本当は、どのようなえびこの言葉を期待していたのだろうか？

ライム・ア・ライト(第二章、あなたと再会の約束を4)(前書き)

今年、最初の投稿です。

ライム・ア・ライト（第二章、あなたと再会の約束を4）

「その人達なら、確か、名もない大陸の方に行くって言うていたわ」「そうなんだ、ありがとう！ ラミさん！」

ララティアの言葉でラトは回想から現実へと意識を戻した。

ラミの働いている酒場は旧都ソルレオンの中心にある。気が付くと夜が近づき、空が濃紺に染まっていた。店はもう営業を始めているようでちらほらと客達が集まり始めているようだった。

ラトは掛け値なしに真剣な顔で、ララティアに言った。

「で、何の話をしていたんだ？」

「うん。実はね、ラミさんに本当のお父さんとお母さんのことを話していたんだけどね、何だか、それらしい人を見たらしいの！」

「なるほどな………つて!？」

わけもわからず頷き、とにかく何か頼もうとメニューに目を落とした瞬間、ラトは耳を疑った。

「そ、そうなのか!？」

「うん！」

気分が暗く沈みがちなラトと違って、ララティアはどこまでも陽気だ。

「ま、ま、ま、ま」

まさか、会いに行く気か、と言おうとして、でも焦りでラトの唇は上手く回らない。何度口を開いても、出てくる言葉は「ま、ま、ま、ま、ま」。

「行ってみようよ、お父さん！」

「本当に会うのか？」

「うん！」

「本当に本当に会いに行くのか？」

「本当に本当に会いに行くよ……！」

そこまで言われて、ラトはやっと納得したかのように胸をなでお

るした。

やっぱり、会いに行くのか……。

『……仕方ないな』

そう言っただけで承託したはずなのに、ラトは何故か、動揺を抑えられずにいた。

俺はララティアの本当の父親ではない。

わかっている。だけど、わかりたくない。

ラトはその現実から目を背けたかった。

孤独に戻ることに恐れ。ララティアがいつか去ってゆく姿　考えたくない。

だけど、ララティアはそんな俺に言ってくれた。

『私のお父さんは、お父さんだよ！』って。

だったら、俺はララティアの願いに応えるべきではないだろうか。

「ね　ね　お父さん」

ラトの思案は、ララティアの呼びかけによって中断を余儀なくされた。

気を取り直してラトはララティアを見た。

「ネブレストの森の話って知っている？」

ララティアは言った。どこか笑みをたたえた瞳でラトを見つめて。

……あん？　なんだ、それ？

『ネブレストの森、それは時迷いの森。その地、足を踏み込むことなかれ。そこは、時間の流れが狂っている場所』

ララティアはまぶたを下ろし、謳うように詩の一節のようなものを口ずさんだ。

ラトは訊いた。

「それはなんだ？」

「この大陸に伝わる伝説だよ。ネブレストと呼ばれる森の」

「なるほどな。で、それがどうしたんだ？」

「私もね、その森に導かれてこの時代にきたんだよ」

「なっ、なにいつ　-　!？」　ラトは驚いた。

「だってそうだろう？」

いきなり、時を越える森があつて、そこからララティアが来たんだよ、と言われては、俺でなくとも驚くに決まっている。

ところがそんなラトを、再び動揺させることをララティアは言った。

「私だけじゃないよ。私を追いかけてきてくれたえびごさんも、ルカさんやアリエールさんやラミさんも、そこから時を越えてこの時代に来たんだもの！」

「あいつらもか・・・!？」

ふと、ラトの脳裏にラミと初めて出会った場面が過ぎつた。

そういえば、ずいぶん前に　そう初めて出会った時に、ラミが言っていたことがある。

『・・・私やルカと同じね』と。

あの時は意味がわからなかった。特に深く考えもしなかった。だけど今なら何となくわかるような気がした。それはつまり、ララティアと同じように自分達も時を越えてやってきた者達という意味だったのだ。そう、ララティアと同じくネブレストの森から来たのだから。

「それにね　」

「・・・ん？」

沈黙し、考え込んでいたラトは、神妙なつぶやきに顔を上げた。

やけにしみじみと、そして昔を懐かしむように、ララティアは言った。

「私のお母さんも、ネブレストの森からこの時代に来たんだよ」

ラトはララティアの言葉の意味が、すぐに理解できなかった。

ララティアはラトの戸惑いなんて関係ないようで、続けざまに言

った。

「だから、私もこの時代に来たんだもの……」
ララティアはにこつと笑顔を浮かべていた。

そんなやり取りがあつた次の日に、ラトはララティアを伴つて出発した。旧都ソルレオンを出て、ラト達はミルドレットの街に向かった。

ラト達はミルドレットの街にたどり着くと、休むことなくそのまま駆け続け、港に停泊している多くの船のうち、もっとも雄大で豪華な一隻に迷うことなく乗り込んだ。それはあらかじめ、えびこが前もって頼んでおいた船だつた。

まあ、どうやって頼んだのかは、ラトにとつてもララティアにとつても、謎のままだつたのだが。

ラトはララティアから聞いた話を頭の中で反芻させながら、空に浮かぶ太陽と雲を見上げていた。

人には色々と事情や思いがあるものだな。まさか、あのララティアが、お母さんが訪れた時代だつたから、わざわざネブレストの森まで行つて、時を越えてきたとは……な。

感慨にふけるラトの耳に、誰かの足音が聞こえてきた。

ララティアだろうか？

「どうした？ ララティア」

ラトはそう言いながら振り向いた。

だが、そこにいたのはララティアではなかつた。

青い髪を揺らしながら、どこか無表情の長身の男が近づいてくるのを見た時、ラトは自分の目を疑つた。その青年は、ラトと視線がぶつかりると、軽やかに前髪をかきあげた。「誰だ？」

ラトが話し掛けると、その青年の表情がわずかに動いた。「ん。口に出してはそう言った。」

その時、誰かの声が船内に響き渡つた。

「エレニツク様っ！」

それを訊くと、登場したときと同じように、彼はあっという間に去っていった。

その場に一人取り残されたラトは、ぼつりとつぶやいた。

「なんだ？ あいつ」

「まず、お互いに自己紹介しようよ！」

紫色の髪のエルフの女性が朗やかに提案する。

いや、エルフだろうか？

エルフにしては、少し雰囲気が違う感じの女性だ。確かにララテイアのように耳が尖がってはいるが、どこか丸みを帯びている。

船はラトとララテイアを名もない大陸に降ろし、ここから目的地であるターンの城までは徒歩で数日の旅というところだ。

名もない大陸の支配者、ターン。彼を倒せば、その大陸の支配者になれるという。その噂は、名のない大陸に訪れたばかりのラト達の耳にも入ってきた。

もしかしたら、ターンを倒しにくるかもしれない。

ラトは確信に満ちた表情のまま、そう思った。

なにしろ、あのララテイアの両親だ。当の本人であるララテイアがそれを訊いて俄然やる気になっているのだが、恐らく、彼らもここにいるに違いない。

そんな思惑を胸に、ラトは今、酒場で出発する前の朝食の準備に取り掛かったところだった。

そこで、ラト達は、紫色の髪的女性と青い髪の少年に出会った。

彼らもターンの城を目指しているらしく、せっかくだから一緒に行こう、と紫色の髪的女性の方が強引に誘ってきたのだ。

だが、確かにお互いの名前も分からないままでは、短い旅の間だ

けでもちよっぴり不便だろう。

そして紫色の髪の女性は、ラト達の同意を得る前に勝手に自己紹介を始めてしまう。

「私はフロティア。フロティアニブレストだよ。スタンレチア家から来ました。よろしくね！」

ウキウキ気分を隠そうともしていないフロティアは、口を閉じてにっこりと笑った。

そんな彼女の後を引き継いだのは、人懐っこい笑顔を崩さないララティア。

「うん、よろしくね、フロティアさん！ 私はララティアだよ！
で、こっちが私のお父さんだよ！」

ララティアは手を合わせてお辞儀をすると、くすつと笑った。
「誤解を招くようなことを言うな！」

途端にそっぽを向いたまま、ラトはぼそりとつぶやいた。
ララティアとフロティアは今回のことを楽しんでいるようだが、

ラトはもちろん、かなり不満そうだ。
「本当のことだもの！」

「どこがだ！」
お皿のミートボールをフォークに突き刺したまま、ララティアは

動きを止めた。
そして満面の笑みを浮かべる。

「お父さんはお父さんだよ！」
「……俺はラトだ！」

言い捨てて、ラトはプイッと横を向く。
「えっ？」

「俺の名だ」

きょとんとしたフロティアに、ラトがぼそつとつぶやくと、彼女はオーバーアクションで喜び始める。

「ラトさんね。ラト！ うんうん！ で、ラトさん達はどこから来たの？」

ラトはがつくりと肩を落とした。

そしてゆつくりと持ち上げた指先で、頭を抱えながら言った。

「フロティア」

「えっ？」

「いいのか？」

「何が？」

ラトはきよんとしたままのフロティアに、にっと勝ち誇った笑顔を作る。

「おまえの連れ、もう先に行ったが……」

「えっ？ あああっ　　！！！」

そこでやっと、フロティアはもう一人の青い髪の少年がいないことに気づく。

「メリ君、待ってよ！」

フロティアは大慌てで少年を追いかけ始めた。

「私達も一緒に行こう！」

ララティアがそう言うと、途端にラトは怪訝そうな顔をした。

「……俺もかよ！」

ラトはララティアに視線を転じ、不満を口にする。あいもかわらず仏頂面だ。

「勝手にしろ」

「うん！」

ララティアはまるで元気づけるかのように両手を握りしめると、強い口調で言った。

そうしてフロティア達を追いかけるかのように、二人はその場を後にするのだった。

ライム・ア・ライト（第二章、あなたと再会の約束を5）

「ターンが倒された！」

フレストの街に足を踏み入れた瞬間から、街を覆う気だるさのようなものには、みんな気づいていたけれど、酒場の投げやりな女主人^{マダム}の言葉に、フロティアは食事の手を止める。

「そうよ。以前はここも、あなた達みたいに冒険者や旅人で賑やかだったのよ」

何でも数日前、数人の冒険者達がターンを倒したと、この街に報告に訪れたらしい。

そのおかげで、この名もなき大陸に平和が訪れたというのだ。

「まあ、平和になったことはいいのだけど、こう客先が少なくなつたのにはちよつと、ね……」

お皿のロールケーキの最後の一口を平らげると、フォークを口に挟んだまま、フロティアは動きを止めた。

「そつ、それで、そのターンを倒した奴って」

「やめておけよ！」

フロティアが言い終わる前に、青い髪の少年　　メリアプールが口を挟む。

何でも彼は、フロティアの義理の弟らしい。数日前、メリアプールの兄であるエレニツクとフロティアは式を挙げたばかりだということだ。

もちろん、フロティアはすぐさまメリアプールに言い返した。

「何だよ！」

「ターンを倒した奴と戦うっていうんだろつ。無理だから、やめろよ」

「いきなり無理だって決めつけていたら、何もできないよ！　例え、一人じゃ無理でもみんなで戦えば」

またしてもメリアプールは、最後まで言わせない。

「今までターンに立ち向かった冒険者達が、みんな俺達より弱かったというのか？ それに、そんなことより早くスチアを探さないと……！」

フロティアはぐつと不満そうに押し黙る。

『スチア』というのは、何でも彼、メリアプールの幼なじみらしい。数日前、行方不明になってしまった彼女を探しているというのだ。

フロティアとメリアプールの何度目かの舌戦は、ついに彼に勝利をもたらすかに見えた。

けれど、それは一瞬のことだった。

「お姉さん！ ロールケーキをもう一つ、おかわりね」

どうやら、フロティアはロールケーキが大好きらしい。

近くでその光景を見つめていたラトとララティアは、必死で笑いを堪えていた。

「えへへ お父さん！ 私もロールケーキがほしいな！」

「あのな……」

だが、すぐさまララティアが笑顔で追加の注文をすると、ラトは肩を竦めた。

メリアプールは、フロティアのいきなりの話題の切り替えについていけず、何かを言い返そうとして咽そうになり、慌てて口の中身を飲み込むと落ち着こうとして一息ついて、コップの中に残っていた水を全て飲み干すと、タン！ と音を立ててテーブルに置いた。

「何だよ！ 突然！」 けれど、フロティアは可愛い弟に対するお姉さんの笑顔を崩さない。

「あれ？ メリくんもロールケーキ、食べるの？」

メリアプールは何も言わずにそっぽ向く。

「あつ……！ そうだね。ごめんね、メリくん」

フロティアは辛らつな顔でコクンと頷いた。

メリアプールはそれを見て、一瞬、ホツとしかけた。だが。

「わかった！ 今日はこのまま、無礼講よ！ お姉さん！ お店にあるだけロールケーキ、全部持ってきて！！！」

大げさに片手を上げて、フロティアは明るい声で叫んだ。

「おい！ 何でそうなるんだよ！」

メリアプールは視線で、ラト達に助けを求めるが、彼らは彼らですでにランチを楽しんでいる。いや、少なくとも、ララティアは。

「おいしいね。お父さん」

楽しそうにララティアはくすくすと笑う。

「こつちもこつちで、誰かのせいで資金が底をついてしまった……」

眉間に縦皺を深くしながら、ラトはボソリとつぶやいてみせた。

「さて、これからどうするかだな」

「お父さん、そうがっかりしないで……」

テーブルにのしかかり、ラトが毒づくくと、ララティアがラトの肩を慰めるように軽く叩いた。

「おまえが気楽しすぎだ！」

ララティアの言葉にもラトの心は休まらず、ラトはテーブルの上の水の入ったコップに手を伸ばして一気にぐびぐびといった。

フレストの街は、この大陸唯一の国、フレイム城の城下街だけあって、本当に色々な施設がある。ラトとララティアがいるのはこの街の一角にある、小さな聖堂だった。

ターンを倒したという冒険者達を追いかける前に、目的を失って気落ちしているラトを気づかって、フロティア達が案内してくれたのだ。

「ここはね、結構、色々な情報とかが聞けるのよ！」

というフロティアの説明どおり、聖堂のそれほど広いとは言えない広間は人で溢れ返っていた。それも、普通の街の人とかではなく、冒険者や旅人といった類の人々が、ワインを片手に自分の手柄を語っていたりする。

そんな冒険者のための広間の中で、ラトはララティアに思いのたけをぶつけていた。ぶつけずにはいられないほど、ラトの胸のうちには不満が強く渦巻いていたのである。

「結局のところ、おまえの両親のことは分からずじまいなんだぞ！ いいのかよ！ それで！」

「よくないよ」

「だったら、もっと真剣に探せよ！ 意外と、おまえの両親は近くにいるかもしれないんだからな！」

「うん……！」

ララティアは、急に冷静な声で言った。

「近くにいるもの」

「……はあ？」

「すぐ近くに……」

「どついう意味だ？」 怪訝そうに言うラトに、突然、ララティアは樂しげに笑った。

「 だつたらいいな」

「……びっくりさせるな」

深い溜息をついたラトに、ララティアは嬉しそうに叫んだ。

「それより、ほら、お父さん、フロティアさんだよ！」

ラトはララティアが指さした方向に顔を向けた。そして訊いた。

「……フロティアって、歌うまいのか？」

どうしてラトがそんなふうに念を押したのか？

ララティアが指さした方向には小さなステージがあつて（というか、何故、聖堂の中にステージがあるのかが問題だが）その上では一人の女性がスポットライトを浴びながら、歌を口ずさんでいた。ステージの前には何人かの人達がつめかけ、熱い声援を送っていた。

他の人達も、ステージでの彼女の歌を心の底から楽しんでいるらしかった。

てつきりラトは、フロティアは歌とかは下手だろうな、とばかり思っていた。そのためか、なかなか驚きを隠せずにいる。

蒼い月 満ちかけて

今もまだ 縛るの

震える手を

そっと 空に掲げ上げるの

忘れられた場所は

何も無い虚像のようで

繰り返される日々は

何も生まれないの

誰も知らない星がある場所

誰も知らない悲しみがある場所

不思議な歌詞だ。そして、しっとりとした心にしみてゆくような素敵な歌だった。

ラトは尋ねた。

「何の歌だ？」

ララティアはほんの少し、寂しそうに言った。

「私のお母さんが、いつも歌っていた歌だよ……」

「そうなのか……?」

それはエルフや羽翼人だけに古来から伝わる星の歌だった。安堵を与える優しい音色は、やがて歩き疲れたラトやララティアのまぶたを重くした。フロティアの歌声は、ラト達の寝息を優しく包みこんだ。

翌日、フロティアとメリアプールは、ターンを倒したという冒険

者を追って、バリスタの港町に向かうことにした。

「ララティアちゃんとラトくんも来ない？」

フロティアはエヘへと笑いながら言った。片手をそっと差しのべる。

だが、ララティアは小さく首を振った。手のひらを横にひらひらとさせながら。

「私達はいいよ」

「ん？ 行かないのか？」

「うん」

小さく、はかなげにそう頷いたララティアに、ラトは思わず顔をしかめた。

「ひよつとして、熱でもあるんじゃないのか？」

別にからかうつもりでそう言ったわけじゃなかった。ラトは本当に本当に驚いていたのだ。素直なララティアというのはラトの常識では、おとなしいえびこと同じくらいに有り得ない存在だった。

そういえば、フロティア達と出会ってから、ララティアは何か考え込んでいるような気がしたな。

もしかしたら、ララティアの本当の両親って、フロティアやメリアプールと何らの関係があるのではないだろうか？

そんな馬鹿馬鹿しい疑念が浮かんでしまうほどに、ラトは呆気に取られていた。

「馬鹿馬鹿しい……？ ……そうなのか」

ラトはぼつりとつぶやいた。そして、思った。

その可能性は不定できるのか？ と。

ララティアの両親については、名前も、歳も、そして、どこに住んでいたのかも分からないのだ。

彼らがララティアの両親ではないと不定できなかった。

その時、ふといたずら心のようなものが、ラトの心に浮かんた。

これを言ったら、ララティアはフロティアはメリアプールは、どんな反応をするのだろうか？

そう思った時、自然とラトの口は動いていた。

「フロティア」

と、ラトは言った。

「おまえのフルネーム、フロティア。ネブレストって、あの『ネブレストの森』と同じ名前だな」

フロティアはラトを見た。ララティアもラトをまじまじと見つめた。メリアプールは首を傾げた。

彼らの顔にはどことなく、驚きの表情が浮かんでいた。でも、俺が言いたかったことはそれじゃない。彼らの反応が見たかったのもこの台詞じゃない。次の一言だ。

ラトは軽く呼吸を整えて、できるだけ自然に聞こえる口調を心がけて、言った。

「意外とおまえも、ネブレストの森から時を超えてきたのかもな」
フロティアは

ララティアのように驚いた様子もなければ、メリアプールのように何を言われたのかわからないといった戸惑いの表情も浮かべなかった。フロティアは、まるで微笑ましい出来事があったように微笑した。

彼女はただ一言だけ言った。

「ふうん」

せつかくの告白だったのに、拍子抜けするような反応に、ラトは落胆を隠せなかった。

以前、旧都ソルレオンでララティアが言っていた。

『私のお母さんも、ネブレストの森からこの時代に来たんだよ』とそれが確かなら、ネブレストの森と同じ名前であるフロティアも、そこから時を越えてやってきたのではないかと思ったのだ。だが、それはどうやら違ったらしい。だから、そのことに彼女が何の反応を示さないのは仕方ない。

でも、それなら何故、最初はフロティアは驚いたのだろうか？

いや、ただ、ネブレストの森の名前が出たから驚いたのかもしれない

ないな。

ラトはそこで、自分の考えを不定するように、首を何度も何度も振った。そして、再び、腕を組んで考え込む。

それなら、「すごいね」とか感嘆の言葉を漏らすなり、「そうなんだ」とか共感の意を示すなり、他に反応の仕方があるのではないか。それなのに、あんなふうに笑うか。あれじゃまるで。

ラトはふと、フロティアの表情を見つめ直した。

驚きも、疑問のかけらもない微笑。

もしかして、フロティアは

「ごくん、とラトは唾を飲んだ。

「一つ、いいか？」

と、ラトは言った。

「なあに？」

「ネブレストの森って、時迷いの森って言われているよな」

それだけをラトは言った。

もしかしたら、フロティアは未来から時を越えてこの時代にきたのではないか。

ラトはそう思ったのだ。

普通、人は自分の理解できない事実や言葉を投げつけられれば、戸惑いや驚きの表情を浮かべるものだ。でもフロティアが、ラトの言葉に対して浮かべた表情は、ただ微笑みだけだった。あれではまるで、ラトが何を言ったのか理解しているみたいだった。

「うん！」と、短くフロティアは答えた。

やっぱり、俺の考えすぎか。

ラトがそう思いかけたその時、フロティアはにこっと笑みを浮かべて言葉を続けた。

「私が死んだお父さんやお母さんともう一度、会いたいと思っただから、もしかしたら、森が願いをかなえてくれたのかもね！ まあ、私もダーリンに聞くまで、ネブレストの森が時迷いの森なんて気づかなかっただけだ」

それがフロティアの返事だった。

ラトは言葉を失い、言葉を探し、でもやっぱり見つからなかった。どうにか探し当てた言葉は、「本当かよ?」というひどく陳腐でありきたりなものだった。フロティアがララティアの母親。それだけの事実が、激しくラトの心臓を打ち鳴らし、ひとかけらの冷静さをも奪い去ってしまった。

「ララティアちゃんとラトくんはやっぱり、一緒には行かない?」

と、フロティアはまた言った。

「うん。でも」

「でも?」

動揺するラトは、鸚鵡返しにつぶやいた。

ララティアが何を言わんとしているのか、まるで想像がつかなかった。

ララティアは言った。

「私、フロティアさんに出会えてよかったよ」

ラトはララティアを見た。

言わなくていいのかよ?

そう訊きたかったが、ラトは思わず、言葉を詰まらせた。

「私も、ララティアちゃんに出会えて本当によかったよ!」

フロティアは柔らかな笑みをたたえながら、こちらを見つめていた。

「う、うん!」

と、ララティアは言った。そして、少しだけ寂しそうな表情でつぶやいた。

「また……、会えるよね?」

「会えるよ!」

フロティアは即答した。

そして、ララティアの手を取り、にこりと笑った。

「絶対に会えるよ!」

そう言うと、フロティアはメリアプールとともにバリスタの港町

に向けて歩いていった。

フロティアとメリアプールとも別れたラトは、一人、フレストの街の宿屋へと向かった。

部屋のテーブルの上に並んでいるいくつかの椅子の一つを引き、腰を下ろす。ふうっ、とラトは無意識のうちに溜息を漏らしていた。

その時、部屋のドアが開き、廊下の明かりが差し込んできた。

「誰だ？」

「お父さん！」

姿を見せたのはララティアだった。

「どうしたの？ 明かりもつけないでこんなところで」

「ちよっと、考え事をしていただけだ」

と、正直にラトは答えた。

「考え事？」

言いながら、ララティアは部屋の明かりをつけた。

「これからのこととか？」

「……そんなところだ」

嘘だった。その答えでは四十点がいいところだった。それも、かなり甘めに採点した四十点だ。

ラトが暗がりで考えていたのは、フロティアについてだった。ララティアの本当の両親についてだった。時間が経つにつれ、ラトの不安がまたよみがえってしまったのだ。

確かにミルドレットの街でララティアから言われた言葉で、一度は俺は本当のお父さんだろうとそうでなかつたら、そんなの全然関係ないだろうなという気持ちになった。俺は初めからララティアの父親ではないと薄々分かっていて、それでもララティアを守ろうと思ったのだから。そして、その気持ちはもちろん今でも変わっていない。

しかし、だ。俺はそれでいいとしても、ララティアはどうなんだ

ろう？　ということに俺は不安を抱いていた。

ララティアは俺と一緒にいるより、本当の両親と　本当のお父さんと一緒にいる方がいいのではないだろうか？　と。

もし、本当のお父さんと出会ってしまったら？

ありえないことではない。ありえないどころか、それはかなりの確率でありえることだった。メリアプールの兄、エレニツク。フロティアと再会することがあれば、会ってしまうかもしれない。いや、きつと会うことになる。そうだった時どうなるのか、俺はそれが怖かった。

「お父さんも不安なの？」

「なっ？」

ラトの横に腰を下ろしたララティアが、まるでラトの心を見透かしたようなことを言った。

「な、何がだ！？」

「・・・私も不安だよ」

まるで、ではなかった。ララティアは、正確に俺の心を見抜いている？

「あのね」

かすかに微笑みながら、何かを言おうとしたララティアの瞳に、はらりと何かが降ってくるのが目に入った。慌ててララティアは窓を開けると、そっと手を広げた。

「あっ？」

手にとつて、ララティアはハツとした。

これって・・・プリカの葉！

巨大な霊力の名残が感じられる葉。何度見ても、間違いなくプリカの葉である。

この時代にあるはずはないのに・・・どうして？

しかも、葉は次から次へと降ってきた。気づいた街の人々がどよめき、空を見上げる。

どくどくと、急にララティアの心臓が騒がしくなり始めた。

ふつと空を見上げた瞬間。
。ばあああつ！

光のシャワーが降り注ぎ、辺りを温かな白色に染め上げた。
ラトがバツと上を見上げて叫んだ。

「ララティア、また、変な登場の仕方だぞ！」

空から、エビフライのような生物が降りてくる。その足元には、
白い細長い道。

「えびこさん！」

「お久しぶりっス！ 頑張っているっスか？」

えびこは微笑を浮かべ、ゆつくりと地上に降り立った。

ララティアはえびこのもとへ転がるように走っていった。

「えびこさん、どうして……」

「ララティアのことが気になって、ではだめっスか？」

「う、ううん！」

ララティアは瞳を潤ませて微笑んだ。

「で、今回の用はそれだけか？」

ラトがのっそりとえびこの前に進み出た。

「それだけではないっスよ」

えびこは即答し、意味ありげにララティアを見た。

あつ……！

ララティアは心の中でそうつぶやいた。そして、不安そうにラト
を見据えた。

「まだ、何かあるのか？」

渋い顔で、ラトがえびこをじろじろと観察した。

いつも不機嫌な感じではあるが、何だか普段より余計にいらだた
しげだ。

しかし、ララティアはそんなラトの様子を複雑な顔で受け取った。

えびこさんが心配してくれたことはもちろん嬉しい。けれど。

ララティアはごくんと息を呑み、思い切って尋ねた。

えびこが姿を見せてから、ずっと気になっていたことを。

「もしかして……えびこさん自ら、私を迎えに来たの？」
「そうっす！ もう、いいっすよね？ そろそろ、未来もとの世界に戻るべきっすよ！」

未来の世界に戻る。

ついにこの時が来てしまったのかと、ララティアは複雑な心境になっっていた。

未来から来た住人が、未来に戻る。それはとても当たり前のことだったが、ララティアはすっぱり忘れ去っていた。

多分、ラトと出会った時から。

「……俺は許さないからな」

ギツときつい眼差しで、ラトはえびこを睨みつけた。今にも飛びかかりそうな雰囲気だったが、ぐっとこらえている。

えびこは穏やかな表情を崩さずに、無言でその視線を受け止めている。

「貴様は俺にララティアのことを守ってほしいって言っただろうが！ 期間限定なんて、聞いていないぞ！」

「ずっと、とは言っていないっすよ！」

「……た、確かにそうだが……」

そう言われてやっとそのことに気づいたらしく、ラトは少し声をひそめたが、再びくわっと犬歯むき出しでわめき始めた。

「だが、そんなこと知るか！ ララティアは俺の娘だ。俺の許可なしに連れ帰るなど、絶対にさせるか！」

滅茶苦茶なことを言いながら、ラトは地団駄を踏みまくった。

「お父さん、そんなことをしたら足を痛めちゃうよ」 ララティアがおろおろして声をかけると、ラトはこちらにも怒りの矛先を向けた。

「うるさいわい！ お前も何とか言え！ 私のお父さんはお父さんだよ、とあれほど意気込んでいたのはどこのどいつだ！？」

「私も、もっとお父さんと一緒にいられると思っていたよ。ずっと、

そばにいたいと思っっているもの」

「そうだろうが！俺と一緒にいるより、未来に戻ることを選ぶな
ど片腹痛いわい！」

「厚かましいにもほどがあるっス……」

「やかましいわい！」

「……お父さん……」

ラトとえびこを眺め、ララティアは心がぐらぐらと揺れているのを感じた。

ここにいたい。お父さんのそばにずっといたい。

だけど……」

ララティアはきゅつと唇を噛みしめた。

「ごめんなさい、お父さん。私、やっぱり、未来の世界に戻らない
といけないよ」

「何っ!？」

「私、ここへ来れて本当によかったよ。みんなは……お父さん
は教えてくれたもの。世界はそれほどひどいところじゃない、っ
て」

「そ、それならもつとここにいればいいだろうが！この時代の良
さと俺の偉大さなら、これからいくらでも見せてやるわい。そのお
気楽な脳みそにもわかるほど、徹底的に叩き込んでやる」

ララティアの胸が、きりきりと痛んだ。

最初はあれほど、自分を追い返そうとしたお父さん。それなのに
今は全く逆だ。こうして不器用な言葉で、引き留めようとしてくれ
る。

やっぱり、お父さんと一緒にいたい。素直な気持ちにララティア
は心を痛め続ける。

「だいたい、お前が最初に、俺のことを『お父さん』と呼んだんだ
ろうが！それなのに、さっさと俺を置いていこうなどとは虫がよ
すぎる！これからもよろしくね、と言ったのは、どこのどいつだ
あぁあっ！」

「わたし、です……」

ララティアは顔を曇らせた。

考えてみれば、自分は一番ひどいことをしようとしているのだ。孤独になることを何より恐れる人を、置いていこうとしているのだから。

それでも帰らなくちゃいけないもの。だって……私には、応えなくてはいけない義務があるんだから！

「お父さん、私、この時代に来るまでは、人々から勇者の導き手と呼ばれ、そして聖女として称えられていたの。この世界の希望の一端を背負っていた。……でも、私はその責務に耐えられなくて、この時代に逃げ出してしまったの。でも、お父さんは、みんなは教えてくれた。逃げてばかりじゃだめだって。立ち向かわなくてはだめだって。そう、請われて勇者の導き手となったからには、私はこの世界の人々の期待に応える義務があると思うの！ 応えるように全力を出す義務もあると思うもの！ だから、このまま逃げ続けるなんて、絶対に嫌だよっ！」

最後は、ほとんどただの叫びになってしまった。

お父さんは私を守ってくれた。だから、今度は、私が未来の世界を、人々を守らなくちゃいけない。そう思ったのだ。そう、お父さんが私を守ってくれたように……。

ララティアの決意の固さに、ラトがたじろいた。それでも必死に頭からぶすぶす煙を出して理由をひねり出そうとしている。

その気持ちが嬉しくて、辛かった。

「りっ……立派に育ててほしいと言ったではないか？ まだ、全然、立派でも何でもないだろうが！」

「そうっすか？」

「黙れ！」

げっしっ！

ラトは、場の空気を読めないえびこを蹴り飛ばした。

ふらふらとさせながらも何とか立ち直ったえびこが苦笑して、ぼ

んとララティアの頭に手を置いた。

「それなら、心配は無用っスよ！ ララティアはもう、充分、立派っスよ！」

「し、しかし……」

ラトは完全に言葉を詰まらせ、悔しそうに歯ぎしりした。

その様子を見たえびこは、ようやくラトの気持ちが分かったらしく、首を困ったように横に振ってみせた。

「やれやれっス。もっと、優雅に話し合えないっスか？」

えびこが苦笑混じりに、ララティアに視線を送った。そして、唸るラトの肩にぽんと手を置く。

「男は、引き際が肝心っスよ。無理やり引き留めようと無様な姿を見せ続けるくらいなら、せめて、ララティアを未来のネブレストの森まで送ってあげてはどうっス？」

「俺が？」

「私を、お父さんが？」

ラトとララティアは、顔を見合わせた。お互いの脳裏に出会った頃のドタバタがよぎる。

「あの、えびこさん。私は嬉しいけれど、いいの？」

ララティアが聞くと、えびこは当然のように頷いた。

「構わないっス。一緒に行くのは、ネブレストの森だけっス。街とまでは問題になるかもしれないっスが、森だけなら大丈夫っスよ！」

「うん、ありがとう、えびこさん！」

嬉しい言葉に、ララティアはしゃきつと背筋を伸ばした。

「それでは、決まりっスね！」

ばさりと尻尾を翻したえびこが、とんと地を蹴った。雲のようにふんわりと、体が天に舞い上がる。

「じゃあ、一足先に帰って、お茶の準備でもしておくっスよ。ララティアのお父さんの直々の訪問スっからね！」

愉快そうな笑みを残して消えたえびこに、ラトは慌てて叫んだ。

「おい、待て！ 俺はまだ、行くとも決めていないぞ！」

「えええっ！？ 来てくれないの！？ 私、お父さんに見てもらいたいところ、いっぱいあるのに」

ラトが、ぼりぼりと鼻先をかいた。

「あ、まあ、この俺をぜひに、と言うなら行ってやってもいいがな」

「本当！？ それなら早速」

ララティアはしゃんと背筋を伸ばし、深々とお辞儀をした。

「どうか、お願いします、お父さん」

「……………」

腕を組み、ラトはあらぬ方向を向いた。耳先まで火照らせたまま
で。

「し、仕方ないな」

「えへへ」

ララティアもつやつやした頬を染めて、はにかむように笑った。

そしてララティアと別れてから数日後。

旧都ソルレオンの宿屋のテラスに、物思いにふけるラトの姿があった。そよそよと心地よい風が、開けっ放しの部屋のカーテンを揺らしている。

そこへ、澄んだ青い髪の女性が姿を現した。

「ラトくん、……………何しているの？」「別にどうでもいいだろうが！ だいたい、貴様らは未来の世界に帰らなくていいのかよ！」

ラトにたんたんつと足を踏み鳴らされ、声をかけたアリエールはげんなりとした。せつかく、久しぶりに出会ったというのに、いきなりこれではとりつく島もない。

「……………わたし達は、この時代の方があっているから……………」

悲しげに溜息をつく、落ち着いたトーンの声でアリエールはそう答えた。

ルカとアリエールとそしてラムは、この時代に残ることにした。サークジェイドと戦いの後、ルカとアリエールは各地を転々と回り、華々しい戦果をいくつも挙げてきた。魔王の右腕だと自称する死者の王、ラックと戦い、これを討ち取ったりもした。魔物の奇襲を受けた街の救援に向かい、住民の六割を脱出させることにも成功した。いつからかルカ達の活躍の噂は、旧都ソルレオンを飛び出し、大陸の街という街に、村という村へと伝わった。サークジェイドを倒してからほんの数日間の間で、ルカという名前は多くの人々に知られるようになっていた。ルカという名前は希望を表した。彼の名が『勇者』という称号と一緒に語られるようになるまで、それほど時間が必要ななかった。

そして、このことに一番驚いたのはルカ自身だった。この時代に来るまでは、人々から『化け物』だの何だのと恐れられていたからだ。

だが、この時代ではどうだ？

人々は恐れるどころかルカのことを、今ではあの大勇者として名高いラストIIエンターティナーに続いて、多くの人々に知られる勇者となってしまうている。人々の恐怖の声は、この時代では歓喜へと変わった。人々の絶望は希望へと変わった。

ルカはこの時、苦笑混じりにこうつぶやいた。
「恨んでいたはずの自らの力が、こんなカタチで人々の役に立つなんて……な」

そう語るルカの表情には、憎しみや怒りの要素がほとんど感じられなかった。まるで憑き物が落ちたような、そんな清々しい表情だった。

アリエールはそんなルカを見て、より一層愛しく思った。

「……そうね」 アリエールはそう言って、くすすと笑み

をこぼした。

ラミはというと、今でも旧都ソルレオンの酒場で働いている。彼女は、例えこの思いが決して届くことはないと分かっても、それでもルカの側にいることを選んだらしい。

ふと、アリエールは気にかかっていた話題を引つ張り出した。

「……………そういえば、ラトくん。結局、ララティアさんのことはどうなったの？」

ラトがこの時代へ帰ってきたのは、未来の世界に行つて数日後のこと。その間何があったのか、どんな会話を交わしたのか、ラトはほとんど口にしなかった。

折りに触れては聞き出そうとしてみたが、いつもごまかされてしまつたのだ。

「そういえば、そうだな……………」

「あれからどうなったんですか？ ラトさん」

いつのまにかアリエールの後ろに、ルカとラミが立っていた。

「それは……………」

ララティアがいた数日間を思い出したのか、ラトは少し照れくさそうに頭をかいた。

「貴様らには関係ないだろうが！」

だが、すぐにそう吐き捨てると、ラトはかあつと怒りで顔を赤く染め、ドスドスと部屋から出ていった。

「あつ、ラトさん、待ってください！」

慌てて、ラミがラトの後を追いかけてゆく。

「……………変わらないわね」

結局今日もごまかされてしまったと、アリエールは肩を落とした。

ラトは一人、街の中を歩いていた。特に目的はない。ただ、彷徨

い歩いているという感じだ。

まるで走馬灯のように、これまでの出来事がラトの脳裏に浮かんで消えていった。ミルドレットの街で泣き叫ぶララティアから『お父さん』と呼ばれたこと。ラミとの出会い。えびこに振り回されたこと。ララティアと交わした数え切れない会話。サタナエル達とのドタバタ劇。ルカとアリエールとの出会い。そして、ラミとの再会。サークジエイドとの戦い。天魔との死闘。仲間達との色々な場面。

ラトは空を見上げた。一瞬、ララティアの笑顔がラトの瞳に映った。

ラトは、ララティアに聞きたかった。

おまえが望んでいたものは見つかったのか？ と。でもその答えは、聞かなくてもわかっていた。

ララティアなら、「もちろんだよ！」って答えるに決まっているからだ。

そう考えるとラトは思わず、嘔き出してしまった。元気いっぱい両拳を突き上げるララティアが思い浮かんだからだ。ララティアなら間違いなくこうするだろうな、そう思ったら、ラトは笑いをこらえることができなかつたのだ。

「なあ、んで、笑っているの？」

思いつきり思い出し笑いをしていたラトの肩を、ちよんちよん、と誰かがつついた。

「誰だ？ 人が思い出に浸っている時に邪魔をするのは」

ぶすつと振り返ったラトは、ハツと顔色を変えた。その鼻先に、ふわりと優しく甘い葉の香りが漂った。

「お久しぶりっスね、元気にしていたっスか？」

彼女の隣にいたえびこの言葉は、ラトの耳には届いていなかった。「……未来の世界が平和になってから、こっちに来るのではなかつたのか？」

「だって、お父さんに早く会いたかつたんだもの！ それに未来の

世界には、いつでも戻れるように魔法の修業をいっぱいしたからね！」

両手いっぱいプリカの葉を抱えて、ララティアが頬を染めて微笑んだ。そんなララティアの姿は、キラキラと陽の光にまばゆく照らされていた。ラトの瞳には、まるで目の前に天使がいるかのようにも感じられた。

ララティアはにっこりと笑って、ラトに言った。「お父さん、これからはずっとずっと、一緒だよ！」

「ラトくん。ララティアを末永くよろしくお願いしますっすね！」

えびこは満足げに、にこっと笑顔を浮かべた。そして、何度も何度も頷いてみせた。

しばらく、ラトは意味を図りかねたように、ぽかんと口を開いていた。

「これからは、……ずっと一緒にいられるのか？」

だいぶ間があつてから、ラトはララティアに訊いた。

「うん、これからはずっと、一緒だよ！」

ララティアは笑顔をラトに向けた。

ラトはララティアを見た。ララティアもラトを見た。

ラトとララティアはお互いの顔を見つめ合つと、ひとしきり笑い合った。

ラトはその笑顔を、心からいとおしいと思った。彼女の笑顔には、不安も迷いも微塵もない。

そうか、それでいいんだな。

ラトはそう、自分に言い聞かせた。

俺の隣には、ララティアがいる。ララティアの隣には、俺がいる。それだけで、それだけでいいんだな。

そして、ラトとララティアは、ル力達が待っている宿屋へと向かった。

止まることなく、どこまでも二人一緒に。
未来へと。

ライム・ア・ライト（第二章、あなたと再会の約束を5）（後書き）

今回でひとまず、番外編の方は完結だったりします。でも、まだ5巻は残っている状態なので次回も恐らく番外編の続きだと思います？今度の話は本編完結後のお話だったりしますので、レークス達も出てきます。ダイタ達は出てきませんが？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8493t/>

グラウンドクロストワイライト

2012年1月14日10時49分発行